

# 信仰

本章で扱うおもな内容はつきのとおりである。

## 一、神社祭祀

○鎮守神とむらの諸神・神社の別當

## 二、民俗信仰

○講・棲名と神の信仰・山の神信仰・屋敷内の神・屋内の神・諸祈願・小祠類

## 三、俗信・信

○俗信・つきもの・怪異

## 四、仏教民俗

○村の寺院・觀音信仰・薬師信仰・地藏信仰・その他の仏教信仰各調査員から報告された内容は、やや統一を欠く点がみられた。とくに仏教民俗関係の資料がすくなかった。それは調査員の関心のもち方や調査日程の関係等でやむをえないことであろう。

報告された内容を便宜上右のとおりに章節に分類してみた。この中で、比較的まとまった資料のあつまつたのは、星敷神とオシリヨウサマのことである。また、神社(鎮守神)信仰に関連してのベットウの事例が、三カ所でみられたことを注目すべきことのように思われる。棲名信仰については、今回の調査の重点目標のひとつをして期待していたが、思いのほか資料があつまらなかった。最近は棲名神社とのむすびつきも弱まっているようであるが、あるいは調査不足であったかもしれない。天狗信仰についても、十日夜の行事とのむすびつきなど、今までの他地区の調査では例をみなかつた内容である。このほか、産泰信仰がやや広範囲にみられたこと、各コープなどにある坪井戸とそこにまつられている弁天様のことなどが注目される。

以下、二、三の特徴的なことについてとりあげてみることにしたい。  
星敷神は、県内では稻荷をまつるのが一般的であるが、倉渕村では稻荷のほかに、八幡神やオシリヨウサマをまつっているかたちがみられる

ことが特徴的である。とくに、オシリヨウサマをまつるかたちは、各大字にその例がみられるが、その特色をあけるところになろう。

(7) オシリヨウサマをまつっているのは、むらの中でも、いわゆる「旧家」であること。

(8) オシリヨウサマは、稻荷様とならべてまつられてあるが、先祖様をまつっているという考え方があること。

(9) オシリヨウサマはたるという性格がみられること。

(10) オシリヨウサマは、星敷祭りと同じ日にまつられるが、供えるものに、若干のちがいがみられる。

(11) 「二神体」に卯塔が多いが、石宮や自然石をたててある場合もみられる。

(12) オシリヨウサマをつけて期待していたが、思いのほか資料があつまらなかった。

本項では開區資料をならべるだけにしておく。本村の場合と同じような町の例を知るのみである。このほかに、関連のある資料としては利根郡昭和村生越の調査結果、本村の場合は利根郡昭和村生越の調査結果である。このほか、産泰信仰がやや広範囲にみられたこと、各コープなどにある坪井戸とそこにまつられている弁天様のことなどが注目される。

荷様（屋敷神）と同じもの（赤飯・尾頭付きのイワシ一匹・生豆腐）を供えるという。なお、同地区でも、オシリヨウサマをまつるのに「旧家」二、三軒であるというし、また、盆のとき、盆棚の下に先祖様とはべつにまつる仏様のこととも、オシリヨウサマとよんでいるという。生越の「死靈之氏神」のことについては、むらでの具体的な信仰内容については未調査であるが、この信仰の年代を知る上では、比較的古い資料として貴重である。

ところで、倉淵村の「オシリヨウサマ」をどう解釈したらよいか。水沼では、「生靈・死靈」の話を聞いている。樺田字小倉の原田一家の樺荷様のわきには「死靈塔」（大正四年九月建立）が建てられてある。前記の生越や中大塚の「死靈」の例と合せて考えてみれば、倉淵村の「オシリヨウサマ」も、「死靈様」とみてよさそうである。この「オシリヨウサマ」の信仰内容をみると、各地区とも前記のように共通点が多い。この点から考えてみると、ある時期に、先祖祭りについての、流行的な動きがあつたようにもうけとれるようである。今後、もっと他地区的資料をあつめて検討してみると必要であろう。

また、屋敷祭りを、年末に二回あるいは三回おこなうというかたちも珍しい例である。

つぎに、水沼・川浦・岩水の三地区の神社に関連して、ベットウ（別当）という家のることに注意してみたい。これは、有力な社寺に關係ある別當とは性格がちがうようで、神社（小祠）にとくに關係の深い家のことといふものである。とくにまつりのときの獅子舞の屋をつとめたりする家のことである。水沼の場合には、むらの鎮守様のほかに、コチにある小祠までベットウがきめてある。ただ一部に年番のベットウ役をつとめている例もあるが、ふつうは世襲であった。神社との結びつきは、先祖がまつっていた神社がむらの鎮守様に昇格した（であろう）といふかたちや、神社持の土地を借りていたとか、買ったとかいう縁故によつて、まつりのときの世話役（ベットウ）をつとめるようになつたと

いうのである。現在では、ベットウ役の負担は大巾に軽減されているが、かつては大変であったようである。そのために、川浦の場合には、昭和二十七年に、当事者からの申し出により、山林あるいは現金をむら（神社）に支払うことと条件にして、ベットウ役の解消を許されている。ここでは、むかし、神社持ちの地所を安く払い下げるかわりに、年々の祭りの世話をするなどを条件にしたものであつたという。

このベットウ役は、旧鳥淵村の三大字のみにあって、旧倉田村の二大字にはみられないようである。ただ、三之倉の戸樺名神社の獅子舞のふりこみ高は毎年きまつっていた（神社の隣りの戸塚一男家）が、とくにベットウとはいっていない。なお、ベットウについては、この倉淵村の例にい近いものが、吾妻郡中之条町吾妻町、群馬郡樺名町の一部にみられる。利根郡水上町藤原でも、神社の世話人にあたる役のことをベットウといつてゐる。ここではまた、それとはべつに、秋祭りのときに、むらの人たちが赤飯とオシテギを持つて神社へおまいりに行くが、そのとき供えたもののを子どもたちがさけることを、オベットウといつてゐる。オベットウのおこわかオシテギといい、これを食べると、風邪をひかないといってゐる。（この場合、オベットウとはべつのことばであろうか）

十日夜に、天狗様にサワのもちとかりもちをあげることについては、年中行事の項を参照していただきたい。この日は、山へ登つたり、山の神に供えものをするという例が多野郡下にみられる。吾妻町矢倉では、十日夜の供え餅は百八のきりもだという。この点については、十日夜の性格そのものの検討の要があるといえよう。

川浦の浅間神社や、岩水の北野神社の湯立ての行事については、貴重な資料といえよう。

産泰信仰については、幕末ころからの石碑類がみられるが、前橋市下大屋町に鎮座する産泰神社の信仰圈の、両毛地方へのひろがりとみるとことができようか。また、産泰講が、女衆だけの集まりとして、信仰の組織とともにレクリエーション的な組織としての役割を果してきているこ

とも注目されよう。

七社まいりの鳥居もおもしろい資料である。このことについては、「群馬郡誌」の中に「七ヶ所まいり」のこととして収録されている。彼岸の中日に「七ヶ所まいり」として神社の鳥居七つを潜れば長病なく安樂往生することを得るとし真面目に之を行ふものあり」とある。岩水あたりでは、この行事と同じく、彼岸の中日に「ナナトコマエリ」といつて、七つの鳥居をくぐる習俗があつたという。なお、長野県にも同じような習俗があるようである。

榛名信仰については、本村にも古社を考えられている樺田の椿名神社や、三之倉の戸樺名神社がまつられていて、古くからの榛名信仰の定着うかがうことができる。このよくな神社信仰とはべつに、いわば、民俗的な榛名信仰としては、榛名御師の東村（春祈禱）や、五月五日の山開き、五月八日の鳥糰子岳の稻場様のご縁日、五月十五日の榛名神社のお祭り、六月五日の粽祭りのときの参拝や、榛名神社への雨乞いなど、本村と榛名神社との結びつきは強かつたといえよう。ただ、ここで注意したいことは、地区によっては、峰の御師（碓水峰の熊野神社）との春祈禱の交代がみられること、萩生の法師さんの春祈禱の担当地区的分布など、信仰面での変化である。春祈禱を二二三・四年の間にとりやめにしているところもあるし、最近のむらの人たちの信仰面での動きとして注意してみておきたい。なお、榛名の東麓地方と西麓地方との、榛名信仰のちがいもみられるようであるが、この点「榛東村の民俗」と対象されたい。

三之倉の石上神社や、水沼の古布神社（水沼神社）については、石上神宮との関連も考えられている。とくに石上神社については、本文にも資料があげてあるし、土地の人たちの伝承にも大社の石上神宮の分社であるということである。また、古布社も、布瑞社（ふるのやしろ）であろうとして、それも石上神宮との関連が注がれている（尾崎喜左雄博士）が、本稿では書きによる資料であるので、その点についてはふれていません。

道祖神関係の資料も、石造遺物の中にも、樺田の熊久保にある寛永一年（一六二五）建立の双体道祖神像をはじめとして、古い資料も多く、立派である。民間信仰との関係がどの程度あつたか、現行の道祖神信仰がどの時代までさかのばれるか問題であるが、その背景としては考慮してよいであろう。（くわしくは年中行事の項を参照されたい）

仏教関係の信仰については、全般的に資料がすくなかった。

かつては、水沼の觀音様が、かなり広い信仰圏をもっていたといわれてゐるが、馬の飼育がなくなったことや、信仰心の一般的な衰退によつて、最近はむかしほどの参詣人はないといつて、現在でも、縁日には人出もかなりあるという。

そのむらが信州への通路にあたつていたことによつて、かつては馬の往来もさかんであつたし、日常の生活の中でも、馬の利用は多かつた。そのためか、本社では、各地に馬頭観音像（石造）が多くみられる。一ヶ所に十体以上の馬頭観音塔があるところもあり、往時の街道の面影を伝えているし、この信仰のさかんであつたことを示しているといえよう。

行人塚の伝承も、本社では各地にみられるという。これも本村の信仰の一つの特色といえよう。

以上、各調査より報告された資料をもとにして、倉渕村の信仰の特

色について記してみた。もとより、短時の調査であつたので内容的に

不足の点や、不明の点も多い。

今後の話題を多く残したまま、まとめとしたい。（井田 安雄）

## 一、神社祭祀

(一) 供守神とむらの諸神

石上神社の由緒を示す机、宝物箱にはつきのよう書類があり、大和の石上神社から明治期に勧請したことがわかる。



石上神社（近藤義雄撮影）



福守様（都九十九一撮影）



古布神社（撮影岸栄）

（島山）

福森様 三之倉上宿の戸塚達也氏屋敷

裏にあり、以前ははつきりわからない石であつたのを刻みなおしたという。高さ二四センチ、子授の願かけがあり、願果にはノボリをあげた。その石につきの文字が刻まれていて。

福森の頭はきづで  
あるけれど  
心配するな世次生すぞ 戸浪（三之倉）  
水沼の布留ぬの神社 湯井が焼けたとき、布が空をとんで現在の土地の杉の木にかかったのでそこえ神社を祀った。そのため湯井の神社のあつたところの家は、いまでも水沼の神社の祭りには酒を持参している。（島山）

古布神社 水沼全体の鎮守様である。祭神社は経津之命。むかしからの言い伝えによると、そこでは絶をつくってはならないといつてある。神社の祭神が絶の実のために目を悪くしたので、水沼では絶をつくれないといふ。綿をつくると年まわりがわるいといふ。

祭日はもとは旧九月十九日、現在は新の十月十九日。（水沼）  
西訪様 下水沼にまつてある。むかしは四月二十七日が祭日（春祭）  
行事があつた。白衣の五人の女性が竹枝で湯釜の湯をふりかけた。（島山）  
月並神社 所在はよくわからないが、鳥口に似た岩より水が流れ出で、この水で牛王札は書いたという。この水が鳥川の水源だといわれている。

お札の中の文字

是ハ大和國官幣社  
石上大社ヨリ受ル  
明治十五年正月

表書

浅間神社 川浦字宮原にあり、二月と十月の十五日が祭日、御湯立の行事があつた。白衣の五人の女性が竹枝で湯釜の湯をふりかけた。（島山）

蛇比礼蜂比礼品々比礼

瀛都競邊部鏡八握剣

り。

西訪様

下水沼にまつてある。むかしは四月二十七日が祭日（春祭）

もかし、武田領になつたときに西訪様をまつたという。上下の西訪

様をまつた。武田氏は、諏訪様のおかげで勢力をのばすことができた

というので、各村に諏訪様をまつたものという。(水沼下水沼) 以前は八月相間にも諏訪様がまつてあるが、祭日は四月二十七日、以前は八月二十七日。(相間)

瑞荷様 神社に瑞荷様がまつてある。そこへは旧十一月一日におまいりに行く。その日は、神様が出雲からお帰りになる日だという。(水沼中郷)

雷電様 むかし、水沼のお寺にかみなりが落ちた。本堂がやけたことがあった。そこで、かみなりよけとして、雷電様をまつたといふ。

雷電様へおまいりに来る人は、うまくを奉納した。(水沼)

天王様 七月十五日が天王まつり。

ここへは毎年、キユウリの初ものをしんぜる。(水沼)

淡島様 中尾にあるお産の神様である。祭日はもとは三月二十八日。

現在は四月十日。産泰様と同じ日にまつっている。(水沼)

愛宕様 大谷戸にまつてある、十二様、瑞荷様と一緒に一月二十四日におまつりをしている。(水沼大谷戸)

岩水の神社 岩水は七班に分れているが、ほとんどの班に神社がある。

岩水・川浦地区が氏子となっているのは浅間神社である。

一班 宮原 薬師様

二班 下道 新屋敷

三班 上村 愛宕様

四班 湯が沢・小橋・下村・四ツ目町

五班 石津 白山様

六班 本丸・上野・相間川・田中 北野神社

このうち五班の瑞荷様・觀音様はイナリ組・カンノン組と明確にまつ

る人が別れており社会生活の面まで規制している。

イナリ組は下村の塙越姓のみが入っており、カンノン組は小橋・下村の原田姓が中心となり塙越姓も一部入っている。住所が離れていてもイナリ組に入っている人もいる。(岩水)

浅間神社 烏川に迫った川浦富士山の峯に砦があり、大明神の砦とともに駒形城ともい、本丸、二の丸、帶曲輪の跡が明確に残っている。天正十年頃に真田昌幸が北条勢の侵攻に備えて築城したと言われている。

この本丸跡に石宮があり、それを奥宮とし殿に本殿がある。中世の五年輪塔や宝鏡印塔もあり古くから信仰され靈場とされていたと思われる。中腹に役小角や祇遊像もあり或は修驗道の關係地かとも思われる。

祭神は盤長姫と木花開耶姫命ある。

縁起によると大永三年(1523)五月十五日に本殿のある所に祠を建て朝間大明神とし、元和二年に石宮を建て、寛永七年に社殿を造立、享保八年に京都から神位をうけ、この時に浅間大明神とした。明治十五年に火災があり、十八年に再建した。

四年三月と十一月二十三日が祭典で川浦と岩水の氏子がまつる。神官

は高崎の八幡様の竹林氏が兼務している。

本殿前の手洗鉢に「享保八年(1723)七月日」とあり、参道や石段を修築して神位をうけたものであろう。

村誌には湯立をやったことが記されている。

炎上以前(明治十五年以前)ハ祭典当日御湯立ト称スルモノアリ、大釜ニテ湯ヲ沸シ白衣ノ五女竹枝ヲ尚手ニ持シ熱湯ヲ攪拌シテ四周ニ散布シ、次ギニ之ヲ面部ニ當テ黙禱久シウシテ後本村一ヶ年間ノ吉凶構福ヲ予言セリ」と云フ

北野神社にも湯立の釜があつたという。  
現在邑樂郡大泉町の社日神社で行なつてあるクガタチとほぼ同様の神事であり、広く行なわれていたことを示す。(岩水)

浅間神社 岩水にある浅間神社は、現在川浦と岩水の住民を氏子とし



椿名神社 (佐藤 清撮影)



椿名神社裏の地神様と金比羅様

(佐藤 清撮影)



花輪・鉄火・高座で祭る八幡様  
(佐藤 清撮影)



椿名神社境内にある座泰様や十二様などの石宮

(佐藤 清撮影)

椿名神社 春、四月三日、秋、十一月二十三日が祭典。神樂は二回やつた。神樂を指導してくれたのは、高崎市上小塙町の静野さんという人である。上小塙町の稻荷様（祭りは三月十五日）の神樂は今でも盛んである。椿名神社の向って右側が神楽殿、左側には産泰様や十二様の石宮があり、銀杏と杉が抱き合っている大木の下に道祖神がある。本殿右裏には、地神様と金毘羅様の石宮がある。神主は、八幡の八幡宮からくる。

椿名神社の向って右側が神楽殿、左側には産泰様や十二様の石宮があり、銀杏と杉が抱き合っている大木の下に道祖神がある。本殿右裏には、地神様と金毘羅様の石宮がある。神主は、八幡の八幡宮からくる。  
椿名神社の境内には、諏訪様、産泰様、不動様など合祀されているが、以前に集められたものである。椿名神社の境内には、諏訪様、産泰様、不動様など合祀されているが、以前に集められたものである。

椿名神社 春、四月三日、秋、十一月二十三日が祭典。神樂は二回やつた。神樂を指導してくれたのは、高崎市上小塙町の静野さんという人である。上小塙町の稻荷様（祭りは三月十五日）の神樂は今でも盛んである。椿名神社の向って右側が神楽殿、左側には産泰様や十二様の石宮があり、銀杏と杉が抱き合っている大木の下に道祖神がある。本殿右裏には、地神様と金毘羅様の石宮がある。神主は、八幡の八幡宮からくる。

椿名神社の境内には、諏訪様、産泰様、不動様など合祀されているが、以前に集められたものである。

椿名神社の境内には、諏訪様、産泰様、不動様など合祀されているが、以前に集められたものである。

八幡様に向って左側に、年号の刻まれた石宮が六つあり、お宮側から、天保七年、文政四年、文化二年、寛政六年甲寅天、享保十五歳、宝暦十二年の順に並んでいる。宝曆十二年の石宮には、花輪村の銘がある。

八幡様の祭祀は三つの部落でやるが、道祖神、天神講などは、花輪が別で、鉄火、高座が一緒にした。(第六区)

諏訪神社 中原にある。現在は舗装道路などができてすいぶん狭くなってしまったが、もとは学校との間にある道路を含めた一画が境内で、鳥居はちょうど道路の中央にある。境内には杉など大きな木がたくさんあった。ある夏、鳥居のすぐそばの木に雷が落ちたこともある。その木をあとで切り倒したときには大きくなつたが、モモンガなども住んでいたようだ。現在の鳥居のわきにある百万遍の燈籠は享保年間のものである。

川浦地区の住民全てが氏子になつていて、祭典は春秋二回、四月二十日と十月一日に行なう。秋の祭りはもとは九月十五日だったが、上ノ山などに伝染病がでてとりやめになつたことと秋蚕との関係で現行のように変更になった。当日は獅子舞が出る。獅子舞は指定されたものが稽古し演じる。家々では赤飯をたいて祝う。(川浦)

お諏訪様は元和二年に鎮座したという記録がある。現在の御神体は、享保二十年十一月十六日に、信州の諏訪大社から押受したものである。明治になってから神社統合政策で、もとはむら毎にあつた神社を諏訪神社に多数合祀することになつた。(川浦)

相満神社の掛軸  
(相満) 撮影

(開口 正己 撮影)



戸椿名神社(撮影 岸栄)

相満神社 相馬村のおぼすなさまに、相満大神という軸が偶然あったので、それをいただいて来た。十一月二十三日の勤労感謝の日と、四月三日の榛名神社のお祭の日と、二回お祭している。(相満)

神穴 三之倉の戸榛名神社にはご神体の奥にほら穴があるといわれている。このことについては、「神社由緒調査書」(明治三十五年、県学事文書課保管)によればつきのように記してある。

本社ノ裏ラ子丑ノ方ニ神穴ト称スルモノアリ、其奥行ノ深キ事幾何ナ

ルヲ知ル能ハス、古来ヨリノ口碑ニ此神穴遠ク榛名神社ノ本殿ノ裏ニ通スト、已レナ故ニ因ミシヤ、中古戸春名神社トセシ

ハ。

なお、樺田の岩下のイワノ観音のはら穴も榛名湖に通じているといわれている。

## (二) 神社の別當

水沼神社の祭典と別當 祭典は十月十九日であるが、その前に関係者が寄つて相談をする。これを、おまつりよりあいといふ。十月二日に、三地区(中尾・相間・中郷)の代表がよつて、お祭りの打合

が、晩秋蚕の関係で忙しいひとも多いので現在では十月一日に変更して行なつてある。(川浦)

諏訪様の祭りに毎戸一本あてカサボコをくれる。(七区)

オクマン様 四月十五日は、木の下のオクマン様のお祭り日である。

(川浦)

せを開く。

それぞれの地区公民館に、代表者があつまつて相談をして、その結果をもって、別当の家へ行つて、その年の祭りの内容について相談をする。ことしは獅子舞をするとか、しないかということなどを話し合う。

別当の家は二軒あって、一年交代でつとめている。現在の世帯主は、開口博さんと同喜平さんのところ。むかしから代々この役をつとめている。相間の中の落合というところにあって、本分家で隣りあつてゐる。同地区の旧家である。

お祭りのときに獅子をふることがきまると関係者がかけいこをする。その接待なども別当の家でやっている。獅子のけいこは五日から一晩おきにやつた。

お祭りの前の晩（宵祭）に獅子舞をする。獅子舞をするのは中尾・相間・大谷戸のもの。お獅子をふりだすのは、大谷戸の宿（五軒までわり番）であるが、ふりこむのは別当の家。お獅子をふりこんだあと、獅子舞の人たちは衣装をぬいで別当の家に置く。それを別当の家では川にさらして洗つて、長持の中にしまつて置く。

祭りの当日には神主・世話人などの接待をする。

十月二十三日がお祭り勘定の日で、祭りの費用を計算した。これも別当の家でやつた。最近は公会堂でやつてある。

なお、祭りのときとか、お祭り勘定のときには、甘酒をつくつて振舞つたが、それも別当の家でつくつた。最近は、甘酒をやめて、ふつうの酒にしている。また、お祭りのときに供えるもちも別当の家でついてだした。

神社には山と田があつた。その登記上の名義人が別当の家であつたといふ。（水沼）

別当（オペットウ） 倉渕村内の別当はつきのとおりである。水沼ではつきの諸家に別当が置かれていた。天狗様・小池石京家と小池要家。

淡島様・上原茂家。

地神様（石宮）・小池要家。

諏訪様・原田サイ家と原田忠一郎家。

水沼神社・開口博家と開口喜平家。

別当のうち、片方で不幸のあった場合には交代できるように、別当は、二軒でつとめるのがほんとうだという。（水沼）

川浦の鎮守様は諏訪神社。この別当はもと三軒あつたが、のちに二軒となる。宮下茂雄家と宮下宇金次家。昭和二十七年に、両家の申出により別当を解消している。宮下茂雄家は先々代を弥一郎といつた。

ここでは獅子舞を春と秋の2回したが、この獅子舞の練習、獅子のふりだし、ふりこみなども別当の家でした。（現在は公民館）（川浦）

岩永では、鎮守様は天満宮（北野神社）。この別当は原田栄太郎家。

別当の家の土蔵に梅鉢の紋がついているし、土蔵の中には、お湯立てにつかう釜、古いのぼり、鉢などがしまつてある。天満宮は、もと原田家の屋敷神であったという。別当はその村にとくに関係の深い家のものがつとめているといわれている。（岩永）

## 一一、民俗信仰

### (一) 講

代参講 鈴講 三ツ峯、成田、伊勢、日野の天狗様、少林山、古峯が原などがあつた。（下郷）

権名講 川浦には権名神社はないが、戦争当時まで権名講があつてやつていた。講は、川浦の中にくつかり、希望者でつくつたもので、代参の者は坊に行き、納め金をすると講員の数だけのお札をくれて、神官が拝み、神樂を上げて來た。近くても泊つて、お神酒や夕飯をもらつて來たものである。

村へ帰つてからは、代参の者が講員のところへお札を配るだけで、お日待ちはしなかつた。お札は特別なことなしに神だなへ上げてその家なりのおまつりをしたくらいいである。(川浦)

お日待ち　十二講　庚申講、地神様があり、それらが毎月どれがあるので、講員の家で宿をするのも、どの家もどれか一つがあたることになる。もとは、一戸当り米を五七合持寄りでやつたが(現在は「まかせ」)、経費は出すがそれはそのまま貯金をして、旅行積立金になつてゐる。村の子どもは、みんなお日待ちに招ぶので、男衆よりも大勢でいる。

(川浦矢陸)

庚申講　庚申講は、各地区にいく組もあり、七、八人で組んでやつてゐる。

庚申講は七、八人で組んでやつてゐる。

庚申待をする時期は、おもに農閑期である。カノエサルの日にやる。サルの日が庚申様の日という。本来は六人講といつて、年六回、一ヶ月おきにやるのがたまえであるが、農繁期はさけている。八人のところは年に八回やる(中郷下水沼の場合)。

一月はめでたい月であるのでやらない。六、七、八月はいそがしいのでやらない。

宿はくじびきできめる。オクジといって、前夜にくじびきをして宿をきめる。

忙しいときは、おたがいにはなしあつて日をきめる。

終戦後は、春と秋だけやつてゐる。

庚申待の晩に地震があると、火にたつといつていやがつた。そのために食事をするとすぐに掛軸をはずしてしまつた。また、子どもが生まれた家では庚申待は遠慮することになつてゐる。

米は四合つつもちよせる。四合ますがあつて当番の人が連絡をしながらあつめてあるいた。「飯はしらめし。おかずはさかな類はつかわない。てんぶら、にまめ、いもがらのにたものであつた。おたかもりにして食

べた。むかしは、おたがいに強いつつて、これをおしいといった。帶をゆるめてくえなくなるまで食べたという。講で二回食べた。一度食べて一旦箸をおいてそのあとまた食べた。おはらをだしてそれぞれ自分でよそつて食べた。神様のご飯をいたぐるのだといつて、おたかもりにして食べた。庚申様のご飯は、残してはいけないといつて、時間をかけて食べた。お庚申様のときは、食べすぎはない。いくら食べてもあたらぬいといった。

庚申様のときは、庚申様の掛軸をかざり、その前に、庚申様の名入れのお膳、お椀をだして、こちそうをそなえた。おがむときにはお灯明をつけて線香をあげる。酒は飲まなかつたが、最近は宿によつては出す家もある。

なお、寒申はしないといい、寒に入れば庚申待はしない。冬至前と、二月の節分がすんでからやつてゐる。庚申様と正月様とは仲がわるいといい、正月中は、庚申様の掛軸をどこかへしまつておく。(水沼)

庚申様は百姓の神である。また運の神、仕事の神ともいいう。ナマグサはしない。「庚申様のフンダキみてえな顔をして生意氣いいうな」という。料理は宿の人方がつくるが、普通女は手を出さないという。一方では女が料理

を作れる部落もあつて、この場合ケガレがある



百 庚 申　浅間神社境内 (岩水)  
(丑木 幸男 撮影)

んで山盛りのオシイ(無理ぐい)させる。そ

庚申待宿期

（日本語）

（英語）

（日本語）

（英語）

庚申待宿  
(権田)  
(阪本英一撮影)



庚申掛軸  
(川浦西ヶ瀬)  
(阪本英一撮影)



坊峯の庚申塔（京和之年）  
七区  
(阿部孝撮影)

進ぜるとすぐに下りて、宿の主人がその膳で食べることになつてゐる。庚申にはお高盛をする。餃子をぬらして盛りつけて、箸の高さまでしてたべさせるが、うどんのときは、オカセで五椀か六椀になるので、これを食いつけるのが大変だった。

酒は一升ときまつているが、宿まかせということなので、一升、三升となることもあるのでわからない。（川浦）

庚申講のときには昔は一人七合までの米を持ち寄り、宿で料理をして食べた。宿は交代で行なつた。「オタカモリ」「オシを出す」といわれ、椀に飯を高盛にもり食べさせた。若いものや子供はおどかされて、オタカモリを食べられないと大きくなつて嫁さんをもらえないぞとおどかされた。（七区）

地神講 相吉全体で行なう。彼岸の前後の社日にする。この日は畠へ入ると足が曲るといわれていた。今でも社日には土地を動かしては悪いという。芋を掘らねばならぬ時も、前日に掘つておくようとする。地神講には、部落内の人々がヤドに寄つて一ぱいやり、一飯食べる。（一区）

地神様は三月の社日の日にまつる。この日は畠の土を動かすな、畠へ入るなという。それをおかすと足が曲るといわれた。地神講もあり、この日はお日待をした。（島山）

下郷の朝香家では、この日畠の中央に紙をすいて赤飯をあげた。鍊などの農具もこの日は洗つて使用しなかつた。（下郷、島山）

下水沼には地神講がある。鳥川の近くの畠のすみの道ばたに祭られてゐる。祭る日は社日でこの日には畠にはいるなどといわれている。この畠の神様が、田の神様になるともいわれている。（二区）

地神講は春・秋の社日のときに、コーチの中の希望者（農家）がよつておこなつてゐた。現在は春だけ。以前は二十人ぐらいのものが参加していたが、現在は五、六人。地神様は百姓の神様だといつてゐる。春は、地神様が来た晩に寄つておまつりをする。秋は社日の前の晩におまつりをしていた。

庚申さんは仏と信じられている。庚申さまは地震がするともう一回やり直しをしなければならないので、すべての準備ができる、お膳につけるようになるまでは進せない。

「ちそつはあすきがゆ。米を五合ぐらいもちよせた。小豆は宿でだし

た。(水沼)

昔は、春秋の社日に地神さんのお日待ちをした。夜、宿に集まり、掛け軸をかけ、線香をたてて併んでからやるもので、きりはぎをして供える。血ぶくをきらうので、子どもが生まれて間もない人は出られないが、葬式の方はかまわない。りょうぶなので差支えない。

矢陸はいまも春秋やつているが、その他の組は春だけになった。(川浦) 川浦の赤竹、西ヶ瀬、矢陸には地神講、おひまちがあり、米を持ち合せにしめをつくつてまつる。社日の日に祭る。(七区)

## 榛名と鉢 (熊野) の信仰

● 榛名信仰 普通は鉢様がやつて来たが、しだいに来なくなつた。戦争中は榛名山に日参したことがあるが、戦争に負けてしまつたのでそれからあまりお参りに行かなくなつてしまつた。それでも五月五日の山開きには行つてお神樂をあげて来た。お払いをしてもらい、御札をもらつて来た。オシンコが名物だつたので買つてきた。六月五日の春祭り(三月から四月ころ)と秋あげ(十一月から十二月のはじめころ)の二回まわってきた。このほかに、祭典の前の日から泊りこみできで、きりはぎをした。

● 榛名神社 五月五日の節供に神樂をするのでお参りに行った。この後農作業が忙しくなり、出かけることのしまいだというので行つた。六月五日のチマキにも行つた。チマキとオシンコ・白砂糖が一皿にあった。白砂糖の珍らしい頃でおいしかった。参拝者に神社でくれた。茶店でも一皿二十銭で売つていた。(岩水)

春祭禮(三月から四月ころ)と秋あげ(十一月から十二月のはじめころ)の二回まわってきた。このほかに、祭典の前の日から泊りこみできで、きりはぎをした。

むかしは、碓氷峠の御師が春祭禮にきた。一晩中、東の空がしらままでおがんていた。鳥牛王のお札をもつてきた。その後榛名神社の御師が来るようになつた。もとは一軒一軒まわつて祈禱をしたが、のち三・四軒まとまつて祈禱をうけていた。

秋あげには、榛名神社の御師がむかしから來ていた。米がそれたからと米をやつたり、豆がそれたからと豆をやつたりした。秋バツといつて、秋の初めのあげたもの。一軒あたり三合か四合ぐらいで、とくにきまりはなかつた。御師は「秋バツをあげてください」といつてお札をもらつてきた。

最近は来ていない。むらの中にも、森生の神主さんをたのむ人もあるし、榛名の御師さんのところへ代表者が春祭禮をしてもらつて行つていのもある。

春祭禮は、立春のあと(節がかえつてから)にしてもらう。以前は、一軒まわつておがんでくれたが、その後は数軒ごとに組んでおがんでも

るとすぐ御幣すくりをし、祭壇に弓的の的を

くる。部屋には四方に青竹をたて、七五三縄をめぐらし、その中で夜丑之刻に引き弓の儀式をする。このときは部屋を真暗にし、祭壇的の的弓を射る。的といつても戸板などたてたもので悪魔を射るのだという。お

日待講は十軒単位で、宿は一年交替、榛名の御師の外に村の神主がしたこともある。(下郷)

● 榛名神社 五月五日の節供に神樂をするのでお参りに行つた。この後農作業が忙しくなり、出かけることのしまいだというので行つた。

六月五日のチマキにも行つた。チマキとオシンコ・白砂糖が一皿にあった。白砂糖の珍らしい頃でおいしかった。参拝者に神社でくれた。

らい、現在では、代表者が株名までおがんでもらいに行つている組もある。

春祈禱は、神様の

おころもがえといつて、おしめ（こじこめという）を、毎年あたらしくつくりかえてもらう行事であ

る。このとき、こじこめをかえてもうところは、中尾の下田利重家の場合はつぎのとおりである。

天照大神宮様

門戸守護札（株名神社）  
春祈禱の際配られる 二区  
(阿部 孝撮影)

天上にある方除け 二区  
(阿部 孝撮影)

中央会員

会員

除けになると信じられていた。これ等は、金で札をした。宿では神棚に野菜とオサゴ、干柿と田づくりといって頭つきのをあげた。田づくりは山の神の好物でオコジョともいっただ。御師はその時千羽鳥などのお札を持って来た。このお札をケーカキ棒に挟んで苗代の水口に立てる者もあり、トボーロにはつておくる者もあった。

秋には権現様のお札を持って来て各戸を巡回して、これを玄米に集めていた。これをモミバツウという。量は一軒一升以上だが、中には三升も出す家もある。

御師は供をつけてくるのが普通である時は供をつれずに一人でやって来たことがあつた。そこである人がおしならばつがひはなれぬ四羽六羽

ひとりくるのはあひるだんべえ

と歌いかげたら

雨風や夜半の嵐のはげしさに

おしのつがいもひとりくるなり

と答えたという。（一区島山）

碓氷峠からもとは春祈禱に来た。夜一晩中東の空が白らむまでおがんでいた。御師はカラスゴラのお札をもつて来た。このころ株名神社の御師は秋だけ来ていた。（水沼）

川浦は春まつり（二月になる）と云うので毎年お札を持ってやつて来た。（原田保太郎氏方になる）

春祈禱もこのとき受けることがあり、その時、キリハギ、簡粥の札、カラス牛王、峰さまのお札を一緒に持つて来る。（川浦）

### (三) 山の神信仰

十二様 十二様は山の神様。男の神様という。山に仕事をする人がまつる掛軸には、「大山祇命」とある。むらの人があまつる掛けには、「十一 天明神」とあり。

中尾では、十二様の講があつて、月の十一日におまつりをしている。むかしは、十二月十二日によつてくじ引きをして、各月の宿をきめた。同じ日が三回づけてあると、その家は赤飯をした。

七、八人で組んで十二講をしてやる。

十一講のときには米を五合すつあつめる。このために五合ますができる

おがむべきといって、十二講をしたこともあつたといふ。(水沼)

山仕事をしていた人たちは十一日にパンダイモチをつくつて食べた。

株の上で、うるち米を、まさかりの頭で

ついてもちをつくつた。あんを入れて食べた。かたち

はできとつであつた。(水沼)

十二様は山

仕事をする人

が信仰する。

百姓でも山を

山をもつてい



十二様のお札 上の山七区  
(阿部 孝 撮影)



山仕事をする家の神棚、向って左側が十二様 (花輪)  
(佐藤 清 撮影)



山の神像 (川西ケ瀬)  
(坂本 英一 撮影)

る人が多いので、ほとんど人が祀っている。月一回十二日に祀る。十二戸以上あると二本アイベキ(閏月、都合のよい月という意)というクジを作り、十一月、十二月に四回祀る。十二様はマサカリを持っている。男の神であろうといふ。その掛け軸があつて、これを掲げて祀る。(上村)

十二様は山の神のこと、正月一日に農家の山入りのとき、正月餅を進ぜる。組内の山仕事をする人(農家でも山仕事をする)板をひくきコリなどが十二講をつくつて、十二日にパンダイ餅(ひいた板の端でウルゴメをマサカリでついてくる)を供える。山の神は男性で、女は祭らず、パンダイ餅も男がつく。好物はオコジョで、富山の薬売りがもつてきたりなどがある。

山の神は十二様といふ。ヤマド(山仕事)をやっている人は、山はじめ(初山入り)だけでなく、毎月十二様を祭る。自宅の神棚に十二様があり、十一日の晩には必ずオハギを作つて進ぜ、「ヤマドに怪我をしないように」と折る。男衆は酒を呑んだ。十一日には山仕事をした。十一日の晩はどうしても都合が悪い場合には十一日の夜にお祭りをした。

三本出(三股)の木は十二様がいるから切るなといふ。三股の木には、十二様が来て遊ぶともいふ。どうしても切らなければならない場合はシ

ントウ（神主）に  
おがんでもらう。

（第六区）

押平（ウスンデ  
イラ）の山の神の

お祭りは四月十二  
日で、むかしは獅

子がでた。道具は  
残っているが、今

はやらない。（六  
区）

十一さまは十一月十五日が祭りで、昔は講があり、村中でお日待ちを

した。昔からのボンテンにもある。（川浦、矢陸）

山の神の石宮が相満にあったのをこちらの山に移した。山仕事をする

人は月の十二日にお祭りした。

コビキが木の株つ上の上でパンダイ餅をつく。ウル米をふかし、コマサ

キリの背でつくが、ヒネリ餅みたいにしてついてのし、太さ一寸ぐらい

にして長く伸ばし、糸を水に浸したがらんで、適当な長さにヒヨヒヨ

切る。それにあんこを付けたり、ミソを付けて焼いて食つたりした。

一日中お祝いをして、その餅をもつて娘の家へ遊びに行つたりした。（陣  
田）

オコジョ 山の神様はオコジョが大好きである。供えるのに右手でし  
ようと思ったら、左手をさと出し、山の神様がドキマギしているすき  
に右手で供えるものだという。（第一区島山）

#### 四 屋敷内の神

屋敷内の神 これは家によつてちがう。水沼の下田利重家では、井戸  
神、星敷稻荷、土蔵の神様、外便所の便所神様をまつっている。同家に



二 講宿（川浦西ヶ瀬）  
(阪本 英一 撮影)

は、稻荷様のところに、石宮とワラ宮とあるが石宮は屋敷神、ワラ宮（ホ  
クラ）は先祖様をまつっているとしている。

稻荷様とならんで、八幡様とか、不動様、あるいはオンリヨウサマなど  
をまつている家もある。

なお、つばやまにはとくに神様をまつているとはいっていないが、

屋敷まつりのときにオンベロをこしらえて、一緒にしんぜている。（水沼）

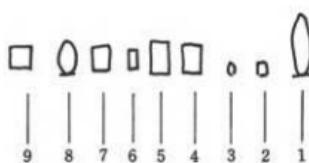
屋敷神 石上の追川博氏方の屋敷神の配置は次のとくである。（写真  
参照）

1、「御先祖様」と言つてゐる石碑。銘に「若宮八幡」「慶応丙寅年十  
一月吉日」（追川庄蔵）等とあり。子供が次々と死んで育たないので建立

したという家伝がある。2、3は自然石。4、5、6、7、銘に「梵字、先祖萬葉、寛保四年三月吉祥日、施主庄左衛門」とある。8、五輪塔不完全品。9、天神宮。この屋敷神の祭日は十二月



追川博氏方屋敷神 1区  
(都九十九一 撮影)



十五日。（一区）

下郷通川博氏屋敷神 屋敷の西北の地に屋敷稻荷のほかに自然石とともに高さ八八センチの石塔のようなつぎのようなものがある。

ア 寛保四子年 施主 先祖万呂等

三月吉祥日 庄左衛門



屋敷稻荷と姫金神（三之倉）  
(郡九十九一 摄影)

ここではオシリヨウ様とはいっていい。万靈供養塔のようなものであるが、先祖の供養を屋敷神とならべて建立している。（下郷）屋敷祭り 屋敷稻荷を祭る。普通は十二月十五日に一回赤飯とおかしを供えて祭るが、三回祭る家もある。十二月一日、十五日、二十八日での供えるものは一回の家と同じである。（二区）

屋敷稻荷のまつりは、一回の家、二回の家、三回の家と三つのかたちがあるが、一回の場合が多い。このとき、おしめをはりかえる。

一回の場合に由十一月一日。この日は神様が出来から帰ってくる日であるといふ。

一回・三回の場合には、一日のはかは、あとはいい日をみてやるが、十五日を、伏見の稻荷様から位をもらつて来た日としてやつてい

る。ここでオシリヨウ様とはいっていい。万靈供養塔のようなもの

であるが、先祖の供養を屋敷神とならべて建立している。（下郷）屋敷祭り 屋敷稻荷を祭る。普通は十二月十五日に一回赤飯とおかしを供えて祭るが、三回祭る家もある。十二月一日、十五日、二十八日での供えるものは一回の家と同じである。（二区）

屋敷稻荷のまつりは、一回の家、二回の家、三回の家と三つのかたちがあるが、一回の場合が多い。このとき、おしめをはりかえる。

一回の場合に由十一月一日。この日は神様が出来から帰ってくる日であるといふ。

一回・三回の場合には、一日のはかは、あとはいい日をみてやるが、十五日を、伏見の稻荷様から位をもらつて来た日としてやつてい

る。ここでオシリヨウ様とはいっていい。冬至前にはすませろという。

屋敷まつりのときには、赤飯・豆腐・かしらつき（いわし）二匹（一対）。豆腐はすみをきつてあげる。なお、稻荷様のほかに八幡様とオシリヨウサマをまつっている家もあるが、この場合には、三社とも同じものをあげる家もあるし、八幡様には稻荷様と同じものあげるが、オシリヨウサマには赤飯だけあげる家もある。

初午のときにも、屋敷稻荷をまつる。まゆだまをつくつてあげるが、オシリヨウサマにはなにもあげない。（水辺）

石宮のない場合は、仮のワラ製で十二月十五日即ち祭日の昼間に造ることになっている。祭りはこの日の夜。供物はコワメシ、カシラツキ一二匹、豆腐を四角に切ったのを三切をそれぞれ紙にのせて進ぜ、それらを少し残してもてきてオミゴクとする。オンベロは、縁を切つて先を二つに割り、それにさしはさみ、これを一本づつお宮、そのわきの十二様などに供える。隣にある里芋の形をした石は、川浦の方でオシラ（オンベロ）様という。この地区ではないわい。（下道）

なお屋敷稻荷は大概の家にあるが、オシリヨウ様は特別な家にあるものだ、という人と、この村にはない、みたことがないという人が多い。（下道）屋敷神は屋敷裏の石宮又は藁ぶきのお仮屋。

十二月十五日、赤飯とイワシを進ぜる。本丸ではオンベロを作り、イナリ様、氏神（元神様）に進ぜる。（下村）

屋敷稻荷は家中を見える位置につくると繁榮するが、反対の向きでありますと不吉だという。十二月十五日は川浦は、ほとんど十一月十五日にする。霜月十五日といふのがまりで、旧暦でやると翌年の正月になってしまい、餅をついてごちそうを食つている時に、屋敷まつりのおこわをつかすのも変なことだからというので十二月十五日にすることにきめたという。（川浦）矢陸では、屋敷まつりは十一月十七日にする。いつの頃か、十一月十



若宮八幡（島山）  
(都九十九一撮影)

五日の祭りの日に大火事をおこしてお祭りができる年がありそれ以後は「一日おくれの十七日」になってしまった。（川浦・矢陸）

屋敷稻荷のまつりは十二月十五日にする。稻荷

さまにお供えしたら後をふり返ってはいけない。（川浦）

屋敷祭りは十一月一日、十五日、二十五日の三回祭った。現在は細貝戸に四軒だけ三回祭る家がある。一日は赤飯、十五日、二十五日は小豆めしで祝う。大部分の家は十五日におまつりをするだけとなつた。（七区）星敷稻荷を祭る家は八軒あるが、お仮屋を作るものはない。神様祭るより鰐口祭る方がいそがしい。（相満）

オカリヤ 屋敷まつりには、石宮の隣りに小さなおかりやをつくる。粗相のものでよく、ふだんの暮らしの中でも、粗末な家のことを「オカリヤのようだ」といい、「オカリヤこせえた」という時は、小さいワラの小屋のことをいう。（川浦）

若宮八幡 諏訪神社境内にある石碑。「若宮八幡 明治丁歳三月吉辰」と刻してある。上野直一氏が建てたもので、子育ての神という。（一区）オシリョウサマ 野石（自然石）を拾つて来て、屋敷神の近くに置き、四月にシメをはることになつてゐる。祭る家と祭らない家があり、最近の家には全然ない。上野松五郎氏は「御戸蓋」だといふ。（一区島山）



オシロウサマ（島山）  
(都九十九一撮影)



オシロウサマ（相吉）  
(都九十九一撮影)

相吉にはオシロウサマはひとつある。石宮で、飯島マケのものであるといふ。昔、坊さんがこの土地に来たが、村の人とおもしろくないことがあつた。村人がその坊さんを殺して埋めたところという。（一区）お死靈様は相吉の飯島久活郎氏持地の一角にある。昔は道路端にあつたという。今は杉の大木が枯れたあとに石宮となつてゐる。オシロウサマと呼び、正月にはお餅も供えた。その由来は、昔どこからともなく尋ねてきた坊さんがあり、部落の人と面白くなく、人々が殺してしまつた。その靈を慰めここに葬つたという。（相吉）

オシリヨウサマはむらのなかでも古い家にまつられている。屋敷の裏に、イナリサマとならんでまつられている。家によつて形はちがうが、自然石の場合もあるし卵塔がたつてゐる場合もある。

オシリヨウサマは屋敷を守る先祖様といわれ、イナリサマとはきっともきれない仲だともいわれてゐる。おまつりも、屋敷祭りのときに一諸

にまつっている。供えものは、イナリサマと同じ家もあるし、赤飯しか

あげない家もある。

夜泣きをする子どもがあると、オシリヨウサマにお願をかける。歌よみをして、なおたらそこへ水をあげるというおまじないをする。歌はつぎのとおり。

「猿沢の、池のほとりに泣くきつね、おのれ泣けども、わが子泣かすな」コンコンという。

これを半紙に書いて、子どものねどこの下にはさんでおいた。夜泣きがとまつたら、オシリヨウサマに水をあげるという。本家にオシリヨウサマがまつられていても、新しく分家した場合には、オシリヨウサマはまつられない。

むかし、生きりようがたるとか、死りりようがたるとか、その場合には、先祖様をおがめといった。(水沼合間)

オシリヨウサマはお稲荷さまより二先祖様(古くから

まつられているということ)だとか、ほんものだ

というので、稲荷まつりのときに赤飯をあげるのだ

といふ。(水沼下水沼)

オシロ一様はその形から一名イモガニ様ともい



オシリヨウサマ——寛政十一年  
(川浦西ヶ瀬)  
(阪本 英一 撮影)



中沢イッケの星教神 中央後の竹にシメ網をした  
下にオシリヨウ様の石を祭る(隣田)  
(開口 正己 撮影)



オシリヨウ様(高さ 50 cm) 元文五庚申歳七月吉日  
シメ網で囲ってある。(亀沢)  
(開口 正己 撮影)

う。屋敷内には石宮の屋敷稻荷を祀る。石宮のない家では薬のお仮屋を造っているが、その隣に並べて石製のオシロ一様を祀っている。十二月十五日、赤飯、鰯、豆腐をすつてまるめ、お供えにして進ぜる。最近の分家には、お稲荷様のみあって、オシロ一様は祀っていない。塙越家の新宅の場合(今は屋敷がないが)石宮の屋敷稻荷は、本家の東に南向きにあり、これには左右に「文政二卯年正月吉日、願主」裏面に「川浦下組・塙越新左衛門」の銘がみられる。

なお、昭和二十七年に九十六才で死んだ母親から「死んで三十三年たつと神様になるが、このときトムライアゲをする。これをオシロ一様といふ」と聞いているという。(下村)

オシリヨウサマは屋敷稻荷の脇に祭られている丸い石をいう。ハヤリヤマイを治す神であるという。十二月十五日の屋敷祭りにお赤飯はあるが、稻荷様と違つて、オトウフとオカシラツキはあげない。(六区)



原田多三郎氏方のオシリヨウサマと鬼子母神（長井）  
（上野 勇 撮影）

ヨウサマは、屋敷からは田んぼをへだてた東の畑の北側にあるもので、高さ三十七回、最大径約二十五cmのもので、年号があり「寛政十一年八月吉日」と記されている。

屋敷まつりのときにおまつりをするものでおこななどを進めたときは後をふり向いてはいけないときつくりわれている。ふりむくとさげてくれないと。（川浦）

オシリヨウさまのたたりり 西ヶ瀬原田多三郎氏方のオシリヨウさまに、近所の婦人が毎朝お茶を供えに行くようになったので、わけを聞いたところ「体のぐあいが悪くなつたので易に見てもらつたところが、オシリヨウサマがたたつて」といわれたのでお茶を進ぜに来たのだといふ話だつた。しばらくの間進せていたその婦人の病気はシラチだつた。（川浦）

屋敷稻荷の脇に並べてオシリヨウ様をまつる。覚えてから作つたものはないから明治時代以前のもの。頭の丸いもの、尖つたもの、平べつたいものなどがある。坂上村にもある。吾妻町大沢高橋哲次家にもある。よくやつた。（陣田）

オシリヨウサマは芋型の石で、屋敷を守る。十一月十五日お仮屋を立て祭る。大概の家にある。（長井）

細尾のある人が山へカヤ刈りに行ってけがをした。おがむ人に見てもらつたところが、屋敷にまつっていたオシリヨウさまをまづらなくなつたためといわれた。その家では、火事にあって、オシリヨウさまがやけていたなくなつたためだといわれている。その家は、細尾で一番古い家だという。

（川浦字矢陸）

おがむ人が死靈のたたりだといつた病人がでたときなどに、それは、オシリヨウさまのお茶をあげろといわれたことがあり、そのときには、オシリヨウさまにお茶をあげろといわれたこと。

むかし、いいうちでオシリヨウさまをこしらえたんだといつて。新しく分れたうちでは、オシリヨウさまをまつていない。おまつりは、十一月十五日の屋敷まつりのとき。（川浦字桑字本）

川浦の矢陸は現在二十軒。このうちオシリヨウさまをまつっているのは四軒だけ、それぞれの一家の本家の家のここでは、このむらへ一番先に入った家の先祖をまつったのがオシリヨウさまだといつて。オシリヨウさまをまつっているのはつぎの家で、まつりは、十二月十七日の屋敷まつりの日。

伊井栄太郎家・伊井七郎家・原田敬次家・松井亮家。

なお、ここでは、むかし、十二月十五日同晩に火事がつて屋敷まつりができなかつたことがあり、それ以後、十七日に屋敷まつりをやるようになつたといつて。（川浦字矢陸）

## 五 屋 内 の 神

荒神様 正月のおかざり、春折縛のときのきりはぎをあけるくらいで、とくべつのおまつりの日はない。ただ、ふだん、荒神様をおこらせるとかがをするとか、荒神様のたたりはひどいといつて。荒神様は身上（財産）を守る神様で、ミソを焼くと荒神様がいやがる。

「せいたくすると荒神様におこられる」という。ミソを焼くと香ばしくてうまい、で、せいたくだったのです。(陣田)

荒神様 お正月のおかざりと、春祈禱のときのきりはぎをかざる程度

で、特別のおまつりはしていない。(水沼)

荒神様には、稻刈りのときに、刈りあげたいい稲を一株とつて来て、カマ神様にしんぜる家もある。(川浦)

うまやがみさま 台所のうまやのところにまつてあるが、現在ではお正月とか春祈禱のときにおかざりをする以外は、とくにまつるようすることはしていない。(水沼)

天道柱 緑側の中央のところに柱。春祈禱のときには、ここにもきりはぎをかざる。

また、七夕、十五夜、十三夜のときには、それぞれのときにおそなえするものと同じものを、天道柱のところに一つしんぜる。天道様のおかげで、百姓仕事をやっていくけるという気持でおそなえをするものといふ。(水沼)

水神 水神様の丸い石を拾つて来て、神棚のお札の台にする。(陣田)

#### (六) 諸 祈 願

七社まいりの鳥居 北野神社の鳥居の中央の表裏に三つずつ鳥居が刻まれてあり、本体と合わせて七つの鳥居を表わしている。銘が次のようにある。

于時 明治二十六年 稔仲夏吉辰  
確 水都鳥淵村大字川浦村

施主 年八拾八令 原田幸吉

年八拾九才 婦 エイ  
発起人年六拾參 婦 ヤヲ

五重重巻書(花押) (岩永)

豊盛祈願 東横野のサギの宮に豊盛祈願に行く。この神社は蛇神で、



七社まいりの鳥居  
表裏に三つずつ鳥居を刻み、本体と合わせて七つの鳥居を表わしている。(岩永 北野神社境内)  
(丑木 幸男 撮影)



七社まいりの鳥居  
北野神社(岩永)  
(丑木 幸男 撮影)

養蚕の時ネズミが蚕を食うのを防いでくれるといってお札を受けてきた。サギの宮にはヘビがたくさんいるが、養蚕をするといって、誰もかまわなかつたから、ヘビが緑の上に横たわっていることが再三あった。また白いヘビも見たことがある。お札を買うと養蚕守護のためにヘビがついて来る。ついて来たかどうかは川を渡る時、川原の石を見ればわかる。石に水がついでいればヘビが来たのである。(第一区)

小正月のマイダマを作る時、ちちで細長いものを作つてボクにさしてわたしたものをサギノミヤサマといふ。ヘビを表わすものをいひ、ネズミ除けである。

(川浦)

雨乞 ひ

でりが続くと、村中みんなで様名山へ行くことがあつたが、水をもらつてくる遊びに行つ

たくらいのことで、「榛名山でシントサンが拌んで柄杓で水をかける」という話を聞いた程度という。

実際に村の中で雨乞いをしたことはない。(川浦)  
天気まつりとり入れどきなどに雨大が長く続いたときには、雨が旱くやむようにと、村の人たちが天狗様のところにあつまつて、天気まつりをやつた。(水沼中尾)

日参 戰争中は榛名神社に日参した。武運長久を祈つて。一年半ぐらいいは続いたろう。こんなに日参したのに戦争に負けたといって、それから榛名様にお詣りする度数は減つた。

戦争中は上野十二社(県社)参りもしたし、千人針も区全体としてつくつて送つた。(一区)

願かけ 榛名山のビングン稲荷には、金を借りてきて倍にしてなした。遊集山に行つてお天狗様を借りて来た。(一区)

## 小 論 類

天狗様 中尾の天狗様は十日夜のときにおまつりをしている。

旧十月九日の晩にもちをつく。もちをさい切つたもの百八コを重箱に入れて、十日の朝早く天狗様へおまいりに行って投げる。天狗様のお宮のうらから、星敷ごしにそのもちを投げる。投げる時に「大天狗様にあげます(しんせます)」と声をかけながら投げた。これを、子供たちがひろって、うちへもちかえつて、おみこくとして食べた。また、もちは、境内のほかの神様には、きりもちを二つずつあげてくる。

天狗様には、きりもちのはかに、長さ三、三尺、巾一寸ぐらのもち(サワモチという)を一枚重ねて持つて行つてしんぜる。天狗様のお宮の屋根にかける。それをさげて、うちへもちかえつて、おみこくとして食べた。なお、でき」と(死者の出た場合)があつた家(一マケ)で、四十九

日たたない場合には、エンニンといつてこのときは天狗様へはおまつりしない。(水沼中尾)

中郷の場合は、旧十月九日の晩にもちをサイノメに切つたのを重箱に入れて、天狗様にあげてくる。もちの数は特にきまつていない。昔はつとこに入れてもつて行ってあげたという。神社の境内にある諏訪様、稻荷様、秋葉様などにもおまつりして、もちを二、三コあげてくる。また、天狗のサワモチを二枚もつて行ってあげて、また、さげて家へもしかえる。(水沼中郷)

下水沼の場合には、もちのはかに赤飯を重箱につめてもつていく。(水沼下水沢)

天狗は十二月八日にお祭するが、お天狗様では不思議のことがある。泊っていると夜中に「フワフワフワ、ドシーン」とでかい音がした。峯のお天狗様が音をたてる。(陳場)

産泰様 中尾にあるお産の神様、祭日は、淡島様と同じで四月十日。

他村からもおまつりにくる。安産の祈願をして、安産であつたらお札と

して旗をもつていて納める。(水沼)

産泰様はオアスナ様(榛名神社)の境内にある石宮で、三月二十八日に

にお参りにいく。

花輪・鉄火・高座で祭る八幡様の境内にも石宮の産泰様がある。ここには講があり、「一月に話し合いで日を決めてやつてある。女衆が全員お参りする。その際、籠をなつて持つて、シメを張つて、オミキスズを供える。オミキスズは、切り口を斜めにした竹一本を半紙でつつみ、水引きで結わえたもので、中に酒を入れて供える。その後は宿に集まつてスシヤゴモクメシを作つて食べる。米は持ち寄りで、宿は輪番制である。(第六区)

産の神としては矢陸に産泰様があり、安産祈願を行つた。高崎には「オボロウサマ」があり、そこから人形を借りてきて、だきねすれば、子供が出来る。又、安産になるとされ、返すときは一体にして返した。

十二様は十二人の子を産んだが、みんな軽かったし、丈夫に育つたといわれており、炭焼の女性は、みな軽かったので十二様を信仰すればよいと聞いています。

便所の神様は、便所をきれいにしておけば美人を産してくれるといわれていた。軽く産むためには、ほうきを洗って逆に立てればよい。(七区)

**道祖神** 子供組が中心で正月十四日朝どんどん焼を行なう。このとき一同が控えている宿が決まっている。男は十五、二十五、四十一、女は十三、十九、三十三の各年令の人々が厄年で、厄落しにみかん、お金を投げる。どんどん焼の火で、まゆ玉を焼いて食べる風邪にかかるといふ。松のもえ残りを屋根に上げておくと火防になるともいいう。又、ぬるでの木で作った刀を、この火で焼いて家の入口に置くと魔除けになる。たちともいう。(二区)

**双体道祖神** 川浦にある双体道祖神は享保年間のものが多いが、その理由は不明である。村の発展を期したものや若い男（夫）が結婚してお前を大事にするとその恋人や妻に捧げたものもある。材石はこの地域のものらしい。刻んだものは職業的な石工だけでなくふつうの人が丹精こめて作つたらしいものが多数ある。(川浦)

**座主の森** むかし戦争で権名の座主がこの地で戦死したという。この



三之倉神明宮の道祖神  
(近藤 義雄 撮影)

近くの上野みや子さんの家では、この座主の森の西の竹やぶからお葵岩にあげる梵天の竹を権名神社に奉納してきた。このときはサラン反を竹に巻いて

持っていた。現在座主の森には南北朝時代頃の板碑が二面と板碑残欠、石碑などが立てられ、石燈籠には「安永三年午ノ五月は、奉納御宝前、石神村中」とある。(下郷)

### 三、俗 信

#### (一) 俗

信

**三隣亡** 三隣亡を信仰した人は、欲しい物があれば、こわ飯をふかして幣束を立てて置けば来るという。人に見付かれば駄目になる。三隣亡除けには、猿田彦大神を信仰の方へ向けて立てれば除けられる。三隣亡の日にその家に行るとわかる。三回見たが、人にわかれれば効かなくななる。あべこべを食うことになる。身上をつくるには三隣亡の方がよい。(陳田)

三隣亡を信する人は、賽り物をこしらえて近所に配るが、それを食べてはいけない。上権田に三隣亡を祭る家があつたという。三隣亡に対しては猿田彦を祭るといい。

三隣亡はネズミのようだといふ。大晦日に、三隣亡の家では飯櫃をシャモジでたたく。するとオサキ（三隣亡）が寄ってくるという。だからシャモジで飯櫃をはたいてはいけない。(六区)

**お百度** 大病人がいると、部落の人みんなが神社へ行ってお百度をふんだ。きさは今まで降りては、拝殿に向つた。あらかじめ、榊（すつと前は麻）の葉を百枚用意しておいて、拝むたびに一枚ずつ置いて来た。

(一区)

顎をかけて近所の神社です。あるいは大神様の七つ鳥居をくぐる。一つくぐると七回分になるわけである。(本丸)

ショウジンバ、きれいな水が出る所で、死にぎわの病人がそこの中水が飲みたいという。こまかい水なのか、のどにつかえない。(陣場)

塙断ち 酒たち、タバコをたって折廻することもある。(一区)

藤膳 兵隊に行つたり、伊勢参りの家族があると詠歌をすえた。その人がふだん使つている膳に御飯を盛つて床の向においた。(一区)  
アガタ 明治の末ころまでアガタといわれる女の人が来た。この人は箱を風呂敷に包んで背負つてきた。一人で来た。  
死んだ人にはいたいと呼ぶだしてくれた。箱の上に茶碗をのせて話しが途切れそつになると、茶碗に水を入れて、ワラミゴで水をかきました。そうするとまた、はなしが続いた。(川浦)

## (二) つきもの

オサキ使い 金を残すといわれている。某家はオサキ使いだといい、それは他家に行って、お金、米などを全部運んでくるという。(本丸)

形はいたちの小さいのに似ている。多くふえて困る。よその家へ行って、うどん粉を一箱ぐらい持つて来る。杓子を與れるとついて行く。親神が封じていけたが、今でもそこを掘れば出る。(長井)  
山大様 山大様は十二様のお使いだ。(オコジョについては聞かない)。榛名山の奥りに山大様が巣をこよえて子を育てた。こわ飯やご馳走を持つて行つて置いて来る。ある日、女衆が子どもをおぶつて行き、山大様の穴をのぞいたら、その拍子に背中の子が転がりこんでしまつた。困つて家に戻つて来たら、その晩子の鳴く音がする。出て見たらその子がちゃんと来ていたという話を聞いた。(陣田)

## (三) 怪異

怪異 中沢高次馬方が馬を引いて坂を登つてきた時、コン坊生が先を歩いて行くので、馬を急がせれば先方も急ぐし、静かに行くと先方も静かに歩いたという。(陣田)  
木を削る音 宮ゲートの奥りで一晩中サキヤマ様を削る音が、コツーン、コツーンとするのを聞いた。(陣田)

狐火 戦時中のこと、亀沢の友さんの前の田んぼで灰焼きをしている

のを見た。先方に行つて、人に聞いたら誰も焼いていないという。帰りがけに見たままだ焼いていた。その時、大畠の真中で狐が鳴いていた。

次ぐ日に見たら火の跡もない。狐は悪いことする時はケーケーと鳴く。

コンコン鳴きの方がよい。今は狐はあるが化かすことはなくなつた。(陣

田)

大沢道の上の大曲りの所では、自動車がライトをつけて飛んで来るが、光は明るくないし、音もしない。みんなが不思議のことがあったという

場所だった。戦前のことだ。(陣田)

光り物 墓の前にいたら、自分の影が前に写るので、振り返つたら稲光の固まりが後ろにあった。そこでは二回ほど見た。狐は光がもたない(自分だけ光るが照らさない)というが、あれは影ップシが写つた。(陣

田)

中沢須摩さん(明治二十五年生)が十四才の時、正月十四日道陸神にミカンを投げて厄落としをするのを、子供が拾いに行つたが、後の山から直徑二十cmぐらいの光り玉が出て、煙でぼっかり消えた。光り物は十五才前になると、その人は一生見るというが、ほんとうによくみた。

十七才の春に親父が仕事に連れて行つた。岩鼻の大柏木の天神様(観音か)に泊りこんだら、キツネ嫁取りを見たので寝られやしなかつた。上ノ原の雜木林に提灯が二つ三ついたと思つたら、そのうち二十も三十も上の方について、きれいだった。幾人も見てた。そこでは二回見たが、それきりキツネ嫁取りは見ない。(陣田)

火の柱 宮ゲートの奥り、御所ゲートに登る道を、油ヶを買ってショイビックに入れてしまつたら、火の手が上がりだんだんでつかくなり、一丈も一丈も伸びて立つていて。開口は少しも明るくなくて、火の手だけが高く上つていて。灰なんか焼いてた所で、キツネ火だつた。(陣田)  
亀沢の百香供養塔下の田んぼに直徑一m、高さ十mぐらいの火の柱が立ち、上方からだんだん消えたが、きれいなものだつた。(陣田)

ある夜、ここにケードの井戸つ尻に提灯がふわんふわん浮いて田んばの方へ移って行った。消えると淋しい。十五日夜の二つも三つも寄ったくらいの大きいもの見た。そこにいる者の者が見た。

人玉は人が死ぬごとくらいによく見たが、今は見なくなつた。(陣田)  
戦時中に中沢清和(?)が戦死した時、ニューギニヤから光り玉が来て、ケヤキの枝に沿つていて消えなかつた。えらいものだつた。(陣田)

#### 四、仏教民俗

##### (一) 村の寺院

明治十二年の「寺院明細帳」によると、本村内の寺院はつぎのとおりである。

宗派名	寺院名	本尊	所在地	備考
真言宗	祐全寺	大日如来	三ノ倉字上野谷方	開基直心法師法印 慶長四年創建 創立基朝弁法師 創立慶長十四年
曹洞宗	福藏院	"	三ノ倉字暖井	
大日堂	利樂寺	"	川浦学校	
	蓮華堂	阿弥陀如來	水沼字中郷	(境内仁堂北向堂) 開基延元己内 境内弘法堂 地藏堂 觀音堂
	觀音堂	觀音	三ノ倉字栗崎 岩永村字元村	
	東善寺	觀音		
	全透院	觀音		
	大日如來			

祐全寺檀下の者は、水沼の蓮華院に頼んでいた。なお島山・相吉はもともと蓮華院檀下である。(一区)

##### (二) 観音信仰

十一面觀音 大防の觀音様といわれ、西ヶ測ではよく信仰したので火事がない。(一月二十日の祭りに絵馬を上げる。(七区))

水沼の觀音 正月十七日にさかり、十六日の夜から十七日にかけて馬をひいてお詣りにいった。吾妻、安中方面からもきた。信州別所の觀音と水沼觀音は兄弟の觀音様ともいい北向にまつらである。(下郷)

厄除觀音は蓮華院の境内にまつてある。この觀音様は、信州の別所の觀音様ときょうだいであるといわれている。

縁日は一月十六日の晩から十七日にかけてと、八月十六日の晩から十七日にかけて。

二月の節分の晩には厄落しをやつてゐる。これは戦後からの行事である。(会費を払つて参加する)

なおむかしは四月一七日にも觀音様におまつりに来る人が多く、農道具などを売る店もひだらほどだつた。

この觀音様は諸難よけのご利益があるといわれ、よそむらからもおまつりに来る人が多かつた。

縁日のときには、この近辺から馬をつれておまつりに来た。



水沼觀音 (撮影 岸栄)

祐全寺 四五六名の檀下があつたが今は無住。共有林がたくさんあつたが、これをゴルフ場に売ってしまった。  
このほかに寺はない。そこで他の住民は一区にある全透院檀下となり、

厄除觀音であつたが、馬の神様としても信仰が

(水沼)

水沼の観音様は正月十六・十七日が縁日。十六日を夜観音、十七日を昼観音という。馬を飼っている人は馬を連れていった。地蔵峠を越えて遠方からきた。

露店が出演歌師がバイオリンを弾き、「俺は川原の枯薄」などを唄い、賑やかなものである。(第六区)

馬頭観音 馬をなくしたときに、馬頭観音の供養塔を立てて供養した。烏川の河原にうぶする山(神社免)があつて、そこにソンマステバといふところがあつた。馬が死ぬと、そこへもつて置いててな。

なお、埼玉の上岡の観音様へは、馬を飼つているうちのものがおまいりに行つた。絵馬とか、筆を買つてきた。馬が病むとその筆を食べさせた。(水沼)

火伏せの観音様 西ヶ瀬の観音様は火伏せの観音様で、馬が春駒である。正月の二十日が祭礼である。昔は農業をやっている家には、二頭位の馬がいたから、村中のものが馬をお詣りに連れてくると、たいへんにぎやかさだつた。観音堂の近くで男こどもが、太鼓たたいてはやすと、これに鳴りかけの馬が驚くのが、見ていてもおもしろかつた。正月の二とて、御年始も兼ねたので、ヨピッコはいたい人出だつた。(川浦)

### （三）薬師信仰

薬師様 めの薬師様と言われ眼病祈願の人が多く参拝する。「め」といつも書いたのをあけた。(岩水)

薬師様は眼の神様で、オガニショをかける。(第六区)

薬師様 上ノ山の薬師様の縁日は三月八日である。同じ川浦でもシモからおまいりするひとは少ない。(川浦)

### （四）地蔵信仰

地蔵様 坂下の地蔵様は子育て地蔵といわれている。子供が弱かった



坂下の子育て地蔵様  
(佐藤 清撮影)



薬師様 (岩水) (丑木 幸男撮影)

りすると、赤色の腹がけ

や帽子をあける。縁日は四月十七日。子供がママに育つようについて、豆の粉の餅を作る。縁日

には露店が出たり、芸人を呼んだりして賑つた。処女会や婦人会が、アヤメ団子やカシワ餅を売つたりしたが、前もつて注文しておかなければ買えなかつた。

地蔵様はもともと下平の九衛門さんの所有であつた。この人に三人の男の子があり、上の二人は立派に身代を築いたが、末の太郎兵衛さんは酒呑みで、家屋敷と地蔵様も売つてしまつた。いつか地蔵様は高崎の九蔵町のフジサキという醤油屋の奥庭にあつたという。ところが、「椎田に鳴りたい、鳴り

みで、家屋敷と地蔵様も売つてしまつた。いつか地蔵様は高崎の九蔵町のフジサキという醤油屋の奥庭にあつたという。ところが、「椎田に鳴りたい、鳴り



地蔵堂（全透院）（近藤義雄撮影）

#### 丸山太茂氏宅の不動様

（佐藤清撮影）

丸山太茂氏宅の裏手に不動様のお堂がある。このお堂は三代目の人が建立したものであるが、不動様を祭つたのは、初代の順峰様である。丸山太茂氏は四代目である。順峰様は近江の三井寺から笈を背負つて柳田にきたといわれており、その笈はお堂の中に現存してい

**五** その他の仏教信仰  
**不動様** 丸山太茂氏宅の裏手に不動様のお堂がある。このお堂は三代目の人が建立したものであるが、不動様を祭つたのは、初代の順峰様である。丸山太茂氏は四代目である。順峰様は近江の三井寺から笈を背負つて柳田にきたといわれており、その笈はお堂の中に現存してい

たい」と地蔵様が夢枕にたつたので、貰ってきたといふ。また、室田の山上にいて、夢枕にたつて連れかえったとも伝える。近在では靈験あらたかを伝える地蔵様である。（第六区）

地蔵様には子供の病気のお願い頭巾やヨダレカケを上げる。（陣場）



弁天さま（川浦、矢陸）  
安政9年建立（阪本英一撮影）



マリシテ（第六区）  
（佐藤清撮影）

不動様  
（川浦）  
マリシテ  
ンマリシ  
テンをおが  
むと頭がよ  
くなるとか。  
競争に勝つ

る。順峰様は、マルヤの姓である丸山を貰つて植田に住み、近所の子供達に文字を教えたりした。坂下の子育て地蔵様のところにある祭りの時、詰め所は、順峰様の家を寄付したものである。

不動様の祭日は三月二十八日である。祭日には、護摩をたいて祈禱をしてお祈りをしてもらつた。祭日にはホラ貝を吹くが、そうすると、天地の神々、日本中の神々が、そこに集まるのだといわれている。（第六区）



聖德太子（中央）弘法大師（左右）（島山）  
(近藤 義雄 撮影)



島山の大師様  
(近藤 義雄 撮影)

大師様 倉渕の谷には二十一か所に大師様（弘法大師）をまつたところがある。たいてい旧道添いである。島山の大師様は部落中央の道端に小さなお堂があり、その中に坐像の大師の石像があった。土屋一族の墓地にも大師堂がある。ここには正面に聖德太子像（立像）があり、その左右に弘法大師像がある。向て右は三十五センチ、一本造、左は三十センチの石像で、両者とも坐像。この堂は、先祖が四国雲場巡りをして帰つてから作つたという。聖德太子像にはつきのような墨書銘が背面にある。

前橋北の八木のくし

大仏師 栗原

定運作之

嘉永三戌五月一日

なお、この堂内には、葬儀に用いる黒塗りの龍頭があり、十五石仏も

堂前にある。（島山）

三輪亡はマルシテン（摩利支天）これをまつた人が向う三軒をとりつくす勢いがあるので、三輪亡のあるところには必ずマルシテンさまをまつのがいいというので、三輪亡のあらとこには必ずマルシテンをまつる。（川浦）

弁天様 中尾の坪井戸のわきにある。坪井戸というのは、小さいわき水のことをいい。もとはのみ水につかつた。

ここは、弁天様をまつっているので、どんなに日照りのときでも、この水は絶えることがないといわれている。（水沼中尾）

弁天様の石像に首がかけていたので、埋めようとしたら、その施主が病み出した。一ヶ月かかると首を見付けたら病気が治つた。石で造つたものでも魂が入つてるので、バカにできない。そこには「弁天」の地名があり、埋めたてて地ならししようとしたもので、弁天様が施主にたたつたのは、施主にすがろうとしたわけだ。今はお堂に行つてある。（陣田）

嘉永三戌五月一日

相吉の太子様は大島にあつたのをあげた。二十一大師といつて毎月二十一日にお祭りした。室田には石芋の弘法様というのがある。弘法様に里芋を石いもといつてあげなかつたら芋が石になつたといつて。今でも

ハツ頭芋のような石がある。（相吉）

シオソカノジイサン 村で石像を造ることになり、榛名山のスモウ岳から石像のアラドリをしようつて来た。山口定右衛門家で、名を磨りこんでくれればよつて来るといつて、先祖がよつて来たといつて。彫刻が

いいが、シヨウジンバという所で刻んだらしい。

堂のモミジの大木が邪魔で伐つたら、枝が当つて石像の首がもげた。

風邪をひいた時、コウセンをこさえて行つてなめさせると治るといつての

で、石像は始終口にコウセンをくつけていた。このきりはしない。

シヨウジンバをエンマ様ともいいう。（陣田）

ホウトウ様 鉄父の石井誠太郎さんの祖父である富次郎さんが建てたもので、地元ではホウトウ様と呼び、目の神様として信仰している。お祭りは十月十五日に石井さん宅でやる。オンベロ（御幣）をこしらえてあげる。

碑の字は、身延山の七十四代の日鑑が書いたものだという。石井さんは、東善寺（曹洞宗）の檀家だが、おじいさんの一代だけは日蓮宗の信者であった。（第六区）



行人さま (川浦隨原)  
(阪本 英一 撮影)



シウヅカのジイサン  
(口に団子が入れてある) (二区)  
(阿部 孝 撮影)



二十二夜様 (坂下)  
(佐藤 清 撮影)



ホウトウ様 (佐藤 清 撮影)

行人さま 中原、中村、上の山の三ヵ所に三人の行人さまがまつられている。むかし姉妹三人が行人様としてやって来て、この三ヵ所に生き埋めになつたものをいう。一番大きい唄が穴の中で長く生きていたたかな神で、そここの木の杉つ葉も持つて来て燃さないくらいにしてまつた。公民館近くにまつられている行人さんは、石宮が二つあり、もと伝えられている。互いに見える所に三角になるようにあつて、大変あらめぐりが一丈一尺くらいの大木があつて、切り株がいまも残っている。

毎年、土用の丑の日がまつりの日で、キリハギ、ポンテンを立て、

シントさんが拌む。中沢文吾さんの家で管理し、何か供えるが、村の人は立ち会わない。（川浦）

二十二夜様 坂下の河野さんの裏手にあるが、これは最近建てたものである。女衆が目の神様であるという。（第六区）

二十三夜待 女衆が月のあがるのを家のなかで待っていて、月があるまで話し合っていたが、とくに儀式的なまつりはない。（相吉）二十三日夜の、女衆が集りサンヤサマを信仰する。菓子や米の粉のだんごを供え、月が昇るまで待ち、昇ると金貨でおがんで別れる。サンヤサマを信仰すると利口の子供が生れるといわれている。（七区）

# 人 の 一 生

今度の調査でしきりに思われたことのひとつは、急速な習俗の風化と変容は何を契機とするかということだった。このことについて現象的には、戦争を、経済の急速な膨張による物質文明の渗透を、実際に膨大ななかでのマス・メディアの発達等々による生活文化の根柢からする変容やらをあげることが可能かもしれない。だが、しかしだ、それらがあつておわればあとも変わらない部分は変わらないのであり、あるいは、とうに姿を消したと思われたものが、突如として日常にせせりだしてくることがあり、それが日常をつきやぶるという逆説が確かにあらむ。わたしましろ後者のようなものを、この問い合わせまる重要な原因とおさえてみたい。もししかしたら、それはすでに宗教、あるいは観念の領域の問題であり、これまでの方法ではつかみえない部分の方が多いのかもしない。

ここで人の一生の習俗としてとり扱うものは、これまでの調査と同様に誕生・年祝・青年集団・婚姻・葬儀である。すなわち、「冠婚葬祭」の「祭」をとりのぞいたものがこの項目で扱われる領域である。部立についてはこれまでの報告書にならうこととした。これらの習俗は、社会生活・信仰あるいは年中行事と関連するものが多いので、これらの章をも併せて参考されたい。

誕生・年祝・青年集団・婚姻・葬儀など人の一生に関する習俗は、あらゆる習俗がここ数十年の間に大きく変容し、あるいは消滅していく傾向にある中で、比較的風化の少ない部分かも知れぬ。それは何故だろうか。

時代の変遷のなかにあっても、慶事だけはおちることなく反復されて

いくことがある。そのことについてはつきりと説明しきれないけれど、ひとはおめでたいことについては、その習俗が急速にあらたまることが多いではないものがあるのだ。これはおめでたいことは反復するに値するということを意味するのだろうか。また、くりかえしに耐えることだけが価値あることであるということか。

婚姻の習俗で、とりわけ注目したいのは、トムコの役割である。御祝儀に直接関連したものだけでも、くれ方もり方双方のトムコがむら境で顔を合わせる嫁とその荷物のウケトリワタシをはじめとして、三三九度の席における語い、すぐそのあととのトムコ結び、トムコ座敷などがある。ここにはあげぬが台所など裏方の仕事いっさいもまたトムコのものである。いまあげたトムコ結びや婚約成立時のトムコに対する他の挨拶などは、その意味をかんかえるときいたく象徴的である。昔は御祝儀の席にあはれこむ青年もあつたとかで、そのような事態に至れば、仲人の面目は丸づぶとなるから、これらの仁義は実にきちよめんに行なわれた。御祝儀は旅館や公民館で行なうことが普通になつてゐる現在でも、仲人の役割はいさきかも変わらないといふ。また興味深いものとして、他の部落への転出後にもトムコとしてのつながりは続くという報告がある。トムコについては、既刊の民俗誌が、その特徴として同年齢集団であることを強調しているが、今次の調査の範囲では、そのことにはどの報告も否定的である。ここでは、共通項として、隣り組で親族を除いた他がトムコであるという、地縁性だけをいつておく。

通婚圏については、むらによりある一定の傾向があるようである。例えば、川浦の西ヶ瀬では一定期その嫁の半ばを碓氷郡松井田町から迎えている。兄弟、姉妹のとりかえつこの例もきいた。また、カミの部落

ほど嫁を里に求め、嫁先にいても「米粒ほどもシモに往け」という。逆に「嫁をカミに求めるははずはない」といういわ方もある。ある空間に生活するものにとっては、そこがどんなに奥山であろうと乾いた不毛の荒蕪地であろうと、住めば都というやつである。価値の序列などということがあろうはずがない。だが、他者との異和を覚えたときからそれが生まれ、幻想でしかなかつたものが恒常化し、あたかも実体あるもののようにのさばりだしてくる。この村でも近代になると、講中の参詣の帰途で良縁を得たり、兵役についた土地で恋愛結婚をするものがありで、この神話はどうのむかしにくすれている。

生活圈の極度にせまかった時代の常として、外部からのわずかな刺激についても、実に敏感な反応を示している。それは文物だけではなく人の交流など様々である。ここに命のためにいえば、そのせましさは決して強いられたものとばかりいえないのはもちろんである。また、当然のことながら人々にはじゅうぶんに充ちたりた空間であつたはずである。これは特殊な場合に属することになるかも知れないが、青年の場合にその典型がみられる。例えば、むらにやつてくる芸人や商人、とりわけ越後からの藝妓や越中からの娘薬売りなどとのつながりにはほほえましいものがあった。現に迎えられてかの地で豊かに暮しをたてているものがいる。

水祝いとおやおやはすべてのむらにみられるわけではないが、旧行政区にかかわりなくこれが行なわれていたことが報告されている。どきつい婿（嫁）いじめではないようだ。

現在も地区によっては開業医のいないところのある村であるから、交通の便の悪い時代においては、病人の発生はむらをあげての大騒動であったにちがいない。それらについての報告がいくらかある。また、同種のものとして出産の際の妊娠の危険のことなどがあつたが、野良や山で生まれたことの名前によくみられる周囲のもの願いやその後の健やかな成長のことをきくところがやすまる。

この項目についても、戦争の影響ということは大きな要因のひとつである。死の領域についてただに観念としてだけではなく、己れのすぐ隣にあるものとしてこんなにも実感した世代はあとにもさきにもないことだろう。例えば、戦争期におけるおんなたちの生き方だが、それはもうこれまでとはちがつた角度で扱われてよいのかも知れない。出征したもののかけ膳をすえなかつた家族はなかろうし、その無事を祈つて産土様にお願いをかけたり、お百度参りをしなかつた母や妻や妹（姉）や娘はまれであろう。そして、奇妙なことだが、出征したものは「往つて参ります」ではなく、「往きます」とのみいおいて、家郷をあとにしていくのだ。「先立つて不幸」を強いたられたものの親たちはいまあまりに長く生きすぎたと思っている。

トムコは、この不幸に際しては葬礼トムコと呼ばれて、ここでも重要な役割を果す。御祝儀のトムコと全く同じ構成員でありながら、これをホウベーと呼ぶ地区がある。

葬儀については、比較的古い習俗が現在も行なわれているようである。例えば、野辺の送りのあとトムコによるお仏事がきちんと行なわれているむらが多い。また、この村でも、三十三回忌の技つき塔婆のことがきかれた。最後の年忌をおえると、死者はオシリヨウサマと呼ばれ、その家の先祖としてまつられる。屋敷細荷の傍に鎮座する珊瑚型の石塔がそれである。オシリヨウサマのある家がかならずもし古い家とはいえないようだ。この年は安樂死のことがしきりにいわれた年であった。

三代あるいは四代の同居する複合家族がむらの家族の中心をしめていた時代には多くの民俗は永遠不易の相貌をもっていた。それは長老がそうすることを強いるからではなくして、若輩がそれらをうけいれようとするからである。七五三の祝いや成人式が今年はよいよ華麗になされた。ひとは社会の習慣のなかにあるときもつとも安堵するのだろうか。

# 一、誕

## (一) 娼

妊娠の知識

嫁入る直前になつてから、母あるいは祖母から教えても

らう。(川浦)

初めての妊娠 あまりに腹が痛いので、母に軽井沢のはり居に連れて

いつてもらつことになつたが、寒いのでひなたばっこをしていたら、また痛くなつた。どんなだと母に説明を求められたので「下腹のあたりがピクピクしてムシガはねるようだ。ムシならもうやめてくるはずだけど、そんなには痛くない」というと、「そうじやあ、おめえあれじやあねえか、まちがいなしだ。はりに行くのはやめべえ」といわれた。四ヶ月めの二とつた。

月のものがなくなつてから、「ほんの匂いがとても嫌いだつた。特に姑さまに言わなくとも察してくれた。梅干しでも、みかんでも好きなものを食べろ」と言われた。(七ツ石)

妊娠を誰に知らせるか、姑や実家の母より夫の方が安直に話せるようだ。夫がその母に「はじまつたつていうよ」などとしらせるとき、「そきやあ、いいじやあねえか」などとつけた。(川浦)

先ず姑に打ち明ける姑のいない家では、近所の年寄りに様子を聞く。姑は嫁から妊娠を知られると、嫁の里に連絡する。(二区)

腰帯 妊娠五ヶ月目の戌の日に、トリアゲバサンにしめてもらう。腰帯の長さは七尺五寸三分にする。つまり、七・五・三というエンギをかづぐのである。この腰帯は晒木縫で、「大」という字を書く。安産のまじないである。腰帯は姑が買つてやる。家では赤飯を炊いて、産泰様にあけ、腰帯をしめてくれたトリアゲバサンを招いて、「ちそ」を出す。産泰様は鎮守の森の境内に石の祠が祀つてある。(二区)

五月日の戌の日になると産が軽くすむ。(六区)

五月に入つた戌の日に腰帯をしめた。「一丈の晒を巻く。姑さまが水天宮さま、産泰様をおがんでくれる。(七ツ石)

腰帯をしめるのは妊娠五ヶ月の戌の日が良いといわれ、普通は産婆にしめてもらう。長さはさらして一丈(七尺五寸ともいふ)は必要だ。

夫の裸を用いるとつわりが軽くなる、という。小祝様から腰帯を借りるといふのは知らない。(桑本)

妊娠中の禁忌 妊娠した女性が火事場を見ると、その時なぜた所が赤あさになる。

また、死んだ人を見た時は黒あざができる。もし、どうしても見なくてはならない時は、懷中に鏡を入れておく。(川浦)

火事を見たり、お葬式を見たりすると、アザを持つた子ができるから懷中鏡を帯の間に入れていた。(七ツ石)

火事を見ると赤いアザの子ができる。人が死んだんを見ると黒いアザの子ができる。(関沢)

妊娠している時、火事を見ると、生まれる子に赤いアザができ、死人を見るときオアザの子ができる。

親戚の人の場合はアザがかけにでるが、他人の場合には顔にでるといふ。だから妊娠は何事があつても、うつかりとびだすなどといふ。

鏡を持っていれば、このアザを防ぐことができる。鏡にうつって子供にうつらない。(六区)

お産 腹が痛くなると部屋のたたみをひつたてて、そこにわらを敷いてお産をした近所のおばあさんによつてもらつたり、家のおばあさんにとり上げてもらう。自分でとり上げた人もかなりいたようで、生まれる直前まで働いていて、その時になつて夫が湯をわかし、産婦が自分でヘルソノ諸を切つてとり上げた。よくしたものでそれでもりつぱに育つた。(川浦)

初めての子は、実家に帰つて出産することが多かつた。約一ヶ月、親

子はそこで生活をして、二月めに帰家にもどるのだった。現在では、殆んど実家に帰ることはなくなつた。また帰つても産院ですることが多い。

(川浦)

初産の場合 産氣づくと夫を遊びに出した。これは夫がいないとお産が軽くすむとされており、初産に夫があると、二回目以降も夫がないとお産ができるないとされていた。(七区)

暗いナンド部屋で生む。ランプをつけていた。覺をしつたて、ワラをつんとしき、その上にボロをおいて生んだ。昔はコタツヤグラにつかまつて生んだものである。(六区)

昔のお産は座産である。疊を上げて、むしろを敷き、その上に寝かせてわらくびを開いて、その上に産みおとす。(川浦)

近所に手なれた年寄りがいて、お産を手つだい、子をとりあげてくれた。トリアゲバアサンと言ふ。水沼の里バアサンは多勢の子をとりあげたので有名である。お産は普通の家では、初子のときは嫁の里で産む。姑が、お産に必要なもの一切を持つて、嫁をつれて、嫁の実家へ行く。二度からは、嫁が先で生む。(二区)

むかしの人がイジメみたい、丸い大きなザルの中でオツバサマ(突つ伏して)で生むのを子どもの頃みだ。私は掛けぶとんを固く丸め、しっかり二カ所しばって、それにおつかつて生んだ。取上げばあさんが「そら、いきめ」と掛け声をかけて生まれさせてくれた。

手伝いの人が後から腹を抱いてくれた。

昭和十三年に最後の子を生んだ時だけ産婆さんを頼み寝て生んだ

(七ツ石)

疊を上げてくれた(粗末な)ふとんを敷いてシビ(藁をすぐつたハカマ、柔かくていい)を置き、油紙をすいたようなことをして産んだ。三日も寝ればいい式だった。(関沢)

姑さまが面倒みてくれた。着ものを縫つた裁ち屑など袋に入れてとつて、それを敷いて生んだ。一週間寝ていた。二十間仕事をしなくも

いいと言われた。オママは別釜で煮て貰った(上石津)

お産が始まると家人もしきりに産泰様を拝む。お産の苦労は体の大きい小さいにかかりなくあるが、小さい人の方が苦労するようだ。軽い人ならば、陣痛が始まって三回か四回やめば生む。普通は三回位で出来

る。「障子の骨がみえるうちは、駄目だ」という。お産の時、夫は家にいなさい方がいいといって、ぐずぐずしている。家人に追い出されてしまう。初子の時、夫が傍にいると、それがくせになつて、つきの出産にもいないと、出来ないともい。夫にあまつたれるのもしない。いなければ、もう苦にならないで、うそのように軽くすむとい。(川浦)

難産の場合は、産婆をよび、様子を知っている近隣の年寄りに手つだつてもらう。男は産室に入るとはできない。産室はすべて疊をあげてあり、布団をつみ重ねた中によりかかるてお産をした。(二区)

お産の場所 産室としては、おりの部屋、なんどと呼ぶ部屋が使われるのが普通である。夫は、産室には入ってはいけない。また、山へ行つてはならぬといわれるのは、夫もけがれているからである。(川浦)

お産は奥の部屋でした。むかしは、疊をあげて、わらをして、お産をしたという。むかしは坐産であった。(水沼)

お産はオクリのデーです。疊を一枚はいで、むしろを敷き、その上に灰を撒き、油紙をおいて、更にボロを起き、ふとんを高く重ねこれによりかかる坐産である。

初産のとき夫がいると、あとも夫がいないと生まれない。余計にやむから居ない方がよいという。

ホウキをまたぐとお産が重くなるという。(下村)

出産と夫 お産のときには旦那はその場にいるものではないという。お産が長びくといわれた。(水沼)

お産の神様 産泰様と淡島様

産泰様は安産の神様である。大胡の近くの産泰様へは、この辺からもあまりに行つた人もいる。

便所は、きれいにして

嫁をもらつた人は嫁さんと交代する。嫁は嫁を宿へつれて行つておねがいした。

おぐと、いい子がうまれるといった。

お産のときには、雷神

様が一番先にやつてくる

という。ふだんでも、座敷

敷はまたぐものではな

いといつている。とくに

女子に対してはやかま

しくいつている。油は下におくものではない。か

けておくものだといつ

（水沼）

お産の神様に福守大明

神がある。寺の門前に福

守様の石像が祝つてあり、子供が欲しい夫婦はここへおまいりして願を

かける。その際「願成就」とかいたのぼり旗を立ててくる。（二四）

産泰様はお産の神様で、西ヶ瀬は石山に大きい石宮がある。三月十五

日がお祭りである。産泰様は部落毎に祭っている。（川浦）

桑本には産泰様はなかつたが、カミの方の川原に平たいい石があつ

たのをむらのものがみつけ、「うちのむらには産泰様がないのでこれをつ

くるべえ」といつて、これを切りつけた。今から五十四年前のことである。現在は、天神様、稻荷様と並んでいて、二月二十八日がお祭りである。この日には、女衆がご馳走をつくつてもちよつてお参りに行く。（川浦）

産泰様 三月二十八日に、むらの女衆が店へよつてもちをついて祝つた。産泰様はお産の神様

参加者は、嫁になつた人から、新しい嫁がくる前の主婦まで、新しく



産泰様（右端）  
明治十一年寅年2月吉日  
（龜沢）（開口正己撮影）

嫁をもらつた人は嫁さんと交代する。嫁は嫁を宿へつれて行つておねがいした。

昼食を食べてから、米五合とあさき一合をもつて宿へあつまつた。もち

は、嫁にきたての人がいた（ちょっとつくまねをする程度であった）。もち

もちは二三すぐらいいた。一人前あんびんもちが十五コぐらいいはでき

た。もちを夕飯に食べたり、あつたのを家へもちかえつたりした。

宿では産泰様の掛軸をかけておがんだ。ご神酒はちょっといただく程度。

女衆があつまつて、すきな話しこそするのが楽しみだった。

もとはこのときむらうちの産泰様（石宮）へおまいりに行つたが、大正十二年に掛軸をつくつてもらつてからは、それをおがんで、おまつり

には行かなくなつた。

なお、家とか、近親者に不幸のあった場合には、四十九日でもすまな

いと、産泰講に参加しなかつた。（水沼相間）

産泰様はお産の神様、掛軸をかけて、ローソクをあげたり、線香をあげたりしておがんだ。このときのローソクの燃えきらないのを持ちかえつて、お産のときにつけると、これが燃えきるまでにお産が出来ると

いった。

自分の代りのものができるまでは、脱会することができなかつたので、嫁をもらつまでは、年をとつても産泰講に参加しなければならなかつた。

（水沼）

産泰講（三月二十八日）参加者は嫁さん、昼食をすませてから宿（交代でした）にあつまつた。むかしは、夜の九時ごろ食食をしていた。現在は、月に五百円ずつの積立をして、近くの温泉へ一泊旅行をしている

（川原湯とか伊香保温泉など）。

むかしは、米を五合ぐらいずつもちよつたり、お金をだしたりして、すしをつくつて食べたり、もちかえつたりした。

産婆 とりあげあさんといつた。むかしは、素人の人が産婆の役を

やつてくれた。

お札は、お七夜のときに、よんでお祝いをしてやつた。そのあとはほとんどかまわなかつた。産婆さんがなくなつた場合には、子どもが見送りに行つた。(水沼)

産婆の原田モンさん(明治二十六年生れ)は十七才で嫁に来て、姑が四十六才でお産をするので姑に教わりながらとり上げた。まだ若かつたので取り上げて三日間も食事が出来ないほどショックであつた。山の中で産婆がおらず衆人がみな産婆の事を行なつた。モンさんはそれから現在まで八十人から取り上げた。最初の双子のときは一人だと思って取り上げたら二人になつたので驚いた。(七区)

産婆は、お産のあと、一週間は湯をつかわせに通う。お七夜が過ぎても、二日位は通りがかりながら「赤ん坊は、どうだい。」なんと声をかけてくれる。産婆へのお札は、昭和〇〇年ころで、二十円だつた。また、反物で一反くらいする家もある。(川浦)

へその縄へその縄はひとくび(てふたつともていつそくともいう)のところを麻糸でしばつて血の出ないようにしてからはさみで切る。へその縄が長すぎてとぐろを巻いたようになるから、それをしつかり腹まきにしばつて動かないようにしないと血が出てしまう。

四日めといえはたいいもげるもので、五日めの朝お湯をつかわせる時みれば、例外なくこれている。産婆は近所なら一週間くらいお湯をつかわせに通つてくれる。(川浦)

二つ折りにして一握の部分に麻を固く巻きつけて端をはさみで切つた。「こいそく」にして切るといわれていた。原田モンさんは姑のお産に手伝つたが、このへソの縄を切る時は夢中で姑に叱られながらやつと取り上げた。これが機会で一生産婆を務めた。(七区)

竹の刀で切る。切つたあとを焼酎で消毒し、乾いて自然におちると、縄の緒を紙に包み、名を書いて、タンスの中にしまつておく。これは薬用とする。(二区)

エソノオは紙にくるんでたんすの中などにしまつておいた。それを女の子の場合には、嫁に行くときにもたせてやつた。あとで大事にしまつておいて、腹のいたむときになればいいとかいった。(水沼)

ヘソノオは部屋につるしておいた。(下村)

後產 赤ん坊をとりあげないうちに、産婆は腹帶をしっかりとしめるようにする。そうしないと後のものがつきあけてしまつ。後のものはとばくちへいけたが、その理由は丈夫で生きているものの付属品だから、

人間の住む所から近い所がよかつたのだろう。現在ではお墓のはし、前の方の手水を置く所に持つて行くことが多い。(川浦)

後產は産婆様のすぐ下の所に埋める場所があり、そこへ持つて行って埋める。(二区)

後のものは、山のある家では、山ならどこでもよいが、なるべく深く掘つて埋める。その上を、へビが渡ると、その赤ん坊は成長してからへビをこわがるようになる。また、イヌなどに掘り出されると、あとから生まれる弟妹たちが病弱になると云う。(川浦)

のちのものは、床下に穴を掘り、その中に埋めてその上にかつをぶしをのせ更にその上に石を置いた。昔は娘で子を産むと森原に埋めることになつてゐた。(七区)

後產は塙とオサゴ、ゴマメと一緒に包を込んで戸ボーロなど人が出入りする所に埋めた。

お墓へ持つてつたりしてもいい。(七ツ石)

ノチノモノはオートクチ(大トボロ)の石の下にうめる。子供があまり夜泣くので調べてみたら、ノチノモノがほれていた。(六区)

ノチザンは床下にいけたり、山に持つて行つて埋める。(下村)

エナとか、のちのものも床下にいけた。(水沼)

カナババ 胎便のこと。生後三日位で乳が出るが、それまではマクリを飲ませた。マクリは医者がくれ、綿にくるんで乳房のようにして、乳の代りになめさせた。(下村)

カナババはおむつを洗いながらすた。(水沼)

#### 産後の食事

お産があると実家では米三升位を、重箱に入れて持つて

きてくれる。産後一週間位は米の飯で、そのあと麦飯となる。おかげは

ナイリ(菜をゆでてカツブシを入れたもの)、おつゆはカンビヨウ入り

で、油物は眼に悪いといい、砂糖は乳が上るといって避けた。産後は一

週間位休む。三週間も休むのは、よく休む人である。(下村)

お産衆は食べるものがいい。おかにカツブシ味噌、それにフのおつ

ゆ位。四つ足、生ものはいけない。野菜も食べると赤ん坊が青い便をするから、悪いと言い一週間位は食べられない。それからでも野菜は煮て

食べる。(七ツ石)

産後食べてもよいものは、かつぶし、麸ぐらいであった。悪いものは、

さんま、かばちや、柿があつた。柿は、はらんだときはよいが、産後柿

を食べ、すくしのような体になつて死んだ人がおるので悪いとされてい

た。(川浦)

油もの、カライものは食べてはいけない。柿はひえるからといって百

日の間食べない。ナスはナスピがさがるからだめ。水も飲んではいけない。ゼンマイを買っておいてミソで食べた。越後からくる本ゼンマイは

高かつた。(六区)

よほどのことがない限り一度だけおかゆで、その後は普段の食事がと

れる。産後のひだちがわかるといつ日から三日はおかゆになる。また、一

週間はおかゆとつゆだけしか食べない所もある。(川浦)

産婦の入浴 始めて湯に入る時、カマの火をきれに引き出して、火の

氣のない様に掃除してから入った。ヒゲシ様に悪いから。(七ツ石)

産の禁忌 お産のあと二十一日間は神様に詣らない。身体がケガれて

いるからである。また正月にはオタナの下に行つてはいけないという。

(下村)  
生れた子はケガレが無いがサンシは二十一日とか、百日ケガれてる、とか言つた。よこれものは日の当る所に干しちゃいけない。月のもの

時でも同じで人の目につかない蔭の方に干す。

またケガしているから神棚へ進ぜるものなどもしない。

サンシは便所の掃除をよくするとキリヨーのいい子ができる、と言つた。(七ツ石)

#### 二 生児儀礼

産湯 使つた後は、床下に捨てる。陽に当ててはいけないからである。

(二区)

産湯は、その部屋の床下に穴を掘つていけたという。(水沼)

産湯は日があたらないところに捨てる。(六区)

初湯は年寄りが床下に穴を掘つて、まけてくれた。(下村)

家からちょっと離れた所に穴を掘つて捨てる。(川浦)

初産湯は、すっかり波立たなくなつてから捨てないと、赤ん坊が乳を

上げるという。家の床下や家からちょっと離れた所に穴を掘つて捨てる。

(川浦)

初湯は床下に捨てる。普通一週間産湯を浴せるが二十一日間入れると

丈夫に育つといわれている。なお湯の中に卵を入れて浴びると皮ふが

なめらかになるといわれた。(七区)

うぶめし 子どもが生まれるとすぐ、一生いくらしができるよう

と、一升の米のめしを炊いた。これは、その時に居合せた、手のあいて

いるものが、だれでも炊いた。これをうぶめしといい、そこに居る人た

ち(産婆もふくめて)が一緒に食べた。(水沼)

子が生れるとすぐオボダテ(白いごはん)を煮る。マメに育つように

大豆を一握り入れて煮て誰でもくる人になるべく大勢の人に食べて貢

う。世間が広くなる、という。(七ツ石)

うぶめしといつて赤ん坊が生まれると、家族のものが土様や稻荷様

に炊きたての飯を進ぜる。また、心配して寄つてくれた周囲のものにも、

いつしょに食べてもらいう。(川浦)

お産見舞 五日とか七日の奇数の日にやる。フとかカンピヨウを持つていく。(六区)

おはちの米 初子の場合には、出産の知らせがあると、嫁の里の母親はすぐ米をもってやってきた。初孫だからとて、米を三升ぐらいいおはちに入れてもらってきた。(水沼)

産着 サラシのジバンコ、麻の葉の着もの、ひとえもんを二、三枚)をしてシメシを作つておく。麻の葉のきものを一枚は着せるもんだ。

真綿を丸くのばして綿帽子をかぶせる。

ホースキに穴を開けカーセで包んで汁を飲ませる。ホースキ虫にならない。(七ツ石)

赤ん坊が生まれると、産湯をつかつてから産着をさせた。これは嫁が用意しておいたが、嫁の里の母親とか、うちのおばあちゃんなどもつくつておいてくれた。(水沼)

祝い着はじめたの子どもには、男の子でも、女の子でも、嫁の実家で祝いの着物をつくつてくれた。三つ紋とか、五つ紋つきのかさね(一枚)をつくつてくれた。それを、お便所まいりのときには、赤ん坊にさせてまわつた。嫁の里では、御七夜にまことにあつようにつくつてくれたのである。(水沼)

赤ん坊が生まれれば、祝い着として嫁(母親)の実家から赤ん坊に、着物一揃い、寝せておく蒲団、ねんねこ、おむつを送るのが現在では普通である。しかし、昔はこれらすべてを孫に作つてやるのはやはり数が少なかつた(川浦)。

お七夜 赤藪をふかして産婆にとどける。産婆もはあこれで丈夫だからあしたつから米ねえ、という。(川浦) うぶ毛 お七夜には初めてかみそりを使い、うぶ毛をそつた。そのうちの何本かを産婆様に進ぜて残しておく。そりてはだれでもかみそりの使えるものがやつた。最近はすらなくなつた。そつたあと、氏神様にお参りする。(川浦)

うぶ毛は二十一日目に剃る。この日をオホヤが明けるといい、このうぶ毛通りかかった牛の背にのせてやると、その子が丈夫に育つとされていた。(七区)

命名 お七夜のときに名前をつけた。

三つ名前をつくつておいて、紙に書いて、一升ますに入れて、稻荷様(屋敷神)にしんせておいて、それを、うちの子どもにひかせた。一升ますに入れたのは、一生よいようにということであった。名前がきまると、半紙に書いて、神棚の下とか、あるいは茶の間の正面の柱にはつておいた。

よその人に名前をつけてもらつたこともあつたが、このときには、お祝い(ひあがり)のときに、祝いの品物をおくつた。(水沼) 名は生後一週間してつける。名を書いた札を数枚一升杯に入れて神棚に上げ、それから子供に名札を引かせてきめる。(二区)

お七夜に名前をつける。普通、その家のオジイサンあたりが、三つ名前を書いて、升を入れて神棚に供えてから子供にひかせる。名前がきまる」と大黒柱にはりつける。

九屋のオジイサンがよく近所の子の名をつけた。(六区)

ヒトヒ子子に、椎田は印がいて、これにつけてもらつたが、ほとんどは本などを見た人や実家の祖父につけてもらつ。(下村)

赤ん坊の名前は、おそらくもお七夜までにつける。むらによつて違うが、産婆につけてもらつことが多い。三之倉に名付の上手な医者がいて、その人に頼むこともある。ひのえまに生まれた女の子や、両親が厄年

知りありの神官や坊さんなどに命名のことを頼むと、三つの名前を用意してくれる。これを机に入れて神棚に上げておき、赤ん坊の祖母や兄弟に引いてもらう。決つたら、名前を父親が半紙に清書して神棚に下げる。(川浦)

両親のどちらかが、厄年に生れた子には、男の子なら女の名前を、女

の子なら男の名前をつけるとよいといった。(川浦)

役場名と通称

役場や学校でのオモテ名とむらうちの通称と二つの名

前を持つものがある。たとえば、梨本の原田チヨさんは、幼いころ体が弱かつたが、方円様に名前が良すぎて弱いのだといわれ、仮り名をハマとつけた。同様の例には、○○リキさん(おみず)がいる。女子に多く、男子には殆んど例がない。(川浦)

便所まいり お七夜の日に、とりあげてくれたおばあさん(お産婆さん)が、つれて、隣近所三軒の便所まいりをした。このとき、お米を炒つてもつて行って、よその家のいろいろの隅に、おさこのようにまいた(お米を炒つたのは、生えないように)。また、へつついのすみで、赤ん坊にお化粧をしてもらった。(水沼)

七日めには、産婆が赤ん坊をだいて、近所の家のお便所まいりをしおひねりにしたおさこをそなえる。おとなう家は、橋を渡らないで三軒というが、たいていは向う三軒両隣りにいくことになる。産婆とはこの日で練が切れる。(川浦)

便所まいりには橋を渡らずに行けといった。

むかしは、このときに、ひたに「犬」という字を筆で書いてもらつた。これは、犬にあわないようにとってあるといふ。(水沼中郷下水沼)

お七夜にセツチン詣りをする。姑が赤ん坊を抱いて、近隣の家の便所におまいりする。子供の額に「犬」という字を書き、オサゴをおひねりにして便所の神様に供える。(二区)

お七夜にはセツチン参りをする。両隣りの便所にオサゴを持っていく。橋を渡ってはいけない。

サラシに赤いエリのついたウブギを赤ん坊の頭からかぶせて、オサンバが連れていくてくれる。そのウブギはサンバの贈り物で、お返しには、下駄・草履・腹巻などをやる。(六区)

せつちんまいりという。お七夜の日にした。(最近はほとんどしなく

なった)

自分の家の便所と、もう三軒両隣りといつて、三軒の家の便所をあかんばをつれてしまわった。

このとき、米といった豆をおひねりにしてもつて行って、いろいろの隅を、おひねりで押していく。このときいろいろの隅を赤ん坊にさわらせることをした。

セツチンマイリには晒に赤い衿をつけたジバンコみたいなものをオボギの上にかけて、自分の家と橋を渡らずに近所三軒の便所を回る。ヒタイに口紅で赤い星を二つつけオサゴと塗を持っていく。おコワフをふかす。

産見舞はイワシのカンズメやカンビヨーなど持ち歩く。(七ツ石)

産後一週間。近所の三軒の便所を、オサゴ、ゴマメを持って、シユウトが抱いて語る。最近はこれを略して、自宅の便所に語る人もいる。(下村)

ひあがり お産をして二十一日たつと、ひあがりという。この日うぶの神様がどく(よそへ行く)という。さんし(産婦)はおきて床を片づける。この日から、家族と一緒に食事をすることができた。

ふつうは、お七夜がすぎると、産婦は起きていた。しかし、座敷へ来るなどか、神様の下へくるなどか、お天道様にあたらないように、普笠をかぶつて外へ出ろとか、手拭をかぶつて出ろといわれていた。産婦のところへ、おかゆをもつてくるにも家族のものが一口食べてからもつてきたし、お茶をもつてくるときも、一口のんでからもつてきた。神社へも、百日ぐらいたないと、おまいりに行かなかった。よそへあまり行かなかった。

お産をすると、家族のものは、しばらくのあいだは庚申待にも参加しないかったのである。(水沼)

出産後二十一日目のヒアガリまで里にいる。二十一日目に嫁ぎ先へ帰り、そこでヒアガリ祝いをする。お産の祝儀をもらつた家へ適当な品物

を買ひ求めでお返しをし、近親者を招じてこらそうする。(二区)

おばやあけ 出産後二十一日めに赤飯を炊いて産部屋があけたことを祝う。それまで赤ん坊の母は産婦としてあつかう。(川浦)

オビヤキは二十一日目にする。お赤飯をふかす。お産見舞を貰つた家に、お赤飯を一重箱お返しにする。(六区)

オビヤキにはトバル様にお宮詣り。フジ絹やメリンスの重ねのきものなど抱いた上からかける。

産見舞を貰つた家へおこわを返す。「ヒアカリしたから、わざとお返し申します」と言う。重箱には豆など入れて返す。(七ツ石)

産後二十一日間は穢れているから魔呂にも入らない。二十一日目に産屋明けとなり、宮詣りする。この日赤ん坊も湯をつかわせる。大きく育つよとに、なるだけ大きな桶で湯をつかう。(二区)

お産まいり セッちゃんまいりのころに行く。屋敷の稻荷様もおまいりした。

お七夜でなく、二十一日目(ひあがりのとき)におまいりに行く場合もあつた。きちんとした仕事をして行つた。つれていくのはおばあさんとかうちのもの。(水沼)

お宮参り 誕生から百日には、産土様にお参りに行く。赤ん坊は穢れているので、この日まで神棚様に参ることができない。その家族も同様で、一月くらいは神仏への参詣をひかえる。(川浦)

孫だき 産後二十一日目(ひあがりの日)に、嫁の里の母親が、孫だきにくる。このとき、着物をこしらえてもつてくる。場合によつては、母方のほかに、お金をもつてきた。(水沼)

母方の祖母がやつて来て、初めて孫を抱くことをいう。孫見ともいう。

(川浦)

赤抱き 誕生して六日めの赤抱きは、枕団子が六つなので嫌われる。あとはいつでもよいが、一日と七日めをさける家もある。最近では、どこの日でもあまり気にしなくなつた。この日は、近所の婦人たちが布やう

ぶ着を持つて、お祝いに来る。この時、「丈夫そつな子だ」とか「かわいい子だ」とかと最高級のことばでほめる。(川浦)

お祝いを持つて、赤ん坊を見に行くことを赤見という。(川浦)

食い初め 赤ん坊に初めてものを食べさせる日は、女の子の方が早く百日(百十日)めで、男の子は百と十日(百二十日)めである。この日は、白米の飯を炊いて、膳をつくり、産土様に進ぜる。この時期の赤ん坊はこほんつぶを一粒いれても、まだもぐもぐやるだけで、めったにくのむ子はなく、三粒食べればよいはうだ。(川浦)

女は早生で生れて百日目、男はおくで百二十日目に食初めをする。膳に赤飯を盛りオブノ神様に供えてから、二粒食べさせる。(川浦)

女が百十日、男が百二十日、飯、汁、オカシラツキを普通の茶碗に入れてやつた。食べべなくとも必ず入れてやつた。(六区)

食いぞめは女は百十日目、男の子は百十五日目にする。こはんをたいて、あたらしい茶わんと箸をつけてお膳をつくつてやつた。それは床の間へあげておく。

なお、中尾の今井家では、このとき、女の子の場合には針坊主を、男の子の場合には硯と筆を、お膳の上にのせてやつた。(水沼)

男は百十日目、女はそれよりおそい。食膳食器は、子供用の小型のものを町で買ってくる。一人前の膳を仕立て、飯粒一個を赤ん坊の口の中に入れてやる。この日、川原から小石を拾つて来て、きれいに洗い清めたものを赤ん坊の口に入れて噛ませる。歯が丈夫に生えるようにとのまじないである。里からは、お頭つきで祝儀一式を持参して嫁の両親がお祝いにやってくる。(二区)

男の子一五日。女の子の子一〇五日。女の子の場合ならお善こしらえして裁ち板の上に上げる。お善には針ものせておく。  
白いごはん、または赤飯をたいて豆腐汁、切り身などわざとつけ、新しい茶碗に軽く盛る。一粒口に入れてやる。  
チングを残して頭をする。(七ツ石)

赤ん坊のイチゲン 生まれてから三月目に赤ん坊へ、母親の里へお客様に行く。新しい着物を着せて行つた。これを赤ん坊のイチゲンといい、孫をイチゲンにやつたといった。このとき、赤飯をもたせてやつた。(水沼)

母親は、出産後、二ヵ月のあいだは、三月に身切るといって、実家に帰つてはならないとされた。はじめて実家に赤ん坊を連れて行くことを、赤ん坊のオイチゲンという。(川浦)

むかしは子どもが生まれても三ヵ月くらいたないと、大橋を渡るなとか、お客様に行くものではないといった。また、生まれて三ヵ月以内に、三月がかりにならないように、よそへ泊つてこいといわれた。たとえ、隣りの家へ行って泊つてくるのでもよかつた。これは、初子のときだけで、その意味についてはわからない。(水沼)

捨て子 親がヤク年に生れた子や弱い子はチャーチベシ(サンダラ)にのせて三本辻に捨ててくる。前以つて頼んで置いた仮り親に拾つて貢う。

仮り親はオトナになるまで年始に行く位。(七ツ石)

うまれつき身体の弱い子は、誰かに拾つてもらつと丈夫に育つといふ。西ヶ渕に一例ある。その赤ん坊はうまれつき弱くて育つまいといわれたので、適當な捨て親を選んで「これこれの事情でいついかに赤ん坊を捨てるから捨つて下さい」と頼み、当日、大きなもみじの木の下に赤飯を重箱に入れて「これを食つて丈夫に育つてくれ」と捨てた赤ん坊の傍に置く。しばらくしてから捨て親がやって来て、自分の家に連れて行く。そこで捨て親の子として数時間をすごしてから生家にもどる。一晩泊めるということはない。捨て親との関係は、生涯続くのが普通で、その子どもたちは兄弟(姉妹)同様のつき合いをするし、親がなくなればかたみ分けもくれる。(川浦)

弱い子は捨子をした。上手に子どもを育てた人にはひろつてもらつた。捨てるところは三本辻。そこへむしろを敷いておいた。着物を

きせ、枕をおいてすてた。捨つてもらう人は、あらかじめたんでおりに行く。新しい着物を着せて行つた。これを赤ん坊のイチゲンといい、孫をイチゲンにやつたといった。これは、下からあがるということで、出世をするということを意味していた。

捨つた人は、ひとつきりうちへつれてきてしばらくおいてから、つれもどしてもらつた。もらいにきたときに、お土産として、菓子をもたせてやつた。もらいにきたときに、お土産として、菓子をもたせてやつた。

捨つてくれた人のことを、捨い親といい、そのあともつきあう。そのうちに子どもがいれば、兄弟のつきあいをする。(水沼)

トツキトウバ 生れて十月目で歎かはえると三本辻に捨てておき、人に拾つてもらい、その家から子どもをもつて来る。又、弱い子の場合も同じことをする。双子は別に何にもしない。けさかけっ子は他人にくられれば育つといわれていた。(七区)

生後十月目に歎かはえると、トウバになるといつて、子供を三本辻に捨てる。捨い親には三面供ぐらいいはつけとだけをする。(六区)

子供が生後十か月目に歎の生えた時は、十月とうばと言つてわかれ死にするので、三本辻へ捨てて、他人に捨つてもらう。又、子供が何人か生まれて、一人も丈夫に育たない時にも捨て児をする。母親が三十三の厄年時のにも捨て児をして捨つてもらう。捨い親には家族としてつき合つてもらう。(二三区)

六月術、十月術はよくないといった。(水沼)

百反着物 体の弱い子には、反物の切れはしで着物を作つて着せた。

(六区)  
厄年の子 役に立つといつ。(六区)

ひよわな子 名前をかえるといつ。(六区)

初歩き お誕生日までにはたいていの子が歩けるようになる。昔は、全般におくで立つたようだ。最近の赤ん坊は、生まれたときからもう袖口から手を出したり、口をチユッチユッとするようなまねもある。昔は、おつかながつて手を出さなかつた。すい分度胸が良くなつた。(川浦)

誕生祝い　お誕生までにたいていの子は歩けるものだが、まだ歩けぬ子もいる。この日には餅をついて風呂敷や重箱に入れて背負わせる。そのとき、背負った餅を尻にぶつけたり、歩けない子は早く歩けるように、もう歩く子は丈夫に歩けるようにとの願いをこめて、わざと押してころがすようなことがある。餅のあんは、甘くみられるといって、甘くしないのがふつうで塩あんである。(川浦)

シオアンの餅をつく。そして親類やオボタ(出産見舞、お祝い)として反物、布などが多い)をもらった家に配る。また、赤坊をミに入れて、餅三(五ヶ背負わせ、赤ん坊の尻に餅をぶつける。(下村))

誕生祝いのときは餅をついて祝つた。赤ん坊を箕の中に立たせて、餅を背負わせて、餅をしりにぶつけた。誕生日に餅を背負つてあるける子はえらいといった。

誕生祝いには、嫁の里の親、仲人、新しい人(マケ程度)をよんだ。

誕生もちは、誕生のお祝いをくれたところへばつた(里方、近所、兄弟、仲人、おじ、おば)。場合によってはいとこのところも。(水沼)

最初の誕生祝いには誕生餅をついて、子供に背負わせる。これを力餅という。力餅は子供が尻をつくまで、数を加えて背負わせる。この日親戚の者を招いてごちそうし、祝いをもらつた近隣へ、お返しの餅を配る。(一区)

誕生祝いには餅をつき、あんびんにして近所に配る。子どもに風呂しきで餅を背負わせて、箕の中に立たせ、早く大きくなれと尻をたたく。

(七区)

初誕生には子供にお餅を背負わせて、箕の中に立たせ、その後、餅をおろして子供の尻にぶつける。(六区)

白い餅と赤い食紅を入れた紅白のアンコ餅を作る。奇数にして親類や近所へ配る。

ミの中へ座らせ、風呂敷に包んだ餅を十個位しよわせる。餅を貰うとタビ、ゲタ、ズック靴など足にはくものを持ってきてくれる。

る。(七ツ石)

初正月　女の子なら羽子板。男の子にはショーキダイジンの掛けじくをやる。(七ツ石)

初節句　おひな様を買って贈る。(女の子)男の子には鯉のぼりや座敷のぼりをやる。

お節句ゲーシは別にしない。向うで子ができた時すればいい。(七ツ石)

女の子の初節句には座り籠をたいてい権田で買ひ求めて送つた。親戚のはあいには尺ものだった。結婚するとときには娘家へ持参するのがふつうだった。また、この日は嫁の里帰りできる日で、タラのひばしを土産に泊ってきた。(川浦)

五月の節句には、実家から、鯉のぼり、吹流し、人形などを送る。初子の場合には、はずむのが普通で、二、三男とはかなりの違いがある。

(川浦)

### （三）育児

まくり　赤ん坊が生まれるとすぐ、まくりをくれた。これは医者でもらってきた。これがなければ、砂糖水を、まわたとかガーゼにふくませた。また、ホウズキをなめさせた(まわたをかぶせて)。これに虫がきれようなどということであった。(水沼)

赤ん坊にマクリをのませたり、マクリの代りに初めて出る黄色い母乳を飲ませた。(七ツ石)

乳首　さとう湯と実母乳を飲ませると三日から五日目ぐらいには乳が出るようになる。最初はさ水のようなものが出て、その後赤子は飲めないが腹の中で飲んでいたから、大丈夫だとされていた。二日間ぐらいいは、カナボボといわれる黒い便が出た。(七区)

乳首にうまく吸いつけぬ赤ん坊にはホオズキをふくませた。ホオズキはまた虫からでも食べさせるが、これは現在でも老人のいる家ではやっている。(川浦)

男の子が生まれると、近所の婦人で近ごろ女の子を出産した人から乳をもらう。また、乳を飲ませる前に、虫がおきないと虫封じになると、いつて、ホオズキの実を吸わせた。(川浦)

乳の不足 乳の出がなかなかしないときには、鰯やもち米のようないものを食べると、たいてい効果があった。(川浦)

末熟児 ななつきでは、なかなか育ちにくいが内臓が丈夫なら育つ。

一般に男の子より女の子の方が早く生まれるもので、このつきならもうしつかりと育つ。(川浦)

いじめ わらで作ったものは上製だったが、かここでつくることが多かった。底にはわらを、その上にやわらかい着物や布などを敷いた。手の少い農家には便利なもので、赤ん坊をいれておけばひっくりかえる」ともないから、そんなに遠くなれば、日の当たる縁側において、近所の畠でみながら仕事もできる。歩けるようになるまでいたるもので、よくいで一年というところだった。(川浦)

子守り 面倒をみてくれる年よりや相応の年齢の子どもが家にいないときには、近所の子を頼まねばならなかった。大きな家では遠くからの子どもを頼むこともあった。(川浦)

農業を大きくやつてたりして、でのない家では、小学校を出たが出ないかくらの女の子を子守りとして頼む。よそ村の小さな子を頼んだ場合には、住み込ませて、学校に出てやり、盆には、着物、下駄などをやつた。赤ん坊が三つくらいになるまでいてもらつた。(川浦)

産毛と春電坊主 うぶげは一回はするものだといった。それは、男も

女も同じ、チングは残しておいた。こんだときには、うぶの神様がチングをひっぱっておこしてくれるといった。大きくなつて(七つくらい)からチングをそつて、太田の春電様もついくものだといった。これを、春電坊主とか、七つ坊主といった。

七つになると春電様へおまいりに行つた。弱い子どもは丈夫に育つようになつて、春電様に、七つ坊主にしますといつてお願をかけた。(七つになつ

たら、お願はたしに行くからといってお願をかけた)。そのとき、春電様へは、チングをひとしぱりにしてもつて行つてあげた。なお、七つになつてから、高崎の成田山へおまいりに行つたものもあつた。

なお、うぶげは、人にふまれないよううつは山へもつて行つて捨てた。つは山には神様がいるといった。(水沼)

七つ坊主 昔は七つになると、みんな誰でも坊主になつた。しかし体の弱い子はとくに必ずした。剃った髪の毛はタカダナ(神棚)に上げた。

その際チングは残した。そのチングを抜くと鼻血が止まるといつたり、転んだときウブス様がチングをひっぱつておこしてくれるといつたりした。

話者の一人は、人力車に乗つて太田の春電様に行き願果しをして来た。(一区)

七つ坊主といつてオガニシヨバタシまでは、女の子でも髪をのばさなかつた。

チングだけは残しておくが、鼻血のとき抜くとよいといつ。(六区)

七つ坊主と言ひ、小学校に上るまでは、頭をかみそりで剃る。しかし、ボンノクボの所だけは、剃り残しておく。チングと言ひ、子供が鼻血を

出した時にこの毛を抜くと止まる。(二区)

太田の春電様に丈夫に育つようにおがんしようを立てた子は、うなしの毛を残して七才まで坊主頭ですこした。(川浦)

## 一一、年 祝 い

仲間入り 二月十一日の行事契約の日に、赤ん坊の名を披露し、酒一升を買って、子供を村人の仲間に入れてもらつ。(二区)

昔は、小学校を卒業すると、どんなになりは小さくとも、一人前に扱われるようになる。むらのけいやくの時に、酒一升と餅を持って両親と一緒に挨拶する。(川浦)

七五三 七五三の祝いは、豊かな家でないときちゃんと祝うわけにはいかなかつたけれど、戦争の時代にもしてはいた。男の子の五才の祝いには戦闘帽などかぶるものもいた。どこに家でも華やかに祝うようになつたのはこの十年ほどだらう。(川浦)

初潮 初潮のことは、母親から教えられていたので、いざとなつてもそんなにおどろかなかつた。その晩は、赤飯で祝つてくれた。おとなになつた喜びをかみしめながら床についた。たいていは高等科になつてからだつた。現在では、早いものでは小学校の中学年からあるといふから時代とともに子どもの成熟もしいぶんとはやまつてきたことになる。(川浦)

腰巻祝い 女児は十三才の厄年になると、大人になつたとして腰巻きを着せる。(下村)

成人式 昔はそんなに祝わなかつた。村で成人式を主催するようになつてからのこととて、はじめはまちまちだった服装も昭和三十五年頃から、女子は振袖で表すのが普通となり、急速に華やかになつた。昭和五十年には、すっかり新調すると二十五一三十万円にてがとどいたといふ。(川浦)

厄年 女の厄年、十九に三三才。

男、二五、四二、この前後、前厄、後厄という。一月十四日の道陸神焼きの時、みかんなどを投げて厄払いする。その他「水沼の北向きの観音様」を拝みに行く人もある。何か事があつた時、厄年だから、と思いついて気をつける位で別にいそがしくらまわないのである。(七ツ石)

節分に少林山へ拝みに行く人もいる。(七ツ石)

男子は十五、二十五、四十二才、女子は十二、十九、三十三才。厄年の者は全員小正月の十四日夜、村の三本辻でミカンを投げる。これを子供達が拾いに集まる。お金を年の数だけ投げる人もいる。他人に拾つてもらうのであって、自分の家の者が拾うと、厄を拾い込むことになる。子供達は、今年は誰々が厄年かとあらかじめ聞いて選つたものである。

(下村)

男十五、二十五、四十二才。女十三、一九、三十三才。両方三回ずつで終る。厄年のは厄除けに、正月十四日、ドウロク神の前で、年の数だけミカンを投げる。錢を投げる人もいる。「厄をのがしてくんど」と錢を道祖神に進せて、捨いに出でている人に投げてくれる。今はミカンが多い。(陣田)

厄年は、男一五、二五、四二才で女は一三、一九、三三才で昔はささやかにみかんを投げたが、最近は大箱で道祖神に供え、ドンドンヤキの終つた後で投げる。

西ヶ瀬では、「一才以上の中年の者は、酒一升を持って行って供えた。四二才の人は一升持つて来るので飲みきれず、とつておいて二月一日のケイヤクに使つたりしている。(川浦)

女の厄年は十三、十九、三十三歳、男は十五、二十五、四十二、六十六歳である。

厄落しはどんどん焼きの日に、道祖神様にみかん、するめ、もち、酒などを進せ、どんどん焼きが終わつたあとで集まつた人々に配る。矢陸では、現在、中学生がその配分の権限をもつ。豆を年齢の数だけ紙にくるんで供えることもした。西ヶ瀬では、二十五、四十二歳の男たちは酒をびんで飲みます。その場で飲みきらぬものについては、封を切らずにとつておいて二月のケイヤクにまわす。男女ともシマイ年のは供物を貯蓄するが普通だが、その年齢になれば懐工合もよくなるからであろうか。せいむらの中のことだから、今年は誰と誰とがたたるはすなどと勘定しているので、厄落しはないわけにはいかなかつた。何があると、ほおれみたとか、人並みのことをしていないからそういふことにならぬね、というふうにいわれる。良いことはいつてくれないので、話の種がないから悪いことはすぐである。(川浦)

還暦の祝い 子どもが祝つてくれる。(川浦)

古稀の祝い 古稀は長命の人が多いので、古稀の祝いはたいていやる。

他人は呼ばないで、子どもが祝ってくれるのが普通である。（川浦）

喜寿の祝い 七十七才の人は、吹竹をつくり、水引きでしばって親しに贈る。

吹竹は、せいよいくなる（病気にならない）とか、つんばにならないしるしといふ。

もらった人は、もらひっぱなしでよい。（川浦）

米寿の祝い 八十八才の米寿という祝いはめったにない。またお祝いをするときぬ例が多いといふのでやらない方がいいという人もいる。

祝いは子どもがしてくれるもので、赤い帽子や、じゅばんをつくつてもらう。（親せきや近所の人を招いて祝う。）（川浦）

金婚式 子どもがしてくれるもので、やる例は少ない。（川浦）

### 三、青年集団

補習学校 小学校を卒業してすっかり学校と縁が切れたわけではないく、夜間は毎日補習学校へ通つて実用的な勉強をした。指導は小学校の先生が担当し、二年間通つと免状をくれた。この頃から、男子は青年会に加入した。（川浦）

青年会 青年会は特に成文化してあつたわけではないが、小学校卒業と一緒に誰もが義務的にはいらなくてはならぬものという感じをもつていた。年に五銭の会費で入隊などの連絡期のものは免除された。（川浦）

青年会の山 川浦には青年会の山というのがある。山林古帳の整理のとき碓氷郡と群馬郡との境に約一町歩の所有主不明の空地ができたのを

当時の会長が指置して青年会の所有となつた。そのうち一部を売り四百七十円を碓氷産業銀行に貯蓄した。

最近では公民館建設に五十万円など公共施設の建築の際にこの貯金をおろし、青年会として寄託している。（川浦）

青年会の行事 青年会主催の行事としては、秋には郡の運動会で里見

村の小学校へ出かけたり、江の島、鎌倉への旅行、弁当付で三十六銭だつた。農産物評議会や記念植樹などもやつた。（川浦）

三山旅行 青年会の恒例の行事の一つに三山旅行といつて上毛三山を四日間でまわる旅行があつた。まだ肌寒い四月十二日の夜半十時頃むらを出発し、地蔵峠を経て松井田に出で妙義山に登る。ここでは中の岳神社に参拝したあと大砲岩に全員が登る。このあと礪部から汽車に乗り、

安中、高崎を経て前橋の本町油屋旅館に旅籠を解く。あくる朝は三時起きで赤城山に向う。赤城神社に参拝をすませたあと西斜面を渋川にくだつて、電車で伊香保温に着く。この夜は石坂旅館に泊る。最後の日は伊香保温から榛名湖畔を徑由して榛名神社に詣で川浦に至る。実に三泊四日

の行程であつた。（川浦）

農産物品評会 青年会主催の恒例行事の一つで、毎年秋に行ないることでの収入は金の維持費にあてられた。ほかに烟を借りて黒鉛署をつくつたり、まゆや桑を売った代金、村有林の下刈りにてたりして維持費をつくつた。（川浦）

演芸会 秋の祭りには、むら毎に青年会が中心になつて演芸会をやつた。田園のよさな所に舞台を作つて、踊りやよそ村の器用な人を頼んで八木節などをやつた。（川浦）

青年年のたまり場 夜になると、むらうつの店などに集まって、そこをたまり場とした。（川浦）

青年の遊び 青年たちは、お祭りには相撲、弓などをやるのが楽しみだった。弓は、手折なしの自己流で、一時しまりにはやつた。基本を習つていないので矢を折らしてしまうことが多く、そのかかりがたいへんだったのでは、いつとはなしにするものもなくなつた。かるたは、百人一首をやつた。小学校を卒ても、よそに遊びに行くことが容易で

なかつたのでたいていのことは夢中になれた。（川浦）

夜遊び 若い衆は毎晩夜遊びによそ村へ出た。仲間と組んで団体で行つたが、ワイワイ騒いでいるだけで、悪いことはしない。（陣場）

夜遊びは地蔵峠を越して、坂本まで遊びに行く。（長井）

昼間はひまなしに働いたが、仕事がすめば夜は個人個人勝手におし歩いた。元気な若いものは夕飯を食べてから坂本あたりまで遊びにでかけ、どの家でも馬を飼っていたので、つぐ朝の朝草刈りに間に合つたうに夜お歩いて帰つてくる。だから、なかには朝草刈りに間に合つたうに夜もりで風呂場の火ふき竹をもつて困つたようないもいる。こんな遊びはしょっちゅうということではなく、一年ほんの一、二度だ。

（川浦）

若いときは、夕飯食べて板鼻までお女郎買いて行つて、夜があける前に帰つてきて、つぐ日は一日ちゃんと仕事をさせたという人もある。だからほとんど寝たつたことになる。畠をうなうばいは、一日二つかとか三つかとか一人前の量は決っているから、それはちゃんとこなし」というのである。（川浦）

信州の岩室田まで、朝で峠を越して、お女郎買いて、陽のあるうちに帰つてきたという。昔のものは強かつた。（川浦）ヨアソビは若葉が村祭りの夜などにしていた。ノゾツコミ程度で、昔は女郎買ひに、風呂峠を越えて板鼻、地蔵峠を越えて坂本などに出掛けた。またおひき娘（セリ）が娘をたのんでザグリをひかせた。困らない家の娘もやつていた。概ね十六、七才（二十五才位の者で、株名町や坂上村から来たものもいた）が九時十時までマユを煮ていると、そこに男が遊びに来た。そして両人がよくなるのもあり、その場限りのものあつた。（上村）

ヨバイある人が夜這いに行つた。暗い中でオッキリコミの入つてゐる大ナベのつるを着もののそで引つかけて、ズルズル引きづつて音をたててしまつた。「オッキリコミは食つてもいいがナベだけや置いてけ」ととなられ、あわてて逃げ出したそうだ。（カジヤ）またある人は、うまく望みを遂げて外へ出たら、これから入る男がいてガッカリしたそうだ。（中石津）

ヨバイのことをオオヌヌットともいつた。

兵隊検査前の若衆がやつてゐた。「ヨバイのできねえのはろくな若い衆ではない」とさへいられた。明治の頃、日露戦争前に、六本木駐在がこの村に来てからきびしくなり、それ以後はやらなくなつた。思う娘の家をノゾツコミをしたり、昼間連絡をとつておいて赴いたり、直接話をしていくものもあつた。親しくなる前は、不意に押かけるのもあり、親にはみつからなかつた。（上村）

兵隊検査 甲種合格だと巾をきかせるが家へ帰つてくるとしなびる。フンドシから全部新しいものを着て行つた。（中石津）

## 四、婚 姻

### (一) むかしの婚姻

恋愛 二人で歩くと村の人々は笑つた。恋愛はわずかで、親まかせの結婚が多かつた。

村中の二人が仲よくなつて、逃げるのがみつき、「家に来ていろ」と一ヶ月も居候させて夫婦にさせた例もある。（上村）家が近所などで幼なじみだった男女が、年ごろになつて、双方で好きあつて、結婚しようということになつても、恋愛などとかつこうの良い言葉はつかなかつた。くつついたなんていつた。（川浦）

ちよつかいの早い人は、自分で見つける。今は職場結婚で見つけて来るものが多い。（長井）

娘のとりっこ 他部落の者と仲よくなり娘をとりにくると、「ヒトのセンゼエを荒す」といって石をぶつけた。（上村）

イトコツカワセ 昔は近親結婚もかなりあつた。従兄弟姉妹の結婚をイトコツカワセといい、親戚がふえないとされた。（上村）とりかえっこ 嫁が妹の妻直であることを認めて、実家の跡取り息子である兄や弟に推しようするなどして、婚姻がまとまることがある。二

のように二軒の家の兄弟姉妹の間で、嫁入りや婿取りが相互に二組以上行なわれることをいう。このような組合せは、ほんとうに仲が良く、深い親戚づきあいとなる。婚姻圈の広狭とは直接関係はない。（川浦）

なお、戦争の時代には、結婚して間もなく出征した夫が戦病死したときなどに、農家では、夫の弟と再婚することがあった。これをい。その後にも同様の例がみられる。どの夫婦も皆うまくいっている。（川浦）

婚姻圈 昔は親戚あるいは村内間の結婚が多かったが、その他の隣村、樺名町室田、吾妻郡坂上村、碓氷郡九十九村などと結んだ。（上村）

通婚圏は村内や坂上など足で歩ける範囲で、遠くも細野ぐらいであつた。（六区）

多くは倉田村と烏沢村の間での婚姻が多かつた。嫁は山地からもられ、といい、坂上からの嫁さんはよく稼いでいい嫁さんだったが、こちらから坂上へやるのはほとんどなかつた。吾妻の方からは町へ近いといいで納得して来る。

碓氷の方へ嫁に行くものは多く「米粒のタケでも下へやれ」といつていた。碓氷から来るのは少なかつた。（川浦）

通婚圏はふんどしのだけでも、上に昇るなどといつて、下りたがるのが人情で、山の中は、けがいりする。（長井）

## 〔二〕 婚姻の条件

嫁の年齢 嫁のとしが一つ多ければ、金のわらじをはいても探せという。同様のことは、婿が長男で、嫁が末っ子の場合にもいう。（川浦）

一つ年上の女は、カネ、タイコでもさがしてもなかなかない。末っ子の男に、長女の一つ上が一番よい。（六区）

ヨメトウメといつて四つ違う人は、相性が悪いという。（六区）

仲人 結婚話が途中まで進んで成立しない場合、仲人は責任をとる。スリコギでハラを切るというが、これで腹は切れないから、何とかまとめる。（上村）

ネドリ（話を決める人）とザシキ仲人と別の場合もあつた。

仲人ナワソという。（六区）

座敷仲人 婚姻についてのいっさいの仲介をする仲人ではなく、二人が前から仲が良かつた相思相愛の場合の仲人をいう。たいていはむこ

方の親が適當な人を物色して依頼する。（川浦）

一人の橋渡しは誰かがしても、座敷仲人にあとのご祝儀を頼む場合がある。ふつう買う人の施主が仲人を頼む。（陳田）

仲人のあいさつ 結婚話がきまとると、仲人はくれ方、もらい方両方の悪口をいつて止させる場合もある。話がこわされると、「仲人はシャクシトムコの家を全部まわつてあいさつをする。これは「何か支障があつたときは、トムコ（お他人さま）にお世話になります」ということで、村の人たちに納得してもらつて話をまとめるわけである。（川浦）

水ラサス テムスピができてからでも、縁談をこわそとして、先方の悪口をいつて止せる場合もある。話がこわされると、「仲人はシャクシテ腹ヲ切ラネバナラナイ」という。（陣田）

仲人礼 貰い方は反物の上に金を包む。くれ方は酒を台にして金を包む。大体貴い方が多くする。トンビノハネと言う。（七ツ石）

トンビノハネというのは仲人へのお礼のことである。お札として酒一升と赤飯を持っていく。仲人は自分のところで赤飯を

ふかして、貰った赤飯にたして、親戚や組内に配る。（六区）

式が無事にすむと、貰い方から親が仲人へお礼に行く。赤飯をホケエに入れて、御礼の金包みを持って行くが、これをトンビノハネという。テノクボになる。（陣田）

仲人への仲介のお札は、お金でした。これを「トンビノハネ」というが、なぜそういうかわからぬ。その後の仲人とのつきあいは、年末のお歳暮と新年の御年始くらいで、三年も続けばいい方だ。仲人の側から新婚夫婦には特に何か贈るということはしない。（川浦）

仲人への挨拶 結婚後、嫁娘が一、三年は盆、正月、五節供などに挨

挙に行く。子どもができるまで行くともいう。五節供は正月、三月三日、五月五日、ハッサクなど、七夕は節供ではない。

正月は膳解（膳を当てて四角に切った餅）を三枚持つて行く。三月は菱解、五月はコワ飯にタラの頭付き、ハッサクは悪いものの持つて行く。ナベカリはしない。（陣田）

### （三）婚 約

タルタテ（樽入れ） 年二歳の男女、双方を知っているものが仲介にたって、初めに話をヨメの方に持つて行き、「これこれの人があるけれど、こっちの家の娘に良いと思つて行つてみないか」などときだす。そうこうして話が進んで、双方で良縁で結構だということになれば、仲人が間にたつて、タルを立てる。ヨメとムコと双方で、本当に良いと決めたかというカタメの意味をもつ。当事者の家族とおじさん位が出席する。仲人は、酒とするめを持参する。もらひ方の方からはヨメの家へ「一生、いられるように」と酒一升を持つていく。昔は、どんなにめでたい席でも、この日それだけしか飲まなかつた。そのあと、仲人は、双方の隣り組をまわつて「私はこのたび、嫁あってA男とB子の仲のとりもちをした。もし、ご異存がありましたら、お申し出下さい。」と挨拶した。そつやつてまるくおさまればいいのだが、あとで式の席に男があはれて来たり、嫁がすぐ逃げたりという例が昔はよくあつたので、仲人は本気だった。仲人はこれまでがたいへんで、草履がすり切れるまで三里か四里的道を、五度か六度ほども通うのが常だった。タルが入つても相互の往来はめつたになかつた。結婚式まで一度もまともに自分の生涯の伴侶になるものの顔を見たことのないもののが多かつた。（川浦）

タルタテはタルイレともいう。仲人はまず貴い方にいく。貴い方には親戚が集まっているので、挨拶をして呉れ方に行く。呉れ方でも親戚が集まつておらず、仲人は持參の酒を出して申し入れをする。そこでカタメの盃があり、婚約成立となる。その後、呉れ方の主人と仲人は組内を回つ

て婚約成立の挨拶をする。その際、名刺があり、仲人の名前に入つた手拭を持っていく。タルタテの後は親類づき合いとなり、お歳暮などの贈答もする。（六区）

まず見合いで、いいとなつたらタルダテ（樽入れ）になる。仲人が樽酒一升とスルメ一枚持つてくる。娘も酒を飲まされるがこの時酒を飲むと後で嫌だと言えない。

ウワキン（結納金）など取決め、無事にすんだあいさつを仲人はムコ側に行つて話す。（七ツ石）

タルタテ（樽入れ）は婚約の成立をいう。仲人が酒一升、スルメを持つて行き、呉れ方では近親者が集まる。一升は神棚にあげたあとおろして娘に飲ませる。これで娘は承知したことになる。そして結納の日、御祝儀の日取り、娘の都合をきいて相談しておいてくれという。次でもらい方の家に行つて報告する。仲人は妹を出して承知させ、式の時には娘が出て、これは話が違うとなつて駄目になつた話もある。（上村）

テムスピともいう。仲人が酒一升吊るつて嫁の家へ行き、親戚が寄つて嫁にくるかどうかを決める。昔は一升樽を持って行つた。話が決まるると、兄弟や近所を呼んでご馳走し、その酒を残さず飲んでしまう。日取りもそこで決める。（陣田）

結納 もらい方の方で、結婚式で嫁の着るいっさいを、仲人がお伴を連れて持つて行つた。お伴は、もらひ方の家の奉公人か、しじゅう来て手伝つてくれるよつた気安く頼める人にお願いした。結納目録は、麻するめ、扇子一対などであつた。麻は、真白なものだから白髪になるまでということであり、するめは、腰の曲がるまで、扇子は、末広がりの繁榮を意味する。結納から結婚までは半年位で、五月にタルが入れば十

月に式をするのが普通だった。（川浦）

結納おさめは、話が決るとよい日を選んでする。金を受取らぬ家もある。（上村）

結納は式の前日に納める。ヤナギダルと目録を持って仲人がいく。目

緑はシンシヨウに応じて色々である。(六区)

イーーーの金や品を渡して、娘の都合のいい日を選んで二祝儀の日どりを決める。オイチゲンやお客様の人数なども話し合って決める。

ムコがたでイーーー着(江戸様)を作ってくれる。または江戸様は身近な人のを借りて、その代り重ねの道中着を作ってくれる時もある。(七ツ石)

祝イナメ　ご祝儀の三日か、一週間ぐらい前の日のいい時、仲人が嫁の支度の目録や親戚の名を書いた親戚目録と結納金を、貰い方からくれ方へ納める結納オサメともいう。(陣田)

嫁入り前の教育　嫁入り前の娘に教えられたこととしては、お膳箱を運ぶにも、シユウトさんの膳箱を下にしてはいけない。必ず上にすること。シユウトさんが寝たら、ふとんぐらいかけてやるようについてである。(川浦)

#### 四　嫁　入　り

嫁入り道具　大正のころの嫁入り道具は、桐のタンス、長持、夜具ふとん一組(袖のある夜具)、小さい鏡台、裁ち板、張板をもつて来た。昭和三五年ころには、タンス、ベビーダンス、下駄箱、一番行李、裁

ち板、張板、タライ、ふとん一組になった。(川浦)

現在はたくさん持ってくる。(川浦)

嫁の荷物　両者が近所なら荷物は嫁と一緒にくる。離れている場合、嫁の家から荷物を運ぶ。その運搬具は、馬から人、更に馬車と変わった。(上村)

嫁入りの髪型　嫁の嫁入時の髪型は、島田ではなく、ほんだままである。(川浦)

嫁入り　馬の背の両脇にたんすを付け、真中に嫁が坐って、馬の鉤をチヤラコン、チヤラコン鳴らしながら来た。馬は腹巻や着物を付けて、ふさを垂らしてきれいに飾りたてた。一見の客が手に手に提灯(弓張り)

を持って来た。こちらからお迎えに出る人はムラの境まで行き、一行を案内して来た。

一行は中宿で一休みして、嫁だけをトモコ衆が案内して嫁の家に入れれる。(陣田)

嫁入りは近いところでは、ちょうどちんをつけ、尻はしょりをして行列をつくって歩いて来た。

坂上がら来た嫁の道中は、嫁が馬に乗り、お伴が両掛けを抱いて来た。(川浦)

嫁迎え　異れ方のトモコは嫁入り道具を運んでくる。貰い方からは、弓張り提灯を持って、隣り組の人とトモコ連が迎えに来る。その時、スルメと酒一升を必ず持参することになっている。これは貰い方で気をさせる。

仲人は両方の間に入つて挨拶をするが、これは大切である。挨拶が悪いから嫁を渡せないとつ騒ぎも、まれには起きる。特にトモコは、実際に式を取り仕切る役であるから、これに腹を立てられたら大変である。酒を忘れたというので、仲人があわてて、貰い方にとんできたという話もある。(六区)

出迎え(ウケトリワタシ)といって嫁を迎えるときは、もらひ方ではトモコがちょうどちんをつけて村外れまで出迎えに出る。酒一升くらいを用意して行き、くれ方からの行列を出迎えて酒を渡し、花嫁を引渡してもらって来る。花嫁行列はそのまま家まで送つて来ることもあった。(川浦)

行列迎えといつて結婚式の日には、もらひ方の方では、嫁入りがどんな近場からでも、嫁の行列を途中まで若いものが四、五人して丸い印に紋をつけた提燈をつけて迎えに来た。そこで嫁のうけわたしと嫁入り道具のうけわたしがあって、ごくろうさんと送つて来てくれた人々に酒を出してきてなす。このあと嫁方からは、イチゲン座敷に臨む七、八人が迎えのものたちと合流して新たな行列をつくり、夕暮れの道を嫁の家にむ

かう。（川浦）

仲人は酒一升（ウケトリワタシの酒といい、持場つて飲む）とスルメを持ってきて渡す。嫁方のトモコが嫁を送つてきて、婿方のトモコに渡すと帰るわけである。これは村境で行なわれ、嫁と荷物を責任もつて受け渡しをするわけで、このとき仲人はうまく橋渡しをする。渡す方はわがままをいつて、仲人の人柄を見る。黒いものを白いといわれても、仲人は理屈をいわないでまるくおさめるようつとまらない。トモコが両者飲んでいてクソリクツをいつても、これをまるくおさめる。トモコは権威があり、仲人は低姿勢である。仲人というのは、もらいまえすればよいのだから、お勝手に行つてまでおじきをするという。（上村）橋の所か、辻まで組の男の人が迎えに出る。張りちようんを持って、嫁ごは土産の酒一升を若い衆に差し出す。一応受け取て、あとでサンヤの座敷で飲む。（七ツ石）

トムコ コムラ（小村——小字）の隣り組の人たちのことをトムコといふ。親族をぬいた他の人たちとはみんなトムコで、冠婚葬祭のようないことは、村の世話人とトムコに「おまかせします」といつて施主がまかせれば、主人がテエサシキに座つていてもみんなトムコがやつてくれる。（川浦）トモコはシモでいう隣り組、隣ば班のことと、「友子」の字をあてることがある。年齢には関係なく、その規模もコウチによつてまちまちである。結婚式や葬式には重要な役割を果す。（川浦）

トモコの統代が各小字に一名いる。祝儀、不祝儀の世話をしてくれる。その人が立会えば全部のトムコが立会うことになる。桜ノ木では、ソウレイトムコと葬式の際は言う。トムコは結婚式では、うたいとか取り結びなどをする。（川浦）

トモコには新郎と上の年令差のない人が數人頼まれる。トモコは、トモコガシラを中心にしての世話をする。トリムスピの時、説をしたり、イチゲン役者（嫁、または婿の親戚で酔つた人）を自宅まで送り帰した

りする。宴の最後はトモコ座敷で、呑み放題であった。嫁御が、着物を着換えてお酌である。（六区）

トモコとしてほんとに仲のいい友だちを招いた。（七ツ石）

トムコは結婚式の際嫁を迎えて出るが、一元の座敷では隣側に座るのみで座敷には座わらせなかつた。昔は三十名ぐらいだったが現在は九名か十名ぐらいで隣近所の家から一名づつ出て務める。

三三九度の際に最初にトムコがうつたを行ない、式がはじまる。終りにもトムコのうつたがある。最後に「嫁渡し」が無事に出来たということで解散になる。

昔は隣側から嫁が座敷に上がるところで、トムコがちょうどちんで尻を三回打つて座敷に入れた。トムコは祝儀、葬式に關係があつた。（川浦）

トムコは御祝儀のときに立ち合つ近所の人で、しかも若い人である。水沼では男だけで、ワカイモンガシラ（複数）をいう場合もある。下三之倉では女もトムコがある。御祝儀の取りむすび後にトムコ座敷が設けられる。（一区）

婚礼の時、一軒一人出るのがトモコで、翌と同じ年とは限らず、年令はまちまちである。ふつうは村のオヤジテエ（戸主）やトモコになる。組の仕事を手伝うのがトモコで、婚礼や建テマエなどの祝い事はトモコが出る。葬式の時はホウエエといつて、手伝いに出る（陣田）

下道からトモコがくる。手の足りないときは、どこの部屋がトモコになると、ということは決つている。然しよつてもう力がない時は、トモコを頼まない。

御祝儀の時はトモコゼイが嫁を川境まで迎えにいく。ここで嫁を荷物の受け渡しをする。このとき仲人が酒をもつてきて、トモコに荷物運び、トリムスピなどを頼む。トモコが預つて嫁家まで連れてきて、式をあげるのである。（上村）

結婚式のとき、カネツケの日に招待された者全部がトモコであり、

トモコは嫁の受渡しの権限がある。トモコ同志で受渡しをする。仲人が氣に入らないから渡さないということもある。葬式のときはトモコといわすホーベーという。(庚申組の人が穴掘りすると決っているところもある)これは松井田、行田にもある葬式の出家の属する庚申組の穴掘りをするもので、他の庚申組に頼むことはない。この庚申組は二月にクジをひいて庚申待をする人達であるが、他の部落例えは上野に新宅に出て、本家のある本丸の庚申組に入ることになっている。庚申組は血縁関係を示すものである)

トモコは祝儀のときだけ用いる。このときトモコムスピがある。親や娘は出ないで婿が入って、因田座の人々が盃を二つ三つ四つと両方から廻す。こみ合って結ぶのである。これは一人前になつたので、トモコ(村の人という意もあらわす)の仲間入りをすることで、一戸の代表としての男という意義がある。(上村)

中宿 嫁はすぐ婚嫁に入るのではなく、中宿で休む。中宿は婚家通り越さない家に頼む。モドルのはよくないからである。

中宿ではオチツキといってオスシをだす。(六区)

夕方四時か五時頃、嫁の行列は婿の家近くに来ると、婿の家のクダリの家の家中をとる。そこで嫁は髪直しをし、嫁の方のつきそいの人々は休息する。中宿になれる家については特に条件の限定はない。中宿をとれぬ場合は、当家の別の部屋に控えの間をとる。(川浦)

真直ぐ嫁がたへ行かず、他人の家でも、親戚でも中宿を頼む。そこで座敷ができるまで待つ。(七ツ石)

嫁入りには、着物を着てしなくしたのが尻はしよりで、弓はりぢようちんをもつて歩いて来るので中宿に入つて休む。中宿ではオチツキといつのでお茶とボタモチを出す。(川浦)  
ご祝儀が重なる場合 同じ晩にもう一つご祝儀があつた。二組がかち合つと勝ち負けがつくからと、逢わない様に双方で時間を持ち合せたり、回り道した。もう一組の人は子が出来ないそだだから、負けただん

べ。(七ツ石)

入家式 嫁は座敷から入る。このとき縁側で堆積、離嫁はタイミング(オガラ)で作った一握り位の太さ、長さは一・五尺位のもの、先に赤い紙をつけている)で尻をたたく。嫁は奥の方の上座、婿は下座に坐る。なおこれより先、弓張提灯、馬、女仲人に連れられた嫁、嫁のイチゲンなどを、近所の家にあってある中宿に入れ、その間に荷物は嫁の家に入る型、村の人が嫁だけかりてきて結婚式をするものもある。(上村)

ガドに入ることで、赤いオガラ(赤い色紙を巻いたオガラ)で嫁の尻をたたく。(六区)

オチヨーメチャヨーが戸口に立つていて、嫁が戸口に入る時、オガラの棒で嫁の尻をたたく。姑さまに手をとられて座敷へ入る。(七ツ石)  
嫁の入家のとき、お仲人が連れて縁側から入る。このときオチヨウメチヨウの子どもがタイマツで、嫁の尻をたたく。(川浦)

嫁は奥座敷のおもての縁側から入る。入るときに、嫁の尻を弓張提燈でたいたり(梨子本)、カヤで鳥居をつくつてそこをぐらせた(西が瀬)。かたい所で詰め込みをする所も多かつた。(川浦)

嫁が縁側から上る時、ムラのトモコの一人がタイマツ(提灯)で嫁のお尻をたたく。はたき込むのだという。ここでは杵をまたいだり、トモコの尻をかわしたりしない。(陣田)

オチヨウ、メチヨウ、隣組の両親のある幼い男女を頼んだ。(川浦)

お待ち女房 嫁の連れといふようなもので二人、若い程度よいといわれ、

三十才位の者がなる。(上村)

トリムスピの式に、近所の嫁さんを二人たのんで、マヂ女房になつてもらつた。嫁さんの仕事と同じような仕度(嫁さんをまかしてはいけない)というので、すこしおちる程度の仕度をした)で、その席に出た。嫁さんのつれということである。(水沼)

嫁ごと同様に仕度をしたお待ち女房が二人座つている。アゲボーシをか

島台を中心にして三つ重ねの盃で三々九度の盃事をする。謡をしながら。

(七フ石)

トリムスピ

開式

銚子のつき合せ

女蝶は片膝を立て先につき、次に男蝶立つてつき返す。さらにもう一度女蝶つき返す。かくて双方の酒が混じる。

三三九度の式

最初男蝶は蝶の、女蝶は蝶の前に座る。



### 三三九度の席

(原田栄太郎氏「婚礼のこと」による)

○謡い「四海波」終つて、「一回つく」。

銚子のつき合せ。また位置の交換。途中は前回と同様に行なう。

○大盃一回つき、「肴をはさむ」。

これにて三三九度は終る。父母を呼び仲人より父母につきのよくな接拶をする。「村の人のお世話になり、目出度く三三九度の式も終了しました」。

○謡い「庭の砂」終つて、「一回つく」。

これにて三三九度は終る。父母を呼び仲人より父母につきのよくな接

拶をする。「村の人のお世話になり、目出度く三三九度の式も終了しました」。

○謡い「千秋葉」終つて、「一回つく」。

中盃にて「一回仲人につく」。肴をはさむ。

○謡い「永き命」終つて、「一回さす」。

中盃にて「父母につく」。肴をはさむ。

○謡い「千代もかわらじ」終つて、「一回さす」。

父母一同に挨拶。

○謡い「千代もかわらじ」終つて、「一回さす」。

註

女蝶は何時も大型の盃台を持つ。

蝶・蝶共仲人の右に座る。

床の間左の座敷の場合はこの反対に着席

結婚式の時、床の間に飾る島台（蓬莱山）の鶴は紙で作り、鶴は大根で作る。ニボシを真中で折り、大根にさし龜の頭と尾にする。（六区）魚ハサミ 式のとき雄蝶・雌蝶は、三度酒を注ぐ度に魚ハサミをする。これは女仲人が紙を出して脇に置き、それに魚をおくる。そして盃に酒を

注ぎ、飲むと次に魚をはさみ、次で嫁・婿は盃を交換する。これをくり返す。(上村)

三三九度の盃の時、肴をはさむ。嫁と婿はこれを紙でとる。これを食つたというて話になる。(六区)

謳い昔はかたい所では謳い込みなどもやつたが、現在では式の場だけで謳う。謳いの練習は年に一度元日の朝稽古(公民館で)している。長老が「四海の波……」と謳い初めをし、一同がそのあとにつづくはじめてのものも、謳えるものがあとについてなんとかうたいこなせるようになる。(川浦)

お高もりの飯取り結びの式が終わると、お座敷になり、親碗にお高もりの飯を碟に出す。嫁が飯に箸を付けると、トモコが脇からふんだくつて、大神官様の棚に進ませる。この飯を他人に食われるは盗まれるというので、必ず誓が翌朝食べる。

お高もりの飯のあと、ふつうの膳が出る。

(陣田)

トモコムスピ 婚が一人前になつて仲間入りする意味で、三・三・九度の式のすぐあと、下座に坐つている婚が、隣組兼トモコの人々と円座に並び、盃を左右と交互に廻す。そして最後に手をたたいて終る。トモコムスピのあとイチゲンサンシキとなる。トモコの仕事はこれで終つたわけである。トモコサンシキは、幾度座敷もあるその中の一つであつて、イチゲンサンシキの前にやる部落(四班一七班)もあればあとにやる部落(一班三班)もあり、地域によつて異なるようである。(上村)

トモコ結びといつて三三九度の式のすぐあとで、宴を中心とトモコが輪になつてすわり、三つの盃で飲みまわし、誓のところで結ぶ。(川浦)

婚礼の場合の客座敷 この場合には、客に格付があつた。大体次のとおりである。

イチゲンに行かなかつた人たちの座敷、三番目が友人関係者など、

の人たちは、これらの座敷に、お相伴として適当にわりこんだ。(以上三座敷になる)

もらい祝儀の場合、一番はじめにトモコの人たちがちょっといちらそつになる。(つぎにお客座敷(小さしき)となる。これは三時間くらいかかる。この接待をしてあるあいだに嫁の着く時間となる。嫁がくると、おくりイチゲンの座敷となる。これが一番いい客である。最後に、もう一度トモコの人たちの座敷となる。もらい方の場合は、以上四座敷となり、くれ祝儀の場合よりも、客の人数は多くなる。(水沼)

イチゲン座敷 もらい方が朝十時頃アサイチゲン(婿と娘の近親・兄弟・従兄弟・伯・叔父母など十人位)に行き、ご馳走になつて、帰つてくると、もらい方では座敷が始まつて。座敷は普通三座敷あり、普通の来客のが二座敷(一組はトモコ及びこれに準ずる者、もう一組は親類友人、仕事関係者、役をもつている人)オイチゲン座敷が一座敷(貴い方、貴れ方のイチゲン合せて)である。イチゲンは概ね十人前後で、普通は貴い方は貴れ方より一二人多い。(上村)

迎えイチゲンとして貴い方から、仲人、婿、近親が嫁の家に行き、宴會をする。宴がおわると仲人が残つてその他は帰つてくる。(六区)

トリムスピの後はイチゲン座敷になるが、隣組長がトリモチをする。イチゲンは、イチゲン目録を持っていく。この宴は、ツモリザカナ(青菜にカツブシをかけたもの)が出て終る。ツモリザカナは両側から出で、真中で結ぶ形になる。(六区)

オイチゲンは嫁、ムコの兄弟とか、親の兄弟が七人九人十一人と奇数の人数にする。

朝、ショット一杯酒を飲んで、食べてから揃つて嫁むかえに行く。嫁がたではオイチゲン様にあるつけの御馳走を出す。お相伴が下座について座持ちをする。酒が出て、お吸いものが出て、三通り位出るの位出る。

いい寒。キンピラ、数の子はつきもの。むしり魚、鯉が姿のまま一匹

お給仕の娘がとつてくれる。青いものが出るとオツモリの合図になる。

ホンバンと言ひ、たいがいソバが出る。(七ツ石)

トリムスピがすまではイチゲンは中宿で待っている。すむと、榜を

つけて並んで、弓はりちようちんを持つてイチゲンサンシキに出た。(川浦)

イチゲン座敷の客の数は、嫁方婿方双方ともに五人、五人位がふつう

だが、どうしてももらひ御祝儀の方がくれ御祝儀より多くなるようだ。

双方のイチゲンの客同志で話しがはずむと、一時間や二時間はたちまち

たって、帰るのは十一時頃になる。(川浦)

女イチゲン、ふつう、結婚式のときには、イチゲンとして嫁の母親な

どは、参加しないのがたまえである。しかし、男衆がいないとか都合

によつて男衆が参加できない場合には、男のイチゲンにまじつていくこ

とがある。この場合に、女イチゲン何名と、客としてあつかわれた。

(水沼)

トモコの座敷 トリムスピがすみ、くれ方のイチゲンが帰つた後でト

ムコの座敷というのがある。コムラ(部落)の男衆と、イチゲンに行つ

た人の奥さんたちの座敷で、したくととつた花嫁が酒をつぐことになる。

トムコサシキは一番最後のサシキになるので夜が明けたことも少なくない。昔はイタミダル(四斗樽)を一本も上げて飲みほうだい飲んで、その

のあげくにけんかをしたりして、本膳を出そうにも出せず、ぐずをいつ

ているので困つたものである。

最近は、公民館や旅館などで結婚式をやるところがふえたので、トム

コサシキも使って來たが、矢陸の場合にはトムコ代表を四人招へば、この人がゴーチ(村一部落)代表ということでおことになつてゐるとい

う。(川浦)

トムコ座敷は嫁、婿が招待役となつて、トモコ連に酒をつき、その勞をねぎらう。(六区)

ノゾツコミ 取り結びの式がすんでから、若い衆や子どもが、座敷の障子に穴を開けて嫁をのぞつこむ。なるべく障子に穴を開いた方が縁起

がいい。あまり悪いことをされないように、酒一升ぐらい庭へ出して置き飲ませる。(陣田)

サンヤの座敷 お客様など一切の用がすんだらサンヤの座敷にならる。

男の象徴を大根で作つて嫁に、女のものをネギに割れ目などを入れて

ムコに。

中身のない空っぽのコモツカブリを勇さまに、塩びきの頭と尾だけ本

もので身は葉を置いた魚を姑さまに「浜が大漁でいい魚がとれたから、

この酒で祝つておくんなさい。若い衆のお土産です」と言つて差出す。

そして明け方まで心おきなく酒を飲む。女衆や子どもが大笑いしながら見物する。お勝手の女衆は嫁の入れるお茶をのみ、お土産の菓子など夜食に食べて帰る。「よめこのお茶」という。

家の衆は寝る間はない。(七ツ石)

よめこのお茶 すべてのことが終つてから、嫁が実家から持つてきた

茶葉で、近所のひとたちの労をねぎらう。(川浦)

嫁のお茶といつて宴が終わると嫁が組内の人にお茶とお茶葉をだす。(六区)

ヨメゴのふとん 結婚式の夜のヨメゴのふとんは、シニウトが敷いてくれる。この日以後敷いてもらうことはない。この日はすべてイナリ

(すべて相手のいう通り)である。(川浦)

嫁入った晩だけは、しゆうとめさんが嫁の床をしいてくれる。現在でも、何か樂をさせてもらうと(ヨメゴに行つた晩のようだ。)といつて

方がでてきて笑いあう。(川浦)

ヨメゴネセ 結婚式のあと婿、嫁と一緒にねせる。近所のトモコ(既婚者)の若い男女一人ずつが立会い、ねせるのをみて帰つたといふ。(本

丸)

カネツケ祝い 式の翌日、オコワをふかしてホカイに入れて、嫁の家に持つていく。すると、アトタズネといつて、嫁の方から一番近い人

が挨拶にくる。

この日に嫁はマルマゲに結い、氏神にお参りしてから、村回りをする。

この時には姑と一緒にいく。(六区)

カネツケ祝いは結婚式一日目。トモコ、近親を呼んで赤飯をふかして祝つた。(上村)

祝い式の翌日をカネツケの祝いという。この日、嫁の里から、赤飯をもつて、嫁のおばさんとか、女のきょうだいがきた。これを、アトタズネといつた。(水沼)

昔はカネツケ祝いといって歎を黒く染めたそうだ。姑が嫁を連れ、手ぬぐいに名前を書いたのを配りながら組合を回る。

カネツケのオコワをホケーに入れ、若い衆にでも前以って嫁の里へとどけさせておく。(向うの手伝いの人が食べる。お金のし袋を入れて返す。姑が若夫婦を送つて里帰りする) (七ツ石)

ムラマワリ 式の翌日、嫁はご度支をしてお袋が連れて部落のトムコの家だけ挨拶に回る。昔は十六軒全部回つたが、今は半分の八軒だけ回る。この時に名入れ手ぬぐいを名刺代りに配る。(陣田)

結婚式の翌朝は、女しゅうとが嫁をつれて、隣組に手ぬぐいを持つてあいさつまわりした。その後、新婚夫婦はふかした赤飯をもつてふたりで嫁の実家に行く。この時に名入れ手ぬぐいを名刺代りに配る。(陣田)

まわりする。これを村廻りといふ。(川浦)

女イチゲン 結婚式の翌日、イチゲンの客の奥さんたちがやつてくる。

これを女イチゲンとも後だねともいふ。(川浦)

里帰り 三日目、婿同伴で嫁が里帰りをする。その時、婿の父親と兄弟と一緒にいく。兄弟が、赤飯をホカイに入れてしまつていい。これをオトモがついていくといふ。

嫁の実家では、御祝儀と同じお膳ができる。宴が終ると、嫁の父親が送つ

てきて、隣り組に挨拶回りをする。

ここで仲人札をする。仲人札の貰い方、呉の方の割合は、七、三とか

六、四とか、話し合いで決める。(六区)

結婚式の翌日をゴダン、カネツケといい、近所の女人たちを招く。

この日に里帰りをするが日帰りで行なつた。泊ると蚕がはざれるといい、どんなに遅くても歩いて帰つた。(七区)

お里帰りといい、三日目、仲人婚の母親と共に嫁の実家に行く。日帰りであつて嫁の親がついてくる。アトタズネといい、嫁の両親に手土産を持つて行く。(上村)

式の三日目に、嫁はヒザナオシとして里へ帰つた。このとき、むこうも一緒に行った。隣近所へあいさつまわりをする場合もあつた。

このとき、嫁の両親が嫁をおくつてきた。男親だけが、とつき先の近所まわりをした。名刺をもつて、いたらぬ娘だが、よろしくおねがいしますと、あいさつまわりをした。(水沼)

嫁の里帰りといつて第三日目、新婚夫婦と二組の夫婦で嫁の実家に行く。(川浦)

式後五日ぐらいたつてから、嫁はヒザナオシに実家へ行く。翌と一緒に親が連れて行くことになつていて、男親でも女親でもいい。ふつう泊らないが、治ることもある。帰る時に実家の親が、アトタズネといつて嫁に付いてくる。アトタズネは別の日に、親戚が来ることもある。里帰りには赤飯をホケエに入れてしょつて行つた。(陣田)

## (五) そ の 他

嫁の里帰り 一月四日をヨメの「年始日」という。四角のパンモチを三枚ゆわえてもつていく。この上にお金(昭和のはじめのころは五十銭ぐらゐ、お年玉の袋に入れていた)をのせていった。お金には、「御年賀」と書いてもつていった。嫁にきて一年ぐらゐは、むこも一緒に行つた。

子どもでも生まれると、むこは行かなくなる。一月六日をまるめ年とい

い、この日は、おとしたりだから、里へ帰つてゐる嫁も六日にはかならず帰つてくるものだといった。

三月三日のお節供には、ひしもとお金をもつて行つた。お金の袋には、「御節供」と書いてもつて行つた(金額は、昭和のはじめごろで五十銭ぐらい)。一月と同じく、しばらくのあいだは、いつも一緒に行つた。

四月のむらまつりのときには、里へお客を行つた。このときは、節供の場合とちがつてお金はもつて行かずに、お菓子をもつて行つた。

五月五日のお節供のときは、タラの干物をもつて行つた。三月と同じく、「御節供」とかいて、お金をもつて行つた。むこは一・二・年よめと一緒に行つた。

農休みは、麦刈りがすむと、農協で日をきめて一日間やつた。時期は年によつてちがうが、七月二十日ごろ。このときには、お茶葉子とか、おまんじゅうをもつて行つた。この場合は、あそびに行くという気持であつた。

彼岸とか盆のときには、親のあるうちは、里へ行かなくてもよいといわれている。

九月一日の八朔の節供には、お客に行く人もあるたが、とくに行かなければならないとはいわなかつた。この頃は、晚秋薺がでるので忙しかつた。

秋のまつりは十月なかばごろであるが、このときには里へお客に行つた。このときは、持つて行くものははつにきまつていなかつた。また、お金も、べつに包んではいかなかつた。

お歳暮には、塙びきのさけをもつて行つた。これは、親のあるうちは行くものだといわれている。

なお、仲人のところへは、子どものできるまでは二年始とお歳暮はもつて行けといわれている。

嫁が里へ帰るときには、小づかいをもらつて行つたり里の親からも小づかいをもらつたり、お土産をもらつたりした。

里帰りのときに、里の親のところへお金をもつて行くのは、正月と節供のときの三回。(水沼)

嫁が実家に帰る日

正月十五日 小正月  
餅を持っていく。

正月十五日 小正月  
餅を持っていく。

三月三日 節句、麥餅を持っていく。

五月五日 節句、水引きをかけた開きのタラ三枚を持たせる。

七月二十日 前後二日 農休み

九月一日 八朔、赤飯を持っていく。

その他実家の部落のお祭りなど。(上村)

嫁の里に帰れる日は正月四日、三月の節供、彼岸、農休み、盆、八朔の節供、春秋の祭。(六ヶ区)

嫁の里帰りは年始、節句、五日の節句、お祭、八朔かお盆、お歳暮位。(七ツ石)

正月四日は、一尺角の鏡もち一枚に金をいっけて、女衆が里帰りする。

(川浦)

正月六日を六日の年とりといふ。実家に帰つた嫁を長逗留させぬために嫁家に帰るようになされたのが由来であるらしい。(川浦)

嫁は三月の節供には、赤い餅をはさんだ一尺四方のひしもと頭つきのさんまの開き十枚、それに手ぬぐいをそえて里帰りする。また、

五月の節句には、赤餅とたらの開き二枚を持つて里帰りする。(川浦)

嫁がお客に行くのは節供、お祭り、雨で仕事ができない日など、盆には墓参りに行く。マキアゲ、アキアゲなどのきまりの日は別にない。イキミタマも聞かない。(陳田)

八朔には嫁は重箱に入れた赤餅をもつて里帰りする。嫁が里帰りできる一年で最後の機会の節供なので泣き節供ともいう。(川浦)

嫁ノツトメ 「嫁ノオツメ十年」といって、十年もたてば嫁の権利がこくなる。子どもができるまでは大事にして、子ができるとクサビに

なるので、なんだん無理して仕事をさせるようになら。嫁も子どもがで  
きると懸念が出てくる。身上回しをするようになると、実家には行かない。

(陳田)

一人前の嫁 むかしは、五升だきの鍋なべがもちあげられない、一人前  
の嫁にはならないといわれた。いろいろのかぎ竹から鍋をおろしたので  
ある。それができないと、一人前でないといわれた。また、機織きおりが出来  
ないと嫁には行けないともいわれた。むかし、機織ができなくて、追い  
だされた嫁があり、つぎにきた嫁は機場から來たので、機織が出来ると  
喜んだという話もある。

ことわざに「一機二針」というのがある。機織と針仕事が出来るこ  
とが、女のつとめだということである。一日中、機織を正在する、便所  
へ行つてもかがむことも出来ないほどであったという。  
分家のものもひきとか、じゅばんをつくるのも、嫁の仕事とされていた。

(水沼)

おやおや 一月十四日には、前年結婚したむらの嫁さんに、男のもの  
をお膳にのつけて進ぜる。重いほど大きなものに水引きをかけて、うや  
うやしく捧げた。(川浦)

オヤオヤは、結婚後の最初の一月十四日の晩にやる行事。ヌルデの木  
で作つた大きな男根に水引きをつけて、トモコガシラを中心としたトモ  
コ連が、新婚家庭に縁り込む。昔、嫁の場合など、持つて歩かせ、戸別  
訪問までした話がある。その後トモコ同士で一杯やる。

オヤオヤの晩に、近所の子供達はその家にいき、「オヤオヤ、オヤオヤ。」  
と騒いでお金を貰つた。

用済みの男根は、庚申様みたいなところに納めた。

トモコは、結婚式において、強い権限を持つ。式の一週間位前から、  
トリムスピの「トコロ高砂」を練習したり、また雄蝶、雌蝶などを決め  
る。(六区)

水祝い 一月十五日の晩、前の年に結婚した家へ、コチの人たちが

行って、新婚の嫁の祝いをした。これは、昭和のはじめころまで行な  
われた行事であった。新婚の家全部で、この祝いをやつたのではなく、  
その中で大きな家を見当をつけやつたものである。  
水祝いをするからといって施主が、コーナー内を全戸まわってよん。各戸金を出しあって、酒二本とスルメを買って行った。出席する  
のはわかいもの。

座敷では、正面に、正装した嫁・婿・両親・仲人を着席させる。そ  
の前で出席者(わかいもの)がめでたい詠(高砂、四海波、祝いのいさ  
ご、千秋楽など、四つか二つ)をうたつた。このけいか(一月一日の詠)  
初め。大体四十人から五十人ぐらいのものが参加した。

このあと、婿と舅と仲人(分)の三人を、参列者が三回胸あげする。  
女衆はその場から上げだす。胸あげが終ると、「おめでとうござります」  
といつて、酒宴となる。(水沼)

水祝いといつて矢陸では、一月十四日のどんどん焼きの晩、どんどん  
焼きに行って帰つて来てから、嫁さんの家の庭で紋付きで正装した前年

と今年結婚した嫁さんが一列になって順に歩くと、まわりに集つたもの  
たちが手桶の水をかけて水祝いをした。前のものがもたらしていると  
後者の者に大量に水がかかるので皆警張した顔つきで歩いた。(川浦)

母親のお客 くれ方の母親は、孫でも生まれると、お祝いの品物をもつ  
て、嫁のとつき先へお客様に行つた。

また、もいら方の女親は、嫁の里のおまつりのときなどに、嫁の里へ  
お客様に行つた。(水沼)

離縁 持つてきたものだけは返すが金なんか出さないだろう。

道具なんか放り出されて鏡台なんかこわされた人もいるそうだ。それ

ぞの事情にもよる(七ツ石)

カリブン 特殊な例として、家に病人があつて附添いがいらないとか、

手不足のときなどカリブンで手伝つてもらうこともある。(上村)

## 五、葬 制

### (一) 病氣・死の子兆・死

急病人 川浦のような山村では、急病人がでるのがいちばんたいへんなことだった。病人は何としても病院のある高崎まで運ばなければならぬ。病人たどいうことになると、親類から隣り組が皆寄つて戸板を用意して提燈にまもられながら、その前後を一人してかついで出発した。八里もあるのだから、から身で行つても難儀な行程で、それに病人がでるのは、たいてい夜のことだからその苦勞は並のことではないので、電信柱一本行つたところで交代という具合にしないととてもつづくものではない。高崎までかつぐのは重病人だから、そんなにおおくいくといせいをつけるわけにもいかず、君が代職がみえる頃には、よくよくいやになるものだった。いやだといつても病人はでるものでいく度もかついでいった。(川浦)

祈とう、易 家内に病人でたばあいには困ったときの神だのみで、祈とう師や易者にみてもうことがあった。村うちににはいなかつたのでそとむらにでかけた。(川浦)

お百度まい 病気が長引くとよく家族や近親のものが、お百度まいりをした。参詣するのは身近な神社だが、川浦では諏訪神社へまいるものが多かった。また、よいよとなると、人數を頼んで産土様にもお願ひした。十人で組んでやれば十回すつということになる。

戦争の時代には、病人のある家だけでなく出征兵士のある家では、その無事を祈りたいといいの留守家族がやっていた。かけ膳も供えた。(川浦) 予兆 烏が「アーアーアウ……」と鳴く人が死ぬ。家の屋根の上で鳥が鳴いたとき、尻の方角の人が死ぬ。川浦では一人死ぬと三人つづけて死ぬとか、女の人が先に死んで口を開をするとつづけて三人死ぬといわ

れていた。(七区)

女の人人が死ぬと寺のお勝手に、男の人が死ぬと本堂にいくという。(六区)

魂呼び 病人が今日明日の命というときはよく魂呼び(呼び返し)をした。とくにも、七、八つの幼児の不幸のときの若い両親や祖母などがそのこの枕もとで悲鳴をあげるような声で本氣になってことの名まえを呼んだものだが、それは不思議ときまつて夜半のことで、実際に通じる声だった。呼びづける親も疲れるし、耳に残ることほど近所の不幸でもみんなかなしくさいた。

屋根にのぼつて名を呼ぶというのもきいたことがある。(川浦) つるべ井戸のある家では、井戸のところで、トモコが蛇の目傘をさして、病んでいるもの名を呼んだ。(川浦)

ささがくし・お顔がくし 臨終を見届けると、すぐ家族のものは、神棚に袴の糞をあげる。そのあと扇を締め、半紙で封をする。また、門口には、灰を入れたちようべしを置き、その上におはらいをのせる。(川浦)

お顔がくしといつて人が死ぬと、誰で神棚をかくしてやる。高棚をササでかくす。ササを切ってきて立てて神様をかくしてやる。ひと七日位、そつておく。(七区)

枕なし 死んだ人は北枕に寝かせて布団の上に刃ものをのせる。あれば刀を、普通カマをのせる。(七区)

枕飯 死者の枕元には、枕飯と枕團子を供える。これは米をとかすく炊くので黒い飯である。そのあとで、白い飯にけぶがえしをそえて供える。(川浦)

死者の枕もとにそなえる枕めしは玄米を炊く。あとで白米とかえるといふふうなことはなく、それはそのまま墓地までもつていく。お棺を埋葬したあと仮前には白米をそなえる。死者へのそなえものはお膳のしたくにしても、おつゆとこはんがひっくりかえしにといったように左まえにする。(川浦)

**枕團子** 玄米を粉にひいて、戸外で火を燃やして作る。これに使用した鍋釜の類は、ひと七日の間は家中に入れないでおく。(一四)  
枕團子は玄米の粉で六つくる。何故六つのかよくわからないが、六地蔵あたりとつながりがあるのではないか。何ごとによらず「六」という数字はきらわれるようだ。(川浦)  
**枕團子・枕飯** 飯茶坊一杯の玄米で、六つの團子を作る。その煮汁で、オツイのオワン一杯の玄米を炊いて枕飯にする。枕飯にはオハシを二本立てる。左膳といって、ゴハンを右に置き、お膳の向きを逆にする。  
枕團子と枕飯は、屋根の外で炊く。使用したナベやゴトクは一週間使用しない。(六四)

トモコ 隣組(七・八戸)で間に合わないとき、手が足りないとき、次の組にたのんだり、たすけてくれる。これはお互いまことである。例えは稲荷組で墓祭は行なうが、その次の組をトモコといふ。この場合観音組である。年令には関係なく、戸が単位で一戸一人主人が出来る。トモコをアナホリ組ともいい、葬式の時はアナホリ役と決っていた。最近は不祝儀以外には、トモコのつきあいはほとんどなくなった。

諺八愛組
訪幡岩名
下下上部 落
道道村名
桜塚塚イツケ 井、 塚越、 塚米

下	白	福	葉
諷			
訪	山	音	荷
天			
神			
本	下	石	下
九	星		宮
	數	津	
		村	
		村	原
	原	塚	原
			塚
		田	村
		越	
	田	越	中

トムコ こういう間違いができたからお願ひします。と組の人にます話して近所の人に頼む。組の人があいさつにくる。「長いことご苦労して貰ったけど、つい間違いがありまして」「長く病んだけどつい丈夫になれなくてお気の毒な事をしました」と言う。そして親戚へ告げに行つて貰つたり近所の人に全部任せて頼む。地主は口だししない。  
組の人はいそがしい。診断書を貰いに行き、お寺へ行つたり、役場へ行つたり、材料を買ってきてカン箱を作る。花カゴやトーローを竹で作るなど。

穴掘りの人には冷や酒と盃を持って行き、ちよとしたサカナも共に持つて行つてきよめる。穴を掘つた道具はひとと七日まで墓においてく。

(七ツ石) 置式があると、ツケに行ったり、ハナをつくり、穴を掘ること、ヒキ

モノの世話をしたりして、一切のことをみんなトムコかやる。最近は葬儀屋が多くのことを行ってくれるのでかんたんになった。(川浦)  
ホウベエ 葬式の時は、村の戸主が一軒一人出て手伝い、輿の支度花こしらえ、告げなどの用をする。同じ戸主だがトモコとはいわない。

(陣田)  
葬式の仕事はいつさい近隣のホウベエがやつてくれる。家の中の仕事を隣組(例えば上宿のホウベエ)の者がやる。墓の穴掘りその他外の仕事は次の隣組(例えば中宿のホウベエ)がやってくれる。穴堀りの道具類は初七日まで放置しておく。上宿のホウベエは中宿のホウベエに酒一升を買って肴を添えて持つて行き労をねがう。野辺送りが終ると上宿の

者は帰つてしまふが、中宿の者が野辺送りの後始末をする。(二区)  
告げ 必ず一人でいく。告げには施主の家で一杯だす。また、告げに  
きた人には食事をだすことにつきまっていた。告げの人の顔をみてから腰  
を伏したので、むらす手間がなく、ネーズクイ(シンのある餃)を食わ  
せたという話もある。(六八区)

病人が亡くなつたらすぐ隣り組へ連絡し、葬いのこといつきを依頼



島山土屋家墓地内太子堂の葬具  
(近藤義雄撮影)

する。依頼された方では、ふたり一組となつて知人や親族につけにいく。ふたりで組をつくるのは、途中で何かことがあることを予想してである。地

元の近い親類などにはとしよりが連絡する。(川浦)  
先ずお寺へ行く。友引と寅の日は避ける。告げは組内の者が使者すべてを引き受け、二人ひと組となって行く。告げを受けた家では食事を出して勞をねぎらう。今は、施主が告げに行つてくれる使者に金をわたし「お清めをして下さい」と言い、告げを受けた家ではお茶を出していく。食事は出さないことになっている。(二区)  
ツゲは一人で組んで行く。ツゲが行った家は、きよめの酒とこはんを出す。(七ツ石)

葬具　お棺のほかいろいろの葬具は、むらむらに揃っている。西ヶ瀬では観音堂におさめてあるが、上の山の人たちもこれを使用する権利がある。使用料は、長いあいだ五百円だった。(川浦)

お棺　お棺はたて棺で、いまでもむらうちでつくる。建具職は西ヶ瀬には二軒あった。材料はスギである。その他の道具も隣り組みで器用にこしらえた。(川浦)

棺は、材料をだして、大工や建具屋に作つてもらう。(六区)  
鉢旗　鉢旗もトモコが作る。喪主が一本、兄弟が三人いれば、長男が一本、「二男が一本、野辺の石塔に立てるものが一本と合計四本を作つ

てもらう。(川浦)

送り旗　どこかのお宮やお寺に願かけをして、その人が願果しができぬ時は送り旗をつくる。その旗には目的の社寺名を書いておき、これ路傍に立てておくと、その方向に行く旅人が次々にその旗を狙いでゆき、ついにはその社寺に達するという。子供のころ、よく「身延山」などと書いた旗をみかけたものだ。(一区野口佐五平氏談)

おこし　昔は葬いのある毎におこしを作つた。葬儀の終つたあと、おこしは墓の上にかぶせるようになつた。三十五日位までは毎日線香を立てに行くのでそのまま置くけれど、その後はまだ形が整つてもかまわす燃してしまつ。現在はむら共有のおこしなので葬儀の終わつたあとは持ち帰る。(川浦)

穴掘り　墓の穴掘りや埋葬もトモコがやる。死者の近縁のものたちは、少し埋めただけで、仁義などを申すために、早々に家へもどるので、墓地に最後まで残るのは隣り組のものたちだけである。(川浦)

年令にはこだわらない。アナホリは必ずトモコがする。またオハカの組というのがあって、墓の掃除、穴掘りは交代でやる。(下道)  
昔は、バントといつて穴掘り専門の人があった。坊さんの送り迎えもした。その人は普通の座敷に坐らなかつた。また、祝儀、不祝儀にも下座に坐つた。(六区)

通夜　親戚や近所の人が集まり線香を絶やさぬ様にする。交替で少しは寝る。(七ツ石)

葬式の日　友引と寅の日だけは避ける。寅は千里往つて帰る、といつていやがる。ふつうの日並びならば、亡くなつたその日にいっさいの仕度を整え、夜には通夜をし、翌日が葬式ということになるが、運わるく友引と寅の日と続き三日くらい葬いの出ないこともある。(川浦)

地獄の亡者に頭をたたかれるから。(一区)  
盆前に人が死ぬと、人が来るのに死ぬといって、来る仏様が頭を叩く

ので、おやげねえ（かわいそう）ので、しらじ（挿り鉢）をかぶせて埋めた。（長井）

盆中の葬式 特別なこともなくふつうにやる。死者には、盆中は先祖が壇の間に家から出て行くと壇でくる先祖に途中で頭をたたかれないようとに頭に皿をかぶせる。（川浦）

湯かん 近親が立ち合う。冷酒で仏さまに霧を吹きかけ、線香をたき、冷酒を飲んでから一同とつつく。（七ツ石）

二ツカン シヨイダルの古いのに逆さ水（氷に湯を入れる）をつくつてやる。男衆が麻をタスキにかけ、サルマタ一つになつてやる。女衆は手を出さず、線香を持つてナンマイダ、ナンマイダと唱える。

二ツカンが終ると、ハダシで鳥川にいき、川の下で体を洗つて壇の二ツカンに使用したものは鳥川に流してしまふ。（六区）

納棺 仏さまが普段着てた着もの衿をとつて、その衿を帯にして腰に巻いて結んでやる。

キヨーカタビラを左前に着せる。タビの底をとつたワラジガケをはかせ、ワラジをはかせる。キヤハンをつける。ヒタイに三角の白布をつけ麻糸でしばる。ズタ袋を首にかける。石で釘を打つ真似をする。（七ツ石）

着物は着せてやるのではなく、まわりにつけてやる。女性には白足袋、男性には紺足袋をこはせの部分を裂いてはかせ、その上にわらじかぞうりをはかせる。また、棺の中には酒や羊羹など生前好きだったもの、六文銭や近親のものがいくらくかくし錢などを入れてやる。（川浦）

お棺はたて棺で、死者は、手を組ませ、たてひざの姿勢（またはあぐらをかかせて）で納めるが、年より大きいひとなどは納めるになかなかくろうする。棺の中には、底の部分に死体から分泌物や水がでても、吸い取れるように、紙を置いてその上に焼き灰をいれる。薬などを多量に飲んでいるときには、死後相当量の体液がでる。姿勢を安定させるために、枕や団扇もみがら、鉗（くわ）などと、すき間の充填物としていれる。枕はそんなに大きいものではない。（川浦）

絆かたびらは、はさみを使わずに手で引きさいで裁ち、麻糸で縫い、糸のケツを結ばない。

晒でズタ袋を縫う。真中を縫つて袋を二つに分け、片方に米を、片方に米ヌカと六文銭を入れる。かくし金も人に見られない様にして持たせる。鉄を使わないで縫う。

縫つた針は近所の人が貰つていく。「お針の手が上がる」と喜ぶ。（七ツ石）

一反のサラシを買って、キヨウカタビラ、チツコウ、キヤハン、ズタ袋を作つて着せる。作る場合麻糸で縫い、モドシ針はしない。また結び目は作らない。

仏が普段着ていた着物のエリを、ハサミを使わないでやぶき、帯にしてやる。足袋は底を抜いてはかせる。

キヨウカタビラにカクシ銭をつけてやる。（六区）

棺の中に、針道具、煙草など、日常好きだったものを入れてやる。（六区）

## 口 葬

送

寺 川原に長く住む人たつの菩提寺は、三之倉にある曹洞宗の全透院である。（川浦）

墓地 寺（三ノ倉の全透院）ではなく、個人の家あるいは親族毎に畠めに、枕や団扇もみがら、鉗（くわ）などをすき間の充填物としていれる。ではの飯 別れの箸 坊さんのお詫が始まるとき、重箱に入つた飯が会葬者のあいだにまわつてくる。これを、一本の箸で、「三粒づつ手にとつ

松 明 親族

て食べる。近親者だけが一粒とる所もある。また、葬列が出発する直前にする所もある。この共食のことを、ではの飯とか別れの飯という。(川浦)

出棺 坊さんが経をよむ。親しい者から線香を上げる。途中「一本ばし」が出る。重箱に入れた白いごはんを一本ばしではさんでオテノクボにとつて食べる。「一粒でも三粒でもくついてくればいい。

香箱を回して皆がおがむ。棺に釘を打ってナワをかける。

組合衆が役割りを書いてはり出し読み上げるからそれに従つ。

金剛杖を渡す。

棺箱は後側から出る。子が弓を持って棺箱が出る時、家の屋根峯に向けて矢を射る。(七ツ石)

野辺の送り、みな野辺の送りといって、幕まで行列をしたてていったものだ。近親者は送りのすんだあとは帰ることが多いが、とまるものもある。隣りぐみのひとはそのままいる。(川浦)

棺付き、棺を担ぐのは私の子どもたちで、いない時は孫にする。昔は、子どもを五人欲しいといったが、それは、棺に四人、位牌を持ち一人で合

計五人となり、これだけで葬式になるからということだったといふ。(川浦)

葬列 出棺のとき、トムコの世話人が役付きを読み上げて葬列をつく

る。次のよう順になる。

銘 旗 こんな人、トムコの中の年長者がもつ。

六地蔵 先に持つて行く、いとこ

道教えに行く。親族

前 旗 一本つくり、小銭を入れて辻々でふつてまく。親戚の者

造 花 親戚の者の中で婦人

孫にあたる子どもの役

香 箱 あととりの娘か妹

写 真 子ども、あととりの弟たち

位 牌 あととり

棺付(柩) せがれたち、いないときは孫たちが担ぐ。

天 盖 地分けの者(新宅の場合は本家)

后 旗 親族

弔 旗 トムコ

花 輪 トムコ  
野辺送りの葬列の順序は灯籠が一番先に立つ。これは道案内である。

その次が花籠、前旗、花輪の順に並ぶ。これらはいずれも隣り組の者が持つ。次に弓、たいまつ、香箱、お請、位牌、写真、棺桶、墓標、後旗、

五色旗の順に続く。一家の主人公(父)が死んだ場合、弓とたいまつは孫が持つ。香箱は次男の嫁、枕団子をのせたお膳は長男の嫁、位牌は長

男、写真は次男が持つ。棺は嫁に行つた娘の髪がかつぐことになつてい

る。(二区)

ソデ、ナミダカクシともいう。請持ち(後取りの嫁)が、野辺送りにかかる。四角形のサラシを二つに折つて三角形にし、一方を麻糸で縫つてくる。サラシ一反で、死者の装束も、ソデも全て間に合つ。

位牌持ち(長男)と棺をかづく人達は三角形のサラシを頭に巻く。呼び名は特にない。三角形の二つの頂点を麻糸でとめて作る。(六区)

墓地での儀式 葬列が墓地に到着すると、弓矢を持ったもの(老人ならその孫)が、一本の矢を空にむかって射る。そのあと、かついてきたおこしを左まわりに四、五回(三回ともいう)まわしてから、据え台の上に置く。これは死者が再びこの世に帰つて来られないようする意味がある。据えたおこしの前にござを敷き、お坊さんが最後の説教(野邊りの經)をする。それを囲んで親類縁者、隣組一同が冥福を祈る。そのあと、近親のものから焼香につる。(川浦)

引導 引導渡すとき、坊さんの真正面と真後ろにいてはいけない。引導を渡されるからという。(六区)

土葬 現在も土葬が多い。次第に火葬がふえてる。(川浦)

埋葬 堀った穴に棺をおさめると、小つぶのものから順に土をかぶせて埋めていき、最後に大きな石をのせ、その上におこしを置く。周囲には、龍頭、花籠、燈ろうなどを立てる。旗は持ち帰る。旗を立てる所もある。

おこしは、現在むら共有のものだから、その日に持ち帰り、かわりにもがりを作る。(川浦)

モガリ 土葬の場合に、盛り土のまわりに図のように、割

った竹を折りまげてかこむ。

また盛り土のきわに、竜頭、花かご、燈籠などをあらなわでひとまとめにしてしばって立てておいた。はじめの一週間は、墓参りをするときに、それらの葬具を一本一本抜いてくる。また、六角塔婆をもり土のうしろにさしておくが、それを、一七日のあいだ墓参りに行くうちにうちこんできた。

付けてしまつ。(水沼)

婿嫁など一人前にならないで死ぬと、墓の上に、歎が入らぬよう、竹を削って曲型のオハシキをさし、真中に弓のつるで径十センチ位の石をつるす。これをモガリといいう。(本丸)

むら共有的のおこしを使つようになつて、おこしを墓の上に置かなくなつてからは、もがりを作つて野犬などのいたずらを防ぐ。昔はテンマルというものがたくさんいて、埋葬があると必ずその晩やつて来て、墓をあばくことがあつたので、それを防ぐために作ったのが起源だといふ。もがりは、竹を五尺位の長さに切つたのを細く割つて、竹のしなう性質を利用して、中央の所で交差するように丸く輪のようく組み合わせて両先端を土の中にさし入れる。テンマルが気づかず握れば、びんととがつた先端がはねて、けものを払うのでいたずらを防ぐことが出来る。



しっかり先端を土中にさしてあるから、余程の不注意でもしていなければ、人の傷つくことはない。四十九日で取り除く所が多かつた。(川浦)

モガリとは土葬のあと土マンジュウの上に、竹を割つて弓形にさしたもの。山犬やテンマルが墓をあらそつとした時にはじくためである。四十九日による。モガリがあらされたなどと聞いたことがある。(六区)

野辺送りの草履 三本辻に捨てる。拾つてくると靈があるといふ。(六区)

野燒り 戸ボーロにタライの絵をかいだ紙をはり、片足突つこむ真似をする。(七ツ石)

野辺送りのあと溝め 野辺送りから帰つてくる人々のために、家の表には、水を入れたらしい、お払いの札と皿に入れた塩がもうすの上のにてて用意してある。おこしをかついだりした肉身のものたちは、少し埋めると、家で仁義などを申さなくてはならないので、手早に家へどる。先ずたらいで足を洗つたちだけして清め、手を洗うが、埋め人は途中で手を洗つても、いまいちどかならする。さらにお札と塩で清める。すっかり清めてから、家に入る。現在では、うすは紙に絵を描いておくだけの所が多い。(川浦)

野辺送りから帰ると、トボケチで清めをする。タチウスをさかさにした上の塩と、タライにくんだ水で清める。タライには足を入れる。(六区) 息あけの經 野辺送りのあと、オショウがもう一度お経をあげる。そのあと、お寺座敷になる。(六区)

お寺さしき もう一度お経を上げ「お寺さしき」と言い坊さんに食事を出す。親しい者、四、五人がおともに座り話相手をする。(七ツ石) オッシャン座敷で院号代がわかる。壇徒縦代に聞いてもらつ。(六区) ケムゲエシ 紙を折つて、ハサミを入れ、複雑な紋様をつくり、オヤワニに巻き、御飯を入れて、新仏に供える。これをケムゲエシといふ。

お念仏 葬い終了後、近親者のうち遠方のものが帰つたあと、隣り

組の人たちはそのまま残り、清めの座敷の始まる前、約一時間にわたってお念仏というものをする。一軒にひとりずつ親戚になっている場合に多いのは、もっとと参會する。十三仏の掛軸を掛け、中央にホトケの写真をかざり、そこに仮りの祭壇に設ける。はじめに、「一本線香を立てて鐘、太鼓をたたき、お念仏を申す。鐘と太鼓は、お念仏申しながら、それに合わせてたたきつづける。はじめの線香がなくなりそうになつたら、つきの線香を立てる。立てたらひとつにし、また、つきのお念仏がはじまる。短ければ一本、年よりなら長くしろ」といつて、十三本、二十二本になることもある。ひとりには三十回ほども「ナムアミダブツ」をくりかえす。それぞれの最後の念仏は「じゅうおうじつないむあるだぶつ」と結ぶ。中休みには、念仏玉をくれる。お念仏が終わつたあと、ホトケ様に口を吸われることのないようにと、升にかいだかつお節をチヨツチヨツと食つ。これをすると生グサを食つたわけになり、以後生グサを食つて良いということになる。広い座敷だが大勢の人たちが寄つて長時間のお念仏をやるので、終わつてからも、鐘、太鼓の音、お念仏の声が耳についてはならない。お念仏が一日の最後の仕事で、これががむとその日の隣り組も解放される。たいへんご苦労頗つたひとのなかには、つきの日また呼ばれて行くひともある。(川浦)

野辺送りがすんだ後、トムコの全部が座敷に坐つてトンツクトンと念仏をする。トムコの大仕事で、一本線香の終るまで念仏をいう。組によつちがいがあり、線香を十三本の所と、十九本、二十一本のところがあつて、線香を立てる人はそれを専門にやり、最後の一仮本だけ「ジュウオウジツタイ ナムアミダブツ」を唱える。念仏は、「ナムアミダブツ」である。(川浦)

お寺さんが帰つたあと男衆が念仏をする。ナンマイタブツ、ナンマイタブツ、と鐘をはたいて唱える。

途中、ナカイレの時にお茶と菓子、念仏玉白いオコワが出る。オコワは手に取つてオテノクボで食べる。天ぷらはつきもので、たいていの時ウオウジツタイ ナムアミダブツを唱える。念仏は、「ナムアミダブツ」である。

に出る。(七ツ石)

**念仏玉** お念仏の中休みのとき、お念仏玉とい  
い白蒸しのおこわ飯を食べる。これは、残すとよ  
のは、参会者に握り飯にして持たせる。(川浦)

念仏玉はお念仏の中休みのときくれる米の粉をふかして作った菓子をいう。最近は念仏玉のはかにもいろいろ用意されて、派手になる傾向がある。(川浦)

急仮を叫ぶる中に中休みをする。この時にもち米を使ってふかしたものをネンバツダマとして出す。あんこを入れない白いものだつた。最近は、菓子など、いろいろのものを出すようになった。(川浦)

なまぐさ 算儀のあと、急仏が説いたとき、カツブシをかいてマス（升樹）の中へ入れて出し、これをちよいとつまんで食べる。これでナマグサを食つたことになるので「仏に口をすわれない」という。（川浦）  
お清め 般式を手伝つてくれたトモには、その晩に清め酒で労をねぎらう。食事はうどんにすることが多く、魚などは良くないので出さないでいい。また、うどんだけは絶対に出さぬ所がある。穴掘りの道具を造つてくれた人たちは、清めの酒を出す。これは一升と決つていて。野辻選りに行つてくれた人たちにも、御飯を食べてもらう。また、うどんだけは絶対に出さぬ所がある。（川浦）

〔二〕死後の供養・その他

寺参り 坊さんに対するお礼参りである。葬式の翌日に近親者が何名かで、遺物（着物など）とお布施を持って寺にいく。帰りにはどこか（料理店など）に寄って清めをやる。（六四）

翌日は片附けをする。「親戚のオチラマイリ」をする。本人が日頃着ていたものでも台にしてお布施を持ってお寺さんへお礼に行く。（七ツ目）

年内のまつりと禁忌　年内のまつりとしては、初七日、三十五日、四

十九日、百か日をする。この間、家族は喪に服すわけだが、食物や着物の制限などについては、現在では殆んどしない。おまつりの時、坊さんは特別頼まなければ何んでくれない。お盆と春秋の彼岸の頃なら、来てくれることもある。(川浦)

初七日 もとほていねいにやつたが、最近は翌日初七日をやるようになり、家によつては、葬礼の晩にナノカをやつてしまう。(川浦)

初七日は、世話になつた隣り組、とりわけ女衆を呼んで、線香を立ててもらつたり、食べてもらう位で、これといった特別なことはしない。

(川浦)

一七日までは毎日お参りをする。一七日にはオハギを作つて組内にくはつた。

七日、七日にはダンゴを持つてお参りする。(六区)

ひとなか位、朝の片附けがすんだ頃、組合いの女衆がお線香たてに行く、お茶をのんで別れる。

七日ごとに家の者がおがみ、四十九日に餅をつく。(七ツ石)

四十九日 餅をついて隣組に配りおがむ。この音を聞いて死んだ人が屋根峯をはなれるから「四十九日の餅だけは音をさせるもんだ」と言つ。

(七ツ石)

四十九日の餅をお寺に持つていく。しょっぱいアンコの餅で、四十九個届ける訳だが、今は十個ぐらいである。(六区)

忌明け 墓中には、魚を食へぬようにして、神様はお茶もあげられない。また、人中(おめでたい席)にも出ぬようにして身をつしむ。忌明けは、七日めであるが、死者に近しいものは、その間隔の濃淡によって異なる。近縁のものについては四十九日、両親は百日、兄弟と子は二十日である。近縁のものでは、兄弟と子は二十日で明けるという。また、忌明けには、近親を呼ぶ。餅をつき、野辺送りに来てくれた人たちのともに配る。一同そろつたところで、お墓参りし、团子を供える。(川浦)

形身配け ひと七日までは隣組の者が毎日墓まいりして、四十九日の

忌み明けには餅をついて、親戚や隣り組の人を招いて「ちそつを出す。近親者はこの日に形身配けをする。(二区)

葬式のあつた家の正月 年末近くに、葬式の出た家では、百日経たぬと正月を迎えるが、一夜九十日払いをすればよい。オクリノディ

に、纏をわたしてしめとした二本の竹を立てる。その下を家族のものが九十九回復すると、一夜で九十日の穢れを払うことになり、正月が迎えられる。

年賀状を出すことや新年の挨拶をしたり受けたりもしるのが普通で、年内にその旨をしたためた葉書を知人に発送し、喪中であるとの挨拶をする。(川浦)

年忌 年忌(年会)は、一年、三年、七年、十三年、十七年、二十三年、二十七年、三十三年とあり、ていねいな人はみんなやつた。全部に坊さんをよぶわけでもないが、近親の者を招んでやる。(川浦)

年忌は、一年忌、二年忌、七年忌、十三年忌、十七年忌、二十三年忌、三十三年忌をする。寺からは、年忌毎に塔婆をもらう。坊主は特別に頼まなければ何んでくれない。(川浦)

つぐ年、イッセイキをする。そのつぐ年は三年忌をする。そうして七年忌、十三年忌、十七年忌、三十三年忌で終る。(七ツ石)

三十三年忌 三十三年忌にはとむらい上げといって、杉の木で枝塔婆を立てる。(川浦)

三十三年のあげ塔婆といって、朴の木の股木を立て、お寺さんをあげ、おがんでもらつた。今は四寸角六尺ぐらゐの角塔婆をあげる。(長井)

トメツバ 三十三年忌には、トムコを招き、坊さんもよんで法事ををする。年会の終ったしにふつうの塔婆より大きくて、上部に切りこみのある塔婆を立てる。(枝つき塔婆とか、葉つき塔婆の例はない)

三十三年たつと寺との縁が切れるので、家でおまつりするのでオシリヨウサマになる。だから新しい家にはオシリヨウサマはない。(川浦)

枝トウバ 三十三年忌のトムライアゲに、ホウの木の枝の出ているの

をたてる。(六区)

幼いものの葬式 幼児や独身のものなどいちにんまえにならぬものの葬いは、いつばんに簡単にすませるようとする。大きさにすると、かえつてその両親（その家）に対するかわいそうだからという。(川浦) お産で死んだ人の供養 流れ灌頂とはいわない。緋木縄のヨスマをしつて、川の一寸逆流したところにたてて、ヒシャクを二つ置き、水をかける。色がさめてくると成仏できるという。

子供を生まないうちに死んだ場合には、お葬式を三二つにしてだすものである。(六区)

流れ灌頂 産後の死者にする流れ灌頂をみた事はあるが、何といっていたか知らない。(一区) 嫁の実家の葬儀 実家の父母がなくなると、こちらの隣り組の人たちも、嫁の実家にジンギに行つた。(一区) 無縁仏 川流れや行き倒れの者で、身もと不明の者は、お寺の門の外の一角に葬り、墓参のついでに村人が線香などをあげる。家が絶えて、墓詣りする者のなくなつた仏も、無縁仏として扱われる。(一区)

男性が妻を娶らないうちに死んだ場合、これを無縁仏という。(川浦) 耳つぶさぎ 同年齢のものがなくなつたときには、馬ぐそで耳をふさいで忌みたちをする。「悪いこと聞くな」などと、となえ言を三回するものもあつた。こぬか団子を耳にはさめといふものもある。何ごとによらず同年齢のものの不幸は気になるものである。(川浦)

同年令の人が死ぬと耳にマグソをつけ、耳きくな耳きくなという。子どもには必ずしてやつた。(六区)

ミニップサギといつて同年の人が死んだときは、馬糞を紙に包んで耳にあてる。(一区) 耳フサギといつて同じ年の人が死んだ場合、馬の糞で耳をはたいた。(本丸)

同年の者が死ぬと、耳つぶさげといつて、馬糞を耳にあてた。(長井)

両墓制 埋め墓と詣り墓と別になつていて、詣り墓は全透院の墓地にある。これは山の急な斜面に段を作つて墓地を設けてあり、狭い斜面の段上に石塔が並んでいる。埋め墓は煙の隅などにある。死体はここに埋める。(二区)

# 年中行事

## はじめに

倉渕村は吾妻郡と碓氷郡の境に当たるので、両地方からの交流が風習の中にも表われている。ここで特色のある行事に触れてみよう。

正月には神様が衣替えをするため、神主から十七体もの多数の幣束を作つてもらい丁寧に祭る家が目立つ。年男が若水を汲んでわかすのに、豆木を燃やす家もあり、接続のよいものを選んでいたり、初参りにウブスナ様へオサン钱のほかにお散米をまく、古風も残っている。

六日年（正月六日）に掃除をしない、掃き出さないなどと慎しんでる例も見られる。

山の神を十二様と呼んで幣束を神棚に上げておく家が多いのは、山村のために山仕事が多くて、山神を信仰し十二講が盛んだったからであろう。

小正月のハナなどを作ったメリデンボウの残りを束ねてタフラ木としてカマ神に供えて置き、田植えの時に赤飯をふかす燃し木にしていたり、ハラミパンでこの赤飯を食べたりした。また、作ったワキザシをあとでみそをかく時に使つたり、鎌の柄にして蛇除けを頼つたりすることがあり、特殊の呪物として靈力を信じていたようである。

マユ玉飾りの時に鷺ノ宮という細長い餅の切れを、マユ玉本の枝から枝に渡して蛇神を表わし、鼠除けを祈つている。安中市東横野の鷺ノ宮を祭るものか。十日夜に水沼中尾でサワ餅という細長い餅を天狗様に供える例と対照的で興味深い。

道祖神の夜、トモコ（同年令集團）の者が新築祝いをしてくれたり、

新婚者の水祝いをしてやつたりする例は、よそにあまり見られない風習である。水祝いについては松井町坂本地區でも報告され、道祖神にオキニマラを奉納する西上州に残っていた奇習といえよう。道陸神焼の火中に道祖神の石像を投げこむため、崩れたので龜沢では大正十三年に新造しているが、反対に隣りの熊久保には県内最古の在銘という寛永二年の双体道祖神が残っているのも興味深い。

エビス・大黒を祭る所が神棚の下の仏壇よりさらに一段下の戸棚の中に作り付けになつてある家が見られる。エビス様はふつうの神棚より一段下に祭るが、こんなに徹底しているのは珍しい。

四月八日に虫除けの呪文を書いた札を逆さにして戸口に貼るのは、藤岡市上日野でも見られ、新轍師が広めたものであろうか。

五月五日の節供に山祭りをして榛名湖畔に遊ぶ風習は、旧四月八日の山祭りの名残りから今風の山開きにつながるものと思われる。

秋十月の神無月に神様が去る雲へ集まる時、この留守居神は金比羅様になつていて、長虫（蛇）のため一足遅れたためと説明されている。北毛では諏訪様が蛇体のため遅れて留守居神となつたとしているのによく似ている。

十日夜の供え餅をサイメに切つてツツコに入れて十二様（山の神）などに供えたり、サワ餅という一寸巾で二、三尺の長さの餅を天狗様に供えたりする例（水沼中尾）は、十日夜が山の神祭りだったことを表わしている。

また、田のカエルと畑のカエルにそれぞれ米の餅と粟の餅を供えたなど、水沼の例も取種感謝の祭であつて、田や畠の神もこの日に祭られていたことを示している。十日夜が田の神（カエル）と山の神（天狗）

と向方を祭る日だったことは大変興味深い。

十二月十五日の屋敷祭りにオシリヨウ様に米の粉をこねたオシトギを供える（岩水）家がある。オシリヨウ様については倉渕村だけの例が報告されていたが、その後もっと広がっているらしいことがわかつた。藤岡市中大塚小林家で墓の入り口にシロウ様という自然石を屋敷祭りの日に祭つてからみても、今後の分布調査が期待される。

十二月二十七日をヨゴレ年といい、女と馬の年取りともいって、ススキをしたり、お松迎エをしたりして、正月の準備をする大事な日となつてゐるのは、実際的な行事である。ふつう十三日がスヌハキの日とされるのは、今では早過ぎよう。

大晦日に主人が便所で年取りをしたという家例（二三区）もあつたが、実態を知りたい。

なお、各項の記述は奥の方の部落から低い方へと並べて、行事の変化が見られるように考慮した。（閑口正巳）

正月様（年神様）は榛名山から十二月十五日くる。古くは二十日過ぎだった。神社の世話人が各戸へは配る。このとき皇太神官、歲神様、お抜きの三通りが配られる。（下郷）

年神棚 新しい枝を吊る家のもある。（陣田）

正月棚は新しい板でつくり、吉方に向けて吊す。（下郷）

正月棚は杉材のオタナがあり毎年同じものを使い、座敷の正面に向かう。アキノカタとか方角については言わない。

オタナの前に新しい竹でカケモンザオを渡してコブ、スルメ、イカ、カチグリ、イワシ、ホシ柿、フキ、ダイダイ、シオビキ、クリとマリなど縁起のよいものをさげた。クリとマリはクリマリ（身上マワシ）がよくなる様にとの意味である。

オタナに年神様の掛軸やお札、お供えをあげた。お札は伊勢神社→高崎の八幡神社→浅間神社を経て各家庭に配られる。（岩水）

正月棚は毎年、板をあたらしく買ってきてかざった。棚は尺巾で、長さに六尺ぐらい。

正月棚は、おもてざしきの神棚のとなりにかざる。正月棚は、神棚とかぎの手に、東向きにかざるのがふつうである。

むかしは、神様の前には、おかおかしくておしめをはつた。

正月棚は、ごらうそに正月二十一日まであげた。お棚は、一月二十日にこわした。（沼水）

正月節 コジックメ 大小あり、外は小。

七五三 白 風呂桶、手桶などにまく。

オカオガクシ 太神宮様、三方荒神などにまく。

宝珠の玉 玄関

大オカサリ 座敷（下郷）

お飾りは年神棚の前の竿に、ミカン・イワシ・スルメ・コンブ・カキ・アサ・手ぬぐい・マユなど七種の物を吊るす。マユは養蚕のあと、

正月に神様の衣替えをするため、新しいお札を蒼生の神主に頼んで切つてもらう。正月様、十二様など全部で十七体作つてもらい、一括してもらう。古いお札は燃す。（陣田）

年神様は普段の神棚にお迎えする。特別には作らない。（六区）

しんじん棚(神棚)の前に一メートルくらいの竹をかけて棚をつくり、松を飾り、シメを張る。みかん、だいだい、こぶ、いわしななどを横につるした竹にさげる。日清・日露戦争の頃は、栗は勝ち栗などといつてつるしたり、縁起ものでクルクルまわるからといっておつるべて進せる。(川浦)

供え物は供え餅を神棚・エビス大黒・仏壇に別々に供える。(亀沢)

年男 家の若い男で、貰いのできる者がなり、三が日までは、供え物やお雑煮を作る。御膳のまかないをして朝食が食べられるようにして、重箱に入れて神棚・福荷様・門松などの松の枝に進せて回る。朝晩供え物を飾り、シメを張る。みかん、だいだい、こぶ、いわしななどを横につるした竹にさげる。年男は長男が十五才になると長男にやらせる。それまでは主人がする。三カ日は年男がいっさいやつて女衆には手を出させないことが原則であるが、仲々そつもいかず女衆にやつてもらう。

新しい手桶で井戸か川から若水を汲み、座敷のイロドリで豆木で火を燃して湯を沸し神棚にお茶を進せる。これは年男が必ずやる。(岩水)

トシオトコと言い、男衆が早起きして神棚に供え物を進せる。おそらく三時には起きて朝湯をわかす。フンドシから全部新しいものに着替えてお灯明やお神酒など上げる。(七ツ石)

馬小屋、星敷神様、お福荷様、物置、便所など外から供え物を上げて家の中の神棚に上げる。(築地)

うちの物語が年男をつとめた。

十一月三十一日の夕方、マメガラを用意して、元旦の朝、それをつつかつてお湯をわかしたりぞうにをにたりした。これは、まめになるようなどいう意味であった。

元旦の朝には、井戸から水を汲んできて(若水という)、これで顔を洗つたり、お湯をわかりたり、雑煮をにたりした。

三が日のたきはみな年男がした。(水沼)

年男は各家の主人がなる。大晦日の晩から用意しておいて、朝一番早

く起きてコップ一杯の若水を汲み正月様を祝る。三ヶ日の食事は、女の手を借りずに年男が作る。ごみの類は一ヵ所にまとめておき、四日の朝掃き出す。(二区)

年男は若水をくみ、豆の木で火をつけ、お茶をわかす。また門松などつくつた。このとき朝の火は豆がらでたきつけた。(下郷)

年男は主人がなる。朝火打石で火をつけた昔は年男が食事も三が日は三箇日は女が開放される。(六区)

若水 年男が汲んで、お茶をいれて供える。(亀沢)

朝湯 元日の朝今は夜が明ける明けいうちに早く起きて風呂をたて、年男が先に入る。それから家の男衆が入って、女衆が後から入る。入浴後、朝食をそろつて食べる。風呂に近所の人を呼びつけはしない(亀沢)

朝湯は下クルワの鉢泉の湯を汲んできて何軒かで入りっこした。(岩水)

朝湯は年男から順に入り、女性は男の子供より後に入つた。(下郷)  
初参り 元日の朝、株名神社へ参拝に行き帰りに東禅寺へ寄つて来る。おサン銭やお散歩を持って行く。寺へは年始を持って行く。最近は除夜の鐘と同時に参拝する者もいる。(亀沢)

除夜の鐘がなると同時に、うまれおぶろなさまへ一番まいりに行つた。おまいりに行くときは、風呂に入つて体を清め、いい仕度をして行つた。(おさこ)おさいせんをあけて、新年の無事を祈つた。(水沼)

年始回り 元日に神社へ参拝する前に村内を回つて年始をした。隣りから始めて各戸を挨拶して回る。男衆だけが回つた。(亀沢)

年始参りは浅間神社へお参りしてから岩水内全戸をまわつた。ケーヤクに出られる男衆は全部出た。刀を差して歩いた。

前年に死人のあつた家は門松を立てておらず、そこへは行かない。(岩水)

新年会 元旦には、男衆が一戸一人ずつ、明け六つの鐘を合図にお寺

(全透院)へ往き、帰りには浅間神社にお参りした。むらでまとめて区長が御年始として、神社にはお賽錢をあげる。また、そのあと公会堂で新年会をする。(川浦)

始まわり(元旦)を現在は省略して、集会所にあつまつて、新年的なさつをかわしている。むかしは、十五才以上の男子は、むら(曲輪、三十戸)中を、一戸一戸年始まわりをした。うちのものうち一人(そのうちの主人)が、お寺へ新年のあいさつを行つた。(水沼)

年始は元日に一戸一名お昼を食べてから上ノ谷戸に集り、神社と寺へもいった。昔は毎戸通り歩いた。寺へは一日にいく部落もある。(下郷)

家例 上野にいた原田元吉氏の家は主婦だけが三が日によく二を食べられない。主人等はソウニを食べて主婦だけソバをうつて食べた。朝食のみである。

施益に三回入られてからそろにしている。(岩水)

安中市原市の柏屋は、主人が便所で二が日の朝食を食べた。昔先祖が

便所へ逃げ込んで助かったからという。(下郷)

初正月 子の初正月には親元から掛軸を持って行く。男の子なら男の絵、女の子なら女の絵を描いたもので、名称はない。羽子板のこともある。(陣田)

初絵売り 元日の朝ゲに売りに来た。(亀沢)

## 二 日

仕事始め 山へ行き、ナタでマユ玉木を伐つて来る。(亀沢)

仕事はじめで、この日はわざつと(少し)でも仕事をした。山仕事をする人は山へ行つて、野良仕事をする人は野良へ出て、おもいおもいの仕事をはじめた。(水沼)

山入り 十二様へお参りをお供えを進ぜた。帰りにマイダマ木にする山桑や作りものに使うタルデンボウを切つてくる。(岩水)

正月の二日は山入りといい、山の仕事を始めた日で、山仕事をしても

しなくとも、神棚に進せたお供えを一つ持つてまゆ玉木(ヤマツカ、ヤマツクワ)を切りに行く。山に着いたら、お供えは木のかぶつた上に紙をしてその上に置く。年によつて方角の良い山に行く。(川浦)

初山入りは一月一日にする。「ことはじめ、山はじめともいう。半紙を持つて、半分に切る。一方でオンベロ(御幣)を作り、もう一方には、供え物をせる。供え物は、オサゴ、ブマ(煮干し)二つ、一つの餅を二つに切つたものである。オンベロの下に供え物をした後、「今年一年無事に山仕事をさせてもらいたい」と祈る。供え物は幾日もたたないうのに無くなる。

今年はこの山で仕事をするという場合、その山に山の神の祠があればそこでやり、無い場合には、適当な木にオンベロを結わえてやればよい。

三日な不淨といって、むじろきりもなくいい日であるが、年の始めであるから山仕事をしない。

四日はお寺の御年始だからやらない。

五日から山仕事をしたが、本格的には八日からである。(六区)

山入りで仕事を始めに山へ行つて少し働いてくる(カジヤ)

むかし十四軒あつたが、山仕事をしない家は三軒位だった(七ツ石)

山入りのおしめをつくつておいて、この日、もち、おさこ、おたるに入れた神酒、尾頭付のさかな(もちとおさこをもつていくのがふつう)をもつて、山へ行く、十二様をまつてあるところへ、おしめをはつてそこへもちなどをおそなえした。その年の恵方にむかっておまつりをする。山入りの行事をするのに、その家の主人で、このとき、小正月のマユダマ木を切つてきた。(水沼)

二日は山始め、小正月の山桑をきりにいく。仕事を始めともいう。この日初賣に高崎までいった人もいる。材木や炭は旗を立てて下つていた。このときは馬にも飾りつけをした。(下郷)

書始め 二日にするわけだけど、親類中に配るので暮から正月にかけて沢山書いた。持つて行くとミカンや小遣いをくれた。行くと座敷一杯

になる程来ていた。(岩水)

謹い初め 一月二日は、祝い事のあった家を宿として謹いをした。この日は流行歌など唄うとおこられた。御祝儀のとき若衆で謹いに出られる人は二親揃っている家のものといわれていた。(相吉)

### 三 日

縁起 三が日のうちにトロロを食べないとハラワタがくさるという。

(亀沢) 元日からさんがにちにかけては、女衆は神様にあげる供え物には手をつけないで、年男といつて男衆が朝いちばんに早く起きて、若水汲みからご飯の仕度、お正月様への供え物のあげおろしまで、いっさいを手際よくさばく。すっかり用意の出来たころ、女衆が呼ばれる。さんがにちの食べ物については、特別な家例はなく、どの家もお雑煮に決っているようだ。とそなんぞは、昔は普通の家ではなかつた。また、かたい家では、さんかにちは決して座敷ははき出さなかつた。福をはき出すといつてきらつたのである。三日の間に男衆は年始まわりをすませる。四・五日は女衆の年始まわりの日である。(川浦)

三ガ日は仏壇の戸は閉めておく。四日の朝開ける。(岩水)

正月三日は山仕事をしているものは組合の元締めの家に年始に行き<sup>二</sup>駆走になる。(川浦)

不淨日だからよそへ出ない。(カジヤ)

三箇日の食事 朝はお雑煮が普通、夜はきまつていい。坂越一家では、朝がソバ、昼が餅、晩が御飯ときまつている。三箇日の食事の内一回はトロロを食べる。長い自然薯を暮に掘つておく。(六区)

四日はお棚さがしで、神棚にさんがにちあげたお餅を下げて、雑炊にして食べた。(川浦)

お棚餅といつて、のした餅を春の目に切ったのを、三箇日神棚に供える。餅とオツユの具と一緒にして三ヵ間供えるとお山になる。それをさげて、「お棚さがし」のオジャにして食べるとしてもうまい。(六区)

正月四日はお棚さがしである。三ヵ日の間正月様に供えたものをさげて、おじやにして食べる。お寺の坊主が年始まわりに来るのを、主人が家で待ち受ける。(二区)

寺の年始 寺から坊さんがお供を連れて年始回りに来る。お供が各自を回つてお札を置いて行き、坊さんは通つて行くだけである。(亀沢)

「全透院御年始」と住職が小僧を連れて年始まわりをした。「お寺さんが来るから縁側にこざを敷いておけ」と言われ丁重に年始を受けた。

今は車で来て僧徒越代の家に行くだけで済ませてしまう。(岩水)

東善寺の御年始 (六区)

寺の年始は一月の四日ときまつていて、和尚さんが毎戸まわつた。お札をもつて「蓮華院年頭」といってきた。それぞれの家では、縁側にこざをしてまつていた。

なお、一月四日には、「坊さんにおそなえの顔を見せるな」といつて、坊さんのくる前に朝げ(朝のうち)にお茶などを正月棚にしんせて、おそなえもちはさげてしまつた。(水沼)

寺の年始で、寺うけは縁側でした。このとき新調のこざを敷いて札うけをする。寺からはシャモジとお札が配られた。(下野)

嫁娘の年始 四日に嫁娘の夫婦が揃つて親もとへ膳の餅(四角の大判)三枚持つて年始に来る。結婚後、五一七年くらいまでの者が来るが、親がなくなると、膳の餅は持つて来ない。また、「見をしていない場合は、組内を回る。(亀沢)

正月四日は嫁・婿の二年始の日、膳餅を持って実家へお客様にいく。近所へは振舞わない。(陳田)

才棚探し 神棚に供えた物を下げて煮込んで、神様に供える。(亀沢)

### 四 日

嫁のお客に行く日。夫婦揃って、ゼンの餅（四角の餅）を三枚お土産として持つて行く。（六区）

正月三が日のあいだは、朝・昼・晩に正月棚にあげたものをさげずにいた。それを、四日の朝、坊さんが一年始める前にさげて、なべで煮て食べた。（水沼）

四日は年始回り。揃つて村中を回る。四角な「ゼンのモチ」三枚と「サケの切り身」を持つて夫婦で嫁の里方へいく。（七ツ石）

この日、嫁はもち（四角のもち）を三枚、水引きでぬわえて、里へもつて行つた。三枚のもちのうち、真中に入れたのはアワのもちであつた。

里がえりした嫁は、六日までは帰つてくるものだといわれた。（水沼）

四日はお棚さがし、嫁の年始ともいう。朝九時から三日までお供えしたものをお下げて雑水を作つて食べた。嫁は四角の餅を三枚紙に包み、松の葉と書いた袋に金を入れて土産に持参し、六日の夕方まで里に帰れた。（下郷）

## 五 日

セリツミ 「七草ゾーセー」のセリをとつてくる。一夜セリはいけない、というから（七ツ石）

七種ガユのセリをとる日である。六日にとるのは、一夜セリといつていやがる。（六区）

## 六 日

六日は七草の前の晩で、こちそを食べる。いわれは不明。（亀沢）

元日は掃除をしない。はき出ることはしない。「はっこめ、はっこめ、こがねも二つぶもはっこめ、はっこめ」と言いながら松の枝ではっこむ。簪でもする。（岩水）

この日はとしとり。正月棚に「はんをあげるだけ」。

なお、四日は里帰りした嫁は、六日までは、かならず帰つてくるものとされた。「二カ所でとしをるものではない」という。（水沼）

正月六日は、年とりである。神棚に御神酒をあげ、「ちそを」を作つて食べる。（二区）

六日取には尾頭付きと野菜汁を食べる。（六区）

まるめ年は正月六日の六日年のこと。この日山仕事もはじめた。木びきなどが集つてこの日はお祝いした。（下郷）

## 七 日

七草 小豆粥にセリ・コンブ・ニンジン・ゴボウ・イカなどを入れて七草がゆを作る。昔は神棚の前でこれらの物をたたいたり、唱え言を言つたという。（亀沢）

七種ガユを食べる。具が七種類。セリ、ナズナ、大根、人参、切昆布、小豆、餅などで七種類になればよい。

セリを切る時、包丁や金火箸で、マナ板をたたきながら、「七種、ナズナ、唐土の鳥が日本の土地に渡らぬ先に、はしたなけ」とくりかえしとなれる。

母親のとなえ言を聞いて「そらオシヤギリ（囁すこと）がはじまつたぞ」といったのを覚えている。（六区）

七草ガユを使う春の七草は摘わない。コブ・米・大根・小豆・セリなど七色入ればいい。セリは必ず入るが一夜セリはよくないという。六日にとってきて家中に入れずにおき、六日の午後十二時を過ぎれば家の中に入れる。マナイタの上で包丁で叩きながら「七草ナズナ唐土の鳥が渡らぬ先にハシタタケ、ハシタタケ」と歌う。（岩水）

七草がゆに七草を全部間に合わせることはよほど本気でもむずかしい。それでも、ちゃんとする家ではいくつかでも集め、朝早くから母親が台所で、「七草なすな、……」と歌いながら、ほうちよつて七草をとんとときざむ音で子どもたちに目がさめるのである。七草がゆのかわり

に、あずきがゆを作る家が多いようである。西ヶ瀬の原田東一郎さんの

家では、元旦からしんじん棚などに供える木鉢とは別の器に、あずきがゆを入れて、正月の供え物と同じように、十二様（十二の神様）に進ぜる。（川浦）

七草には門松をさげて七草がゆを食べる（川浦）

七草は「七草なづななにたなく、唐土の鳥と日本の鳥と、渡らぬうちにはしただけ」と言いながらセリを刻む。

正月の神棚に飾ったコブ、イカの足、人参、大根、モチ、米、塩、などで七いろになる。（七ツツ）

野菜だけ七いろ入れる。（縮屋）

七色の草を入れておかゆをつくった。おかゆの中には、あずき、大豆、米などをふくめて七色のものを入れた。

おかゆを煮る前に、セリを包丁の背のほうでたきながら、「七草ナズナ」一と唱えことをとなえた。（水沼）

七草がゆを作つて食べる。「七草ナズナ、唐土の鳥と日本の土地に渡らぬさきに、しつたけしつたけ」と唱えながら、厄豆のみねの方で、せり、なすな等七種類の草をたなく。（二区）

朝「七草なづな……」の歌をうたいながら七草がゆをつくった。七草といつてもセリ、コブ、イカ、人参などで七種になればよかつた。この日外飾りははずす。また、この日からは菜類を食べてもよいという。（下郷）

七日は小林山の縁日で六日の夜から歩いていった。草履か下駄をはいて、鍊を立てるまねをする。土がカンカンに凍っていてたでられないこ

## 十一 日

鍊立て 煙に鍊を持って行って、松を立て供え餅一組（二個）を進ぜて、鍊を立てるまねをする。土がカンカンに凍っていてたでられないこ

とが多い。（亀井）

鍊入れは煙にオンベロを立ててお供えを進せて一鍊入れるだけである。煙が凍つていて切れない。（岩水）

さくたてにはたけへおしめをもつていてかざり、そこへ「おさ」と枝をとつていて、はたけにたて、さくきりのまねをしてくる。これは主人がしてくる。（水沼）

一月四日にさげておいたもちをきつて焼いたのを二かけ、頭付のさかな豆、さかなをもつていておそなえをした。おたなのお松の一番下の枝をとつていて、はたけにたて、さくきりのまねをしてくる。これは

「一月四日にさげておいたもちをきつて焼いたのを二かけ、頭付のさかな豆、さかなをもつていておそなえ」と一緒に「一升ますに入れてはたけへもつて行つた」のをし、おんべろを立てた。（水沼）

正月十一日の倉開きの日に、門松に新しいご幣をつけ、煙に持つて行き、お供え物をして、さくと三さくくつ切る。これを鍊立てと呼んでいる。（二区）

倉開きといって、お供餅の雑煮を食べる。（六区）

倉開きを、鍊立てともいう。正月のお供餅を焼いて机に入れ吉方の高棚にあげ、それをお松をもつていて煙に立て、五穀豊穣を祝つた。（下郷）

大食会 正月十一日に青年会で各自、米三合と金を出し合い、五目めじめて倉を開いて、こくもんをだした。十一日までにつかうものは、前々から用意しておけといわれた。（水沼）

大食会 正月十一日に青年会で各自、米三合と金を出し合い、五目めじめて倉を開いて、こくもんをだした。十一日までにつかうものは、前々では米二合を出して五目めし、産泰講でも米二合で行なうが、あまるところ「にぎりめし」にして返した。（二区）

十一さまの宵祭で若い衆が一晩中たいこをたたいておがむ。（関沢）



十二様  
（上）大黒像（陳田正己）  
（下）エビス（撮影 関口開）

## 十二日

十二様 昔は山仕事する人が、神棚に十二様を祭る宿に寄つて、お札を切つてお神酒や魚を進めて祭つた。山の神は十二日以外は祭らない。

小正月の作り物はヌリデンボウの木を削つて、テンガ・マンガ・エンガ・ヨツゴなどの農具や立臼の形まで作る。ヌリデンボウの木のマキ（薪）を束ねてタフラギといい、皮をむいたのやむかないのをませて、カマ神様の所に供えて置く。牛や馬の湯を湧かす大釜を吊るして置く所に置く家もある。あとで田植えのオコウ（赤飯）をふかす時に燃し木に使う。（小倉）

### 小正月の飾り物

はホウの木に掛ける。（陳田）

小正月にかかるエンガ・テンガ・アワボヒエボはヌリデンボウでつく

る。（川浦）

十三日は大正月と小正月の境の日、門松を取りお棚がえをする。（七ツ石）

モノ作り ホダレはホダレ壺が来てそれを買うこともあるが、ハシの木で作った。

エンガやテンガの農具を作った。

アワボ・ヒエボを真竹にさして堆肥のコイヤマにさしたり、大黒柱や勝手の柱にしばつた。

ワキサシをヌルデで作つて神棚において、道祖神焼きて焼いた。ミソをかく時にこのワキサシを使うといいミソになる。鍵の柄にするとよく切れれる。鍵の柄になりそうな反りぐあいのいいのを選んでワキサシを作つた。

ケーカキ棒もマルデで作つた。頭の所を四ツ割りにしてマユダマを入れた。後で苗代の水口にさした。

ハラミバシもマルデで作り、十五日ガユをこれで食べる。吹いて食べると田植に風が吹くというので吹いて食べてはいけない。（岩水）モノツクリは正月十三日、ハラミバシ、ケーカキ棒一本（十五日第に用いたあと神棚に置き、田植の時、鳥のお札をはさんで、田の水口にさす）ヤット一一三本（十四日朝オマユダマをもつてドーロクジン焼きに行くとき、子供の数だけ持つて行って焼き、子供が遊ぶ。このあと軒

鷹

## 十三日

飾り替え 十四日の前に日のよい日に飾り替えをする。十一日から十

三日のうちに松飾りをはずして、マユ玉を飾る。（鬼沢）

カマドのお飾りの松を残して置いて、初雷の時に外で燃すと、雷が遠くへ行くという。（鬼沢）

十三日にはマユ玉を作つてお松のあつた所に飾る。マユ玉木は二日の初山入りの時切つて、持つてきておく。（六区）

十三日のオマイ玉を煮た水を家の四方にまく。家難除けになる。（六区）

下に置き、災難、盜難除けとする) (岩水)

カエカキ棒は一月十五日のアスカギュをケーカキ棒でかん回して、神棚に進せて置いた。

農道具 小正月十二、三日ころヌリデンボウの木でテグワやキネなど農道具の形を作つて年神棚に供えた。余つたヌリデンボウは集めて儀の形にしばり、タワラギといつた。あとで田植えの赤飯をふかす時に、たき木にして燃した。(長井)

ものづくりは、テンガ、カエカキボー、ハラミバン、アワボウ、ヒエボウ、脇差などつくり、脇差はオッカドの木でつくり、翌日道祖神の火で焼くときフジのつるをまいて焼いた。そのあと戸口や神棚にあけておいた。(下郷)

十三日にお松をはずす。一月二日の仕事はじめの日に、山からまゆ玉木(ツヅクサの木が本当)などをきつてきた。十三日には米の木でもちをついた。まゆ玉をつくる、まゆ玉木にさした。また、この日は、ヌルデンボウの木で、手鉤、えんが、臼、杵など百姓道具や、わきざし(ヌルデンボウの木にふじのつるをまいたもの)けえかき棒、ハラミバンなどをつけた。(水沼)

ハナヌルデの木の皮をむいて、鎌やなたでハナを搔いた。ホダレを

売りに来た」ともある。これをマユ玉の所へ並べて飾る。(亀沢)

ハナをかくため、ハ

ナカギナタやホダレカ

キのある家もあるが、

ナタの先でもかける。

(亀沢)

ヌリデンボウを細かく削つて、ホダレナタ

で削つてハナ(ホダレ)

をかく。山正月十三日



長さ 17 cm (刃渡 7.5 cm) (陳田)  
(撮影 関口 正己)

か十四日につくる。(陳田)

ハギの木の皮をむいてけつてつくる。黄色の木の肌が美しい。

アワバナ、ヒエハナをつくる。(川浦)

ハラミバン 小正月に田植えの人足分くらい作つて、神棚に取つて置く。

田植えの時に、お祝いだからこのハラミバンを使つて食べ物を取つて食べる(一応使うことになつて)。(ハラミバンを十文字に組んで苗マ苗代)にさして置くと、福の実がうまくふくれてみるという。(亀沢)

昔はヌリデンボウでホラミバンを作つた。田植えに人足を頼む人数分だけ作つて置く。田植えの時に出た赤飯は、このハシで必ず一口食べてから、普通の箸を使つようとした。使つたホラミバンはナエマ(苗代)の縁に立てた。(長井)

コメゴメの木の新芽(新しく育つた木)を切つて来て、もちつきをした熱湯の中に入れてぬでてから皮をむいて箸をつくる。正月一日にはこれで食べた。また田植えのときに大せいの人を頼んでもこれで食べさせた。(川浦)

ハラミバンは、うちによつて数がちがつた。家族の人数分と田植えの手伝いにきててくれる人の人数分とをあわせてつくつた。(田植えのときに、ハ

ラミバンで田植えの赤飯を食べてもらつた)

まゆ玉は、お松をさげたあとにあげた。(水沼)

アーボヒーボ カマ神の所に進せて置いた。あまり作らないし、こやし場の所には立てなかつた。(亀沢)

アーボ・ヒーボというのをつくり、堆肥の上にさした。ヌンデンボウの木のはをむいて白くしたのをアーボとし、皮を半分だけむいたのをヒーボとした。(水沼)

正月十三日に、家の主人は、二本のヌルギで、アワボ・ヒエボを作つた。アワボはヌルデの皮をむくが、ヒエボはむかない。出来あがつたアワボ、ヒエボは、一本ともこえにわのたいひしやの一番上にさした。(川浦)

アーボはヌリデンボウ（ヌルデ）の木の皮をむいたもの、ヒーボは皮をむかないもの。コエ（堆肥）にさした。（六区）

マユ玉 女衆が米の粉をこねて丸めてダンゴを作りふかす。十六マユ玉といつて、粉一升をこねて里芋の形、マユの形、鳥の形、ソロバン玉の形など合わせて十六個作る。ほかにふつうの丸いダンゴも作る。これらをマユ玉木のボクにさして飾る。マユ玉木はシナコモがつてよくしなう枝がよい。大きいボクに粉一斗分も作ったマユ玉をさして、座敷の柱に結び付けて飾った。神棚や二階にも飾った。（亀沢）

マユ玉はヒエのダンゴやトウモロコシのダンゴも作った。ボクにさして乾かすとおいしい。（亀沢）

おまゆ玉は、蚕の神で、お蚕が当るよう農家では祈りをこめて作つた。形は十六まゆ玉といつて、まゆの形のもの、そろばんや小判の形の大きなものを十六と、ふつうの丸い形のものをたくさん作つた。出来たらまゆ玉木にさし、小さな方は、正月棚の大正月には門松を立てた向わきの所に、十六まゆ玉は神棚の中央に進ぜた。みごとなわん枝ぶりに花が咲いたようにした。粉は、石すす前年の暮れに、家で挽いたもので、子どものいる家では、男親が、そんなに作るのかいというと、女親が、子どもがおいしがって食べるのだから、樂しみにしているのだから、といって、多い家では一斗五升も作つた。十一日には、朝からまるめて、うでで、そしてと女衆の一日仕事であった。（川浦）

カマドの神に供えるマイダマは、ミズアサでさしたもの上げる。（川浦）

十六メエ玉は十三日に百姓屋でつくる。普通のより大きくマユの形をしたのもある。（六区）

ヒエエ玉は馬屋にさした。（六区）

十二日にマイダマを作り十三日のオカザリカエにマイダマ木にさして飾つた。座敷に白いマイダマをさし、台所にはヒエで作った黒いマイダマをさした。道祖神焼きでマイダマを焼いて食べる虫歯にならない。

（岩永）

十六まゆ玉というのは、かいこをするうちでつくつた。大きいまゆ玉を十六コ、そろばん玉のようなかたちのものをつくつて、クワの株にさした。それは、座敷にかざつたが、まゆが沢山とれるようにという意味であった。

まゆ玉木には、もちのきつぱし（あられ）をさすうちもあった。また、むかしは、辻占<sup>つじぐるみ</sup>というのを売りに来た。これをまゆ玉木にかざりとしてつるした。

ふつうのまゆ玉をさしてかざつた。これはまゆ玉の数にはとくにきまりはなかつた。（水沼）

マイダマ木は毎年同じ株から新芽が出ていい株になるからひとつ所の同じ株を切つてくる。マイダマにしたりイモの形にしたり、ホウシの玉に作つた。昔は一俵も米の粉をひいて作つた。（七ツ石）

男衆はハギの木をうででクソツ皮をとり、カマでけづつて花を作る。（七ツ石）

小正月に使うまゆ玉木は、山桑（やまつか、やまつくわ）である。前年のうちに、これはと思う木を選んで、かぶつにねらいを定めて切りきずをつけておき、正月一日の山仕事初めの時切つてくる。（川浦）

十三日は正月の飾り替の日、マユ玉を米の粉でつくり大木、小木にさして供える。大木は山桑の木で座敷に飾る。小木は山桑の枝でお松をあげた神々に供える。十六のマユ玉もつくつた。

十七のマユ玉というのは、のし餅を切つたと丸いのをまとめて十七さした。（下野）

若餅 小正月に若餅をつく。それでお供え餅を作つて供える。大正月ほどはたくさんつかない。ついた餅の方が機械で練つた餅よりうまい。のし餅やあんびん餅（塩あんや砂糖あん）にする。供え餅は一年が十二ヶ月なので十二組作つて、神棚から馬屋、カマ神、稻荷様などの神様に供える。（亀沢）

若餅は米イソのほかに

キミアワなどでもついた。(亀沢)

鷺ノ宮 小正月のマユ玉を飾る時、餅の切れっぱし

を細長く切って枝から枝へ渡して掛ける。これを「鷺の宮」とい、蛇神様で蚕に鼠がつかない呪いにする

という。鷺の宮は蛇神様で秩父(?)にあり、お札もあつた。鼠を取つて食べてしまふ神様だという。(亀沢)

田植行事のまねをした。

(亀沢)



十二様(左)とキヌガサ様(中央の像)(陣田)

(撮影 間口 正巳)

この日に謹初めをする。

トモコは下三歳遠いぐらいまでの男友たちが組むので、部落には幾組もあつた。ご祝儀の世話をしてくれる組で、一つのご祝儀には一組のトモコがある。グループの人が全部結婚するまでの期間の組織で、一

回りすると自然に消滅する。(長井)

水祝い 正月十四日に新しく結婚した家にトムコが寄つて、取り結びと同じ儀式を練習して、説いて習つた。(陳田)

ヌリテの大きいものでキンマラを二本つづけて水引きでしばり、ドンドンヤキのときには村の人たちが並んでいる中を、羽織り袴で正装したムコサンが通る。村人たちはムコサンに水をかけるが、斐つたムコサンにはたくさん水をかけることもあつた。この後宿の家に行き夫婦を座につけさせ、嫁にオキンマラを抱かせて祝つた。水をたっぷりかけられた人はたなみがびっしょりになつた人もいるという。オキンマラは猪の上に

のせて祝つたこともある。(川浦)

正月十四日の晩に、新しい嫁の家にマルデで作ったキンマラサマを持って多勢で行くとその家の酒やごちそうを出してくれた。キンマラサマは男根に似ているもので一本持つて行くだけ。ミズ祝いともいう。(七区)

水祝い(一月十四日夜)は一戸一人ずつ集合し、祝樽に頭付の肴、ヌルデの木で作った男根を籠の中に馬の苔と釣るし、「女房々々」と連呼し、新婦の頭上に籠をかぶせて祝詞を述べ祝の品を出す。新婦礼を述べ両親に披露する。両親謡曲をうたう。

婿を要応すべく定めた家に到り、桶に水を満え簾幕を入れたものを道路の両側におき、前年の婿が相伴して前に通り、忽ち左右から簾幕で一齊に水をかける。婿は服を改めて同時に婿を要応する。西ヶ瀬で行なわれた。

一月十五日、一戸一人出て一銭宛集め、他村より来た新婦の家に集ま  
新築祝い 正月十四日の晩、家を新築した祝いをトモコでしてくれる。  
その家からも酒を出す。

## 十四日

小正月 大正月は一日から十三日までで、十四日から小正月になる。

(亀沢)

十四日は小正月の年始通りの日、朝道祖神小屋を燃した。年始通りは、たいてい十四日から十七日までにすませたが、遅いときは二十八日の不動様の日までよかつた。(下郷)

新築祝い 正月十四日の晩、家を新築した祝いをトモコでしてくれる。その家からも酒を出す。

酒を飲み祝う。終れば婿・男を胸上げして祝う。(水沼村中郷のみ行なつ  
郷土誌)

マルメドシ 十四日の晩お廟にしんせる。オムスピを十二個作つて、  
ラミ箸で神棚に供える。(六区)

鼠除け 正月十四日夜オシリヨウ様に「板を進せてよく拌んで置く  
と、鼠がいたずらしない」という。鼠のことを忌んでヨメガという。オシ  
リヨウ様は屋敷稻荷の脇に芋みたいな形に立ててある碑のことである。

(長井)

道陸神焼キ 正月の飾り松を集めて、松小星を組んでおき、十四日の  
夕飯後集まつて焼いた。(長井は朝食前、甚田では夕食前に焼く。甚田で  
はそこのオキ火を家に持つて来て夕飯をたく。)

道ロク神焼きの火の中に道ロク神の石像を投げこんで焼くので、古い  
物はねてしまつたので、大正十三年一月に新しく作つた。この火でマ  
ユ玉を焼いて、家内の人数だけ食べるトムシ術にならないといふ。近所  
の人とも取り替えて食べる。(亀沢)

(亀沢)



新しい道祖神

大正13年1月建立。オミキスズが  
供えてある。古い石像はドンド焼に  
くべて崩れたので子の無い親2人で  
建立。(亀沢) (撮影 関口 正巳)



道祖神

寛永2年(1625)銘で県内最  
古。(高52cm巾37cm)(熊  
久保) (撮影 関口 正巳)

ドンドン焼きは一月十四日晚に皆が出て松飾りを燃やす。厄年の子(十  
三才・十九才)がミカンを投げる。この火でマユ玉を焼いて食べる。ヌ  
リテの木の皮をむき、藤の皮を巻いて火で焦がして模様を入れたキッボ  
ウ(刀)を作り、トボグチ(玄闇)の上に上げて魔除けとする。(熊久保)

県内最古の道祖神像は「寛永2年(1625)正月吉日」と刻まれた双体道  
祖神で、高さ五二cm、幅三七cmの舟型で熊久保にある。昔はドンドン焼  
きをしたが、最近は門松が少ないのであまり燃さない。(熊久保)

どんどん焼き どんどん焼きは、正月十四日で、川浦では大体夜であ  
る。この時焼くものは、道陸神小屋、まゆ玉、もち、書き初め、女子の  
落ち毛、きつばうなどである。

まゆ玉は、煙でよく焼いたものを食べれば、体が丈夫になるといわれ  
た。

書き初めは、長い竹の棒にさして高くかけながら焼いたもので、遠  
くへ舞って行くほど手があるといった。

女の子の落ち毛は、一年中のものを集めておいて、紙につつんで燃し  
た。煙にまかせて焼きると、頭が痛くならないといふ。(川浦)

各部落でドンドンヤキの小屋をつくつて中に入れるようにして、甘酒

をつくつて飲んだこともある。川浦では夕方(夕めし前と後とがある)

燃す。「奉納道祖神」というのぱりを書いて上げたこともあ  
る。(川浦)

道陸神小屋は、場  
所は庚申塚か道陸神  
場で、どこにも竹や  
ぶがあつたから、む  
らで大きな竹を十本  
位出してきて、そ

れを支えにして組み立てた。子供が立てられなければ、大人が手伝った。

高さは一丈半位で、小屋の中はたたみ二じょう位の広さだった。その周囲に真ん中にこんろをすえて、餅を持ち寄つた子どもたちが雑煮やおしるこなどをして食べたり遊んだりした。また、太鼓をたたいたりすると、通りがかった馬が驚いて跳ねるところがよくあった。それを見ると、男の子たちはおもしろがって一層たたいた。こんな騒ぎが二晩から三晩続いた。桑本では、道陸神小屋に浮浪人が夜暖をとりに入り、あやまつて燃してしまつてからは、作らぬようになった。他のむらでも、作つてもすぐ燃してしまつようになつた。(川浦)

朝、道陸神小屋を燃す。その火にあたると風邪をひかないという。厄おとしの人(男一十五・四十二、女一十九、三十三)がみんなどを持っていき、皆にくばる。

道陸神小屋は、大正月が終つて、お飾りかえで取つた松や竹、ワラを使って作る。

十四日の晩、厄おとしをする人は、自分の身についたものをつぶんで水引きをかけ、またお金を自分の数だけつぶんで、三本辻にそっとおいでくる場合もある。拾つた人は、お金は家に持ちこまずにつかってしまふ。着物は持ちこんでもかまわない。誰さんの厄おとしで拾つたなどといつた。

樺田、三ノ倉は十四日の朝燃すが、川浦では十四日の晩に燃す。  
道祖神の火で、書き初めを燃すと、手があがるという。

女性の人は、オチ毛(髪をすいた時に抜けた毛)を紙の袋に入れておいて、燃す。

マルデンボウの木を四つ切りにして、刀の大小を作り、それにフジツル巻き、焼く。フジツル巻きと白黒の紋様がつく。その刀は神棚にあげておく。その刀によつて泥棒が動けなくなるという。その刀はヤツトウともいい、トボクチのカモイにもおいた。(六区)  
ドウロクジン小屋を各班で一つ位ずつ作る。道祖神の近くで広い場所

があればするがいい田の中である。

竹を芯にして松を七本立てとをかぶせ、竹をまわりにおきワラをまわし竹で押えて繩で結ぶ。七草頃から作り始めドウロクジン小屋の中でお松が甘酒・汁粉・田栗を作つて食べて遊んだ。

十四日の朝大正月のお松をひいてきて燃した。

書初めを焼いてその煙が上がるとき字の手があがる。

お松のもえさしは屋根にあげると火伏せになる。

マイダマを焼いて食べる虫歯にならない。(岩水)

学校つ子が正月飾りの松を持って行くので代りにオサイセンをやる。

小屋を作り、その中のいろいろで汁粉など作つて食べる(開穴)。十四日の朝早く「ドーロクジンを燃しますよ、早く起きておくれ」と学校つ子が村中ふれて歩く。おとなも餅だのマイダマを持って行つて焼いて食べる。

手習いした紙を燃して、うんと高く上ると「手が上る」と言つて喜ぶ。(七ツ石)

ドンドンヤキ(一月十四日)にはむらの子どもたちが、おかげのお松などをあつめてある。子どもがまわつてくると、各家では子どもに、「小づかいをくれた」子どもたちは中学三年生が親方で、下級生のものは、オヤカタのいうことをよく聞いて聽いた。道祖神小屋のときは、よく先輩のいうことをきくものだと、むかしからいわれてきた。

お松とかおかざりをあつめてくると、むらの中のあいている田をかりて、小屋をつくつた。以前は、水沼全体で、ドンドンヤキの小屋を八ヵ所つくつた。中郷で一ヵ所、下水沼で一ヵ所、中尾で一ヵ所、大谷戸で一ヵ所、相間で四ヵ所(のちに三ヵ所)。小屋は大小二つつくつた。小さいほうの小屋のことを、「タマカシ小屋」といって、こちらを十四日の早朝先にもやして、太鼓をならして合囃をしてむらの人をよんだ。

夜、小屋の中で、子どもたちにコンニャクのひつばたきとか、しるこなどをつくつて食べた。最近は、小屋ではあぶないというので、むらの



道祖神

元禄13年(700)7月20日銘  
(高さ60cm 幅33.4cm) (陳田)  
(撮影 関口正巳)

中で宿をきめて、そのうちで「ちそつ」をつくってもらっている。小屋に火をつけるのは十四日の夜明け、はじめに小さいほうの小屋に火をつけた。むらの人が集つてくると、大きい小屋にも火をつけた。むらの人たちは、まい玉を棒の先につけてきて、ドンドンヤキの火でやいてもちかえつた。まい玉はオミゴクだといって食べる。これを食べると、風邪をひかないとか、病気をしないといった。また、ドンドンヤキの火にあたつても、体が丈夫になるといった。子どもたちは、半紙を棒の先につけてもつててきた(旗)。これを、ドンヤキの火でもやして、半紙が高くもえあがるほどよい、字が上手になるといた。

ヌルデでつくったカタナ(ワキザシともい)を一本もつていて、ドンドンヤキの火でやいた。ヌルデの木の皮をむいて、フジのつるをまいてやく。フジのつるのまいてあつたところはやけすに白くなっているので、やけたところが黒で、白と黒のしま模様ができる。それを神棚にあげておいた。このわきざしを、節分の豆まきのときに、ワキザシとて、二本腰にさして、家のまわりに、豆をまいた。そのあとまた、ワキザシは神棚にあげておいた。そのワキザシをあとで、短くきつて、小さ

い鍊の柄にした。マムシよけになるといった。(水沼)

正月十四日はドンドン焼き。七草の飾りかえの時ははずしておいたお松を、子供が十三日の夕方集め、ドーロクジン小舎を作る。この小舎の中で、十三日の晩はおこもりする。もとは若者組で主催した。子供達は十三日の夕方、お松を集めて家々をまわる時、福の神のお札と箸とマッチを配り、ドンドン焼きの寄付をつのつた。「福の神舞いこめ」を唱えながら各家を訪問するが、寄付をしぶる家には「厄病神舞いこめ」などと悪口を言った。子供達は集めた金で菓子を買い、「ちそつを作つて、ドーロクジン小舎で食べた翌十四日の朝、この小舎に火を放つて焼やした。(二回)

相吉の飯島家の墓地に二神併列型の道祖神の石像があり、その前のお堂の北に文字道祖神もある。

道祖神まつりは、正月一日から子供たちがはじめた。今は流されたが、以前は道陸神場というのがあり、そこへ竹など伐つてきて七草まで小屋をつくつた。小屋ができるがると、その晩はオシルコを小屋の中で食べた。七草のときには子供の松葉集めがはじまる。このときお金もいたいってきた。

小屋づくりは子供だけでつくり、道祖神子は今年学校へ入学する子どもが上で十五才までで組織し、年令による特別な名称はないが、年長者が指揮をして毎日仕事をした。

小屋を焼くのは十四日の朝で、太鼓を叩くのでドンドン焼きといった。早い頃は二時頃太鼓で起してある(早く起きねえと道祖神が燃えるよ)といつてある。いよいよ燃すとき、子供達はヤンヤ、ヤンヤと大声をあげた。この火でマユ玉を焼いたりした。この火にあたると風邪をひかないといい。このときから女の子も火のそばにきてもよかつた。

道祖神の神様は夫婦神様で、男は猿田彦命、女は天御主命といい、耳だれのお願をかけた。治れば竹杓子をあげた。道祖神祭りのときは、竹など伐つてもがめられなかつた。太い竹な



坊峯のキッポウ（ヌルデンボウで作った）（七区）  
(撮影 阿部 孝)

どは子供が早くから目をつけておいで、どこの家でのももらつて来られた。（相吉）

キッポウ

道祖神焼きにはヌルデの木で刀を作る。これをキッポウとい

い、長さ九〇cm、刃渡り六一・五cm。ドンドン焼きの火でこがして、軒下にあげておくと魔除けになる。（陳田）

（岩水）

厄年のものは一月十四日に、大体、隣組単位ぐらいで、三本辻（道祖神やきをした近く）で、ヤクオトシをした。ミカンとか、お金をなげた厄年は男十五、二十五、四十二才、女十三、十九、三十三才である。

（水沼）

厄年のものは一月十四日に、大体、隣組単位ぐらいで、三本辻（道祖神やきをした近く）で、ヤクオトシをした。ミカンとか、お金をなげた厄年は男十五、二十五、四十二才、女十三、十九、三十三才である。

（水沼）

## 十 五 日

小豆ガユ 小正月の小豆ガユはさまで食べる。熱くても吹いて食べると、田植に風が吹くといって嫌がる。（亀沢）

小豆ガユは、ハラミパンで食べる。吹いて食べてはいけない。（七ツ石）

小豆ガユは、ハラミパンで食べる。吹いて食べてはいけない。大風が吹くのでいけない。

い。

ケーカキ棒でカユをかきまわす。棒はヌルデを四つに割り、マユ玉をはさむ。ケーカキ棒は神棚にあげておき、苗間の入口にさす。

はさむ。

カユはハラミパンで食べる。（六区）

カユカキ棒 ヌルデの木の元を十の字に割って、わらでいわえて（結んで）置き、十五日の朝のゆをかき回した。（亀沢）

十五日の朝、小豆ガユをにする。かゆカキ棒（まゆ玉をはさむ）でかゆをかきまわす。十五日に朝寝をして、おかゆをふいて食べると、田植のときに風が吹くといった。

この日、なりこ玉（果物のなる木）に、なたできずをつけるまねをして、「なるか、ならぬか、なればおかゆをしんぜ」といった。カキの木などにおかゆをあげた。

また、まゆ玉をゆでた水を、うちの四隅にまいた。へびよけとかいつてある。今はしない。（亀沢）

厄落トシ 道ロク神焼きの時、厄年の人（男十五、二十五、四十一才、女十三、十九、三十三才）は、年の数だけ大豆を持っていて進ぜた。今はミカンに替って、ミカン箱に一箱とか半分とか持つて行ってまいたり、錢をまいたりする。（亀沢）

厄年の人は正月十四日夜のどんどん焼きの場で松を焼くときみかんやお金を包んで投げたり、落花生を配つたりする。男衆は酒の一升もふる

まう。（川浦）

厄落トシは十四日の晩にする。厄年にあたる人が三本辻でミカン、お金を投げる。帰りは違う道を通つて来る。すぐに帰らしくしばらく村うちをまわつてくる。家族はそれを拾つてはいけない。

をまわつてくる。

家庭はそれを拾つてはいけない。

なお、かゆかき棒は、神棚にあげておいて、苗代をするときに、苗間の水口に一本たてた。（水沼）

十五日は小正月休み、小豆粥をつくり家のまわりにまいた。成木噴めなどはしなかつた。（下郷）

蛇よけには崩をやすりでといで出た鉄の粉を家の回りにまくと、蛇が家に入らないという。時期はかまわないと。（亀沢）

## 十六日

ヤブ入り 年始日になつてゐる。因人だつて一日は許される日だといふ。奉公人も家に帰ることができた。（亀沢）

マユカキ 小正月十七、八日にボクのマユ玉をもいで、樽などに入れ置く。あまり乾燥しないようにしておき、おやつに食べる。

マユ玉は寒の水に浸しておくとかびがきない。（亀沢）  
マユ玉は家の者が食べるが、人にも出して食べてもららう。（亀沢）

十六日はマイカキ。

水沼へ馬を引いて行つて馬頭観音を拝んできた。（カジヤ）

十六日におたなさがしとかまゆかきとかいつて、おそなえしたまゆ玉とかおそなえを全部さげた。なお、正月廟は、二十日正月までさげておく。（水沼）

まゆ玉がきといつて一月十六日は、小正月に飾つたまゆ玉を枝からとる。朝、ひとりいくつかずつの割でうでる。うであがつたら、茶碗によそつて、醤油や砂糖など好みのものをつけ食べる。残りのものは、子どもが大きくなつて不要になつたといじめで、内側をきれいな紙で張つたものなどに入れてしまつておく。子どもが外から帰つたり、きつい寒さの夜などに、母親が出してきて、囲炉裏のぬくべの中に入れ、灰をかぶせて焼いてくれる。焼いたら灰を払つて、食べるのだが、何ともいよいのないこおぼしさだつた。何もつけなくても、じゅうぶんうまかった。

あとで作ったまゆ玉では、いくらころがしてもこの味はでなかつた。いくにちかでも一度寒の中であたらないとだめなのである。何といつても、灰をほんほんとたくだけなので、食いなれぬものがちゅうちょすると、灰は消毒してある、そんなふうでは神様のバチがあたるなどと年よりはいった。（川浦）

十六日はまゆかきといつて十三日につくつたまゆ玉をもぎとる日（下郷）

## 十七日

観音様 水沼の厄除観音の縁日で、十六日の晩から十七日にかけて、二年始にきた。十六日の晩がにぎやかでだるま市がたつた。（水沼）

一月十七日は北向觀音様の縁日、ここに馬の神様として知られており、近在の人が、馬をつれておまいりにきた。

埼玉の上岡の觀音様へは、人間だけが行つて、馬はおまつりには行かなかつた。ここでは、絵馬とかササを買ってきていた。馬が病氣をしたときには、このササを馬にくれた。（水沼）

## 十八日

馬頭観音 信州戸倉觀音からご神体を貢つて来て下の觀音様へ祭り、そこへ馬を引いておサゴ（米）を持って参詣した。亀沢の大井朝五郎家に馬の世話をする人（伯楽様）がいてお祭りをして、野石の碑にきりつけてある。（亀沢）

マユネリ 十八日はマユネリの日、まゆ玉をゆでて砂糖を入れて食べる。（下郷）

正月十八日は、マユネリといつて、小正月に神棚に供えたおまゆ玉をさげる日である。（川浦）  
柿の木などになたで傷をつけるとなるという。十八日にマユカキしてマユ玉をゆでた湯を柿の木にかけて「ナルカ、ナラネエカ、ナリマス、

ナリマス」というと、必ずよくなるようになつたという。(亀沢)



エビス・大黒  
1升ますの中に入れてある  
(陣田) (撮影 関口 正己)

## 二十日正月

しまい正月で年始が残つてればこの日に行く。「二十日正月が過ぎたから二年始はきなかんべ」という(七ツ石)

三月三日まで年始はいいそうだ。(中石津)

二十日正月えびす講・しめえ正月ともいう。この日、おたな(正月棚)をはずす。(水沼)

エビス講 胡エビス様が働きに行くのを祝つて、机を出してエビス様をのせ、膳檻を供え、酒・魚(サンマの頭付)を進ぜる。エビス様は木か壁で作つてあるのを、行商が売りに来る。掛軸はない。正月には稼ぎに行くので金は進ぜない。(亀沢)

サイ川では二十日観音を祭る。(亀沢)

朝エビスといって、エビス様に、尾頭付、朝御飯、御神酒を供える。

エビス様が働きにいくのだから資金を持たしてやるといって金を供える。小銭もお釣銭として供える。(六区)

立ちエビスだから朝早くする(カジヤ)

えびす講は、商人の場合は、朝やり、農家の場合は夜やるものだとい

う。うち中のあり金をえびす様にあげた。この日は、集金人がきたり、行き先の人気がきても、現金はだすものではないといった。(水沼)

一月二十日は送りえびす、十二月二十日は迎ええびすといい、商人の家では、一月二十日は朝えびすといい、朝お祝いをした。(相吉)

エビス棚 座敷の神棚の下に仏壇がありその斜め下の戸棚の内にエビス大黒を祭る家が多い。この土地の建具屋が作り付けの戸棚を作る(亀沢)

エビス大黒は神棚の下の戸棚の最も下の方に入れて置く。明治27・28年ごろ建てた家で、作り付けのよう、上から神棚・仏だん・エビス棚の順になつている。(陣田)

二十日コウセン 二十日正月にコウセンを作つて家のまわりにまくと蛇よけになる。

松飾りの立つていた穴は埋めずにおいて、そこにコウセンをまく。(岩水)



(下段) エビス・大黒の棚  
(上段) 神 棚  
(中段) 仏 壇 (亀沢)  
(撮影 関口 正己)



エビス・大黒棚(下段) 神棚の下の戸棚に祭られた。仮壇よりもやや低く位置する。  
(撮影 関口 正己)

蛇よけとして、二十日正月にコウゼンを家のまわりにまいた。「蛇もムカデも一けどけ、オラが（不明）ナタガマニ丁、カマニ丁」などと言つた。（岩永）

二十日に脇差をさして家の四周に香煎をまいた。その時

「へーびもむかでも一けどけ  
おはかじやのめ一ぱり」

と唱えた。（第一区）

二十日正月には雑煮をお供えして正月棚をこわし、脇差（十三日につくった棒）をさしてキナコ（大豆をいって挽いたもの）を家のめぐりにまく。このとき説えごととして「蛇も百足どけどけ、おらあ火事のまいはこり」といつてまいた。



天満宮の拝殿（亀沢）  
(撮影 関口 正己)



天神宮（亀沢）  
(撮影 関口 正己)

この日井戸つるべの繩をないなどもした。（下郷）

## 二十五日

天神講 子供が宿に寄つて、睡いをしてもらつて食べ、向こう山の天神様に書初めを納めて祝う。  
もとは四月二十五日に祭つたが、田の苗マが忙しいので正月に変更した。（亀沢）

子供の天神講の日、近年は学校の休みの都合で十二月のうちに天神講をしてしまうので正月はしなくなつた。（下郷）

## 二十八日

続い正月 年始をすべて行なつた。「二十八日ノ尻マクリ」といつた。（亀沢）

部落によつては二十八日に初不動を祭る。（亀沢）

しめえ正月は不動様の日でもある。（水沼）

不動様祭り 水沼では中尾だけでやる。不動様は火伏

せの神様（水沼）

川浦の不動様の縁日。不動様は火伏せの神様である。

（六区）

旧暦の一月二十八日は相吉の不動様の祭りで、ノボリを立て判紋付ハシモンツキリトッコに裏子をはつたりして楽しんだ。（相吉）

二十八日は不動様の日、桜名町室田の滝不動へお参りにいく人が多かつた。（下郷）  
初肥 その年にはじめてコエ（堆肥）を出す日はきまつていなかが、その日には御馳走をする。（六区）

## 四 日(節分)

豆まき 年取りをする。夕飯前に豆をほうろくで煮つて、神棚に上げてから豆マキをして夕飯にする。ヤカガシは作らない。

豆マキはお棚の前からまき始める。家の内へ「福は内」、家の外へ「鬼は外」とまく。残った鬼ノ豆はお棚に上げて置いたり、紙に包んでいろりのカギ竹に吊るしておく。雷様が鳴った時に鬼ノ豆を食べると遠くへ行くという。(亀沢)

節分には豆の木で箸を作つて、ほうろくの大豆をかきませながら煎る。一度煎つたものを、生まではいかぬと必らず二度煎る。煎れた豆は、しんじん棚に進せてから、机の中に入れて主人がまいた。まき方は、「福はうち、鬼はそと」といながら、先ず神棚にまき、家の中を一巡してから、外をまく。すっかりまき終わると、またものをひろつて年の数ほど食べると、かせをひかぬからといって食べたり、福茶などといつて飲んだりする。また、豆を十一粒開炉裏にくべて、その燃えようによつて、何月に風が吹くとか、これは黒くなつたから雨が降るとかいった。ほんとうに昔の人はうそはつかぬものだと子ども心に感心した。雷よけに、夏まで袋に入れてしまつようなどもした。(川浦)

豆まきの豆をいる時に、豆の木を三角形に折つたのでかきまわす。「福は内、鬼は外」がすんだあと、豆はカギ竹につるしておき、初雷のとき

に自分の年だけ食べるといよい。(三又の豆の木に、正月様にしんせたイワシの頭をさし、豆をいる開炉裏の火で焼く。それに「苗も大根も虫もたかるな」と唱える。

節分に早く寝ると白髪になるといよい。(六区)

節分のまきまきは各戸でやる。豆はホウロクで炒つた。豆を炒りなが

ら、イワレの頭を豆の木の二又がさしたのをやいた。これをヤキガシラといい、主人がやいたこのときの唱えことは、「四十二色の耕作の虫のかしらをやき出す」といふはをかけながらやいた。ヤキガシラは、家の入口のところにさしておく。

豆まきは主人がする。神棚の前からはじめて、各部屋、井戸、お正月にお松をかざつたところを順にまいてある。このときの唱えことは、「福は内、福は内、鬼は外」。

まいた豆は、家族のものがひろつて食べたが、これは、自分の年の数だけ食べるものといった。

のこりの豆をとつておいて、初雷のときに食べれば、かみなりよけになるという。これをオニの豆といった。(水沼)

ホーロークで豆を煎り、一升マスに入れて高棚に進せる。この時、立ち白の長さに切つたカヤを三角に折つたもので豆をかんましながら煎る。堅い家じや三回くり返している。

部屋の窓を全部開け、神棚の前、テー、お膳手、台所、屋敷になり、便所などに豆をまく。「鬼は外鬼は外、福は内福は内」と言う。年の数だけ豆を拾つて食べる。

残つた豆を紙に包み、カギ竹にしばりつけおき、春一番の雷が鳴つた時に食べる。(関沢)

マイタマをさしたサンマタの木にイワシの頭と尾をさしつばをかけながら「四十いくつの虫をやく」と言う。

「鬼の豆を食ねえとハラワタがかびる」と言つたもんだ。日が引つ込んだらすぐやる。よそんちより早くやりたがつたもんだ。(穂屋)

米のめしに豆腐汁を作る。ショーピキでも焼く。(七ツ石)

年男が豆まきをする。先ず神棚に「福はうち」と言って豆をまき。それから部屋の戸を開けて各々「福はうち」と言いながら家じゆうの各部屋に豆をまく。最後に戸を開けて外に向かつて「鬼はそと」と言いなが



豆の上へ  
(陳田 正己)  
(撮影 関口)

ら豆を投げて、

すぐ戸をしめ

る。この豆をと

つておいて、初

雷が鳴ると中

の者が食べて、

雷除けのまじな

いとする。(二)

区)

鬼の豆

節分の鬼の豆の残りを袋に入れて神棚に上げて置く。ナルカ

ミ様(雷)が最初に鳴った時に食べるといふ。落ちないと。(陣田)

豆を紙に包んでカギ竹に吊るしておいて初雷に食べる。(岩水)

天気占い 茹分焼きといって、豆まきの晩にイロリに一年中の豆を十

二粒並べて置き、同じ焼し木であぶついて、焦げて燃えつく順でいく

月はよいとか、わるいとかいう。早く燃えつくとわるい。(亀沢)

豆を十二個イロリに入れて焼け具合でその月の天気予報とする。豆が

黒くなれば雨、白いと天気、中間だと雨と晴が半々となる。(岩水)

煎った豆十二粒をいろいろのぬくべえの中にさくを引いておき、焦げ具

合によって天気を占つた。黒く焦げたから日照りだ、とか言つた。(桑地)

出替り 二月一日は出替りの日だが、出替りという言葉は伝えられて

ない。しかし「盆がきなくも正月がきなくも二月一日がくればよい」と

いう歌があり、暇がでた。奉公人は二月一日だけは主人公と同じく取扱

われ、この日のあつかいが悪いと奉公をやめさせられたと感じた。

下男下女は昔は義理がたく死ぬまで交際していた。(相吉)

二月一日は出替りで、奉公人の契約を替える。(鳥羽村郷土誌)

八 日

オコト ことはじめ、ことじまいは特に伝えていない。(相吉)

月の八日

月の八日は悪い日という。

八のつく日(八、十八、二十八日)には旅に出るのをさけた。医者に

初ケイヤク 宿に寄つて村の諸役の取り決めをして、酒を一杯飲んで

七 日

お祝いした。このころは積雪が多くて外の仕事ができないので、ケイヤ

クをした。(亀沢)

餅ケイヤクで二月七、八両日は一戸一人出で遊び(泊らない)。米一升・

小豆一升を一口として十三個の餅を作り、夕飯に食べて一晩中遊んだが、

酒を飲んで酔っぱらってあとはけんかになつた。多く暴れる人がいると

皆でとつつかまつてネコ巻きにして動けなくした。

ケイヤクはムラの一年中の規約を決めることで、そのあと想談会になつた。(陣田)

一月十一日は、村の規約をきめる契約の日、満十五才になるとこの契

約に加入させられた。(退会は四十二才まで、子供が十五才に達しないとぬけられなかつた)そのときは父親が酒を一升世話人のところへもつ

ていき、「今年から伴を若衆の仲間に入れてもらいたい」と頼んだ。入つ

て二三年は下座にてカンタロウ(酒のかん)をしなければならない。

このときの会議はギジ会(議事会)といつて、一年中のあつたことを

世話人が書きとめておき、若衆仲間のもので不埒な事をした者があると、

大勢の前に座らせておき、その行動を公にしてお説教をして、三年間は

カンタロウをしなければならないことになつてゐる。世話人は三人で、

投票できめたこともある。ハバのきいた人が選ばれた。

二月十二日も契約というが、この日は餅契約といい、小豆のあん粉を

沢山つくり、女衆もまじりアンコを顔にぬりつけこした。この日は他

村の者でも部落にきた人にはアンコをぬつた。このときの宿は祝いごと

のあつた家があつてられ餅をついた。餅は五合を一枚にし、それを十二か

ら十四にわけ、十二半か十二四半の割合で分けてやつた。(相吉)

行くのもさけたという。

この日は、日帰りはいいが、泊って来るものではないといった。(水沼)

針供養 女衆が針を使わない日、別に何もしない。(亀沢)

針供養はお裁縫の女人達がやる。欠けた針を豆腐にさし、一日中針を使わない。お針の先生のところに女人達が集まり、お茶をのむ程度であるが、一般の家でも針だけは使わない。(六区)

### 初 午 の 日

初午 長井の百庚申のすぐ上にある稻荷様へお参りする。狐の姿を壁(粘土)で作つてあるのを取り替えてくる。大々的に賑わつた。三月二十八日にも祭る。(亀沢)

初午には馬肥いを多少でも出すものだという。(亀沢)

初午の日には、赤飯をたき、おまゆ玉をあげる。お稻荷様のある赤竹では、現在でも盛んで、宿を決めておまつりをする。(川浦)

初午はひのつかない午の日にする。ひのえ牛をさけ、きのえ牛にする。米の粉をひいてマイダマを作る。七つ組の一一番大きいメンバに入れて高棚に進ぜる。塩あんのうでまんじゅうやみそあんのまんじゅうを作った。(七ツ石)

むかしは仕事を休んで遊んだ。大正の初め頃まで。(中石津)

かたいうちでは、この日まい玉をつくつて神様にしんせた。一番先に、稻荷様(星戸神)にしんせた。まい玉は、めんばに入れてあげた。これは朝の行事で、かいこがあたるようになっていることである。(水沼)

初午は各自の家の屋敷稻荷を祭るくらいである。屋敷稻荷は家によつて京都から正一位の稻荷を分けてもらつてきた家もあり、正一位の正式の稻荷でないと石宮には祝らなかつた。正一位の稻荷をもつ家は部落で二軒しかなく、その稻荷様は折衷するか他よりも効果があるという。飯島家のものは正一位のため遠くからお参りにきたこともある。(相吉)

涅槃会 二月十五日に、お寺で小さなオマエ玉をくれた。それを食べ

るとマムシに食われないという。(六区)

### 三 月

#### 三 日

ヒナ祭り 一週間前から座敷へヒナ段を出して、座りヒナを飾る。上段に内裏様を置き、供え物を進せる。菱餅・煮物・黄粉に砂糖を混ぜた物なので、ウメピラという塗り物の皿に黄粉を入れて進せる。菱餅はヨモギ餅や色付け餅にして、青・赤・白色など十枚ぐらいを重ねて、お供え餅一重ねの上にのせて供える。

お供え餅が大きいとジンジンして(釣り合つて)大きい菱餅をのせて供える。(亀沢)

おひな様は二月二十八日に飾る。三月一日に餅をつく。ヒシ餅は七重ねにする。一枚ずつ小さく重ねて梅の蕾でさす。一日だけ遊び。チンコロ(ネコ柳)でもとつてきて飾る。(七ツ石)

ひと重ねのヒシ餅に水引をかけ、タラの干もの二枚持つて嫁の里へ夫婦で泊りに行く。一晩か二晩泊つてくる。(七ツ石)

しまつ時はお茶・すし・お煮しめなど上げてからしまつ。(萩屋)

三月三日は櫻節供で、初めての子には嫁の実家から櫻を持つていく。

お返しには嫁が実家に帰るとき、菱餅三枚と餅の上に金をつぶんで持つていく。

嫁は、室田の櫻市で買う。石津の十一屋でも売つた。(六区)

もちをついてひな様にあげる。親が健康のうちは、嫁に「のの字のもち」といって、ひしもちを三枚もつて里へお客様に行つた。

子どもの初節供には、嫁の里から内裏様をおくつた。親戚とか知人からも、おひなさまをおくられた。

古くなつたおひな様は、お天狗様のところへもつていてあげた。(水

(沼)

三月の節供は二月二十八日から舞様を飾りはじめた。八日まで毎朝お供えをし、八日の日にしまった。八日の日を八日の節供ともいう。菱餅は三枚づつ組んで十二重ねか十五重ねがよいといわれている。嫁の家へは一人で捕つて菱餅を持っていった。(相吉)

ヒナ市 中之条や原市のヒナ市へヒナ人形を買ひに行つたが、最近は商店で売っている。(亀沢)

初節供 子が生まれて初節供には、女の子なら三月にヒナ人形、男の子なら五月に鯉ノボリを親元から贈る。嫁の初節供には別に贈らない。

(陳田)

実家から嫁のところへヒナ様を贈る。女の子どもがきてからお祝いに贈る場合が多い。内裏様一揃いなどを買つてやるので、子どもが多いと親は大変である。(亀沢)

嫁は菱餅を持って実家へお客に来る。一、二年は婿を連れて来るが、あとは子どもを連れてくる。泊つて行く。お返しには時期のものを返す。

(亀沢)

ヒナ送り 古いヒナ人形は屋敷稻荷へ納めた。(亀沢)  
古くなつた雛は産土様や稻荷様のところにおさめる。達磨などもそつする。(六区)

## 十五日

屋敷イナリ 三月十五日に祭り、コワ飯を進せて拝んだ。(陳田)

風除け 月日は記憶していないが、庭に南向きに竿の先に鍵を立てて風除けとした。風神様を切る。(岩冰)

## 彼 岸

入り口 変わり物を作つて仏様に供える。

中日 お堂へ二戸一人ずつ男衆が集まつてお念物を十三べん唱える。

昔は数珠を回したが今は回さない。宿番の者が供え物を持つて行く。小豆を入れないオミゴク(強飯)をふかして、オテノクボで分けて食べる。

(亀沢)

春秋とも、彼岸のあけ口の日に墓参りに行く。  
あら波岸の場合には、そのうちに関係のある人は、お線香あげにいつた。お寺へは、お金とか品物をもつて行った。塔婆をつくつてもらつて、あけ口の日に墓参りに行つてたててきた。墓参りには、だんごをもつて行つて全部の石塔のところにあける。だんこは数多くもつていくものだといった。(水沼)

波岸にはお寺(全透院)におまいりする。中日はおはぎをつくるのが普通で、新波岸には別にちよつと駄走をつくる。(川浦)

先祖代々と年忌にあたつた人の塔婆をたてる。中日にはボタモチを作れる。

中日ボタモチおんでもねえ(あたり前でありがたくない意)などといふ。(六区)

入り口の日はあすきめしを煮る。お中日はボタモチを作る。(七ツ石)

「盆々と待つても盆はただ三日、くされ波岸が七日ある」と言う。(荒屋)

寺で塔婆を貰いセガキをして貰い、墓へ持つて行つて立てる。(中石津)

アキロ 墓地へお参りしてタンゴを供える。タンゴは米の粉をこねて丸め、上をちょっとひつこめた形にする。親戚に墓参りに行くのはアキロにまぜる。(亀沢)

念仏 春秋の波岸に、村のお堂に集まつてお念仏をした。この日に、お念仏のところへ行つて子どもたち(ち)そつをもらつたりして楽しめた。(川浦)

念仏供養塔には「文化十二年十二月吉日、上野国開沢謹申」とある。  
お中日の前日、日の沈む頃堂内を掃除して若い衆や子どもが集まつて一晩中天とう念仏をする。甘酒と五目飯を男が作つて夜食としお灯明と

線香の煙を絶やさず、太鼓と鐘を休まず打ち鳴らす。朝になると村の人

も加わる。「天とう念仏ナンマイダ！」となえる。村の世話人が供える

マイダマ（念仏玉）を薄く切ってオミゴクとした。「中日祈禱大念仏」と書いたお札と共に配つておがんだ。（葬地・関穴）

春と秋の彼岸の中日に、不動様のお堂に、むら中（中尾の人だけ）の

人が、一戸一人ずつ（男衆）あつまつて、百万遍の数珠まわしをした。

数珠をまわしながら「ナンマイダブツ」と唱えごとをした。数珠には大きい珠がついているが、大きい珠がまわってきたところで、数珠をいた

だいて、おじきをした。

なお、むらの人が、にしめなどの「ちらそ」をもつてきててくれた。それ

をもらつて食べるのがたのしみで、子どもたちもお堂へあつまってきた。（水沼）

社日・地神様の祭り 地神講があつて宿番に寄つて接待をする。（龜沢）

社日は地神様の日で、田には入つてはいけない。土を動かしてはいけない。（岩水）

社日は畠の神様の祭りの日で、仕事を休む。地神講をやつた。（六区）

掘りまわすものではないという。お祝いなど特別にしなかつた。（水沼）

## 四 月

### 三 日

春祭 恵名神社の春祭に氏子總代が各コウチから一人ずつ出る。末社

は天神・十一・觀音などが天神様の所に合祠してあり、一緒の日に祭る。

吾妻町萩生から来る神道さんによると、一戸一人ずつ出て宿番が世話ををする。春秋二回（四月三日・十一月二十三日）祭る。（龜沢）

### 八 日

お駅巡様 東善寺でお祭りする。（龜沢）

お駅巡様の誕生日。お寺（東善寺）で甘茶をくれる。今は五月にする。

### （六区）

「ハナツクソモチ」といい、モチグサ餅をつく。（七ツ石）

おしゃかさまの日（四月八日）、觀音様にお駅巡様がまつてある。現

在は、この日、年輩の人がおまいりに行くだけ。むかしは、この日甘茶をのみに、お寺へ行つた。レンゲの花で屋根をこしらえてかざり、甘茶

をお駅巡様にかけて、甘茶を飲んできた。（水沼中尾）

虫除け 四月八日はお駅巡様の誕生日で、「千早ふる卯月八日は吉日よ、神長虫の「せいぱりかな」と書いた札を戸口などにさかきにして帖つた。この日藤の花を軒にさしたりした。（相吉）

（水沼）

### 十 一 日

淡島様 前の日に境内の掃除をし、のぼりをたてた。（水沼）

### 十 二 日

十二様 お十二様の祭りである。村の共有地であるゴリヨウの山に祀つてある。祭世話（当番の者）がお宮の掃除をする。村の者は酒肴とお赤飯を持参して飲食をする。昔は盛大な祭りで、踊りをおどつたり、餅をついて、投げて子供に拾わせたりした。（二区）

### 十 五 日

戸塚名神社のお祭、春は別にやらない。（カジヤ、七ツ石、関沢）

### 二 十 五 日

宝慶和尚 松井田の寺から来た人ともいい、お堂について、野石で宝慶

塔を建ていっさいの書物も埋けた。拌むと雷が遠くへ行くという。(亀沢)

## 二十七日

諏訪祭 四月二十七日は諏訪祭りの日で、甘酒を各戸でわかつてふるまつた。神様へは竹を一本組んでしばり、それに甘酒を入れてお供えした。神社へは餅もお供えした。(相吉)

## 旧四月十七日

トウショウウ様にしんぜるといつて、藤の花を貰った。それを戸口や神棚にあげた。(六区)  
野火ツケ 彼岸からお節供までの間に杏岳の草刈り場に火をつける。共有の草刈り場の、かっぽした所に回りから火をつけ、皆で家へ帰つてくる。家へ着く頃にはきれいに焼けて、春にいい草が生える。(関沢)

## 五月 日

### 二日

八十八夜 霜が来ないよう祈るが、名だけでもしない。この辺では五月二十八日ころまで安心つかない。(亀沢)  
五月一日頃、八十八夜の声を聞くと豆、アズキをまく。(カジヤ、築地)  
八十八夜(五月一日から)にはべつに行事はない。このころ小豆をまけばよいといった。小豆のまきはじめてあった。(水沢)

### 五日

端午の節供 昔はヨモギ・ショウブを屋根下に飾つたり、フジの花を軒に飾つたりした。赤飯や餅を作つて供える。嫁が相餅にタラの干物をみやげ物にしてお

客に来る。

昔は鐘鬼大神の絵などを描いたノボリ旗を立てたが、戦時に衣類不足で使つてしまい、最近は鯉ノボリになつた。

二、三日たつてから旗ジマイをする。(亀沢)

節供には吹流し、武者のぼりを立て、鯉のぼりは余りなかつた。のぼりにはくれる家と貢う家の紋を入れた。一軒でも十本も二十本も立てた。

(岩水) ショウブとモチグサ(ヨモギ)を屋根にさして魔除けとする。またショウブ湯に入ると疫病にあたらないという。

長男の初節供には、ノボリや紙の鯉を贈つた。今では人形になつてゐる。(六区)

端午の節供は男の子の節供、このとき、ヨモギとショウブで屋根ふきをした。家の入口に二ヵ所、土蔵の入口などにもヨモギ、ショウブをさした。神棚にもしんせた。夜、ショウブ湯をたてて入つた。由来はわからぬが、これは虫よけといつた。

こちそうは赤飯。

初節供の場合には、嫁の里から吹き流しをおくつてくれた。この場合、嫁の里と、とつき先双方の家紋をつけた。とつき先の家紋のほうを上につけた。親戚からものばかりとか、ひな人形をおくつてくれる。

五月の節供にも、嫁は里帰りをした。このときは、赤飯とたらのひらきをもつて行った。

五月八日は、八日節供といつて、その日には、のぼりなどはしまつものとされた。旗ざおは、近所のものが助けあつてたてたり、たおしたりした。(水沢)

ショウブ 節供にショウブ湯に入った。

娘が蛇にみこまれて蛇に入りこまれてしまつたので、ショウブ湯に入つたら蛇が出た。それからショウブ湯に入る様になつた。(岩水)

ヨモギとショウウブを高棚に上げ、屋根の端々にも三ヵ所上げ、ショウブ酒を飲む。(樂地)

カンカンショウブとヨモギを家の軒にさす。神功皇后が朝鮮征伐に行つた時、ショウブで子供をとりあけたからだという。ショウブとヨモギを束ねて風呂に入れ、ショウブ湯をたてて入る。神功皇后が入ったからだという。この日、初子には鯉のはり、内飾りなどを親戚のもの贈る。お返しにはカシワ餅を作つて配る。又、この日には村の老若男女は株名神社にお詣りし、株名湖畔にこちそうを持ち寄つて遊んだ。湖畔では木部姫神社のお祭りがある。この神社の祭神の木部姫は、山名の殿さまの姫君で、株名山に登り、湖に身を投げて蛇になり、腰元は蟹になつたという。(二区)

贈答 男の子ができる時は、鯉ノボリやノボリ旗を贈る。ノボリ旗

には貴い方の紋を上に、くれの方を下に染め出してやつた。(鬼沢)  
節供のお返しは、三月には梅餅、五月には柏餅と決まつたようなものである。(六区)

昔から「やつたり、とつたり節供餅」といわれ、嫁を実家に返すとき餅を持たせた。実家でも餅をお返しに持たせた。五月五日は、たらの干物を持って行つた。八朔の節句には葉しようが持つていつた。(三区)

五月節供にはタラの干物を一枚位と赤飯をもつて嫁の家へいった。

この日孫のできた年などは二十八日からノボリを立てて食事を供えた。ショウブとよもぎを屋根裏にさした。そのいわれば、神功皇后が三韓征伐のとき屋根をふいていたからという。ショウブ湯も立てた。(相吉)

山祭り 株名山のスマウガ岳に椿名神社の奥の院がある。ここに天狗様を祭り、権田から十キロはある。また、権田のテスの上ノ窓の清水が出る所にも奥の院があり、元椿名神社があつたといふ。

権田のマス池のそばの観音様に應谷次郎を祭る。これらの三ヵ所の山祭りが五日の節供にある。権田の中で当番の村の世話番が巻きわらお

札をさしてポンデンを一本作り、納めに行く。(鬼沢)

ゴンチの節句に株名へ行く。若いしや子どもが遊びに行き、トコロ天やおしんことを食べるのが楽しみだった。天神岬を越して行つた。(中石津)

## 六 月

### 一 日

水餅 お正月のおそなえもちをしみらかせておいた。これを、この日、ほうろくで焼いた。それに砂糖をつけたりして食べた。べつにとくべつの由来はきいていないが、この日には、天皇陛下ももちをお食べになるといわれている。(水沼)

六月一日は、正月のお供え餅を寒水に漬けて、干しておいた水餅を焼いて食べる。生水、かき氷など食べても腹痛を起さないとされていた。この餅のことをシシモチという。(二区)

### 振 舞

新婚後始めての六月に、貴い方の両親・新夫婦が振舞の印を携えくれ方に行き、近親者・仲人を招きて酒食を響應する。(鳥羽村郷土誌)

### 養 蚕

フナモチ 蚕が三眠のとき、フナモチをついて祝つた。となり近所とか、近くの親戚などへもちをもつて行つた。(水沼)

### 田 植 え

苗マ(苗代) 四月二十七、八日ごろ作る。苗代餅やおハギを作つて夕飯に食べた。

田植え 六月七日—十五日ごろにするが、イエーで手間を交換し合つ。

一人前の仕事は一日に四畝歩の苗を取つて植えるのが基準で、馬や牛は二人前として計算した。

男衆が馬や牛で耕やし、スキ起シ・アラクレ・ウエシロをかき、女衆が田植えをする。苗マは最後に植える。

一番あとで田植えを終つた人のことを「マンガ洗イ」という。田植えが終ると、手伝つてくれた人に一杯酒を飲んでもらう。田植えは深く植えることを嫌う。苗は軽くしばらないと苗がカズム(色が變る)ので嫌う。(亀沢)

六月二十日頃までに田植えを終らせる。(関沢、築地、カジヤ)

## 七月

2 日

半夏 この日は田植えをするなという。どうしても植えなければならぬときは、苗を三株さかに植えてから植えろという。(相吉)

## 中旬

農休み 七月十三、十四日、または麦を作れば十九・二十日ころ遅くになる。ふかしまんじゅうを作つて祝う。(亀沢)

十九日一二十日頃農休み、農休みを目標に働き、一番通しを終らせる。タンサンマンジユーを作る。嫁は里帰り。新しいひとえもん、さん尺、下駄が草履を買つてもらう。(七ツ石)

七月中の適当な日を二日間、村でできる。ウデマンジユウ(タンサンマンジユウ)を作つて食べる。(六区)

農休みはもとは七月十三、十四日、農協から連絡があつて、農休みをしている。日は、農作業の進行状況をみながらきめた。田植えが終つて一番どおり(第一回の手入れのこと、ムギをとつてから、大豆とか、アズ

キなどをまいてから、その草つ退治をしてから)のあと、一日は日曜日を含めて、二十一日ころに農休みをしている。

うちの仕事が間にあうかぎり、嫁は里帰りをした。ムギをとつて新しい粉でまんじゅうでもつくつもつて行った。嫁は、五月から里帰りをして

しているので、このとき、里へ帰つて農休みを楽しんできた。(水沼)

農休みは役場と農協で始めた日に休む。この日は朝草刈りは二駆刈つてあとは遊んでよいといわれていた。普通の日は朝飯前に一駆の草を刈らなければならなかつた。(相吉)

人形 戰前農休みのころ、椿名神社で人形を配り、それで身体をなして氏子總代が集めて、人別(おさん錢、一枚一錢くらい)を取つて、神社でお祓いをした。(亀沢)

椿田椿名神社(村社)から人形が各部落に届く。それで家族の身体を

なでて、神社の裏の川から島川へ流した。村長が代表で立ち合つた。七月の二十日近所に、椿名神社から半紙に人形を切つて、各部落によ

こす。自分の体をなせて、椿名神社に持つて行つて、

島川に流した。(長井)

夏越し 農休み前に家族の枚数だけヒトガタを配つた。それに年令を書き体を

ふき錢を二銭位つけて八幡様へ持つていつて、おがん

で流した。神社でミソギ祭りをした。(岩水)

天王様(七月十五日)ここではかつぐことはない。(水沼中尾)

フセギの札 部落の境木にシメ縄がかけてある。(陳田正己)



フセギの札

境木にシメ縄がかけてある。(陳田正己)  
(撮影 関口正己)

フセギの札 部落の境木

にシメ縄を下げる。悪病除けのためフセギの札を吊る。(陳田)

## 土用

丑の日 ウナギを食べる。餅はつかない。土用干しで衣類を干す。(亀沢)

七月の土用の丑の日に川へ行って泳ぐ。桃投げといって、桃を川に投げて、子供に拾わせる。この日に、センブリ、ゲンノショウコ、トクダミなどの野草を採集に行き、かけほにしておいて薬用とする。(二区)

丑精進 土用の丑の日に十王堂で大日様のお祭りをした。甘酒を作つて参拝者に配つた。(岩水)  
百万遍 土ようの三日目に子供達が不動様に集つて太鼓と鉦を叩いて念仏を説く。昔は珠数もまわした。この日寺からお札をもらつてきてそれを辻に立てた。念仏は、「ここでは南無阿弥陀仏だけで、他地区では十三仏など説くところもある。(相吉)

## 八月

### 一日

カマノクチアケ 八月一日は仏様が地獄のカマの口から出立して来る日で、焼き餅などの丸モノを作つて供えた。(陳田)

釜ノ口明きには朝のうちに墓掃除をし、午后は村の道普請ときまつている。(相吉)

焼き餅を焼いて仏様に進ぜる。

先祖が地獄の釜の蓋を取つて、一日から盆のお客に出て来る。もし、一日から盆までに死んだ者には頭にシラジ(スリ鉢)をかぶせて埋める。それは途中で先祖に行き合ひ、「オラは家へお客様に来るとメエは行くのか」と頭をたたかれるからだという。(亀沢)

八月一日は、八朔の節句で、地獄のかまがあくという。やきもちをやいてお先様に進ぜる。この日、嫁は重箱に入れた赤飯をもつて里帰りする。嫁が里帰りできる最後の機会の節供なので泣き節供ともいう。(川浦)

カマノロアケで、ヤキモチを仏様にしんぜた。道中食べるようといふので供える。今でもやつてある。(六区)  
やき餅を作つてカマ神様に上げる。カマ神様が地獄からやき餅を食いながらくるから。(七ツ石)

この日に墓の掃除をする人もある。(墓地)

この日オヤキ(ほうろくでやく)をやいで、仏様にあげる。ヤキモチは、仏様のお弁当という(ヤキモチは、十日たつても、十五日たつてもいたまない)。

この日、墓地の清掃をする家もある(七日に墓掃除をする家もある)。

むかしの人はなしによると、仏様は、この日地獄から出てくる。七日間かかる天の川を渡る。七日に七夕をして祝う。このときは、水と線香をあげ、まんじゅうをこしらえ、仏様にしんぜた。(水沼)  
シラジ 盆月に入り、盆前に人が死ぬと、頭にシラジ(スリ鉢)をかぶせて埋けた。それは途中で祖先に行き合つた時「オラはウチへ帰るのにお前は行くのか」と頭をはたかれてオヤケナイから、頭にシラジをかぶせて埋めてやるという。(長井)

焼き餅を焼いて仏に供えた。

地獄の釜の蓋をぶち破つてくるのだから、なるべく固く焼けといふ。

釜の口あきから仏が地獄から帰つてくる。

地獄までの道は一三〇里あり一〇二十里で来る。

この日以後死んだ人には頭にシラジの絵をはりつける。仏がみんな帰つて来るので地獄へ行くのではりとばされるから。盆仏にはシラジをかぶせろという。(岩水)

百万遍 捕取では八月一日の量すぎから部落の人々が堂に集つて百万遍

を唱える。「ナムアミダブツ、ナムアミダ」と、線香一本立ててその燃えている間中唱え続け、燃え尽きると一休みして夕刻まで行なう。終つて次のように札を各戸に配り、かつ部落の四周の境及び道祖神に、札を青竹につけて立てる。これをすると厄病が入らぬという。

(梵字)

奉修百万遍

村内安全  
五穀豊穣

祈歎

三寶院

慧眼院

原谷戸・上谷戸では子供が集まつて同様にしたが、子供の数が少くなつて、今年は忘れてしまつたらしい。

落合では、大人们が、午前中道掃除をして午後百万遍を行なう。今



百萬遍(御取A)

(撮影 都九十九一)



百萬遍(御取B)

(撮影 都九十九一)



百萬遍(御取C)

(撮影 都九十九一)

年もしたが、夕刻酒をのんだ。  
石上だけは珠数もあって、これを握りながら唱えたが、すでに廃絶し、珠数も失われた。(二区)

七日

七夕 竹に色紙を付けて飾り、まんじゅうを作つて供える。七夕飾りは川へ流さないで、大根葉へ持つて行つて立てる。虫がつかないという。(亀沢)  
七夕には天神様の草刈りをする。その時付属の山林の下刈りもする。

(亀沢)

七夕は「七回水を浴びて、七回食べる日」とい、炭酸まんじゅうをふかして食べる。川からネブツタの木を取つて来て、頭や身体をふいて川へ流した。七夕を過ぎると夜が長くなるので、眠気をはらうためとう。ネブツタを七夕に飾る家もあつた。(長井)  
七夕飾りは竹に「天の川」「桂川」などと書いて吊るしたり、色紙でナスや提灯の形を作つて吊したりする。別に供え物はしない。

七夕に朝早く墓掃除をする。(長井)

七夕には七回水を浴びて、七回食べる。大人は休み、墓地の掃除をする。

る。炭酸まんじゅうを作る。竹に天の川桂川などと書いてさげる。ねぶ

たをとつて来て、体中なげてから流す。(長井)

七夕は八月七日である。六日の朝煙のサトイモの葉にたまたま水を

とつきて、墨をする。短冊や折り鶴、あみなどをこしらえて、切った

ばかりの青竹につるす。八日の朝おとなが七夕飾りを大根煙に持つて

いってきます。大根に虫がつかぬという。(川浦)

新竹を切つて、子供達が紙に字を書いて飾る。「七夕やうでま

んじゅう」などというのもある。

竹は七日にカラス川に流す。その際ウラは切りとつておき、後で大根

島に立てた。そうすると大根を虫が食わないという。

七夕に髪を洗うとよいという。七夕には川の水で洗つてもよくおちる

という。

七夕には七回水あびをする。(六区)

竹に色紙・短冊を下げる。里イモの葉の露で墨をすつて書くと手があ

がる。

竹は川に流す。又大根煙に立てると虫よけになる。

短冊をタンスに入れると虫がつかない。

七夕竹の下に新しい着物を供える。供えた着物を着ると美人になる。

「七夕様にあがるうちは着るんじやねえ」と言われた。

「七回あびて七回食え」と水浴びを七度して、タンサンマンジユウを

食べた。

この日は墓掃除をする。

メズラ畑に入るなどかは言わない。(岩水)

新竹を切つて七夕をかざる。タンサンマンジユー、うどんなど作

る。「ナナタビ食つてナナタビ浴びろ」と子どもが喜んでタラフク食つて

水浴びする。(関沢)

六日の夕方飾り、七日に一日遊んで夕方子どもが川へ流す。

枝のいい竹を切つて大根煙へ持つてさしておく。(七ツ石)

竹かざりをつくる。短冊をつくつてかざつた。イモの葉をつゆでぬみをすつて、短冊に字をかくと、字が上達するという。

この日、まんじゅうをつくつて、桜香、水と一緒に、かざり竹の前に、机をだしておそなえした。

七夕の日に、墓掃除をする(共有墓地)。

七夕のかざり竹は、川へ流す家もあるし、大根ばたけ(菜大根をまつたはたけ)へもつて行つてたてる家もある。虫よけになるという。(水沼)

七月七日が今は八月七日で、この日は七夕をたて、水浴びをした。七月回あびるのなどという。また、この日はエゴの実とネブタ(ネム)の葉を漬して川へ流すと、魚が目にしみて浮いてきたとれた。(相吉)

### 十三日—十六日

盆用意 盆買物は梅田へ行つて盆(一ざや)・盆花(造花)を買って来る。

盆市はたたない、行商で間に合つ。

山からアーバナ・オミナエシなどの盆花を取つて来て飾つたが、最近は家の近所の花を飾る。

墓掃除は盆の来る日の朝する人が多い。(亀沢)

盆のころになると、トンボやセミなどの生きものはとるなどといった。

トンボやセミに、仏さまが乗つてくるからだといふ。トンボなどがとんでもくると、仏様が乗つてきたぞといった。(水沼)

馬を飼つていたころは、盆の十四日の朝、草の二駄がりをした。朝、暗いうちに出かけて草を刈つてきて、もう一度草刈りにした。むかしは

そうしないと、馬のえさが間にあわなかつたものといい、草を刈らないと、親から遊びの許しがでなかつた。(水沼)

盆棚 ふつう仏壇の前に作るが、新盆ならデ工に作る。スイカ・キユ

ウリ・ナスなどの果物類や、お水をコップに入れて供える。うどんは茶碗に盛つて供える。生うどんをショイ繩といつて、十四日晚に盆棚に掛けておく。

盆迎えの日にキユウリやナスで馬の形を作り、トウモロコシの毛で尾フボを付けて供える。(亀沢)  
竹を四隅に立て柱として盆棚を作る。竹に繩をめぐらして檜の葉を四角所・ウドンを二角所に下げる。棚に位牌を出す。仏壇のオルスイ様として本尊の阿弥陀様を仏壇においておき、それ以外は全部盆棚に出す。ナスとキユウリの馬を作る。その飼料としてイモの葉にナスをサインメに切ったのをあげる。うでる前のウドンは馬のショイナワになる。里イモ・大豆を根つきのままあげる。稲穂やトウモロコシ・スイカをあげる。

以下の段には無縁仏をおくる。ガキショウウリヨウ様といふ。

死んでから四十九日すぎないと盆棚にはあげない。(岩水)

盆棚は、十三日の迎え盆の夕方までには作るようとする。青竹を四本切って四隅に立てて柱とする。柱と柱を繩目毎にヒノキの葉を一枚重ねてみとこかよとこ飾つた繩で結ぶ。また繩には、全体に生まのまのうどんをショイナワのようにつける。(川浦)

無縁仏 子どもの仏やよそから家に来てやっかいになっていた者、縁故のない人の仏などは、盆棚の一段下へ祭り、別に供え物をする。(亀沢)

十三日に盆棚を結う。一段低くして無縁仏の壇をゆう。(関沢)

盆迎え(十三日) カドへ線香立て、迎え火をたたく。盆提灯の明かりをつけてきて、盆棚に上げてお水を汲んで進せて、線香を上げる。夕飯なども進せる。(亀沢)

盆迎えは十三日の夕食前に門口で迎える。門口で麦ワラをたいてその煙に乗つて先祖様が来る。その火で線香と提灯をつける。又、その火で体をあぶつて「ネモノ・ハレモノ・デキルナ」と言う。

ミソハギで火を消す。  
先祖様が来て見せるのだから家中の中をきれいにしておけと言われた。秋叢の最中で忙しくしてようがない時分である。(岩水)

門口で麦わらを燃して盆様を迎える。(七ツ石)

盆迎えは寺(金透院)には行かないで、暮地で麦わらを燃して迎えていたが、現在は門(かど)や、家の近くの三本辻でかがり火をたいて迎える。その火を提灯に移して家中の中に運び入れ、仏壇に水をくんで線香に火をつける。新盆の場合も同じ様にして迎えるが、親戚や知人が多く集まる。(川浦)

八月十三日の夕方迎え火をする。門で麦ワラをたき、その火でローソクを灯し、さらに盆棚に移す。(六区)

盆行事 盆花 おもにキヨウを山からとってきた。ほかに、アワバナ、ヒエバナ、山ユリなどもとつてきた。以前は、朝草刈りをしたので

そのかわりに盆花をとつてきた。(水沼)

盆棚は組立式になつてゐる。棚の四隅に青竹をたてた。盆ごとに、新しく買つてくる。かたい家では、干カヤでなわをない、盆棚の前にしめなわとしてかざつた。棚のまわりはヒノキとか、杉の葉でかざつた。棚の上に位牌をかざつた。盆棚は表座敷にたてた。

無縁仏のことばムエンサマという。盆棚の下にイモ(里イモ)の葉をいれる。そこへおそなえものをした。現在は、茶わんでそなえものをしている。(水沼)

盆むかえは十三日の晩。墓地までむかえに行く家もあるし、かど先で、ムギわら(一把)に火をつけて、むかえ火をたいてむかえの家もある。その火を提灯にうつして、仏さまをむかえる。その火を線香からあがつて、盆棚のあかりにうつした。(水沼)

盆中のごらそう、十四日の朝はぼたもち、昼間はうどん、夜に米のめし。

十五日は、朝はふかしまんじゅう、昼間はうどんがふつう、夜はこは

十六日はとくにきまりはない。(水沼)

るすばとけのことは、おるすいさまという。仏だんに、盆様にあげたものと同じものをお供えした。

うどんのかのひろいのを、生のままで、盆棚の正面のしめなわに一本かけた。それは、盆様の馬のよいわだという。（水沼）

十四日の盆の野まわり、家のものがだれでも、なにももなすに野まわりをしてくる。これに、今年もいい百姓をしているということを、先祖様を野良へつれて行って見せるということで、盆様の野まわりといつている。このかえりに、大豆・里いも・ナス・キユウリなどをとってきた。これは洗つて、盆様におそなえをした。（水沼）

十三日は迎え盆で、門火で火をつけてきて新しくつくった盆棚に火を

あげた。盆棚は新竹四本をたてつくり、無縫私は下にまつった。

新盆でも坊さんは頼まないと來ない。新盆まいりは線香と乾うどんを持って

いた。十四日にはキユウリやナスで馬をつくり、そのタズナ（手綱）

やお盆様のしよい繩といつてうどんを馬にかけてやつたりした。送り盆

は十五日の晩で、全部村の人が揃つまでお待つて、集合が終ると花

火をあげて解散した。盆内の食事は、十四日はご飯にぼたもち、十五日

はまんじゅう。十六日は盆がらといつてきまつていよい。（相吉）

お客様「盆三日、帰りこし子にぎわしく、香華たく場もなかりけり」という歌があるが、ふんとにその通りで、昔の人はいい事を言つたもんだと感心する。

此の頃でも嫁は実家へ客に行くし、外へ出でる娘たちが家族を連れてくるので順やかだ。（相屋）

野まわり 盆の十五日に、「野まわりにいくてくべえ」と、キユウリやナスなどをとつてきて盆様に供える。（六区）

新盆 新盆の時、親類・縁故関係者がお棚参りに来る。「盆様でおめでとうございます。」といって挨拶をする。昔は干しうどんやふなどを持つて来たので、酒・魚を出してもだな。

盆様に魚を食べれば盆様にくちびるを吸われないから、魚を食べた方がよいという。仏様はナマグサ物を嫌うから魚は進ぜなくとも、食べた方がよい。

新盆提灯は盆提灯と区別しないで用意して吊るす。高灯籠はしない。（龜沢）

新盆さまの家へうどん二わ位持つて行き、「結構なお盆さままで」と言い、あとは口の中でゴニヨゴニヨ言つてます。（七ツ石）

新盆の場合は、べつに棚はつくらない。そなえものもふつうの盆の場

合と同じ。新盆の場合には、親戚から、新しい小田原提灯がおくれる。

それを盆棚の前に、もらつただけさけておいた。最近は提灯でなく、灯籠（電気仕掛けになっている）の場合が多くなつた。

新盆の家へは、親戚とか近所の人などがお見舞にきててくれる。手土産をもつて、線香だけにくるのがふつう。このときのあいさつは「おほんさまでおめでとうございます。」（水沼）

新盆のあいさつと不幸のときのあいさつは誰も苦手なもので、「新盆だそうですけど……。」とだけいって、たいていあとは口の中でにしてしまつ。（川浦）

送り盆 十五日晚、盆様に盆茶を入れて進せて、提灯の火をつけて、カドへ送り出す。カドで麦わらに提灯の火を移して送り火を燃やす。翌日は盆様には日がわるいのか、十五日の晩にたたせる。

十六日朝、盆棚をこわして墓地へ送り出す。だんごを作つて墓地へ供

え、キユウリの馬を持つて行く。（龜沢）

送り盆は十六日で、キウリのまがつたようなやつにチガヤで足をつけて馬をつくり、それに乗せてお盆様を送り出す。馬ではなく牛がほんと

うのようだ。十五日の晩に送り出す家もある。（川浦）

十六日にはナスで馬をつくり、迎え盆と同じに門に置く。（川浦）

キウリのケツにモロコシの毛をさし、足を四本さした馬をつくる。ウドンを作つて弁当をしぶる背負い繩にする。里芋の葉っぱに包んで、タ

食後、お茶を進せて、自分で飲んでから送り火をたく。  
迎える時は夕方早く。送る時は夕飯後、おそらく燃す。「早くこのけぶに乗つて帰りな」と言って燃やす（七ツ石）

竹は川へ流したり、ヤブへ置いたりする。(七ツ石)

おくりばんは十五日の晩である。この日は早く夕飯をつくって、盆棚からあかりをローソクにうつして、門先のむきわらにつけた。このけむりに乗って、仏様はかえるという。ナス、キユーリの馬をつくっておくりだした。盆棚にかさつた造花も、このとき一緒におくりだした。

十六日の朝、盆棚をこわして(片付け)、墓参りに行く。だんごをつくって、家中で墓参りに行く。支度はいいきもの。(水沼)

盆の食事 十四日の朝はボタモチ、昼ウドン、十五日の朝はマンジュー、昼ウドンに決まっている。盆棚の前で食べる。

「生臭を食べないと盆様に口を吸われる」と言つて盆魚を食べる。盆様には二膳にお椀を供える。箸の代りにフロウ(インゲン)を置く。盆棚の前でお盆様にお椀をシラージで洗う。(岩地)

盆のカワリモノとして盆の十四日にはおはぎ、十五日にはうどんをつくる。(川浦)

盆の十六日 罪を犯してしばられる者でも

この一日は許されると  
いう。(亀沢)

盆中の禁忌 子どもたちは、盆中はチョウやトンボは採るなど

いう。(川浦)

盆の仮壇 仮壇は留守だから何も供えないと  
い。(六区)

盆踊り 昔は鬼沢でも小倉でも盆踊りをし



盆踊り 8月14・15日午後7時半  
総合疗養舍 倉渕村青年団(2区)  
(撮影 阿部)

た。今は倉渕村全体が学校の所の広場でやる。(亀沢)

盆踊りは昔、若い衆がやった。(六区)

どこかで盆踊りしてから歩いて行って踊って遊んだ。そのあと寝すに朝草刈りに行ってきた。(カシヤ)

盆おどりは盆の十四・十五日にもしている。もとは、部落ことにやつた。場所は学校の庭とか、親音さんなど広いところ。前は青年会が主催していたが、最近は婦人会が中心になってやっている。(水沼)

「盆々と祭る盆はただ三日、くされ彼岸は七日ある」と歌う。(小倉)

## 二十七日

諏訪様 この日は諏訪様の祭日で二百十日とならんと、あれ日といわれた。(水沼)

## 九月

### 一 日

二百十日 男衆が出て道刈りをして、無事を祝つて集荷場に寄つて酒を一杯飲む。(亀沢)

二百十日には赤飯をふかす。(六区)

「社日はつかり煙へ入るな」と言つた。(中石津、七ツ石)

一百十日は、むかしから荒れるといわれてきた。この日やく日をのがれるといって、まんじゅうをつくる家もあった。家によつては、赤飯とか、すしとかをつくつた。とくべつの行事はない。むかしは、この日々く日だからとて仕事をやすんであそんだ。(水沼)

### 旧九月一日

八朔ハツノツ はつさくのお節句、嫁ウニが里帰り。別に何も持たない。(中石津、  
裁屋)

八朔は嫁の里帰りの日である。赤飯とショウガをみやげに持っていく。

(岩永)

九月一日は八朔の節供で、新しい嫁に里帰りをさせる。(六区)

八朔(九月一日)には嫁にきて、「三年ぐらいいは、嫁は里帰りをし

た」お土産としてもつて行ったものは、そのときのできあいのもので、  
まんじゅうとか、赤飯など。(水沼)

旧八月十五日

十五夜 まんじゅうやおハギを重箱の中に入れ、野菜を箕の中に入れて、

廊下へ出して月に供える。その晩だけは子どもが取りに来てもよかつた。

お月様が下げに来たといつてとがめないで喜んでいる家もある。子ども  
は糸の先を削って、突いて取るのが、おもしろくて、そつと取った。

十五夜には大豆・里芋などを供える。十三夜と同じように供える。(龟  
沢)

十五夜においてまるをつくる家もあるが、まんじゅうをつくることが多  
い。この晩は子どもたちがまんじゅうや季節のものを、長い竹の先に細  
工をした棒でさげに歩いたが、だれも文句をいうことなく許された。年  
長のものは遠くのムラまでかけた。(川浦)

十五夜にはまんじゅうや季節のものを、長い竹の先に細工をした棒でさげに歩いたが、だれも文句をいうことなく許された。年  
長のものは遠くのムラまでかけた。(川浦)  
ススキ、花、フカシマ・ン・ジユウ十五個。その他箕の中に野菜やナシな  
どの中の丸いものを入れて供える。供えた物は、子供達がさけた方がよい。  
(六区)

「十五夜に疊りあれども十三夜は疊りなし」という。十五夜には大体  
降る。十三夜は小麦の神様だから十三夜に降ると小麦がはぜれる。十五  
夜については言わない。

マンジュウや柿などをミの中に入れて月に供えた。それを子供がオ  
カに下げる歩いた。棒の先に釘をさしてマンジュウなどを突きさした。

子供が下げた方がいい。(岩沼)

まんじゅうをつくって、十五コお月さまにあげる。また、カキとか里

いもなどをあげた。スキをとってきてあげる。

十五夜の晩に晴れると、大麦・小麦があたるといった。「十五夜に疊り  
あれども、十三夜に疊りなし」といわれ、十五夜はたいてい晴れないも  
のだとわれている。

おそなえしたものは、近所の子どもがさげにきた。(水沼)

「十五夜に疊りなれば小麦がはづれる」と言った。十五夜に疊りなし、い  
や、十三夜に疊りなしと言ったのだ、とちょっと混乱あり。

一升びんにススキ野菊をさして進せる。箕の中に葉っぱをつけた大根  
やトウモロコシ、柿、サツマイモなどを入れ上げる。

香ろを出してお線香も上げる(以上七ツ石)

竹に釘をさしたものを持って子どもが盃みにきたが今はこんなゲビタ

真似をするものはいなくなつた。(築地)

十九日

オクンチ 水沼神社のお祭りで獅子舞が出た。永くやめていたが最近

復活した。

水沼に親類があれば行ったり、夜遊びに行つた。(岩沼)

オクンチはハジメ・ナカ・シマイと三度やつた。この日は仕事を休み、

赤飯か寿司をつくって祝つた。(川浦)

オクンチ(十月十九日)はナカノクンチがおぶろなさまのおまつりの

日である。

十八日の後にお獅子(獅子舞)をしていく。獅子頭は二つある。おま

つりのときは、さかはこと山車をだす。

オクンチには赤飯をつくつた。この日には親戚のものをよんで祝つた。

(水沼)  
お九日は九月九日・十九日・二十九日を初九日・中ノ九日・末ノ九日

といい、餅をつきワラヅトに入れて神に捧げる。（鳥羽村郷土誌）

## 十 月

一日（または旧十月一日）

神送り 榎田のオヌナ様にお参りに行く。縁結びの神なので若い人はいい縁があるようによく拝んでこいという。

ルス神は知らない。（亀沢）

神様のお立ちで神様へお参りに行つた。留守神はお稲荷様である。（岩水）

旧十月一日にはオヌナ様にまだ暗いうちにお参りにいった。出雲にお立ちになるのでお見送りするためである。（六区）

神おくり（旧十月一日）で、この日は、神様が出雲へ行かれる日だというので、むらの人たちは、朝早く、うぶすな様へおまいりに行つた。

（水沼）  
十月一日はお諏訪様の神送りといつて、神様が出雲に旅立つのを送るのだという。神社へオサゴを持っていてお詣りした。（相模）

神無月の留守神 旧十月の一ヶ月間は、神様が出雲へ出かけているので、神無月というが、このあいだ、留守居をしている神様もいる。この辺では、金比羅様が留守居をしている神様だという。金比羅様は、長虫で一足おぐれたために、出雲へ行ったけれども、よせつけられなかつたという。金比羅様には、べつに四国に神社があるといつてある。

この辺では、ふだん、会合におくれてくると「やつは金比羅まいりだ」という。（水沼）

旧九月十三日

十三夜 「十五夜には晝りあるとも、十三夜には晝りなし」とい

十三夜に晝ると麦まきの時期なので、麦がはずれるという。柿を進ぜる。（亀沢）

十三夜にはススキは上げない、里芋やサツマイモなどを進せた。（亀沢）十三夜にはフカシマンジョウ十三個供える。その他は十五夜と同じである。（六区）

十三夜（旧九月十三日）には白めしをしんぜる家もある。これは、晴れるようにという願いである。また、まんじゅうをつくつてあげる家もある。十三夜には葉付の大根をそなえる。（水沼）

神むかえ（旧十一月一日）神様が出雲から帰つてくるというので、むらの神社へおまいりに行つた。

このあと、やしきまつりをする。夕はんのときに、赤飯をふかした。神様がおかえりになるまでにホコラをぬつた（つくつた）ワラとかカヤでつくつた。石宮である家でもかならず、わらでおかりやをつくるものだといわれている。

やしきまきさまにおそなえするものは、赤飯・尾頭付き・とうふ・ご神酒（おみきすずを竹でつくり、その中に酒を入れ、サカキの小枝をさした。これを一本あげた）やしき神様（稻荷様）にあげたものは、早くさげてもらつたほうがいいといい、口がつけてないと、おこんこん様が、息をひつかけなかつたといって、張り合いのわるいことであった。（水沼）

## 十一月

旧十一月一日

神迎え 十一月一日に帰つて来る。神社へお迎えに行つた。帰つて来て屋敷まつりをする。お稲荷様が留守居をしていたのでまつる。（岩水）

旧十一月一日にオヌナ様にお参りした。出雲から帰られるのをお迎

えするためである。(六区)

十一月一日は神迎えといい、出雲から帰ってくる神様を火をたいてお迎えした。この日は十二様のところで村中集まつてお迎えした。お迎えといつても火をたく位でとくに儀式的なことはない。(相吉)

イネの穗 稲刈りの時に、穂を受けた株」といって来る家もある。(亀沢)  
穴ツブサゲ 麦まきが終ると、餅・おハギなどのごちそうを作つたが、穴ツブサゲといつても畠には出さない。(亀沢)

旧十月十日

十日夜 ワラデッボウ わらたばを作つて地面をたたいて回ると、モグラが起こさないという。ミョウガのからをわらの中に入れて繩で巻くと音が違う。よその家にも幾人か組んで、ワラデッボウをたたきにいくが、祝儀は出されない。

唱え言「十日夜十日夜、十日ノ晩ハイモンダ、朝ソバキリニ昼ダンゴ、夕飯食ツテアツタケ」

ワラデッボウはすててしまふ。(亀沢)

わらでつぼうは芯を細わらでつみ、その上をフジズルで結わえた。芯には重いミョウガの葉やイモガラを入れ、上手にこしらえるといい音がでた。(川浦)

子供たちは夜になると、それを持って家々を訪ね、庭で「十日夜、十日の晩はいい夜だ、夕(よい)めし食つてぶつただけ」と大声でいいながらたたいた。どんな大勢ではたいてもうさいとはいわなかつた。もぐらを追ははらうのが目的だともいう。(川浦)

旧十月十日はトウカニヤで、新築にミョウガを入れて巻き、庭をたたいた。モグラが畠をおこさないようになたくのである。その時「トウカニヤ、トウカニヤ、十日の晩はいい晩だ、朝ソバキリに昼ダンゴ、ヨウ(夕)飯食つちやぶつただけ」と唱える。(六区)

トーカニヤはミョウガのからを葉で包み、藤づるでしつかり巻いたもので、ぶつたなく。モグラが土をおこすから地面をたたく。

「トオカニヤ、トオカニヤ、朝そばきりに昼だんご、ようめしくつてぶつただけ」と言う(築地、中石津)

旧十月十日。ミョウガの幹を入れたワラットを作り、その先をなつて、もとをフジで堅く巻いて、これで地面をたたく。その時の唱え言は、

「トウカニヤ、トウカニヤ、トウカノバンハ、イイモンダ、アサソバキリデ、ヒルダンゴ、ヨウメシックチャ、アツタケ」

この日餅をついて、小さくセーノメに切つて、ワラットの中に入れ、十二様、お稻荷様その他の神々に進せ歩いた。また祿側にはミを出し、これに御飯、煮物などをおき、お月様に供えた。ミの外側には新らしい葉束を立てておく。(下村)

十日夜(旧十月十日)お供え餅を作り、糞に入れて俵の上に供える。小児はミョウガを芯に入れワラを巻き固めて大地を打つ。(鳥瀬村郷土誌)

供え物 サワモチをミの中に入れて供えた。小さく切つたモチを重箱に入れて百八個を天狗様に供えた。

天狗以外へはツツコに入れて供えた。(岩水)

十日夜のおそなえは田のゲエロ(カエル)と、はたけのゲエロがけんかをするというので、米のもら(白いもち田のカエルのもち)とアワのもち(きいろいもちはたけのカエルのもち)の二色のおそなえをつくつて、あげた。(水沼)

十日夜にはワラツトでモグラよけをした。

「十日夜、十日夜、十日の晩はいい晩だ、ヨノメシ食つちゃぶつぱたけ」と歌いながら各家庭の庭先をまわつた。新しく嫁、婿の来た家には必らず行つた。別に何も貰いはしなかつた。

サワモチを天狗様に供えた。一寸位の巾の長いモチをおりたたんでワラのツツコに入れたのを、角落山大権限の里宮である天狗山の鳥居の

所に供えてきた。サワモチの他はサイノメに切って供えた。

人の進めたのを子供が下げる。(岩水)

十日夜には九日の晩にもちをつく。そのもちを、十日の朝にきつて、百八コわらのつとこまでは重箱の中に入れて天狗様もつて置いてある。ほかの神様にも二三五コぐらいすつあげる。また、サワモチというのをもつていて、天狗様のお宮の屋根にかけた。サワモチは長さが二尺、巾一寸ぐらいのもので、「一枚かねてもつて」といき、天狗様にかけてから、またうちへもわかえる。「これは、うちのものがおみごくとして食べた。きりもちは、天狗様のお宮のうしろから、尾根一しに投げる。そべた。きりもちは、天狗様へもちをあげる場合、エンニンといつて、縁起のわるいもの（人がなくなつて四十九日たつていな場合）は、「マケの人は参加しなかつた」（中尾の聞）

十日夜の行事としては、この晩、わらでっぽうをつくって、子どもたちが、毎戸庭をたたいてあるいた。もぐらが庭をおさないようによい

うことで、そのときの唱えことは、「十日夜はいいもんだ、朝そばきりにせんだんご、夕めしくつちやぶつたけ」  
もちは十コ、糞の中に入れて、縁側にあげた。それを子どもが、シノの先に釘をつけてさげにきた。もちはさげられると縁起がいいといった。また、十日夜には、大根を糞つきのままあげた。このころから大根をとりはじめる。大根でからみもちをする家もある。  
十日夜がムギまきのあなつぶさげといふ。十日夜がさぎると、ムギまきはおそいといった。十日夜にはあなつぶさげしたいものだといつた。むかしの人は、十日夜にかけて、高崎の觀音様へおまいりに行つたといふ。(水沼中尾)

七五三 やる家もしない家もある。(亀沢)

### 十一二月

八 日

正月の準備 十二月八日にはじめる。(水沼)

### 十五日

屋敷祭 昔は十二月の日より日にした。オカリ屋を毎年作り替る。

雑木の柱を使いカヤやわらで星根をふく。高さ65cm、幅75cm、奥行75cmぐらいの大きさに片流れに作る。繩で七五三の結び方でしばる。(五個所とか三個所とかを結ぶ)夜赤飯・魚・オミキスズ(酒)を供えに行き、マツチをすつて灯明がわりに明るくするそこで子供に少し分けてやり、一緒に食べる。(陳田)

星敷まつりは十二月十五日にする家が多いが、ヒのつく日(ヒノエ、ヒノトヒツジのつく日)はさけた。冬至前にする。  
シノにオンベロを下したのを一本ずつ星敷福荷・仏壇・神棚に供えた。赤飯、カシラツキ、コバ豆腐は豆腐の四角をおとして真中だけを使うのと、角の落した三角のを使う家とがある。三角の方を使う時は一皿に二カケをのせる。福荷様に供えた後は振り向いてはいけない。

供え物は子供が下げる歩く。星敷まつりのこわめしは新米だから一番うまい。餅でうまいのは十日夜の餅である。  
子供に下げられないと今晩やり直す。福荷様が機嫌が悪く息をふきかけて貰わないので、よくないことが起る。月のものの女が手を出すとい



屋敷稻荷（手前）とオシロウ様（奥）  
12月15日オカリ屋を作り屋敷祭りをする。（陳田）  
オシロウ様は自然石で、シノ4本で閉む  
(撮影 関口 正己)



中沢イッケの稻荷  
12月25日屋敷祭りに、わら・繩を持ち寄り、新旧の材料を半々にしてオカリ屋を作る。上のわら束は上棟を示す。「水ハライ」  
(撮影 関口 正己)



右より 鬼子母神（文化11年銘）・屋敷稻荷、  
オシロウ様（高さ40cm）（長井）  
(撮影 関口 正己)

よくない、お仮屋を三回も作り直してやり直した家もある。  
オシリョウ様だけにはオシトギを供える。米の粉をダンゴにして供え  
る。（岩水）

屋敷まつりはかまわず三回した。おこわかあずきめしでも煮る。（七ツ  
石）

階級のいい人が三回する（カジヤ）。  
十二月十五日に屋敷の稻荷様を祭る。戌の日に祭ってはいけないと  
う。

赤飯、オカシラツキ、オトウフを供える。オトウフは六角に切って二  
つ供える。

供え物は狐が息をふきかけなければ、犬や猫もたべないという。  
供え物をさげないと、年内にいい日をみてやりなおす。石津、関沢で  
も三回までやりなおす。供え物は、赤飯のあとは小豆飯になる。（六区）  
稻荷様は十二月十五日に祭る。お仮屋を作り、お赤飯にオカシラツキ

を供える。オツイの実のオトウフも必ずあげる。（第六区）

○△家では、石宮があるので、お仮屋はつくらない。他の家とはちがつ  
て、お祭りは三回する。十二月十五日が一回、あと二回は日を定めずに  
する。（川浦）

ふつう稻荷様は、屋敷内の母屋の西北隅に祭っている。毎年十二月  
十五日にお仮屋を新しい稻わらでつくりなおす。この日は、まんじゅう  
をふかしてあけ、家族総出で詣てる。現在では、木造のものや石宮です  
ます家が多くなっている。（川浦）

稻荷まつりは十二月十五日で、一日がかりでお仮屋をつくりオンベロ  
を供え、赤飯か小豆飯を炊いて頭付とともに進ぜた。きれいに下げられ  
ない家は心配して三日位続いた家もある。オンベロはそのときは十五日  
だけで略した。お供えするお膳は、火打石で淨め、息をふきかけると稻  
荷様が下がってくれないという。また進ぜたとき後を振向くなともいう。

(相吉)

二十一日

エビス講 秋はエビス様が稼いで帰つて来るので、夜エビス様を祭る。一升ますに現金や通帳を入れて進ぜる。(亀沢) エビス講で一升マスに金を入れてしんぜる。その他は正月の朝エビスと同じ。(六区)

フタツキのお楓に高モリにする。子供は食べない。食べると縁運くなる。エビス、大黒は独身だったので。娘が「十才すぎる」と「エビス講すきだ」と言われた。(岩水) サンマ、オヒラ、チョコなどつけで進ぜる。進ぜたものは親が先に一口食べてから子どもにくれる。縁遠くなるから。子どもの小遣いから、家のゼニを集めてマスに入れ上げたもんだ。

(関沢七ツ石)

えびすさまは、正月の二十日から十二月の二十日まで、働いていると

いう。(水沼)

大体、一月と同じようなかたちである。

十二月の場合は、ケンチヨン汁をつくってあげた。イモ、大根、とうふ、あぶらげなどでつくった。

えびすさまにあげたものは、嫁入り前の子どもにはくれるなという。縁遠くなるといった。この場合、とじよりの人がさげて、ちょっと食べてから食べればよいといった。(水沼)

二十二日

冬至 冬至餅をついて、トウナスを食べた。ユズ湯には入らない。(亀沢)

冬至はユズ湯に入る。トウナスを食べる。

ソジュウダンスを作る。

ナス火を燃すとデキモン・ハレモンができる。(岩水)

冬至には、トウガン(トウナス)をしまつておいて煮つけて、仏様にあけたり、家族のもので食べたりした。これを「冬至トウガン」といつた。(コンニヤクは食べない)。

かたいうちは、冬至の日に、ツジュウダンスをつくって、神様に供え、(神棚にあけた)、そのあと、家族のもので食べた。ツジュウダンスは、くず米を粉にしてつくったもので、おつみのように、手でぎつてつくつたものを、くしに二つとか三つさして、家の入口のところに「くしづつさした」。

冬至の日は、一年のうちで、日が一番短い日だという。冬至をするといふと、イタのネブンだけ、一日一日と日がのびていくといった。(水沼)

冬至にはトーナスを食べると中気にならない、と言つて必ず食べた。

また「カボチャに年をとらせらるな」と言つた。

豆ガラとナスの木を燃し、「マメでなすように」とも言つた。

米の粉でツヅジュー・タンスを作った。(七ツ石)

土穂ダンゴ、ツジュウダンスを作つて神棚に供えトボロや窓の入り口

全部にさした。(岩水)

アエゴメ(クズマイ)で作る。ダンゴにして細長くにぎったのを二つカヤの串にさす。それをツジュウダンスといつた。ニアカリも終つたあとである。(岩水)

十二月にツジュウダンスといつて米の粉をこねたものを握り、蓋に二個さしたものを一本で一年といつて、正月の松飾りをする場所にお供えした。(相吉)

二十二日夜様(新の十二月二十一日)はとじよりの人があつまつてやる。縁側に机をだし、襷香をあげ、まるめのをしてあげた。婦人病よけの神様という。(水沼)

二十三日

二十三夜様（田二十三日、十一月のうちにやる）二十二夜様と同じようによる。としよりの人があつまつてやる。お月様がでるまでやつてた。まるめのをこしらえてあげた。（水沼）

むかし（昭和の初年ころ）は三夜待をした。「三夜まだから、お日待をして、三夜様をおがもう」といたことがあつた。（水沼）

大師（十一月二十三日）この日、大師ケー（かゆ）を食べる。大師ケーを食べると、ハエがなくなるという。これから寒くなるきりかえの日といった。なお、この日、長いカヤのはしつくつた。長さは三尺ぐらい。これは大師様のはしといふ。このはしあつておいて、節分のとき、豆をいるとき、これを△のようにおつて、結び目を水引でゆわえて、豆をかきまわした。（水沼）

二十五日

天神講 子どもたちが集まつて宿の人が世話する。女衆が二人位出て手伝う場合もある。たいてい五目めしにお茶菓子でも買つてくる。（築地、七ツ石）

子どもたちが宿にあつまつて、神講をやつている。（水沼）

二十七日

ヨゴレ年 十二月二十七日をヨゴレ年、年取り、馬の年取りといふ。（亀沢）

ヨゴレ年といつて、二十七日に煤ハキをする。この日に松迎えもして、正月の松を取つて来て置く。（亀沢）

ヨゴレ年取りは女の年取りともいふ。また馬屋肥を出すことになつてるので馬の年取りともいふ。

天照皇大神宮様は女性があるので女の年取りが大年取りより先にあるといふ。（七区）

十二月二十七日は、ほりどしといつて、すす払いをする。（川浦）

馬と女の年取り 十二月二十七日で馬と女の年取りといふ。年神様が女で馬に乗つて来るので大年取り先に年取りを行なうのだといわれた。（七区）

馬がいちばん先に年をとることになる。今夜は年とりだからなどといつて、にしめくらい作る。年神様は皇太神宮様のことと、馬に乗つてやつて来るというところからきている。（川浦）

二十七日を女と馬の年とりといつて、御飯に尾頭付であつた。（六区）

十二月二十七日は、馬の年取りといふ。

この日には、馬に、ヒエとムギをませたのを食べさせた。

なお、秋の仕事がはじまる、馬にこちそうを食べさせた。大きな鍋でこちそうを煮てくれた。（水沼）

この日のことをヨゴレドシとも女と馬のトシリとも言つた。キリミ

かイワシとトウフ汁を作る位でトシリリとした。（岩水）

女と馬のとしとり。馬と女衆は一年中おおごとをするから、一回よけいに年取りをする。（カジヤ）

馬にもこの日は麦などの御馳走を食わせる。（築地）

それかと言つて女衆に特別のことはしない。（閑沢）

この日は、うまやをきれいに掃除した。女衆と馬のとしとりだといつた。俗に、女衆はいやしんばだから、男衆より先にとしをとるのだと

いう。（水沼）

二十七日は、女と馬の年とりである。（二区）

女と馬の年取りで、二十七日にススキ引きが終ると、塩引きの魚に白米の飯を各々の神棚にお供えする。馬にも茶碗に一ぱい米の飯を与える。

松迎え ススハイを二十七日にする。この日正月のお松も取つてくる。西の方に山があるのでそこから取つてくる。方角は言わない。芯松は使わぬ枝松を切る。誰のうちの山でも構わぬとつくるが、それにつ

いて、うるさく言わない。

とてきの松は屋敷稻荷に置いて、米、カツオブシ、オカシラツキ（ニボシ位）を供えておいた。決してお松をまたいではいけないと言われた。

お松は門松を始め神棚、屋敷、井戸、テントウ柱、食、物置、ウマヤ、カマ神、ミズガミに供え、一しょにじよつてこなければ間に合わない位であつた。（岩水）

門松は、一夜かざりはするものではないといって、おそらくとも三十日までにはするようにした。（川浦）

お松迎えは日をみてやる。大概二十七日頃である。三階松がよいといふ。

門松にかぎり一本立の五段でもよい。門松は松と竹で作るが、その根本に、まさを大きく一かかえ巻く。

昔は松をどこにとりに行つてもよかった。ただし他人が植えたのはよくない。なるべく古い木の枝を使つた。

今は婦人会が改善するというので、絵を一枚配つて門口にはるだけである。（六区）

この日は、すすはらいをしたり、こいだしをしたりした。また、お正月のおかざりにするお松を山へとりに行つた。とてきの松は、うちの中へ入れるなどといった。（水沼）

この日のことをよこれどしともいつた。（水沼）

この日すすとりをして、家中をきれいにして、正月用のお松を山へとりに行つてきた。大体、女しようがすすとりをし、男しようが山へお松とりに行つた。

この日は第一回のとしとりだといつた。女しようと馬のとしとりだともいつている。（水沼）

十二月二十五日—二十七日の間に松迎えをし、二十七日は「女と馬の年とり」という。

お松は三階、五階の枝松を選んで家のツボ山など日影において、オサ

ゴと頭つきを紙に包んでお供えした。このときの松はどこ家の山のものでも自由にきてきた。（下郷）

松飾りは二十八日から三十日までにし、一夜飾りはするなどいう。飾りつけは神棚からはじめ、最後は便所ときまっていた。門松だけは竹もつけ、杭は栗の木が縁起がよいという。お松には全部コジッコメをつけた。コジッコメは夜なべでつくり、神社やお墓、道祖神などにも奉納した。（下郷）

二十七日に門松を切つてくる。ひとの山へとりに行つても文句を言う人は居ない。三階松を切つてくる。（七ツ石）

ススキで松、神棚を掃除するが、十二月の場合は個人個人でやり、日はきまつていない。村で大掃除をするのは、十一月の氏神祭りの前である。（六区）

年取り、年に五回もあつて、一月六日、一月十四日、二月節分、十二月二十七日、十一月三十一日を年取りという。（亀沢）

この辺でとしとりといふのはつぎの機会である。

十二月二十七日　おなんしようと馬のとしとり  
十二月三十一日　おおどしといふ。

一月六日　六日どし  
一月十六日　まるめどし

一月二十日　しまいどし（水沼）

## 歳末諸事

餅つき　十二月二十八日—三十日の間につく。

一夜餅はつかないといつて、二日前までの日のよい日に餅をつく。九日餅はいけない。（亀沢）

もちつきは、三十日までにます。たいていの家では、家族一人に一うすづつとお客様としてもう一うすづく。お供えもちは、娘たちの大きさ

なものをしんじん棚へ一つ、小さなものを井戸神様、川神様、ゑびす様、

おしほう様、稻荷様、釜神様などに一つずつ進せる。また、十二かさねをとて、毎月の神様に進せる家もある。(川浦)

お供え餅は十二かさねどる。鏡餅は大きいのを一つ。神棚へ五かさね、

その他、仏様、便所神様、川神様、おいべす様、稻荷様などに供える。

(六区)

一夜もちはつくなどか、一夜かざりはするなどい、もちつきとおかざりをこの日にした。

むかしは、アワモチをいた家もあった。

この前に、非農家の人が農作業を手伝ってくれた人に対しては、アキアゲとして、もち米とかうるち米などをやった。

正月かざりのお松は、近くの山(どこ)の家の山でもよかつた)へ行つて、松の枝(三階松など)をとつてきた。(水沼)

三十日には大体する。「夜餅はしない」「十九日にも大体しない。(岩水)

餅つきは二十八日から三十日の間につく。このとき臼のまわりに藁を敷き、窓の前に塗を三つ山あげ、餅つきの終りに七ツ数えてつく「七ツ何事ないよう」と毎回手あわせをする。(下郷)

オシメ 十二本作り座敷の四方のカモイに下げる。三本ずつ四方のカモイにやる家と十二本まとめて一ヵ所に下げる家がある。(岩水)

お歳暮 親の所へ必ず新サケを持つて行く。親からはミカン一箱とか、相当のもの返す。(陳田)

親が丈夫なうちに、親のところへは歳暮をもつていくものだといわれている。仲人のところへは、はじめての年ぐらいに、歳暮をもつていった。(水沼)

### 三十一日

イワン、ミカン、串柿、こぶ、ゆず、手ぬぐい、カネを包んで進せた(関沢)

仮さまへはお供えを上げない(築地)

うちは上げる。(七ツ石)

お飾りとしてみかん、柿、栗、昆布、するめ、いわし、羽根、だいだい、まり、ふき、白扇、麻、水引きなどをさげる。

「代々はねくらまわってふつきにくらす。」などと縁起を祝つた。白扇は末広がりの意味である。

昔は、お飾りは必ず奇数になるようにした。するめは五枚ときまつていたが、今は一枚。

一夜飾りはいやがり、三十日にはまつていた。(六区)

男の年取り 三十日は男の年取りといつてお飾りを供える。

大年(オオトシ)は三十一日のこと(下郷)

### 三十二日

大晦日 風呂に入り、酒を飲んでソバを食べて年取りをした。(亀沢)

十二月三十一日は、おおどしといって、男の年とり日である。

また、いちばんおしまいの年とりとして、まるめ年とりともいう。ま

るめて最後、物事をくるという意味なのだろう。(川浦)

大晦日に早く寝ると白髪が生える。(六区)

三十日までに正月の支度ができるから三一日は男衆は山へ行つて働いてきた。(中石津)

大晦日を大祓(おほはら)という。この日は、除夜の鐘がなるまでおきていろといふ。除夜の鐘がなればやすんでよいといつた。いろいろで火をもっていた。この日のために、くわねっこをきつてきておいて、それをいろいろで一晩中もしていたのである。

朝になるとおぶすなさま(生まれおぶすなさま)むらの鎮守のこと)(  
へまいりに行つた。(水沼)

正月飾り 三十日までにお棚かざりや餅つきをすませる。(関沢カジヤ)  
中石津)

大みそかには家の主人が便所で年とりをする。座敷にいて借金の言いわけをするわけにいかないので、こちそゝ作って便所に持ちこみ、そこで年とりをする。(二三区)

大みそかの晩にホイトが次のような唱えごとを言ひながら門づけにやつてくる。「大みそか大みそか、めでたいやめでたいや、「一夜明ければお門松、二にはにっこり庭の松、三がい松のその下で、ちいさんとばあさんがお酒もり、悪魔をはらって西の海へおんはらい、おん厄はらつておめでとう」(二三区)

# 口頭伝承

## はじめに

陣田で、「(筋分の)鬼の豆を、なる神様が最初に鳴った時に食べると、なる神様が落ちない」という話を聞いた時、ふだん聞きなれたかみなり

様地帯より、幾分古い地帯に入ったような気がし、期待に胸をふくらませたが、私の聞いたのは、光り物の話だけであった。

しかし他の地区では、伝説には、藤鶴姫・椎田栗毛・河童など、昔話には、蚕の体にある馬蹄形の紋や、シン・タケ・ナ・ニワの休みのいわれを伝える蚕の始め、ほとぎす・バオウドリ・十一などの鳴き声のいわれを語る話など、また、精だな石・こまがた石・いくめ・須賀尾など、興味ある伝えも採録された。



藤鶴姫の墓(右の自然石)  
(撮影 近藤 義雄)



(撮影 鶴丸十九一)

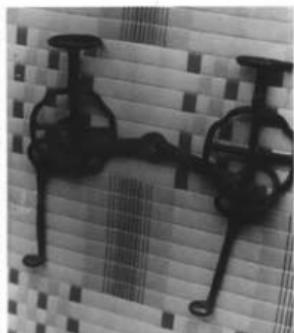
諸々の中に「升の中に牡丹一つなんぞ、いろり」とあるのは、かつて、利根でも聞いたことがあるが、「升の中に毛虫一匹なんぞ馬」というのは、始めて聞いた。馬屋が升のように四角だからという説明だったが、その馬屋には、すでに馬はいなかつた。(上野 勇)

## 一、伝説

藤づる姫の話、高野谷戸のかぎり坂(カキ坂)に藤づる姫の墓がある。この姫は英輪落城の際越後へ落ち延びようとしてこの地まできて、味方

が追いついてきたら敵方かと思い自殺して死んでしまった。土地の人たちはそれを哀れに思い墓をつくった。そのときについた家来の佐藤氏は今までこの地に住みついている。(下郷)

椎田栗毛、熊谷次郎直実の乗馬となつた椎田栗毛は椎田の出である。一宮合戦の後故郷の椎田に帰つて来たが、すでに生家ではなく、土城谷戸までひき通して、枕石のところの清水を呑んでいた。村の小供がみつけた。見ると、腹に巻いた布が血によごれていた。子供が「はらわたが出ている」といつたところが、馬はバツタリ倒れた。その枕になつた石を枕石という。村人は



権田栗毛のくわと伝えるもの  
(全透院藏) (撮影 郡九十九一)

ここに馬頭観音の

石祠を建てた。古いものと新しいものとの二基ある。

古いものに「元録

三年」などの銘が

ある

その馬は不思議な馬だった。草津

導者が飼っていた

が、マゼンボウ

な馬だった。それを熊

をしてあるのに、毎日相馬が原まで行って遊んで帰ってくる。これを熊

谷次郎が買ったのである。(二区)

小栗上野介とふつぶし騒動 小栗上野介については、金を樽に入れ

て、味噌だといつて送ったとか、金を古井戸にいたとか、金の延棒を古井戸にいたそその上に避雷針をあげたとか、その井戸を壊つた

ものが、延棒を二、三本もって横浜へ行き金に換えて来たとか話が伝

わっている。細尾に「戸小栗とつながりをもつた家があった」という。

例の騒動のときは、川浦では毎戸一人ずつ小栗上野介にむかわなければ、オニサダというものが来て川浦を焼いてしまうという布札がま

わった。そこでむらの若い男が殆んど石子でいたようなかたちで参加した。威勢のいいものたちが宮原のこちら浅間神社の近くの川原にあが

た。カッパが馬の尻尾につかまつて、尻に手を突こんだ状態で車の中まできた。それを見て主人が殺そうとしたら助けてくれというのでやめた。殺さない代りに、膳を必要な時に貸すことを約束して帰つて行つた。その

後「せんだな石」の上に十人分のせんを出しては貸していたが「せん粉

失してから貸さなくなつた」と伝えられている。(七区)

それがカミの方まで荒しに来て、田や畠は散々だった。関係のない人間

は殺したくないということだったようだ。(川浦)

軍用金 勘定奉行であった小栗上野介が、軍用金を大明神山にいた

という。しかし、次の儀の話をとかなければ、軍用金の在り場所はわからない。

「夕日さま 朝日かがやく その山に 金が千枚、銀が千枚、雀の足

跡 三足チヨンチヨン」

腹切り石 大明神山に城をきずくべく、堀越下總守が三沢のカラボリを掘つた。しかし堀に水がうまくひけないのでいるうちに、敵に攻められてしまつた。下總守は馬に乗つたまま、山からとびおり、切腹して果てた。

そこが腹切り石である。(六区)

行人塚 昔、行人様が来た。村人が「カラスが荒れて困る。」といつたのに、いたずらにオシッコを入れた

うちは、水を入れてくれ」といつたのに、いたずらにオシッコを入れたら死んでしまつたといつた。それが行人塚である。(六区)

石芋 三倉の下郷に、里芋に達えねえが固くて食えねえ石芋がある。

昔弘法様が、くんろつてつたら、石芋だから食えねえと、松の木に来て、ぶつちやつたら、弘法様の戒めで石になつた。(長井)

カツバの話 矢陸で田植が終り、川で馬を洗い家の馬を連れて来たら、カツバが馬の尻尾につかまつて、尻に手を突こんだ状態で車の中まできた。それを見て主人が殺そうとしたら助けてくれというのでやめた。殺さない代りに、膳を必要な時に貸すことを約束して帰つて行つた。その

後「せんだな石」の上に十人分のせんを出しては貸していたが「せん粉

失してから貸さなくなつた」と伝えられている。(七区)

権田の産土様のうらの岩の川原であつた話。カツバが鯉に化けたり、

金魚に化けて川をおよいで見せた。それを見た、権田の局長さんの家の

久助という子が家にバケツを持ちて来て、家の人が昼食だから食べてから行つて取るようになつたけれど逃げるからといい、一人で川を行つた

ところカツバに川の中に引き込まれ、けつめどをぬかれてしまつた。こ



座主の森（石上）

（撮影 近藤 義雄）



伝、堀部安兵衛の作庭（金透院）

（撮影 近藤 義雄）

り四十頭の馬を揃えて一番番頭が出掛けて行った。途中で暗くなつたので大きな屋敷に馬を止め、荷を下して頼み込んで泊めて貰つた。

狩野芳崖のニワトリの絵がかけてあり、その家の奥さんは「毎朝一番から三番まで時をふく」と自慢した。男はそんなことはあるまい、と信用せず、奥さんと賭けをする事になつた。ニワトリが鳴いたら藍を全部やる約束をして四十頭の藍を全浦とられ、手ぶらで帰ってきた。

やしがつた柑屋の女房はきものの胸に木綿針をさし出掛けで行き、例の家へ泊めて貰つた。思つた通りに奥さんと賭けっこになつた。柑屋の女房は奥さんが眠るのを待つてニワトリの絵のノド笛に針をさしたらその朝は時をふかなかつた。

女房は藍を全部返して貰つて帰ってきたが數えてみたら馬

は三十九頭しかいなかつた。

それで三十九じやもの花じやもの、という言葉がうまれたそうだ。（カジヤ）

狼に助けられた話 祖父の五代前のおばあさんが熊野神社のある峰か

らきていた。あるとき、その帰りに狼の群にいきあつた。すると一匹だけ早くきて羽織を喰えさせて橋の下につれていくので、しばらくすると四

十頭ほどの狼が通つていった。不思議なことがあるんだと言ひ伝えられていた。（下郷）

大蛇 川浦の山には大きい蛇がいる。床屋の常じいさんが、日陰で下

刈りをしていて大きな蛇を見て逃げ帰つたことがある。（戦前）

戦後になってジョウさんという人が、山仕事から帰つて来ると、道上の草の中をヒュウヒュウという音がするのでぞいでみたら大きな蛇だつたという。追いかけて来るよう見えて本気で逃げて来たが、

三十九じやもの花じやもの ある柑屋で染料の藍を貰いに行く事にな

カラス牛王 昔の者の話では、烏川の水源は、ちょうどカラスの口のような所から水が出ていたといい、ここへ権現さん（熊野神社）から水くみに来て、この水で刷り上げたものがカラス牛王のお札という。十二月になると、姉さまからシントさんがまわって来て、他のお札と一緒にこれを配つて行く。（水源のカラスの口のようなところは後に下口が欠けてしまったという）（川浦）

## 一、昔 話

蚕の始め 昔どこがあるところに、「一もり長者と二もり長者が住んでいた。二人の長者は宝競べをすべし」ということになった。一もり長者は千両箱をたくさん並べて出したが、二もり長者は貧乏で何も出す宝がなかったので、子供をたくさん並べて出した。この宝競へを見に来た人々は、千両箱には見向きもしないで、「一もり長者の子供たちをいい子だ」とか「かわいい」とか何とかいってほめたたえた。そこでこの勝負は二もり長者の勝になってしまったので、「一もり長者はがつかりして死のうと思った。その様子をみた番頭が主人を懲めて死を止まらして神様にお願生をかけて子供を祈った。こうして生れたのが玉代の姫である。しかし玉代の姫は寿命を十六歳しか与えられなかつたので、一もり長者は一生けんめい育てた。

いよいよ十六歳のある日、暴れ馬が来て姫を蹴殺してしまつた。一もり長者は悲しんで幾日も幾日も仕事もしないでほんやりしていた。ある日、やっぱりばんやりして桑野が原に行つて考えに沈んでいると、膝に、白い虫が八匹、黒い虫が八匹とまつていた。この虫は、何をくれても食わなかつたけれど、桑の葉をとつてくれたなら食べた。これが蚕の初まりである。蚕の体に馬蹄形の紋があるが、これは馬に蹴られた時のひすめの跡である。黒い点が十六あるが、それは玉代の姫の死んだ年である。（一区野口まつの氏）

蚕の初め 昔、まま母が、ままつ子の娘をみじめに育てていた。ある時、獅子の洞穴に捨てたけれども帰つて来てしまつた。つぎに竹籠に捨てたがこれまた帰つて来、舟に乗せて捨てたけれども帰つて来てしまつた。最後に殺して庭に穴を開いて埋めた。その穴から小さな虫がたくさん出来て蚕になつた。蚕の休みをシン、タケ、フナ、ニワトというのはそういうわけである。（野口まつの氏）

五日の節供 昔あるところに母と娘が住んでいた。大蛇が娘に化けて夜な夜な娘のところに通つてくる。ある時母親が娘に「てめえのところに毎晩くる若者は誰だ」と聞いた。娘は「大蛇だ」と答えた。母親は、「それでは、長い糸を針につけ、その針を若者のきものにさせ。そして糸をほどぐしてやれ」と言つた。その夜娘は言われた通りにきものの裾にさしておいた。翌朝、糸をたぐつていくと洞穴にいた。中で、声が聞える。「みろ、てめおは、いやないなといつたのに行つて。とうとう命をとられたぞ」「命をとられてもいいよ。もつ世つきあるんだから」、「馬鹿あいえ、人間というものはほりこうで、よもぎとしようぶの湯をたつて入れば出でしまうことを知つてるぞ」と。そこでその通りにしたら、蛇の子が七たらいも出で來た。どこかに七たらい村という村があるそうだ。（野口まつの氏）

ほととぎす 昔、ほととぎすの兄弟があつた。兄は首であった。お母さんは、弟の方には山芋のアンズ（あず）ばかりくれたが、兄は、弟にいいところばかりくれるんだんべえといつてきかなかつたので、弟は、それならどうでもしてみるといつた。兄は、弟ののどをさいでみたら、アンズばかり出て来た。それからほととぎすはオトガノドツキッタと鳴くようになつた。（一区）

バウウドリ 片足は赤く、片足は黒いバウウドリという鳥がいる。あるとき娘がいなくなつたので、その話を聞いた親のバウウは、あわてて片脚だけにわらじをはいて探しに出かけた。いくら探してもみづからないので、それからは鳥になつて娘を探しているのである。（第一区）

十一十一になる子がいなくなつたので、「十一、十一」と鳴きながら探しているのである。(第一区)

笑い話 嫁と姑が仲が悪くて、嫁が家にいて、姑が雨にぬれてきたので「どこから降らましたか」と聞いたら「どこからくる、天から降つただ」と姑が言つた。(七区)

うでまんじゅう キンマン(金満家?)で大尽がいた。物貰いがきたので作番頭が、うでまんじゅう一つやる所を半分自分でとつて、物貰いに半分やつた。

十五夜に片割れ月はなけれども」と物貰いが言うと番頭は仕方なく「雲にかかるでここに半分」と言つて残りの半分を渡した、そうだ。(中石津)

### 三、怪

#### 異

キツネ 山ウサギを五ひきほど背負つて夜中に帰つて来たところ、十二さまの坂のあるで妙に背中がさみしくなり、変な気分になり、足音も早くなつておかしいなと思ったが、山の中のことなので、もっと人家に近い所まで行ってからとがまんして、ようやく人家に近くなつた所でふり返つてみたところ、背中のウサギにキツネがとついていたのでおどろいてひと声怒鳴つたところ、キツネの方もおどろいて川原の方へ逃げて行つた。そこで一日さんに近くの家へとびこんでしまつたが、こんなときにおどろいて種物を放り出せばキツネにまんまととられてしまうのだろう。(川浦)

キツネ火 昔は闇の晩に、山の向うの方をいくつものあかりがちよろちよろするのが見えたものでキツネ火だといわれた。(川浦)

キツネツビ とかんと一つでかいのが光る。そして順に小さくなる。そういう時には、キツネが足もとにいるといふ。(六区)

キツネのヨメドリ 横田の方の川向うで提灯がついたり消えたりして

道なりに動いているのがよく見えた。(岩水)

キツネ 裸になつて井戸に入つていたとか、グルグル歩きまわつて最

後にサンマやイカをとられた人が多い。キツネにばかされたのである。雨のショボシヨボ降る晩に蛇の目傘をさした女が、浅間神社付近のうら寂しい所を歩いていた時にいたので、てっきり出たと思った。よく見たら近所の人であった。こわいと思うとそうに見えるのである。(岩水)

きつねつき 赤宿の七十八才のおとりさんは、きつねに化されて細田の山で一晩帰らなかつた。村の人が見つけに行つたら、あなたかそうに眠つていた。化されたときは、麗物を片方ぬいで、片方をはいていると伝えられていたが、その通りおとりさんも片方だけはいていた。(七区)

角落のお天狗 お天狗さんは、女人禁制で、現在四十代以上の婦人は登つたことはなかつた。三十才くらいから下の人は登るようになつた。(川浦)

お天狗さんの笑い 静かな夜の丑満のころ、お天狗さんが、人間が笑うように笑つてみせることがある。そんなときは、お天狗さんのごきげんがいいんだろうという。(川浦)

天狗さんの遊び場 三つ又になつてゐる木は、天狗さんの遊び場だから切つてはいけない。

六尺から一丈くらい上がつたところが三本になつた三つ又の木を切ると不幸がおこるといわれ、けがをした人とか、死んだ人がいる。ミツマタ沢という所には、村有林のあるところに大きい三つ又の木が切らずに残つてゐる。(川浦)

天狗さん 昔(明治末)山の下刈りに頼まれて山の中に小屋をかけて寝泊りしていたところ、朝になつて一緒に仕事をしていた年上の人から「昨夜、天狗さんが木を切つてみせた」といわれた。だれもいない山の中、木のけえる(倒れる)音がしたといわれ、たまには天狗さんがそうしてみせるといい、木の倒れる音がするので調べても何もない。(川浦)

光り物 十四の正月の十四日だつた。わしら方は、正月の十四日には

厄年つていい、厄年に当るものは、みかんを買って行つて投げる。厄落しというのをした。それで子どもが皆そこへ、みかん拾いに出るわけ。捨つてくれえと思って、まつ先を行つたわけだ。そしたところが、後の山から、このくらい（三十軒くらい）の光だまが出て、それで向うの烟へ行つてぶつかつた。それでたまげて、みかんを拾うべらりやしねえ、うちへ帰つて来たら、十五前にそういうものを見るというと、一生見るといわれた。それからずいぶん見た。

十七の春、おやじさんが、山へ仕事に連れて行つた。そこで川向うの岩山の下に泊りこんだ。けちなごとして泊るんだから、寝られやしねえ。それでいくらかたつてから、向うの上野原という日かけの上に、いい加減の雑木山がある。そうして、そこへ提灯が二つ三ついたんだ。不思議だな、あんな山ん中、提灯がついた。そのうち、二十も三十も提灯がついたやつたんさ。ずっと上の方へ、ついちゃつた。そうすると、上から二つ三つ消えたり、ついたり、まん中がつたり、消えたりして、きれいさ。あれがきつねの嫁どりというわけだつたんべえ。ここで一回見た。それきり見ない。一人じやない。みんなで見た。

そのあと、夜中頃、木を切る音がしたんだよ。ワリワリガラガラ、デシンつて、それだから寝りやされねえでけえ木の音がしたんだよ。お天狗さまだ。その山がおえてから、みやげいといつた。それでお祭りだか、何だかで、家へ来るわけだ。それで、上のにいつあんと一緒にだつた。おやじさんが、大戸のあらい屋で、油揚賣つて、しようとくに入れて寄こした。しようびく入れて来ただから、しようびく入れてくれりや、魔物が取れねえつて、それで忠治地蔵の向うのとこへ行つたところ、こしょげいとへ登る道が、あそこにある。あれが、しのやぶつたとい。そこへ来ると、誰か提灯つけて、こしょげいとへ登るもののが、話しあつた。それが段々大きくなつて、一丈も一丈も、火が上つた。きれいだなつてわけで、それでおれが先に立つて、こち帰つて來た。ふり返つて見ても燃えてねえ。その火の手のこと暗闇が、それだけ火の手

が上りや、いい加減明るいわけだ。それが、やしんとして、明るくも黒ともありやしねえ。火の手だけ上つてある。これが、きつね火つていうのかな。あしたげ来て見りや、へえ焼いたが焼かねえがな、判らな。つぐ朝通つて見たら、何の跡もなかつた。

おらが若いいよの時は、毎晩のように遊びに出た。わいわい騒いでいるだけだ。亀沢のところに、百鬼糞糞塔というのが、あらいのう。あそこのところへ来たら、亀沢の天神様の前の田圃の中に、さしわたし一メートルくらい、高さが十メートルぐらいあつたんかな。まるで火の柱が立たつちやつた。おん柱つてことをいうけれど、このようなものなのかな。それが段々上方から消えちやつた。

それからまた夜遊びに行って、おれとやいつわんと二人でいた。井戸つくりのところにいた。このくらいのぶらぶら提灯が、ふわんふわん、ふわんふわん、田圃の方へ走るんだ。けちなものが通るなつて見たんだ。見てる時は何ともねえが、消えしまえばさびしいやね。

それから、十五夜お月の真円づらねえ、二つも三つも寄つたよう、こんなでかい光だまを見た。

人だまつてのは、のり引かねえんだつてんだつてのう。その頃、人だまなんぎは、人が死ぬたんびに見たようなもんだ。昔はよく見た。今はどういうわけだか、見たものがない。

戦争当時、配給ものの沙汰に亀沢へ行つたら、とうさんの前の田圃の中、へえ焼いてる。長ちゃんとこ行つて話したら、あんなところで、誰もへえ焼いやなかつたんだ。帰つて来て見たら、まだ燃えているんだのう。それから、おかしなとこで焼いてるんだと思って、すんすん来る。そして桃煙のところへ来た。そしたら桃煙の真中頃で、きつねの野郎が鳴いてんだよ。きつねのわるさだ。つゞ日も行つて、へえ焼いた跡を見たら、何もありやしねえ。ケーケーって鳴く時は悪い。コンコン鳴きの方がいい。きつねは今も出る。

おれが製版に通つ頃、出口橋の入り口のところに細い新道がある。あ

そこへ入るべえと思つたら、大沢口の大曲りのとこへ、自動車がとんで来るんさ。ライトを二つつけのう。その頃自動車なんて、ほんとに少かつたんだ。それから見えた。あれだけあかしつけてりや、いい加減先まで明るいわけなんだ。それが、ちつとも明るくねえ。音もしねえだのう。不思議な自動車だと思って、それから近道の方へ入つて見たけれど、それで来るのを待つていたけれども、あんまり来ねえから、それでまた県道へ出て見たら、何の氣ぶりもありやしねえ。はあ消えちやつた。話したら、みんなで、あそこは不思議なことがあつたってな。あんなことをすんだからな。

いなびかりのかたまりのようなものが、上方から段々消えちやつた。一とこで二回見た。きつねは光を持たねえっていうが、あれは光があつたな。影ばつちがうつたんだから

中沢高次が、馬に乗つて来んだと、そしたらいい加減な、こん坊主が先へ行くんだつて。そんな馬を急がせれば急ぐ、静かにすりや静かになる。まずけちなものに、あつたもんだ。(陣田) 人玉 学校の裏のドウのヤマ(池田マケのお草—墓地—がある)で、闇夜に人土をみた。お月様のような感じであった。(六区)

ゲンゼバヤシ 大イミヨウジ山(アサマ様のあるところ)の淋しい所で、一種異様な、にぎやかな物音がする。誰かが来ているという。(六区)

體だな石 烏川に體だな石というのがある。あらしが来そうになると、この石の上に體だをして上げておき、食べものがなくなれば河童が来て食つたのだからあらしは来ない。残つていればあらしが来るぞといつた。大水が出た時にもした。何日も雨が降つて、農作物に悪いことがおりこうになると、ふつうの酒肴で、オヒラまでつけて一人前の體だをして供えなくならないときは何回でもやつた。(川浦)

## 四、命名

せんだな石 川の中にあり、この上にちそくを上げておき、カツバが食べればその年は大水がなく、食べないと大水になるといわれている。こまがた石 矢陸のおこしかけ様が馬に乗つて飛んだとき馬の足あとが石に残つたのでこの石を駒形石と呼ぶようになったと伝えられている。

女石 女の性器に似ている石  
こぶ石 赤竹にある。

おお石 穴があつて、その穴から水が出ると雨が降るといわれていた。

(七区)  
石についての伝承 タツ石 ナル石(上ノ久保の奥にあり、手を叩くとなる)ユルギ石(小倉)ゴンゾウ石(学校の前、ゴンゾウがシラミをとつていた)ハラキリ石(大明神山にある)イボ石(川田橋の近くにある)ナツツ石(石津にある)(六区)

鳥川の由来 鳥川の名の由来は、その源流が、山のかつこうが鳥のくちばしのような鳥口という大きな岩から水がしたたる所から始まるところだらど説明される。近くからは鉄籠石がでたという。そこへは、尾根から行くのが常道のようだが、下から登つたのでさんざんのめにあつた。案内役の熊狩りの名人のいのには、ススキは分けて歩くのではなくて、これの上を歩けということだったが、慣れぬものには上手くいかない。森林組合の植樹の際にも入つたが、大きな熊の足跡があつて往生した。(川浦)

蛇測 無師に追われた鹿が川の中へとびこんで逃げるとき、鹿の角が竜のように見えたのでこの名がついた。(川浦)  
おう穴 なめ川と鳥川のぶつかりから、なめ川をのぼった所にある。石が流れようとおもつて穴から出ようとしても、石がどぶの中に入つてぐるぐるまわつて掘りぬいたものだ。潮がひとまきまでいる二~四メートルの深さの所で何か所がある。どんな大きな石でも行つたり来たりしていちどはいった石は出たくも出られないから丸くなつてしまつ。

そこには、また大きなイワナがいたものだ。（川浦）

いくめ 横田の奥の地名で、弘法様が来られ、これより奥には行くま  
いと枝を立てられたので「いくめ」と名づけられたと伝えられている。  
又、上のくぼには同じく「まい」としたので「いくまい」というところ  
がある。吾妻の須賀尾は、頼朝が草津に入湯に行く時レブラをかくすた  
め顔を手拭でふうこう（頬かぶり）してきたが、ここで手拭をとり素顔  
になつたので「須賀尾」と名づけたと言われている。（七区）

陣田 頼朝様が寄つて、陣を立た。（陣田）

マタロクタイラの地名の由来 マタロク様というバントがいて、裏通  
りを干涉したのでこの地名がある。（川浦）

雨降り田 山三の田植えだから雨が降るのはあたりまえだ、マルヤの大  
田が雨降りだ、などといった。（六区）

川浦の地名 神堀、梗ノ木、梨子本、梨本、桑木原、若林、桐木堀、桑

本、木ノ下、稻荷木、三木本、宮原、鳥居平、坊塗、諏訪平、寺の平、高尾、  
東高尾、中井戸、井戸入焼塚、焼ス、溝平、内手、堀之沢、下川原、北

上の山、西林、大峯、後口沢、唐堀、桑寺（タワシ）明神平、古城、富  
士山、岩穴、大蕪、石津、下竹林、小橋、広町、四ツ目町、下通、三ツ

丸、高芝、中川原、久根ノ内、湯ヶ沢、西原、三沢入、猪尾（イモウ）、  
水妻（ヒヅマ）、鼻曲、鳥口、滑川（ナメカワ）、毬ドヤ、北大峯、若林、

劍ノ峰、角落山、中垣、矢狭、犬ナカセ、鷹ノ巣、今朝丸、仁田川原、  
谷平、古米沢、白沢。（七区）

権田の大字名 花輪、鉄火、高座、水有、押平のことを略して、「ハナ、  
チツ、コウ、ミズ、オシ」という。また、水有はミズワリ、押平はウス  
ンテエラと呼んでいる。その他、上ノ久保、元村、下平などがある。（六  
区）

ゲート 倉渕にはゲートという地名がある。

下郷には七ゲートあるという。三の倉のコーヤゲート。花輪の奥の矢

ゲート。学校の上のゴンダゲート。（六区）

屋号 カマヤボウヤ（テンガ）の柄や農具一切をあつた、マスヤ、  
シヤガンヤ、マルヤ、カナグツヤ（路鉄）などの屋号がある。（六区）

あだ名 カドカクさん（四角の家で、骨折などをなおしてくれた人）  
犬松つん（子供がないので、犬が大好きで大きな土佐ブルなどを飼  
っていた人）（六区）

鉢砲玉さんは川浦の人で、本名原田六三郎。林野庁の関係の仕事を  
していた。

酒を飲むと旅館の二階などから、子供達に鉢砲玉をまくのが癖であつ  
た。よく権田館に泊っていた。戦争中は米を一升腰につけていた。一面  
働き者で、前橋に行くときには三時起きをした。酒を飲まない時はとて  
もおとなしかつた。（六区）

## 五、謎・謎・その他

謎 彼岸芋のバカ肥（一区）

おおく貧沢いようと荒神様に怒られる。（陣田）

「芸者のまこととセキダの裏金は、金がなくなりや切れたがる」（七  
石）

「鮎は瀬に住む鳥や木に止る、人は情の木に止る。または情の下に住  
む」と言う。（乾屋）

大峯の三東雨 三東かみなりともいう。大峯山のほうにでたかみな  
りは早くくること。ムギを三東まるかないうちにやつてくるという。こ  
れは権田でいうことである。

権名へはじまるかみなりは鳥渕（はこない）といわれている。（水沼）

△ひとり子の一人旅とかけて何とく

もらひのないしることとく

心はあんじるばかり

△峯の桜とかけて何とく

天狗の面とく

心ははながたかい

△沢の桜とかけて何とく

おかめの面とく

心ははなが低い

△はるともはるともはり天井

これこそ誰にもとき得ねえ

天道さまではとき得る

それは水とく

(一区 野口まつの)

馬(馬屋が四角だから)

圓炉裏

鍵竹へえたり出たりするから(陣

削れば削るほど大きくなるものなんぞ

節穴

升の中に毛虫一匹なんぞ

升の中に牡丹一つなんぞ

お竹さんの腹くだりなんぞ

人を批評する言葉

オツチヤン 人並でない。またオンジイ。

千三つ うそつき。

万ガラ よくしゃべる人。

セツコウガイイ よく勤く人。

イツコク 自己主張のみする人。

サンバニコミヤラレタ 足りない人。ぬけ作。産婆に「まかされたの

ギンナガシ きれいにかざりつけた人。(第一区)

# 芸能

## はじめに

広い倉渕村の芸能調査を、決められた時間の中で行つたみた。全地区を一人の調査員では少々無理か知れない。未調査の地区については、時をうつして行つ予定である。

今回の調査で収穫たたのは、川浦の獅子舞である。三四だらの獅子であるが、祭典当日は、午前は獅子祭で、午後神社境内に舞座を設けて、神楽獅子を行つ。これは三番そとの系列のものと思われる。①演奏者の前にステレを設ける。②舞座に幕をめぐらし、その中で舞う。③カンカチの顔に深いクマドリをする。④大胴が加わる。

これだけで三番そとの流れをもつと判定はむつかしいが、機会を見て実演を通して、調査を深めてみたいと思う。

また川浦の獅子とは反対に、株名神楽のように歴史的に浅い上に、笛方の死亡により現在、その笛方の生前の笛を録音で収録しておいたものの用いて、祭典の神楽奉納にまに合わせており、更に六名という少人数の神楽の伝承者が、ギリギリの所でこの神楽をささえているのを見るとき、現在の芸能のあり方を見せつけられた感がある。

更に民謡やわらべうたについては、樂譜化できる程の正確なものは採集出きず、今回は芸能だけを報告書にのせる。

時をうつして、倉渕の民謡やわらべうたについては、私なりに調査を行ひ以後まとめて考えである。

古衣神社の祭典、十月十九日に行われる（十月十八日の晩）、この獅子舞は、水沼、中尾、中郷の三部落協同で行われる。

三四立ちの獅子で、（前獅子、中獅子、後獅子）、この地区に生れた長男でなければ、かつては獅子舞に参加することはできなかつた。稚児獅子で、十二才から十五才が中心になつて行つて来たが、昭和三十八年頃から四十七年まで中止されたが、昭和四十八年より青年衆によつて復活し現在に至る。

かつては獅子組と呼ばれる組織があり、中年の者が指導者となつて教えた。指導はよく厳しく、舞の練習などの時も足が思うようにならぬかないと、指導者にけとばされた。

獅子舞を出すには、十月一日に村の世話人が集つて、世話人会議を持ちその結果、その年に出すことを決める。獅子舞の練習は、十月五日より夜間行われる。獅子舞の練習を行つ宿は、各字の大きな家を一晩おきに廻り持ちで行つた。現在は三区の公民館で練習する。かつては夜八時頃から夜中まで行つた。練習が終つたあと、あづきの入つたカユが出る。

かゆは宿になる家で煮てくれるが、その出費はすべて宿で行つた。

樂器

腰太鼓

ササラ

笛

カンカチ

## 一、水沼の獅子

このほか付帯物としてオンベ一本（二尺程の青竹につける）また、獅子頭の後に付ける紙を村人が欲しがる。これをもらつと、子どもが丈夫に育つといわれる。

最近は小さいオンベを作つておき、村人に与えるようになった。

祭りの当日獅子の振り出しは、宿になつた家から行い、次に神社に行き更に神社の守番の別当「軒」に行く、毎年一軒おきに行つ、別当は水沼落合の関口林造、関口広吉さんの家であった。

宿と神社は稚児獅子（子ども獅子）で、別当の家はおとな獅子を振つた。

獅子の道具の保管は、関口林造さんの家であった。

#### 曲目（舞の種類）

1 辻がため

宿で振る

2 お宮めぐり

辻がため

3 獅子の子

辻がため

4 ぎんぎやく

辻がため

5 ささぐい

辻がため

6 つるぎ

辻がため

7 うたぎり

辻がため

8 めじしがくし

辻がため

9 以上2～9までは神社で振る

10 きんぎやく

別当の家で振る

以上十曲全部を奏するには、三時間あまりかかるという。

#### 獅子舞の行列

獅子舞の行列の先頭には村役人、次に万燈六本、角万燈三本、傘は二三本計六本。続いて獅子が前獅子、中獅子、後獅子と三匹の後に、ササラ、オンベ、カンカチその次に村人となる。道中では、獅子シャギリ太鼓を打ちならしながら進行する。道の両端は大勢の村人がそれを見守る。

この獅子舞は、依頼を受けて奉納演奏に、靖国神社へ昭和三十四年に、又昭和三十二年頃、高崎市護國神社にも出向いている。

明治のはじめ上郷への獅子を伝承したが、現在五郷の獅子舞は消滅してしまった。獅子舞の道具のみ残されている。

獅子舞が終了すると「笠ぬき」といつて、直会を行う。別当の家で手はじめをし、その後ご神酒が出る。

獅子道具は直会が済み幾日か後に、別当が自分の家にしまい込み管理する。古くは別当には田畠山などを村で与え、神社や獅子道具を管理依頼していた。

別当の田を「甘酒たんぱ」と呼び、獅子舞を行つ時など、別当は甘酒を作つて村人にふるまつた。現在は甘酒ではなくお茶に変わつた。

#### 獅子舞の組織

○古　老（指導格）

○獅子世話役（大人獅子を振る人）

○子ども獅子（子どもの獅子を振る人）

○シンコ（入金したばかりの人で、獅子道具の仕事をする役）

#### 獅子の附帯目的と由来

この獅子舞は、古く越後の人々が伝えたものであるという俚伝がある。

この獅子舞は、疫病除けのためであるといわれるが、村に変り事があると必ず奉納された。古く入梅時などに雨天続きなると「天気祭り」をして、この獅子を出すと必ず天気になつたといわれる。また戦時中南京かん落やシンガボールかん落などの時も、この獅子を村中振り歩いた。ややもすると戦時中獅子舞などの芸能を中止する例が群馬県に多くあったが、この獅子舞は激しい戦時中でも戦の成果にちなんで、獅子舞を行つなど、この村の人々が、この獅子舞に深く心を寄せて来たことが知られる。

## 一、川浦の獅子舞

この獅子は三区だらの獅子である。川浦のすわ神社の春の祭典、四月

二十日にこの獅子舞は奉納される。

獅子の呼び名は、先獅子（ほうがん）中獅子、後獅子と呼ばれ、それにさらに一人（サンザさら）カンカチ一人（棒をもつ）が加わる。カンカチはじばおりにはかま、そしてかんむりをかぶる。

### 獅子の組織

獅子組に入るには、この地に生れた小学校（高等小学校）卒業した長男であつた。

1 新人（シンコ）は見学程度

2 親方（指導役）昭和の初め頃は反田米治郎、反田定次郎であつた。

3 古参役（古老人）手を持って指導する。

練習は四月五日から行つ。別当の家で行つた。別当は当時宮下弥一郎、宮下歌吉の家であつた。

けいこは夜八時から十一時頃まで行つた。酒は毎晩三升は飲んだ。親方が酒を飲んだいきおいで怒り、練習は大変だった。獅子組の者ばかりでなく、村の世話人、総代まで親方に怒られた。親方の権力はするどかった。

練習は特にきびしく、足の振り方など悪いと、けとばされたり、突き倒されたりした。

四月十日頃、総代三人、世話人十六人が寄つて会合をもつ。四月十九日別当の庭に昼過ぎ集つて、アツソソレエ（練習）をやる。村人も全員みに来る。

又万燈は竹で四本作る。だしも二つ作る。横三十三センチ、長さ一メートル程のものを神社の前に付け、それに奉納すわ神社と書く。

祭典当日の四月二十日には、別当の奥座敷から獅子を振り出す。先ず笛が道笛をひとくだけ吹く、全員タイコを打ちながら立つ。二回目の道笛によつて獅子が出掛ける。

### 行列の順

先頭はだし（世話人）次にオンベを親方がかつぐ、次に笛五人、笛頭が先頭、次いでササラ（一人）獅子三四匹が付き、カンカチ、太鼓一つ（世話人に背負わせる）次に村人という順となる。

道は静かに歩き、道笛を吹く、別当の家から神社まで一五〇メートル、石段の所で又一休み、道笛がすむと神社へ昇り、頭の鉢の合図で拝む、そして神社を一めぐりし、頭方が獅子舞唄を歌つ。

○前に来ての歌、お前がかりを眺むれば

みがき立てたる、ひえん柱。

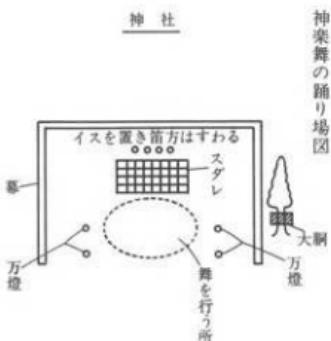
ここで獅子は、お宮巡りを振る（新人）二回まわると、又獅子舞唄で、頭がうたうこの宮の歌となる。

○この宮は、ひだのたくみが建てた宮よ  
くさび一つで四方かためた。

この歌が終ると、獅子は雷田ぎりの舞を新人が舞う、この舞を三回振る。次に一匹一匹の獅子が舞ながら、神社に札をする。以上をお宮巡りといい、このお宮めぐりがすむと、獅子で神樂舞を行つ。神社の境内に「踊り場」を作るといい、獅子の舞う場を作る。杉の木に大胴をいわいつけて打つ。

神樂舞には、獅子舞の付帯物の中に更に大胴と笛が加わる。  
はじめに、ササラとホウガシ獅子が舞う。この舞は静かな舞である。  
この神樂舞がすむと、神樂のおみきといつて、酒が一升出る。更に大どんぶりに高もりにした昼食が出る。この時昼食のくえるのは、獅子連、世話人、総代、招待者のみで、樂屋のすだれの陰にむしろをしき、その所

神樂舞の踊り場図



もんにたてても 花が咲きそろう

○七つ拍子、やれ八つ拍子  
九つ拍子に天狗拍子

この歌が終ると、朝ぎりの庭となる。ホウガン獅子が、天狗拍子の時と同じように、中獅子、後獅子をむかえる。ここで又歌となる。

○もみじ散りて、雲がたつ  
これのところは、花の都よ

この歌がすむと笛通りの舞となる。ホウガン獅子は、又まくを開けて中獅子、後獅子をむかえ歌となる。この時の歌は前の歌とちがい強い歌の方となる。(毎くいの歌といふ)

○奥山に立てた小篠のみことさは  
これのところが、花の都

○この歌が歌い終ると、獅子が荒れてくる。

○天じくの、天の川原のはたにこうそ  
千草むすびの、かりの戸をたてた  
えんが切れれば、ほろほぐれる。

次に三拍子となる。前座と同様ホウガン獅子が他の獅子を幕からむかえ出す。この三拍子の舞に優雅な舞であるが、歌がつく。

- 京からくだりの、かなえのびょうぶ  
ひとえんさらりと、ひきたまわった
- 獅子の子は、京で生れて伊勢育ち  
こしさしたは、伊勢のおんはらい
- さくらぎを、二つにひきわけ

やれ板戸の上でも、ささら三拍子

○白さぎが海のとなかへ巣を立てた  
波にゆられて、ぱつとたち揃つ

次に歌ぎりの舞となる。前座と同様、幕から獅子をむかえ入れる。この舞は笛が少なく、歌が多い。又舞が非常にむつかしいとされる。

○松にからまるつたの葉も

えんが切れれば、ぱつりほぐれる

樂器 箫 五  
大 脚 一  
腰 太 鼓 一  
カ ネ カ チ 一  
サ サ ラ 一

次の歌に合わせて舞がつく。

① これのお庭をながむれば

② こがねこくさが足にからまる

③ いざさらば、われらもちりにからまる

次にめじしがくしの舞となる。前座と同様ホウガン獅子が、幕から他の獅子をむかえ入れる。この舞は静かな舞であり笛も静かに伸びる。この座でも歌がつく。

○思いもよらぬ、朝きりかおりて

それでめじしを、かくさると申すとな

○なんばめじしを、かくしても

ついに一度はめぐり合つとな

○やくしの「こむしょがついしりて  
めじしおじしの肩を並べる

○山がらが、山がおいで里に出て  
これのおにわに、羽根を休める

以上で舞は全座終るが、この獅子舞が神樂舞と結びつき、舞座を境内に作つて行つのは誠にめずらしい。

この獅子舞が舞い終ると着物に着がえ、「千秋樂のうたい」を全員で行つ。更に親方の音頭で手うちをする。  
別当の家に帰り、直会となる。獅子頭と太鼓は新人が別当の家に持ち帰り、別当の家の床間に飾る。他の道具は世話人が持ち帰る。  
よく日カン定酒を別当の家に集つて行つ。このカン定酒は、總代、世話人だけで獅子組連の者は入らない。  
この獅子の由来  
この獅子をはじめたのは、古く猪やさるが野荒しをして困つたので、それを追ひはらうためにはじめた。  
また疫病がはやつたので、獅子舞をはじめて追いはらつた。又吾妻町の萩生から伝授したとの俚伝がある。

現在の獅子組連中

親 方	中 沢 文 五
前 獅 子	中 沢 清 他
中 獅 子	岡 田 千 平 他
後 獅 子	小 暮 幸 夫 他
笛	高 橋 安 雄 他

カンカチ

原田 三雄

サザラ

松井 留

大嗣

中沢 謙他

昭和五十年八月現在、川浦獅子組は二十名にて組織されている。又川浦獅子舞保存会が創立されており、現在会長は宮下桂太郎である。

### 三、椿名神社太々神樂

椿田の椿名神社の祭典は、四月三日と秋十一月二十三日一回、この神樂は春秋の祭典に二回出す。この神樂はこの村の青年衆によって行われる。

この神樂をはじめたのは、大正五年この村の青年十人程に、高崎市上小塙の神樂の師匠が来て教えた。(元群馬郡長野村福荷神社静野氏)

當時習つた村の青年衆の氏名

舞 丸山之峯 大川原長吉 丸山一雄

塙越平四 小池源吉 戸塙英

牧野要作 松本朝吉 丸山政次

大正三年の冬に来て教えてくれた。出発するようになつたのは、一年後であつた。座敷に天の岩戸、八またのおろち、たいつり、びやっこなど十座程であった。

神樂組に入るには、小学校終ると青年に入り、神樂組へと入る。練習はかつて高崎の神樂の師匠に習つた。青年衆の家に集つて行つた。練習中もよくやさしく教えてくれた。祭典の日は朝起り、午前十一時頃から、午後三時頃まで神樂を行つ。只一人の笛吹きであつた丸山忠平氏が、数年前に死亡し、笛の伝授者がなかつたため、録音にとつておいた笛で現在は笛吹きといふ。神樂道具は大正三年頃、村の寄付によつて新調した。かつてはその道具を、氏子の丸山之峯宅の蔵に置いたが、現在は神社の境内の収蔵庫に

取扱されている。

この神樂は、歴史的にも浅く更にあまりにも沈黙現象がはげしく、現在この神樂の伝承者は六名で、一時も早く笛方のたん生れ、この神樂の存続されることを望みたい。

謡い 岩永は親世流の謡いが盛んであった。幕末から明治にかけて塙越越順という学者が出て村内の教化につとめたことにより、岩永は文化が進んだ村となつた。

下村の塙越順と新屋敷の塙越寿之助が親世流の謡いを村人に教えた。塙越順は心学をやつた人でその子の貞俊は東京史を作り、徳富蘇峯らと民友社を作り活躍した。

岩永の謡いは本格的なものであつた。結婚式などでも他の村の人達がやるまではやらないかつた。本格的すぎて岩永の人がやると他の村の人たちがやらなくなつてしまふので。(岩永)

地芝居 明治二十年頃まで田の中に掛け舞台をして、観客席を作つて芝居をした。観客席は青竹を両方から渡して屋根の中央位でそれをしばり、ミナカワを屋根にした。カマボコ型の屋根になる。観客席はマス席にして琉球ゴザをした。

上村の塙越節太夫が義太夫の師匠であり、又室田の有名な役者だつた阪東梅松に芝居をならつた。生活が豊かだつたから冬中一ヶ月も練習した。

先代萩、忠臣蔵、朝顔日記、太閤記、鎌倉三代記などが得意な演目であつた。今でも評判に残つてゐるのは先代萩である。塙越周作さんが正岡、原田豊造さんが阿部貞任となり大変よかつた。義経が大変よかつた。奥さんが見たいなどとさわがれた人もいる。失敗談も多い。

下道のクンさんのが先代萩をした時にはハカマをひっさばいてしまつた。又、ツイタケの向う側で切り合いをして、観客から見えなかつた。田に肥料をやるショウベンヒキに行つた途中で舞台に出るということ

になり、有頂点になつてそのままいついて、芝居の終るまで燃つてこすにいたので、家の人が心配したこともあつた。

近在で岩永の芝居は評判で室田あたりから見にきた。一週間位やつた。木戸賃はとつた。マス席いくらと売り、売り出したその日に売りきれてしまつた。

キラは中之条か吾妻から借りてきた。

警察で鑑札を出す様になつてから下火になり明治末から大正初めに終つてしまつた。一人位鑑札を受けて本職にまじつてやつた人もいた。

米吉さんも一人で奥州白石崎の宮城野がよかつた。

その後はその買ひ芝居でやつてもらつた。昭和十六年頃浅間神社の昇

格祝いに浅間神社の下でやつた。

昭和二十三年頃西中学校建築祝いにも松本錦枝一座が來た。それが最後である。(岩水)

収穫期の芝居 稲のとりいれもすんだ十一月の末、芝居をかけて田園に芝居小屋を掛けた。舞台も小屋もむらのものがすべてつくつた。たいへんは二日間だったが好評のときは数日日延べする」ともあつた。場所は椎田の学校近くの田圃が多かつたが、川浦でもやることが多かつた。(川浦)

(芝居 椎田のウブスナ(椿名神社)の前の田んぼにムシロッパリの小

屋を組んで、東京ツバリの役者をあげて芝居をやつた。長井の若い衆が地芝居を習つた。陳田でも昔は、正月、二月は仕事をしないで、義太夫を習つた。(陳田)

や芝居をやつたことがある。(川浦も下の方)  
四月の不動さまのお祭りに、馬屋をとり払つて屋台をつくり、二晩ぶつづけで八木節をやつたりした。(川浦上の方)

サークス団 昭和六、七年頃の不景氣の頃管野サーカス団一行三十名をたのんで暖井地区の田の中に小屋掛けをし、寒中興行をした。木戸賃

は高崎で五十銭、室田で四十銭、三ノ倉で三十銭と安くなつたので

初日は一人三十銭として興行したが、二日目になつたら全然来る者がなないので困り、三日目は十銭均一で行なつたら満員になり、警官に依頼して制限してもらつた。それでも混乱して「オレの金だつて金だ入れろ」とわめく者があつた。当時の一日の賃金が五十銭であつたから不景気の時代には入場料三十銭は大へんなものであつた。本当は見たいのだが高いので敬遠されていたことがわかつた。これは地元の有志が赤字を覚悟で行なつたことだつた。(二区)

美咲館 株式組織になつており、一株が一枚になつていた。株主は全

回の興行が無料であつた。全株数は三十か、四十株だつた。配当金は全くなかつた。

大正六年にはじめて活動写真を、この館で上映した。年三十日間と

いう名目であったが延べが多かつた。取締りの駐在所が黙認していた。昭和初期には高崎に行つたことのない人が沢山いたので当時は唯一の娯楽であった。館のあつたところは、武藏館のうらで岩永の某家の古材を利用したものであつた。大正初期に作つた。終戦まであつた。(二区)

糸ひき歌 糸は等外 手ドロは部外 今にキカイからしりがくる(二区)

こぜ 吾妻の方から来た。吾妻の若衆が山越しに来て聞いた。金もくられた。(坊主)ハチヒラキ、又はハチビラキといわれる人たちも来た。(七

ゴゼはゴゼンボウともいい、芸者で、越後の柏崎などから五、六人で組んで、親方がついて来た。人の家を宿にして、三味線ひいて歌を歌つた。若い衆が錢をくれた。宿は決まっていない。大正時代まで来ていた。(陳田)

チヨボクレ 木魚の小さいものを持ってたたきながら、題目を語つた。家のカドを回るので、お金をくれて忠臣蔵などをやらせた。(陳田)

春駒 フロシキにふさをつけ、駒の形に輪を付けて動かしながら、蚕



簡  
島山諏訪神社社殿内  
(長さ240cm、径30cm)  
(撮影都九十九一)

の一代のこ  
とを語った  
りした。「シ  
ジの休みの  
いわれは……  
」

「春の初  
めの春駒な  
らぬ」とい  
ふ。『春駒』  
は、アヤトリ、イロハガルタ、スゴロク、モンヅケ(トツコ)、ハ  
ナアワセ。

就学前の遊び 男の子の遊びは、近所の子どもたちがいく人か集まつて、夏なら水浴びや虫採りでせみやかぶと虫を採つた。また道具を使つ遊びでは、こまやたこあけが好まれた。(川浦)

モニヅケは男の子もやつた。(六区)  
オニムシ ギンカブト(兵隊カブトともいい、ハイノウをしょった形をしてゐる、ウシ(角が牛に似ている)、イタ(板のよう)に平べつたい、カミキリ(角がハサミのような形をしている)などの種類がある。メスはみな、角も体も小さく、ダエン形をしている。

夏になると、男の子たちは山林に入つて、カブト虫取りに熱中する。木を蹴つて虫を落したりする。虫はкиりでいくつも穴をあけられた箱に入れて飼われる。箱の中にはオガクズが入つており、エサは黒砂糖などである。(六区)

祭文 山小屋にいると祭文語りが回つてきて、浪花節と同じような語り物を(節が少し違う)演じていった。

祭文は長さ五寸ほどの錦杖を持つてジャンジャン振つて歌つた。これはサキヤマが仕事していくた時、マサキリの柄が折れて困つていたのを、祭文がついてきた錦杖の長い柄を伏つてくれたので、サキヤマと縁故ができるといい、それから祭文の錦杖は短かくなつたという。(陳田)

人形 お祭りの時、前橋在の藤木の人形を頼んで来てやつてもらつたこともある。(川浦)

競馬 三の倉のシユク裏や、川浦のイモウ地区では、明治四十三年頃、競馬をやつた。優勝すると、三段ナガシ、五段ナガシなどの、紅白のボンボンが賞品として出た。

競馬をやつて、馬がいつまでも帰つてこないので、テッポウ馬場といわれている場所もある。(第六区)

# 民 家

## はじめに

この民家調査は子備調査と本調査の一回の調査を行なった。子備調査は七月二十一日、倉渕中学校教諭小板橋良平氏の御案内によつて、村内に残るおよそ百年以上経たと思われる民家十八棟を順次訪問し、外観および室内を簡単にがめさせていただき、あわせて聞き取り調査を行つた。

倉渕村を訪れて、まずおどろいたのは、トタン葺や瓦葺の明治以降に建てられたと思われる比較的新しい家々で村の民家が構成されていることであつた。このようなかで子備調査に訪れた十八棟の民家は村内に残る明治初期以前の遺構を極端にしたものといってよいであろう。

子備調査をおこなつた遺構の中にはすでに廢屋になつてゐるものや原形を残さぬ程激しく改造されているもの、本調査を最後まで拒まれたた

め、村内最古の貴重な遺構と思われながら涙をのんで本調査をあきらめたものなどがあつた。

表一は子備調査をおこなつた十八棟の民家を各大字別に整理したものである。  
本調査は八月一日～四日までの他に十九日、二十一日、二十六日の合計七日間にわたつて実施し、子備調査実施遺構十八棟のうち、改造の激しい佐藤ふじ家、調査を拒否された中島虎之助家を除く十六棟について痕跡図をはじめ詳細な記録を採取した。

本調査に当つては、多忙な時期にもかかわらず、家の隅々まで心よく開放し、調査させていたいたい各家の持主に心からお礼を申し上げます。

(桑原 稔)

## 一、調査民家の形式分類と編年

本調査をおこなつた十六棟の民家は、平面形式より区分すると三つの型に分類される。これらの民家平面の特徴および細部形式を検討し、さらに聞き取りの資料を加えて建築年代を推定し、編年表を作成すると表1-2のようになる。

三つに区分された平面形式は次のようである。

- ① 不整形四間取型（不整形田字型）  
 ② 喰違四間取型  
 ③ 特殊な間取

これらの間取はいずれも他地方において一般的にみられる形式で、倉渕村に限つて見られるというめずらしい形式のものではない。

表1 地区別の子備調査民家棟数

地区(大字)	調査民家の所有者	棟数	子備調査民家	
			権田	水沼
三ノ倉	富沢 順作・山田 勇采・塙 越太源治・牧野 弘 佐藤 ふじ・中島虎之助 上原 信吉・伊井 七郎・松井 晃	6		
及川	上野 正雄・野口 孝治・内堀 幸平 秀信・大久保和一郎・朝香 翠	3		
合計		7		
18		18		

特に①、②は農家にみられる型であり、③は店屋にみられる例である。

一般に農家の間取はもっと多彩を呈するのであるが、倉渕村における農家造構の間取は前述の2形式しか見出されず、しかも造構の年代は比較的新しい（内訳は十八世紀初期頃と推定されるもの一棟で、他は統べて十八世紀中期以降、しかもそのうちの半数が十九世紀以降のもの）。この大きな原因として当村は県の中央部と吾妻地方を結ぶ位置にあり、この両者を結ぶ道路が整備されて以来、農家の近代化が近年特に著しく押し進められたため、古い農家がどしどこわざれていった結果と考えられる。

次に各形式に属する各造構について、具体的にその様式を述べよう。

## 二、不整形四間取型（不整形田字型）

この形式はデーとジャシキ（註1）の裏側に前面の室よりも奥行の浅い室を配したもので、溯源的に喰通四間取型より古い形式と考えられる。

この形式に属する民家は本調査十六棟中一棟であった。

NO.1（図-1）は不整形四間取型として古い特徴を示すもので、調査造構中でも最古のものであった。その古さを示す主要な特徴は、デーとジャシキの裏に設けられたオクリノデーとコジャシキの奥行が極めて浅いことである。すなわちオクリノデーとコジャシキの奥行寸法はちょうど五・〇尺であり、一間未満にとられていることである。これは断面図（図-1）をみるとオクリノデーとコジャシキの奥行がちょうど下屋の幅と一致するところから、この両室は上屋柱（註2）を利用して前面の室と境を間仕切つたために、このような奥行を得なかつたのであつた。このようなところからNO.1の間仕切は構造柱（註3）の配置に従つたもので、オクリノデーとコジャシキの奥行が広くとれなかつたのもやむを得ないところであった。すなわちNO.1の間仕切は構造の影響を受けているわけで、構造の影響を受けないで自由に間仕切られた民家

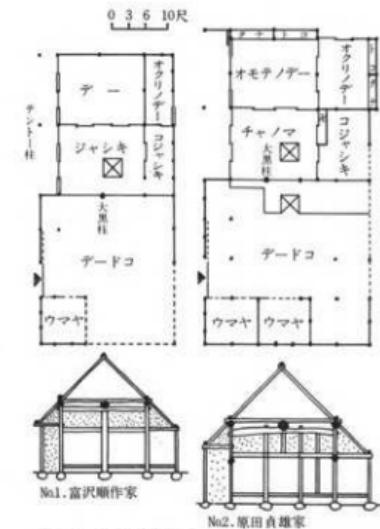


図-1. 不整形四間取型  
(復元平面・断面図)

仕切はNO-1のよう構造柱の制約を受けて設けられたものではない。それは断面図(図-1)を見れば明らかのように、構造柱に合わせて間仕切を設けたものでなく、間仕切のために必要となつた柱は構造柱と構造柱の間に力を負わない柱として付け加えられているのが判る。このようなところから当家における表側の二室(オモテノデー、チャノマ)と裏側の二室(オクリノデー、コジャシキ)との境の間仕切は構造の制約から離れて、純然たる平面計画上の必要性によって設けられたものであることがわかるのである。すなわち当家の平面計画(部屋割計画)は構造の制約を受けていないことになる。これはNO-1にみた構造の制約を受けた平面計画よりも新しい建築手法ということになる。さらに当家にみられる新しい手法は、オクリノデーの西側一間を開放し、裏間に奥行の浅いものではあるがトコ・タナ(奥行一、一五尺)を設けていること、オモテノデーにもトコ・タナを設けていること、大黒柱はチャノマで仕上げられているものの逃げがあることなどである。

当家の建立に関する記録類は全く明らかでないが、以上のような建築的特徴からおよそ十九世紀初期頃に建築されたものと推察する。

### 三、喰違四間取型

この形式の民家は本調査十六棟中の十三棟にみられた。

NO-3は調査遺構の中で最も古い喰違四間取型と思われるものであつた。当家の示す古い手法はベヤの奥行が狭いこと、オモテノダイとベヤの間仕切のうち半分を土壁で閉鎖すること、ベヤに外部に面した開口部が設けられていないこと、オモテノダイの表側に半間の袖壁を残すこと、大黒柱はチャノーナ仕上げで逃げがないこと、コジヤシキは奥行が極めて狭く、その発生段階を思われるところなどである。しかし、オモテノダイとチャノマの表側開口部に差鶴居を使用していること、デードコ上部に根太天井を張り、デードコ側の妻部に低い兜を造り、ここに幅一間

の開口部を設けて、ここより採光しデードコ上部だけであるが屋根裏利用を考えていることなど新しい建築手法も見受けられる。

当家も建立についての記録および伝承はないが、建築手法から考察しておよそ十八世紀中期頃に建築されたものとみてよいであろう。

なお、デードコの上部表側に鉄板葺の「突き上げ屋根」を造り出しているが、調査の結果当初からのものでないことが判明した。

NO-4はオクリノデーおよびゾーベヤ(コジャシキ)の奥行がNO-3よりも広くとられており、オモテノデーの表側の袖壁もなく、チャノマとダイドコ境には建具が入り、大黒柱の仕上げはチャノマとカントの併用になつていてことなど、NO-3よりも新しい特徴を持つている。しかし、大黒柱の逃げはなく、オモテノデーとオクリノデー境を土壁で閉鎖している点などは古い手法を残している。

当家はどの家でも聞く大黒柱の他に2つの柱の名称を聞き取ることができた。それは「テント一柱」と「ミヤコ柱」であった。テント一柱はオモテノデーとチャノマ境の一番表側に立つ柱のよび名である。また、ミヤコ柱はチャノマに面するオモテノデーとオクリノデーの境に立つ柱のよび名である。このよび名の由来は明らかでないが、筆者はその由来を次のように考へる。

「テント一柱」は表側(南側)で陽光を受けるのに最も条件のよい場所に位置するところから「オテント一柱(太陽)」のあたる柱が詰まつて「テント一柱」とよばれるようになったのではないだろうか。また、「チャコ柱」は床上の中心に位置するところから、「中心→社会の中心→都」というように変化して生まれた名称であろうと思ふ。

当家もダイドコ側の妻部に兜を有し、ダイドコ上部だけに竹スノコを張つて屋根利用を考えている。当家の兜は開口部の下に草葺の屋根を庇のように残しているところから、このような形式の兜造りが、兜造りの中でのような位置を占めるのか、今後の研究にまたねばならない。しかし、今のところ他の町村ではこのような例は発見されていない。

当家は建立に関する記録や伝承を残していないが、建築の特徴から一八世紀中期頃に建立されたものと推察される。

No.5はオモテノダイとオクリノダイ境の土壁が消滅し、コジヤシキでは裏間に半間の開口部を設け、こより採光するなど、幾分新しい特徴を示している。

伝承によれば当家は十一代前に分家して現在地に出たところから、

八世紀中期頃の建立と考えられる。これは建築の特徴から推察した建築年代ともほぼ一致する。

No.6はオモテノダイとオクリノダイ境の間仕切の様子を明らかにできなかつたが、オモテノダイの表間に半間の袖壁を残している点はNo.3に類似している。しかし、オモテノダイとザスキ境に長さ二間の差點

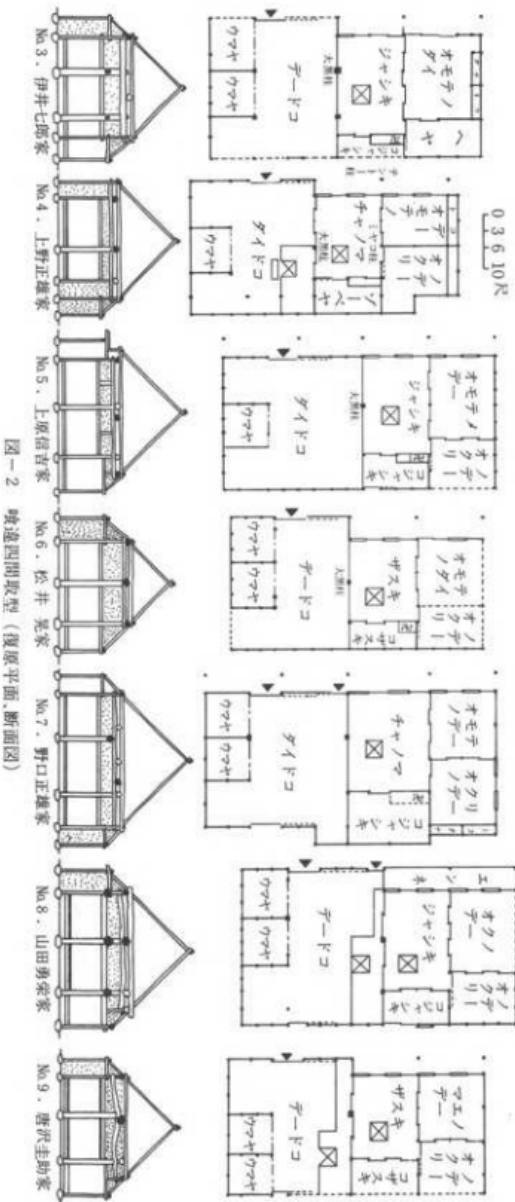


図-2 喰違四間取型（復原平面、断面図）

- No.3. 伊井七郎家
- No.4. 上野正雄家
- No.5. 上原信吉家
- No.6. 松井晃家
- No.7. 野口正雄家
- No.8. 山田勇栄家
- No.9. 唐沢圭助家

居を使用し、大黒柱（仕上げはチョーク）は逃をうつているなど新しい手法もみられる。

当家は建築に関する記録や伝承を残していないので、建築の各種の特徴から考察して、一八世紀中期頃の建立と推定する。

NO7は以上述べた四つの喰違四間取型の遺構に比べて、さらに新しい特徴いくつか示している。例えばオモテノデーとオクリノデー境の中柱を省略し、ここに差鷹居を使用し、オクリノデーではトコ・タナを設け外部より採光するため西側すべてを開放していることなどである。

当家は江戸時代、代々名主を勤めた家柄と伝え、そのことを示す資料もいくつか残されている。今日、当家は鳥川の堤防のすぐ近くに一軒だけとり残されたようにならんでいるが、昔は周囲に何軒もの家があつたのだという。そして、いい伝えによれば当家は何度も大水害にあつたが、一度も流されただことがないのだという。周囲の家は水害にあつたびに流失し少なくなつていった。また、危険を感じてより高い所へと移り住んでいった。こうして今日残つたのは当家唯一軒になってしまったという。そして湖れば寛保三年（一七四三）の大水害の時も、床上一メートル以上も水びたしになりながら流され、消失していくのだといふ。

当家の建立は以上のよな伝承に従えば寛保三年（一七四三）以前といふことになる。しかし、先に述べた新しい特徴の他に東側の妻部の比較的高い位置に兜を有すること、などを考慮する時、当家が當時名主を勤めていたため、新しい手法を一般農家より早くとり入れることが可能であつたとしても、一八世紀初期までは湖らないであろう。建築の特徴から推察する時、階層差を考慮して一八世紀中期頃の建立とみるのが妥当であろう。

NO8はNO5に類似しているが、オモテノデーとジャシキの境およびジャシキとコジャシキの境に差鷹居を使用している点や、大黒（仕上

げは併用）に逃げのある点が新しい手法である。当家も東側の妻部に兜を有しており、デードコ上部に根太天井を張つて、デードコ上部だけであるが、星根裏利用を考えている。建立に関する記録、伝承はないが、建築手法から一八世紀末頃に建立されたものと考えられる。

NO9・NO10はともに兜を有しておらず、したがつて星根裏利用を考えていない。大黒柱はNO9がチョーク、NO10はジャシキ側の一面をカンナ、他の三面をチョークで仕上げているが、両者とも逃げはある。またオモテノデーとオクリノデー境は両者とも中柱を省略している。

NO9・NO10とも建立に関する記録、伝承を残していない。しかし、同時期の建立と考えられ、その時期は一九世紀初期頃と推察してよいであろう。

NO11はジャシキ表の中柱を省略し、ここに初めて差鷹居を用いている遺構例である。大黒柱はデードコ側の一面をチョーク、他の三面をカンナ仕上げとし、逃げを有している。デードコの上部にだけ竹スノコ天井を張り、採光のためデードコ側の妻部に兜を設けている。当家も建立についての記録や伝承を残していないが、建築手法からみて十九世紀初期から中期頃のものであろうと推察される。なお、建築とは関係ないが、当家には正月七草まで「なつば」を食べてはいけないこと、および正月に子供のよろこぶ飾りをすると子供が死ぬといわれるい伝えがある。

NO12、NO13の建築平面にみられる特徴はよく類似している。この両家ではオモテノデーにおける前面の中柱も省略し、ここに差鷹居を用いている。したがつてこの期の遺構では床上における妻側の柱間は二間を示すのである。

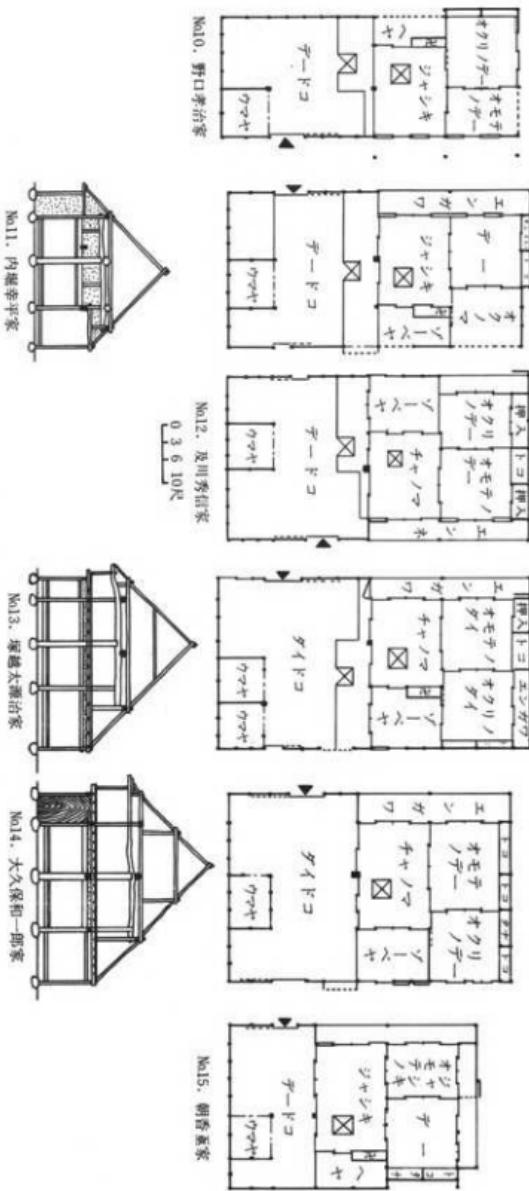
NO12は入母屋造りで建立当初、星根裏利用を考えていなかつた。今日、チャノマ上部の前面に突き上げ屋根を有しているが、これは明治に入つてから改造しては付設されたものであろう。

NO13は前兜造り（註5）といい、この地方ではあまり見ないめずらし

い屋根形式である。前鬼造りは中之条町に多くみられる形式であるところから、その影響もあってわざかではあるが当村にも前鬼がみられたのであろう。NO13は明治二年（一八六九）の建立と伝え、NO12も同じ頃建立された遺構であろう。

NO.14はオクリノーテーの裏側をすべて開放し、書院を設け、NO.13と同じ前兜造りの屋根形式を示している。当家は喰間四間取型の民家では最も新しい部類に入るものである。いい伝えによれば、当家は上野三代作という人が明治十二年（一八八九）に建つたもので、当主の親がそれを買つたために、大久保家が住むようになったのだといふ。

図-3. 噴達四間取型(復原平面、断面図)



NO.15は幕末から明治中頃まで医者の家柄として有名で、オモテノーテーの表側には式台を設けているが、これは建築当初からのものではない。建築として特に変わったところはみられないが、屋根を入母屋とし波風を大きくとったところは医者としての風格を建築的に表現しようとしたものであろう。

書院の上部のランマ彫刻に「東都・後藤恒徳」とあるところから、当家は明治に入ってからそれも比較的早い時期に建立されたものと思われる。

#### 四、特殊な間取

NO.16がこれに相当するもので、これは農家の間取を示したものではない。店屋・すなわち町屋の間取が複雑化したものである。当家は現在では店屋ではないが、間取に「ミセ」「オクノミセ」などの名称がみられる。

るところから、建立当初は大きな商店であったものと考えられる。屋根は切妻造で現在トタン葺になっているが、建立当初は板葺であったと思われる。

平の部分を道路に面し、出桁造とした統一階の大きな家である。当家はいい伝えによれば明治十年（一八七七）の建立というが、建築的にみても、いい伝えの通り建立されたものとみてよいであろう。

〔註〕

……この地方ではジャシキのことをチャノマともよぶが、ここでは調査し

た家で古くからよんでいるよび名を用いる。

2…小屋梁を受ける一番外側に位置する柱のこと。

3…実際に力を負う柱のこと。  
4…大黒柱を据える古い方法はデードコとジャシキ境の柱芯に大黒柱の芯を一致させて据えるので、他の柱より一回り太い大黒柱はその面が他の柱の面よりも突出してしまう。したがつてジャシキに骨を入れる場合は、「このとび出した分だけ大黒柱を欠きとする。あるいは骨を欠きとねばならない。このとび出した分だけ大黒柱を欠きとするか。あるいは骨を欠きといっている。このよつた大黒柱の据え方を「逃げを考えていなければならぬならない。このよつた大黒柱の据え方を「逃げを考えていないう配置」といっている。これに対してデードコとジャシキ境における他の柱のジャシキの面に大黒柱の面を合わせて大黒柱を据える方法を「逃げを考えている配置」といっており、新しい技術である。これによれば大黒柱や骨を欠かすにジャシキに骨を敷きつめることができるのである。

5…塙越太源治のように表側を切り上げて二階を造る方法をいう。



表-2 倉渕村民家造構の形式分類および編年表



原田 貞雄家  
トポーグチの大戸とくぐり戸



富沢 順作家 (No.1)  
左側にみえる「突き上げ屋根」は後補のもの



伊井七郎家 (No.3)



原田 貞雄家 (No.2)  
「突き上げ屋根」は後補のもの



伊井七郎家  
ぬけのない大黒柱（梁の当る部分の大黒柱を欠いている）



原田 貞雄家  
トポーグチのすぐ右にある便所



上原信吉家  
ジャシキ南より正面をみる。根太天井は後補のもの



上野正雄 (No.4)  
中央の突き上げ屋根は後補のもの  
東側を妻兜としているが、その下に草葺の下屋を当初から有している  
(No.7と同様の妻兜)



松井晃家 (No.6)  
中央の突き上げ屋根は後補のもの



上野正雄家  
1間ごとにたつ表側の柱エンガワは当初はなかった。



野口正雄家 (No.7) 妻兜の下に草葺の下屋 (後補) を持っているのはめずらしい。



野口正雄家 当家は突き上げ屋根を有していないので古風な感じを与える



上原信吉家 (No.5)  
中央の突き上げ屋根は後補のもの



唐沢主助家 (No.9)



野口正雄家屋根裏



野口孝治家 (No.10)



山田勇栄家 (No.8)



野口孝治家のデード上部に張られている  
竹簾子大井



山田勇栄家の大黒柱  
デードコ側に逃げているのがみられる。



大久保 和一郎 (No.14)

深越太源治家と共に倉渕村では2棟しか発見されなかった前先造り



内堀 幸平家 (No.11)



大久保和一家の大黒柱

逃げがあり、カンナで仕上げられた表  
面はつやつやとかがやいていた。



及川秀信家 (No.12)

突き上げ屋根は後補のもの



朝香直臣家 (No.15)



塙越 太源治家 (No.13)

この地方ではめずらしい前先造り



牧野弘家

1階より2階の前面を少し外へ出した  
出桁造りにしている。



朝香邸家

オモテノジャシキの前面に設けられた式台  
(建立当初はなかった)



牧野弘家の2階

小屋梁に板養子を張り3階にしている。



朝香邸家の平書院



佐藤ふじ家

元は草葺の屋根だったが、昭和9年に現在のような  
生子トタン葺に大改造したとのことである。



牧野弘家(No.16)

# 有形民俗資料

## はじめに

例年のこととはいいながら、福集担当者のところへ配布された調査カードは一枚もなく、写真のみ約一〇枚という結果をもとにすれば終了ということになるが、とりあけるべき民俗資料は確実に存在していることを考へ、あらためて若干の調査をしてまとめたのが本稿である。そうした事情から、農耕具——一戸の農家を中心とした農具に限定してあることを付記したい。(阪本英一)

### 一、農家が所有する農具

倉渕村大字川浦、伊井栄太郎氏方の場合を例に、当地の農家が、平均的な農業を行つに必要な農具をみてみよう。

伊井家は、田四反、畠六反、計一町ほどの耕地面積をもち、当地の農業がふつうに栽培する米、麦、雜穀や、養蚕を中心とし、いもやコンニヤク、最近ではミョウガ等にも力を入れ、組合をつくってワサビ栽培も行つてゐる農家がある。伊井栄太郎氏が数を上げる農具は、およそ次の通りである。

テシガ	三一五
キワカキ(草カキ)	五
エンガ	二
ノコギリガマ	五一六
下刈りガマ	三一五
シバカリガマ	

草刈りガマ	一一二
桑切りガマ	二一三
桑ツミ(ツメ)	約六
ヨツゴ	二
マンノウ	二
三本鉢	二一三
サカラ	二一三
ジョン(土入れ)	二一三
桑ツミザル	二一三
桑ツミカゴ	二一三
草刈りカゴ	二一三
サンチユウ	二一三
クズカキカゴ	二一三
メケイ	二一三
コイショウガ	二一三
シヨイコ	二一三
モツコ	一
テンビン(カルコ)	一
ヤリップウ	一
麦アチ台	一
クルリ棒	一
エツチユウツチ	二一三
ムギットウシ	(以下若干)

ヒキワリブルイ

アワ、ヒエブルイ

粉ブルイ

ソバブルイ

唐 黄

カナゴキ

石 白

木ズルス（土ズルス）

米ツキ（カラウス）

肥 桶

ビ ク

馬に付ける肥桶

箕 コンニヤク掘り

代グラ

荷グラ

オングラ

マンガ

一斗マス

一升マス

五合マス

一合マス

マブシ織機

蚕かご

カマス

尺棒と尺なわ

## その他

### 二、直接の農耕具

エンガ（柄鋤） 古くは木のヘッタにカネの刃をつけたエンガを使っていたが、昭和の初ころ、全部をカネでつくったエンガが入って来て、ここで煙をうなつた。現在あるのはカネのエンガで、安中市の山崎製作所でつくつたものである。

柄の長さ 一九五cm

婦人、子どもの使用はほとんどなく、主婦でやる者がいれば話のタネになつた。

十年ほど前、川浦の諏訪神社春祭りの市で買ってから使つようになつた。柄が短く、丁字型につくられていること、刃が細長いので土の中へのさきりがよいこと、丸くカネをつけてるので土を返すのに楽なことなどから、老人、婦人、子どもたちにも扱い易いので手軽に使える農具となつてゐる。

柄 九四cm

刃 四八cm ひろがり一九・四×二三・五cm

開こん鉄 沼田の鍛冶屋の製品といい、利根・沼田地方で使用されてるものと同型である。サガラ（唐鉄）よりは角度があるが、テンガとはちがい、開こんをするのにべんりなようにできている。

柄 八八cm

刃 二八・五cm

刀巾 一五×一四cm

サガラ 開こん用と植えつけ用とがある。これは植えつけ用として利根の方のものを入手したものというが、薄いカネ（鉄）を使つていて軽くて、できがいいので相当の木の根もかんたんに切れるので使い易いという。



サガラ（植えつけ鍬）  
(川浦)  
(阪本 英一 撮影)



開こん鍬（川浦）  
(阪本 英一 撮影)



エンガ（川浦）  
(坂本 英一 撮影)



エンガ（川浦）  
(坂本 英一 撮影)



こんにゃく掘り（川浦）  
(阪本 英一 撮影)



テンガ（川浦）  
(阪本 英一 撮影)



テンガ（川浦）  
(阪本 英一 撮影)



三本鍬（川浦）  
(阪本 英一 撮影)



ツブテ打ち



マンノウ（川浦）  
(阪本 英一 撮影)



ヨツゴ（川浦）  
(阪本 英一 撮影)



ジョリン（川浦）  
(阪本 英一 撮影)



ジョリン（川浦）  
(阪本 英一 撮影)



ぐさかき（長井）  
(上野 勇 撮影)

三本鍬 田んぼおこしに使用するのを主とした農具で、オシガが入る前はこれで田を掘りおこして田植えの準備をした。その後も三本鍬でおこしている人もいる。

柄 刀巾 九〇 cm  
刃長 一二 cm  
二三・五 cm

柄 刀巾 一一三・五 cm  
刃長 一一三・五 cm

柄 刀巾 一一一・五 cm  
刃長 一一一・五 cm

柄 刀巾 一七・五 cm  
刃長 一七・五 cm

柄 刀巾 一七・五 cm  
刃長 一七・五 cm

テンガ（手鍬） 昔は、木のヘッタのついたテンガを使っていた。そこらは、カネは鍛冶屋でうたせ、棒屋でボウもイタも見つくりて仕上げさせる注文生産でやらせた。神社の市に来る鍛冶屋もあつたが、これはサントウアブチといい、そんな百姓道具はだめなものだといわれた。

ふつうに使うと一年くらいでテンガのハガネが減ってしまうので、減ったものは鍛冶屋でサキガケをさせて使った。

柄 刀巾 三六・五 cm  
刃長 一五 cm

柄 刀巾 三六・五 cm  
刃長 一五 cm

テンガ（四本鍬） ひかく的近年になつて使われるようになつたもので、四本の刃になつてるので軽くて扱い易く、土へのササリがよく、土もよく碎けること、テンガに泥がたまらないことなどから広く使われる。しかし、サクをつくつて種をまくには、平らなミゾがつくれないので適当でない。

柄 刀巾 一二三 cm (刃先一五 cm)

柄 刀巾 三〇・五 (ひろがり一・五蓬) cm

コンニヤク掘り コンニヤク栽培の道具の中の代表的なもので、二本鍬ともいいうべきもの。畠の収穫期にコンニヤクイモを掘る時使うが、にんじんやごぼう掘りに使うとぐあいがよいといわれる。

刀 (全長) 三三・五 cm  
刃長 二六 cm

刀 (高さ) 一〇六 cm  
刃長 一二七・五 cm

刀 (全長) 二六 cm  
刃長 二六 cm

刀 (高さ) 一〇六 cm  
刃長 一二七・五 cm

ヨツゴ 角材に四・五本の鉄の刃をつけたものが古く、使用したことなかった。昭和になつてからは全部カネとなつた。畠のサクの間の草をかく（搔く）とか、エンガなどでうなつた畠の整地や、土塊をこわすために使用した。

柄 刀巾 一二七・五 cm  
刃長 一四・五 cm

マンノウ 牛や馬小屋から厩肥をかき出す時や、堆肥をきりかえしする時に使う道具、田畠で使うことはない。

柄 刀 (高さ) 一四 cm

柄 刀 (高さ) 一四 cm

柄 刀 (高さ) 一四 cm

ツブテ打ち 田畠を耕作するとき、土塊をたたいてこわす時に使用する道具、鉄の刃がでているので麦作などに多用される。

くさかき 川浦でもクサカキ、キワカキの二通りの名があるらしい。

畠や桑園の除草に使うのでクサカキといわれるが、畠の周囲を仕上げる時にも使われるキワカキともいわれるようである。

柄 刀巾 一二二 cm

ジヨリン 川砂利をすくつたり道路工事に使つたりする道具で、竹で編んで水切りをよくしたり柄につけるツルのところは、使用する状態で上下できるようしばっておいたもので、川の中で使うにはしごくべんりな道具だった。現在は、テレビのヒーダー線で編みこみ、ツルも金具で固定してしまった。



ワサビ抜（川浦）  
(阪本 英一 撮影)



マネ（長井）  
(上野 勇 撮影)



ジョリン（土入れ）（川浦）  
(阪本 英一 撮影)



上から、下刈ガマ（柄62cm）  
草刈りガマ（柄49cm）  
麦刈りガマ（柄42.2cm）  
(川浦)  
(阪本 英一 撮影)



ワサビ植え（川浦）  
(阪本 英一 撮影)



コイショウギ（川浦）  
(阪本 英一 撮影)



ス（筍）（川浦）  
(阪本 英一 撮影)



メケイ（スズ製）（川浦）  
(阪本 英一 撮影)



さんちゅう（長井）  
(上野 勇 撮影)



穀 横  
(阪本 英一 撮影)



桶 左から一升、五合、一合  
(阪本 英一 撮影)



メケイ（竹製）（川浦）  
(阪本 英一 撮影)

柄 七八 cm  
刃 二三×一七 cm

オカメジョシンと一部でいわれているもので、土木工事とか、ちょっとした仕事に使用されるもの、クサカキではない。しかし、水の中の作物では、水きりが悪いので、竹を編んだジョレンとは相当のちがいがある。

刀 八七 cm

二四×一六・五 cm

麦作りの道具の一つで、春になつて麦の成長がさかんな時、これで土をゆすりこんで根元をおおい、分けつけた麦株をひろげて強くるために使う。

これは木の柄がつき、土がこぼれないように鉄のわくがついているので、ひかくて新しい。

柄 一二一・五 cm  
刃巾 二〇・五 cm

刀長 三三一 cm

マネ 煙のまきつけや植えつけをする時に、これをひいて筋をつけ、この線に合わせてきつけをしたり植えつけをしたりする。

ワサビ鉢 ワサビ田のバラス（小石）をきれいに洗うために使用する道具で、底石をサクサクりをするようにかいてはおこして、石の表面についているモなどを洗い流す作業に使つ。これは県の特産課が東京都下の多摩地方のワサビ田で使用していた道具を借りてきて、沼田の鍛冶屋にうたせたものである。

柄 九二 cm  
刀 二八 cm  
ワサビ植え 長野県穗高町で使用していたものを分けてもらつて来て使用している。ワサビ苗を植えつける時、柄を右手に持ち（刀に向うに向けて）、水の流れに向つてワサビ田を振りおこし、左手で苗をさしむ

ようにして植えつける。刀先は薄くすることなく、地金の厚味そのままである。

金長二〇・五 cm

柄 一五・〇 cm  
刃 一八・〇 cm

草刈りガマ カッポシ刈りのように草などを刈つたりするには、手打ちの厚手のカマを使い、芝草など田畠のまわりの草を刈つたりするにはや薄刃のカマを使う。麦刈りにはノコギリガマを使う人もいたが、薄刃の麦刈りガマを使う。山の下刈りには下刈りガマ、雜木を切るにはナタガマやナタ、ノコギリ、桑切りには桑切りガマを使う。

### 三、かご・運搬具等

コイショウギ 堆肥などのコイ（肥料）を扱う時に使う必需品で、馬の背にビクをつけて堆肥を入れて運ぶときなど、コイショウギに入れて両手で差上げて入れなければならぬ。また麦まきなどで、サクに肥料を入れるにもコイショウギに入れて抱えるようにしてまく。

長 四五 cm  
巾 五〇 cm  
高さ 二二一 cm

サンチユウ 畑や田の草を刈つて運んだり、やさしい、いも類、ミョウガ、など、何でも入れて背負うのに使える背負いかご。大正のころはなかつたが、ひかくて最近になつて入つて来た。神社の市で買うこともあらが、村のカゴ屋につくらせる方が多い。  
サンチユウというのだから「山中」の方から来たか」ということだと思つてゐる、といふ。  
メケイ 竹を削つてつくることもあるが、奥の方の山からとつて来たスズを使って編むことが多い。仕上がりがきれいで、長もちする。やさしいなど小物を入れるが、最近ではミョウガとりに欠かせない。



ハンデ木とミョウガ烟（川浦）  
(阪本 英一 撮影)



ショイコ（長井）  
(阪本 英一 撮影)



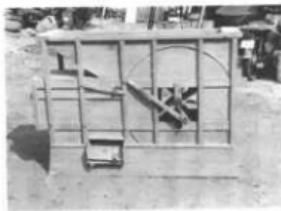
棹 秤 (2首目秤)  
(阪本 英一 撮影)



石臼（川浦）  
(阪本 英一 撮影)



えっちゅう（長井）  
(上野 勇 撮影)



唐 美  
(阪本 英一 撮影)



薬研  
(上野 勇 撮影)



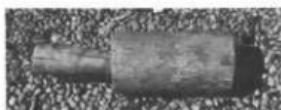
カキダシ（川浦）  
(阪本 英一 撮影)



ワラタタキ石とワラタタキ  
(川浦)



いもあらいいうす（長井）  
(上野 勇 撮影)



ワラタタキ（川浦）  
(阪本 英一 撮影)

スズ製 直径 二九 cm

深さ 二五 cm

竹製 直径 二六 cm

深さ 二七 cm

ミ(簞) 三ノ倉に製作する人がいて、その人から買う。少しくらいのいたみは直してもらう。

最大巾 六二 cm

口の巾 五六 cm

長さ 五四 cm

米、麦、大豆などの穀類を入れるもの。

穀糧 精米や精麦などを入れる容器として使用。

斗ます、ます 戰前は、米、麦は重量でなく容量で取扱ったので、ます(升)は農家の必需品であり、その種類も、一斗ます、一升、五合、一合、五勺。時にはそれ以外にもマユをはかる二斗ますなどがあり、ますの上を水平にはかるための斗カキ棒(カッキリ棒ともいう)があった。重量制とメートル法により使われなくなっている。

さおばかり(棹秤) 農家の生活の中では、はかりを使うのは、マユや毛羽、やさい類の販売の時とか、隣り組の間で重量によつてものを分配する時に二貫外秤を使うくらいだつた。養蚕の時、給桑量をはかつてくれるなどは最近になつてのことである。

ショイコ 人力で運搬する時に使用するもので、作物を家にとりこむ時とか、車の入れる所まで背負い出して来るなどに使つた。また、薪炭を運び出したり、冬の間、婦人たちがやつたボヤ拾いにも使われた。

ショイコの下の方にひもをつけたサルツコとよばれるものを出しておき、荷をつけてなわでしめつける時にサルツコに通してしめつけることもあつた。これは倉淵が初見であり、こうした工夫が生活の知恵である。

しかし最近では、ショイコの使用ひん度が少なくなりサルツコも少なく

なつている。

金長 八四 cm

巾 上二四 cm 下二七 cm

#### 四、そ の 他

ハンデ木 刈りとつた稲束を乾燥するための稲架のことをハンデといい、その支柱をハンデ木とよぶ。杉や檜など収穫のよい木がよく、約一間に一本(柱が一本支柱が二本で計三本)をたて、十本でヒトハンデとし、四段に竹を結びつけてハンデとする。大正年間になつてから普及したもので、それ以前は刈り干しとしたという。

エツチユウ(越中) 槌 越中さんと呼ばれていた出稼ぎの人が持つてきた農具、横槌で、木は杉の丸太を使い、柄も杉の木を利用した。越中さんは富山から季節的にやって来る人で、麦ぶら田植えから畠作業まで、頼まれるとどんな作業でもやる人で、槌などは荷物として持つて来て、終ると持ち帰った。また、ない時は自分で作つて使い、あとは置いて行つたのでエツチユウ槌という名称が残つてゐる。

唐箕 脱穀をした米や麦などは、ごみやアエ(シナ)を選別するため唐箕にかけ、風力で良い実をとる。モミスリをした米を唐箕にかけてくる。

カキダシ 足踏脱穀機でも、自動脱穀機でも、脱穀して落ちた米や麦は、すべてがすぐに箕などにかきこめるわけではないので、長い柄のついたカキダシともいわれるかんたんな道具を使って手前の方へかき出しことがある。モミガラを除く作業である。

柄 七〇・〇 cm

巾 一八×一二 cm

高さ 七・五 cm

石臼 粉をひく時は、手で加減をしながら粒を穴の中へ入れてていね

いにひくが、ヒキワリなどをひくには穴の中へ箸のようなものを何本か入れておき、まわしながら穴の中へかきこんでやると、箸のようなものが動いて中へ落ちるのを調整して適当にひくことができるといわれた。

直径 三五・五 cm

上白高さ 一〇・五 cm

下白高さ 一一 cm

薬研 一般のくらしの中で使うのは、「ま、唐辛子、などの薬味や香辛料を自家用につくる時に使うくらいで、薬草をとつて来て漢方薬をつくることなどはほとんどなかった。」

「もあらうす」といふを中心としたいも類は、かつての食生活の中で大きな割合をしめていたので、煙からとつてきたいもを洗うためにいろいろのくふうがされた。桶の中で洗うのも子どもや婦人の仕事だった。石臼の中がなめらかに仕上げてないのも、いもあらうすだからである。

「ラタタキ石」農閑期ばかりではなく、わら細工は一年中やることが多い。石は、土間の一部に埋めておき、よくたたいて使った。いまは、家を改造してしまったので台所が狭くなつたので、昔のままではじめやになるので柱の根方によせてしまつたが、石は昔のままのものである。「ラタタキ」といわれる繩は、サルスベリの木がいいといわれた。この木は、少しくらいいたたいてもケバダナイ木だからよい。わらをたたく時は、よくしめておいたわらを、かるく、長くうつて、全体にやわらかくたたくのがいいといつて、「氣ちがいのように叩くのではだめだ」といわれた。

長さ 三〇 cm

最大径 九・五 cm  
柄 一一・五 cm

(附録)

## 屋敷稻荷とお死靈様について

佐藤 清

倉渕村のお死靈様については、すでに「民俗採訪」に報告されており、今回の調査の重点項目の一つであった。

お死靈様とは、屋敷稻荷と並んでいる里芋形の石塔で、「屋敷祭り」の日に、稻荷様と一緒に祭祀される。たゞ、稻荷様には赤飯と尾頭付き豆腐を供えるが、お死靈様には赤飯だけという家が多い。

お死靈様は御先祖様で、屋敷を守る点では稻荷様と同じであるといふ意識が全般に見られるが、今回の調査により明確になったのは、「お死靈様はよく崇める」ということである。筆者はこの点に注目したい。

(1)隣接の吾妻町萩生の大塚一家の墓の中央に、やはり倉渕村同様の小さな芋形石塔があり、お死靈と呼ばれている。その脇に稻荷様(薬宮)がある。祭り方は倉渕村と同様である。

(2)吾妻町坂上、関谷の高橋マケで祭る一家稻荷は本家の屋敷の隅にある。稻荷様は石宮で、それをさらに木の社殿に入れ、脇にお死靈、産泰、今では不明の神を祭っている。稻荷様以外はキリハギ(幣束)で、屋敷祭りの時には、稻荷様だけに尾頭をつけ、あとでは赤飯だけである。昔は死靈様が崇るという話をよくした。生靈は話し合いがつくからまだよいが、死靈は話し合いがつかないから、お願ひするだけである。何とかして怨み、わだかまりを解いてもらわなければならぬ。

またそのためには死靈様があるという。(3)榛名町本郷の高浜地区でも、稻荷様のとなりにシロウジンがあり、稻荷と一緒に祭祀するが、赤飯だけでナマグサ(頭付き)は供えない。

シロウジンは無縁仏であると聞いているという。

(4) 藤岡市中大塚の小林家（当主は小五郎氏）に「年中行事」の古文書があり、冬至前の午の日に、屋敷祭りをするが、その折「死靈祭り」もしたという。小林家の墓地の入口に里芋形の石塔があり、笹竹四本を四隅に立てて注連縄を張り、幣束を下げ、赤飯や尾頭付きを供えて祭つた。成仏できない無縁仏などを祭つたものかといわれている。

(5) 多野郡吉井町長根の杉本家では、十一月一日に屋敷祭りをするが、その神をシロ神様という。赤飯を半紙に盛つて供えるが、魚はつけない。

(6) 利根郡昭和村生越の諏訪神社境内には、享保八年（一七二三）建立の石宮に、「死靈之氏神」と刻まれている。

今後、草津街道沿いの町村、多野郡、利根郡などの屋敷神を徹底的に調査すれば、死靈様祭祀の例がふえていく可能性は十分にあると思われる。

直江廣治博士は「屋敷神の研究」（二二二頁）において、「屋敷神の著しい性格としてよく崇るという点が挙げられる。屋敷神の本を伐つたために、ひどい祟りを受けた、或いは粗末に扱つたり、祀り方が足りなかつたがために、崇られて病気になつたという類の話は枚挙にいとまがないほどである。この崇るという性格には、法印・巫覡などの祈禱者の干渉ということを、大きく認めなければならない。そしてまた同時に、この種祈禱者の活躍が屋敷神の成立を促した点も見逃すことはできない」と述べておられる。まさに卓見である。

この認識に立てば、相吉のお死靈様が、村人と争い殺された坊さんの靈を祀つたものだという話や、鬼沢の原田一家のお死靈様は十二月十五日の屋敷祭りに法印様に拝んでもらつとか、三ノ倉でも昔は、法

印がきて祈禱していったとかいう伝承がよく理解できる。

倉渕村にも、ある時期に、こうした祈禱者が強く関与し、「死靈信仰」の流行、浸透があつたことが推定できる。その時期としては、亀沢の「元文五年（一七四〇）庚申七月吉日」と銘のあるお死靈様や、川浦の「寛政十一年（一七九九）八月吉日」とあるものが参考となる。また昭和村を調査して「死靈之氏神」が倉渕の死靈と結びいた場合には、その年号も大きいに参考になる。今後の調査の必要性を痛感する。

ともあれ、どんな家の系譜をたどつたとしても、そう何代も続いて天寿を全うする人ばかりある筈はないし、そうしたところに「死靈信仰」の入り込む余地があつたのである。自分や自分の家族に不幸がふりか、つたとき、それが死靈様の祟りだといふことは、一面において、安心できることでもあつた、原因がわかれれば、あとは解決のために、自分でもひたすら祈願し、また祈禱師に祈つてもらえばよく、不幸から逃れられる可能性はあるからである。

また、よく崇るという激しい性格を持つた靈であるならば、厚く遇することにより、屋敷——そこに住む人々——を強く守つてくれる信じられたのである。

死靈様と相関関係にある稲荷様を加えて考えると、種々な問題が提起されてくる。

稲荷と死靈はどうやら早く屋敷神として定着したのか、稲荷・死靈の定着以前に、それを受け入れる祖靈＝田の神（山の神）を屋敷で祭祀した素地があつたのか、なかつたのか。祖靈＝田の神も証明し尽された問題ではないし、屋敷稲荷も今後の大きな課題なのである。

直江廣治博士は「屋敷神として稲荷を祀る事例は、ほとんど全国的な分布をとっているが、概して言えれば東日本に濃厚である。（中略）近世以降のある時期に一種のはやり神的性格をもつて急速に普及したという事情が考えられる。そのほか「稲荷さげ」と称して、一種の託宣を業とした巫女の活躍、さらには神職その他、職業的宗教家の解説、

宣伝もあすかって大いに力があつたものと思われる」(同前書、三六一頁)とされ、さらに「伏見の大社を中心とする稻荷信仰が、地域社会に沈下定着していった過程は実はまだよくわからない。稻荷信仰普及という問題に近づいてゆくためには、おおよそ次の三つの道筋が考えられる。(1)稻荷大社の成立と発展、さらには神職その他宗教家の解説・教化の跡を文献の上から跡づける。(2)これほど広汎に民間で稻荷信仰を受け入れる基盤となつたものは何であったのか。(3)伏見の信仰圏外で稻荷信仰がどうなつてゐるか。民俗学では、(2)、(3)の視点に立て研究を進めてきているのである」(『日本民俗事典』一四六頁)。

ところで、このハジキを「モガリ」と呼んでいる場所があるのは、大きな問題である。もがりは古代の葬送儀礼に深く関係しているからである。だが、現在のもがり(ハジキ)が、原初的な形態をそのままとどめていると考えるのは、注意しなければならない。

日本書紀や続日本紀には、天皇の廣宮の記事(仲哀・反正・欽明・敏達・推古・舒明・孝德・齊明・天智・天武・持統・文武の諸帝)がみえる。

その意義については、すでに折口信夫先生が、「上代葬儀の精神」(全集第二十卷)や「大嘗祭の本義」(全集第三卷)において、詳説されており、復活葬儀禮の執行を説き明かされている。

古代宮廷の葬と民衆のものがりが全然無縫である筈がない。「もがり」が発見されたことは、期間、規模に違いはあるが、民衆の葬送習俗においても、宮廷と同様なことが行われてゐたことを意味している。北橘村以後の調査で、この「もがり」地区はますます増えつゝある。前橋市五代町、勢多郡赤城村・大胡町、吾妻町萩生、嬬恋村大庭などである。

折口信夫先生は「もがりは元、本式に喪葬することではない。ある時期の間、いまだ離れない靈を持つたまゝの屍を別所に埋立て置く儀礼である」(全集第十九卷二六頁)と説かれている。

古代の日本人の靈魂觀からすれば、魂が抜け出れば死であり、戻ればまた生き返るのである。

ところで、「死者の魂は四十九日の間は屋の棟にいる」という県内共通の伝承がある。もがりは四十九日まで取らないとすれば、両者には形状の違いはあるが、ハジキ、メハジキ、メハッバジキなどと呼んで、四十九日の「畢なおし」(現在では期日が短縮され、東毛では埋葬当日の夕刻に行うところが多い)までは、そのままにしておくのが普通である。犬や狼やテンマルが死骸を掘り起すのを防ぐためと説明されてゐる。

## も が り

昭和四十二年の北橘村の調査(群馬県民俗調査報告第十集)で始めて「もがり」が報告された。同年の国学院大学の倉澤村の民俗調査(『民俗採訪』国学院大学民俗学研究会)にも報告されている。

埋葬した土鏡頭の上に割竹を何本か弓形にさしたものを、県内各地で「もがり」と呼んで、四十九日の「畢なおし」(現在では期日が短縮され、東毛では埋葬当日の夕刻に行うところが多い)までは、そのままにしておくのが普通である。犬や狼やテンマルが死骸を掘り起すのを防ぐためと説明されてゐる。

そこで思い出されるのが、県内の「魂呼び」の習俗である。屋根に上がつてその人の名を呼んだり、井戸に向つて呼んだり、水垢離をとつたりという激しい魂呼びがつい最近まで行なわれていた。とすれば、これを生死の観念の定かでなかつた昔にもどして考えて

みると、四十九日屋の棟にいる魂に、四十九日の「もがり」の期間、魂呼びを続けたのではないかと推定される（四十九という数字には伝教的な色彩が濃厚である）。生と死を科学的に理解できるようになつても、ハジキには屍を大切にするという観念が強くあらわれている。魂が戻ってきて、入るべき身体がなければ困るからではなかつたか。

「もがり」という復活儀礼の一面だけを強調したのがハジキであつた。復活が信じられなくなつて、もがり＝ハジキとなつたのである。もがりは、今後、緊急に調査しなければならない大きな課題である。

六算除け	62
わ 行	
ワカイ	23
ワカイモンガシラ	132
———ケイヤク	71
ワカナ	22
若水	151
若宮八幡	101
若餅	158
ワカレジモ	35
ワクザ	62

目の病気	63	——の材料	26	——ユキ	12																																																																																																																																																
メメズ	60, 61	——ふきの材料	26	予兆	65, 140																																																																																																																																																
メリンス	15, 16	——屋	27	ヨップ	85, 221, 224																																																																																																																																																
メンバ帽	14	ヤブ入り	164	四つ身	13																																																																																																																																																
も 行																																																																																																																																																					
モガリ	145	ヤマウド	22	ヨグレカケ	110																																																																																																																																																
木材輸送	57	——イモ	23	夜泣き	62																																																																																																																																																
木炭	30	——入り	152	一なべ仕事	53																																																																																																																																																
——輸送	57	ツクワ	47	ヨバイ	128																																																																																																																																																
モチアワ	22	——ドリ	50	嫁入り	131																																																																																																																																																
餅ケイヤク	168	——ナシ	22	道具	131																																																																																																																																																
——ゲサ	172	山の神	98, 149	——の髪型	131																																																																																																																																																
一つ	188	——の木	46	——前の教育	131																																																																																																																																																
モチはヒドロにつくれ	37	——の境界	46	嫁が実家に帰る日	138																																																																																																																																																
——をつく日	25	——の下刈り	66	ヨメゴサン	64																																																																																																																																																
モトイメ	41, 43	——の信仰	98	嫁(ヨメゴ)ネセ	136																																																																																																																																																
モトリン	30, 52	——はじめ	98	よめごのお茶	136																																																																																																																																																
モッコ	221	——祭り	173	——のふとん	136																																																																																																																																																
モノ作り	156	——め	50	嫁の里帰り	137																																																																																																																																																
モミスリ	39	ヤミダ	32	——のツトメ	138																																																																																																																																																
モミバツウ	97	夜祈禱	97	——の年令	129																																																																																																																																																
モモヒキ	14, 20	ヤリッポウ	221	——迎え	131																																																																																																																																																
もらい風呂	3	ヤンメ	62	——婿の年始	153																																																																																																																																																
ゆ 行																																																																																																																																																					
山大様	107	結納	130	寄合い	73																																																																																																																																																
ヤカイマキ	17	——おさめ	130	ら 行																																																																																																																																																	
焼米	31, 37	——着	131	ヤキモチ	12, 18, 21, 175	——目録	130	雷電様	90	ヤギリ	48	遊芸人	58, 59	ラッキョウ	60	厄落し	126, 163	夕飯	18	り 行						薬師様	63, 109	湯かん	143	厄年	126	雪かき	75	離縁	139	薬湯	61	ユズ湯	186	リクウ	36	役場名	121	指	66	リヨウ	50	厄除觀音	108, 164	ゆり	22	両墓制	148	火傷	60, 61	ユリゴワメシ	23	リンバ	44	ヤゲン	228	ゆりの根	23	リン病	61	星号	198	ユリヨウカン	23	隣保班	68	星敷稻荷	25, 100, 170	れ 行						——神	99	よ 行		——長	70	——内の神	99	夜遊び	127	恋愛	128	——祭り	25, 100, 184	八日節供	172	——結婚	114	夜食	18	養蚕	31, 47	蓮華院	78	宿ブルマイ	78	用水	40	レンシャク	56	一屋	58	夜観音	109	ろ 行						屋根板	30	ヨゴレ年	187	老人学級	78	——替	20	——年取り	187	老荘会	78	——の祝	27	ヨシガラ	32	労働慣行	52			子祝行事	9	六三の神様	63			ヨソイギ	11, 13, 14, 16	六文銭	143
ヤキモチ	12, 18, 21, 175	——目録	130	雷電様	90																																																																																																																																																
ヤギリ	48	遊芸人	58, 59	ラッキョウ	60																																																																																																																																																
厄落し	126, 163	夕飯	18	り 行																																																																																																																																																	
薬師様	63, 109	湯かん	143	厄年	126	雪かき	75	離縁	139	薬湯	61	ユズ湯	186	リクウ	36	役場名	121	指	66	リヨウ	50	厄除觀音	108, 164	ゆり	22	両墓制	148	火傷	60, 61	ユリゴワメシ	23	リンバ	44	ヤゲン	228	ゆりの根	23	リン病	61	星号	198	ユリヨウカン	23	隣保班	68	星敷稻荷	25, 100, 170	れ 行						——神	99	よ 行		——長	70	——内の神	99	夜遊び	127	恋愛	128	——祭り	25, 100, 184	八日節供	172	——結婚	114	夜食	18	養蚕	31, 47	蓮華院	78	宿ブルマイ	78	用水	40	レンシャク	56	一屋	58	夜観音	109	ろ 行						屋根板	30	ヨゴレ年	187	老人学級	78	——替	20	——年取り	187	老荘会	78	——の祝	27	ヨシガラ	32	労働慣行	52			子祝行事	9	六三の神様	63			ヨソイギ	11, 13, 14, 16	六文銭	143																										
厄年	126	雪かき	75	離縁	139																																																																																																																																																
薬湯	61	ユズ湯	186	リクウ	36																																																																																																																																																
役場名	121	指	66	リヨウ	50																																																																																																																																																
厄除觀音	108, 164	ゆり	22	両墓制	148																																																																																																																																																
火傷	60, 61	ユリゴワメシ	23	リンバ	44																																																																																																																																																
ヤゲン	228	ゆりの根	23	リン病	61																																																																																																																																																
星号	198	ユリヨウカン	23	隣保班	68																																																																																																																																																
星敷稻荷	25, 100, 170	れ 行																																																																																																																																																			
——神	99	よ 行		——長	70																																																																																																																																																
——内の神	99	夜遊び	127	恋愛	128																																																																																																																																																
——祭り	25, 100, 184	八日節供	172	——結婚	114																																																																																																																																																
夜食	18	養蚕	31, 47	蓮華院	78																																																																																																																																																
宿ブルマイ	78	用水	40	レンシャク	56																																																																																																																																																
一屋	58	夜観音	109	ろ 行																																																																																																																																																	
屋根板	30	ヨゴレ年	187	老人学級	78																																																																																																																																																
——替	20	——年取り	187	老荘会	78																																																																																																																																																
——の祝	27	ヨシガラ	32	労働慣行	52																																																																																																																																																
		子祝行事	9	六三の神様	63																																																																																																																																																
		ヨソイギ	11, 13, 14, 16	六文銭	143																																																																																																																																																

ボッカン	17	間取り	28	む 行			
ホド	23	マネ	225	六日年	154		
ホトイモ	24	マブシ	48	ムエンサマ	178		
ほととぎす	194	マムシ	50	無縁仏	148, 178		
ホホバ	17	——酒	61	昔の貸仕事	52		
ホマチ	85	豆ガラ	151	麦刈り	31, 33		
ボヤ拾い	53	一まき	166, 167	一こうじ	24		
ボロゾウリ	17	マヤ	31, 49	一ゾッキ	19		
ボロットジ	17	マユ	58	一作	31		
盆	25	——カキ	164	一の作付割合	33		
一踊り	180	萬玉	20, 61, 158, 164	一のトウシ	221		
一行事	178	——飾り	149	一はたき	33		
一ゴザ	177	——木	152, 158	一ぶち台	221		
一棚	177	マユメリ	164	一ふみ	32		
一中の禁忌	180	マリシテン	111	一まき	32		
一中のごちそう	178	丸盤	17	一飯	19		
一中の葬式	143	マルメドシ	160, 188	一もうけ	40		
一提灯	178	真緒	4	麦焼き	33		
一の客	179	み 行					
一の十六日	180	箕	222, 227	一ワラ帽子	14		
一の食事	180	身頃	13	ムジナ	50		
一の仏壇	178	ミシャグチ	11	虫歯	61		
一花	177	未熟児	125	一除け	171		
一坊主	16	水祝い	7	村入り	76		
一前の葬式	142	一神	104	一契約	76		
一迎え	178	一げんか	40	一仕事	75		
一用意	177	水沼神社の祭典と別当	92	一の庭	68		
ポンデン	112, 173	——の親音	108	一の寺院	108		
本家	5	一の獅子舞	200	一の組織	69		
本哉ち	13	水引き番	40	一回り	137		
ポンノクド	16	みずぶさの木	27	一役	69		
ま 行					一寄合	68	
埋葬	145	水をさす	129	め 行			
前掛	15	ミソギ祭り	174	メーカイ	48		
マエタケ	22	ミソ玉	12	メーダマ	20		
マキ	32	——演	19, 24	銘旗	142, 144		
牧場	52	——ハギ	178	銘仙	14, 16		
巻目	66	——ヤキモチ	18	命名	120		
枕ダンゴ	38, 140, 141	道普請	75	メカゴ	63		
一なおし	140	ミツバ	22	めくらこめごめ	27		
一飯	140, 141	ミツブサ	27	メケ	61, 225		
マクリ	118, 124	三ツ身	13	メジシガクシ	201		
マケ	5, 83, 84	三峰講	82, 93	めしたき	20		
孫だき	122	ミツヤ柱	27	——の盛り方	20		
マサキリ	44	ミナガワ	47	——前の仕事	66		
まじない	61	忌の日	64	メシャキ	20		
マタ切り	4	待	80	——モチ	12, 20		
またたび	24	耳だれ	62	メツバ	61		
松迎え	187	耳っぷさぎ	148	メドブルイ	57		
		ミヤコ柱	27				

パンダイモチ	45, 98	一ツ身	13	フデエ	48
ハンデオ	227	人の一生	113	不動様	7, 91, 111, 166
ハンデエ	39	人を批評する言葉	199	——の祭り	111
ハンテン	14	ヒトオリ	44	フトリジマ	14, 18
万能薬	61	ヒドロッタ	32, 35	フナモチ	25
ハンメシ	19	ヒナ節供	169	冬ざく	32
ハンワメ	20	日向道	54	フラデッポウ	183
ひ 行		ヒノキガサ	14	布留めの神社	84
ひあがり	121	火の柱	107	振舞	173
ビー玉	207	火伏せ様	166	へ 行	
日忌み	64	——の親音様	109	米寿の祝い	127
ヒエ	12, 33	火ぶり	49	兵隊検査	77, 128
ヒエブルイ	222	ヒモカワ	21	ヘソクリ	85
ヒエボ	156, 157	百ヶ日	147	ヘその緒	118
ヒエメシ	19, 21	百反着物	123	ヘツツイ	22
ヒエメエ玉	158	百万遍	170, 175	別当	71, 93
ヒエヤモチ	20	病気	140	別当役	87
——の話	26	ヒョットコカブリ	15	ヘビ	50, 65, 104
ひかげこめごめ	27	ヒヨリ	17	蛇渦	197
日影道	54	ヒヨワなる	123	ヘビ酒	51
光り物	107, 195	ヒラウナイ	32	蛇よけ	62
彼岸	170	肥料	33, 58	便所まいり	121
——の入り	170	毎観音	109	弁天様	63, 111
——の中日	25, 170	拾い親	123	ほ 行	
——の念物	170	ヒワダの皮	18	ほうがん	202
ひきつけ	17, 62	ふ 行		——獅子	202
ヒキワリ	20	フェルト	17	宝慶和尚	171
——ウス	25	ふき	22, 23	奉行人	76
——ブルイ	222	不吉	66	宝珠の玉	150
干草刈り	51	副食	22	ホウトウ様	112
びく	222	福茶	167	ホウベエ	69, 73, 114 132, 133, 141
飛行機	56	腹痛	60	ホーツキ	64, 120, 124
ヒコボーズ	36	福森大明神	117	ホーロク	18, 167
ヒザイシ	43	フジキノコ	23	ホキリ	33
ヒザナオシ	137	福澤大明神	117	ホクロ	99
菱餅	130, 169	不淨日	64	ホケーブクロ	82
美咲館	206	フスペ	66	豊蚕祈願	104
左膳	64	フスマミゾ	24	補習学校	127
七十送り	170	不整形四間取型	208	フセギの札	174
——市	170	伏ガマ	30	補食	19
——祭り	169	フタケ	35	穂ぞろい	39
ヒチブカゴ	47	二夜様	81	保存食	22, 24
ヒツツメ	17	ふだん着	13	ホタドリ	45
ヒツツメショリ	14	ふだんの食事	19	ホタモチ	20, 25
ひとえもん	13	フッコカブリ	14	ボタン	157
ひとがた(人形)	174	ブッティ	50	墓地	143
ヒトケ	35	ブツツケ	207	——での儀式	144
人玉	108, 195				
ヒトツカ	66				

トコ	10	のどにつかえたとき	63	初午	20, 169
休み	48	野火つけ	46, 172	初絵売り	152
人形	207	野辺の送り	144	初ケイヤク	168
妊娠中の禁忌	115	のあと溝め	145	ハッサク	130, 181
の知識	115	の草履	144	初正月	124, 152
を誰に知らせるか	115	野まわり	179	初節供	124, 170, 172
ぬ 行					
ヌイマモリ	16	飲み水	28	ハツタケ	22
沼田早生(ワセ)	36	ノラギ	12, 14	ハツタンドリ	39
ヌルデの木	61	ノラ仕事	18	初不動	166
の男根	8	ノラバキ	18	一肥	166
ボウ	149, 156, 157	は 行		一山入り	152
ね 行					
ネエジッタ	38	肺炎	60	初雷の祝い	63
ネエサンカブリ	14	ハイカラマキ	17	馬頭観音	4, 58, 88, 109, 164
根ギリ	46	歯痛	63	ハナ	77, 157
猫	62	ハイモ	31	ハナアワセ	207
寝小便	60	ハイオウドリ	194	——かご	144
ネズミ	48, 62	羽織	15	——ゲエシ	77
ガエシ	47	バカスカ	22	ハナクソモチ	25, 170
タケ	22	ハカマ	16	鼻血	62
除け	160	カカリサシ	48	花結びゾウリ	17, 67
ネッコモタセ	22	ハギ	22	バナマ帽	14
ネックイ	5	履物	17	はね上げ井戸	28
寝まき	15	ハクサイ	31	ハネ釣り	50
ネル	16	橋掛け	76	ハバキ	14
年忌	147	一木山	76	馬糞	62
年期奉公	76	普請	75	ハヤ	49
年始	151	ハジメ天神	81	ハヤリ目	62
回り	151, 152	初めての妊娠	115	腹帯	115
念仏忌	14	馬車	57	腹切り石	192
講	80, 81	柱の名	27	バラ肥	33, 34
玉	146, 171	ハシリッ穂	39	ハラミ箸	10, 37, 149, 156, 157
の 行					
納棺	143	機織り	18, 48	ハリウケ	26
農業	31	畑作	31	針供養	115
農産物品評会	127	一の広さ	35	春祈禱	96
農休み	138, 174	ハダジパン	16	春駒	57, 206
野帰り	145	蜂	65	春ソバ	21
ノコ	5	一にさされた時	63	春祭	170
ノコギリ	43	八十二様	62	馬冷蕃	22
ガマ	221	八十八夜	172	種物	60
ノシダタミ	16	ハチビラキ	59, 206	株名湖	65
ノシモチ	27	八幡様	91	——講	78, 81, 93
ノゾツコミ	136	ハチヤキ	14	——信仰	96
のちざん(後産)	118	初歩き	123	——神社	81, 91, 96
ノチノモノ	118	二十日正月	165	班	68
		二十日コウセン	165	——長	69
		ハッカの葉	61	ハンギ	45
		ハッキョウサン	48	ハンギリ	34
				ハンゲ	38, 174
				半襦袢	14
				バンタ	142

——まつり	105	——棚	150	仲之旗講	81
天狗さん	67, 105, 184, 195	トシッパチ	52	仲間入り	125
——の遊び場	195	年取り	188	長虫	149
——の笑い	195	ドジョウとり	50	仲宿	131
天井	43	土葬	144	流れ灌頃	148
——あげ	43	トッキトウバ	123	ナカリーン	30
——祝い	42	トッコ	207	ナギナタ	14
天神講	77, 81, 166, 187	トッチャナゲ	20	仲人	129
——様	82	トットキ	12, 13	——座敷	129
伝染病	63	トキ	22	——へのあいさつ	129
エント一柱	210	隣組	70	——札	129
天道ニラミ	27	——制度	70	ナスの馬	178
——柱	27, 104	トハチ	31	謎	67, 198
天南草	51	どぶろく	23	夏越し	175
天王様	90, 91, 174	トマト	4, 31	ナタガマ	221
テンパク	11	ドミツ	51	七草	154
テンビン	221	トムコ(トモコ)… 衆	68, 70, 73, 113 131, 132, 141	——ガユ	154
天秤棒	30, 47	(トモコセイ)	131, 132	——ゾーセー	25, 154
テンブラ	22	トムコ座敷	113, 136	七社まいり	104
と 行		——結び	113, 133, 135	茶ひば	24
トーズルのマブシ	48	友引き	64	ナミダカクシ	144
十日夜	25, 183	トメトウノク	147	ナミノハナ	64
——の供物	183	トヨニシキ	36	なめみそ	23
——のワラット	183	土用干し	39	ナモタセ	22
胴着	14	土用餅	25	成田講	82
岬	56	寅の日	64	ナラズミ	42
一講	81, 93	トリアゲバアサン	115	南京米	40
一様	37	鳥追い	163	ナンド	116
冬至	186	とりかえっこ	128	に 行	
道心ボー	59	トリムスピ	134	肉	22
同祖神	11, 106, 149, 161	泥棒	61	荷グラ	222
同族集団	6	トロロ汁	23	二合げい	21
唐箕	222, 227	ドンドンヤキ	82, 126, 160 161, 162, 163	ニコミ	20, 21
道陸神子	162	トンビのハネ	129	ニゴワメシ	34
——小屋	161	トンボ	5	ニシン	22
——まつり	162	問屋場	58	二十一太師	111
——焼き	160	舌竜様	63, 125	二十三夜様	112
斗マス	227	——坊主	125	二十二夜様	112
戸隠講	81	な 行		ニッカン	143
毒下し	61	苗ジッ田	36	日参	105
毒消売り	52	ナエバ	38	二番契約	72
——屋	58	ナエビ(苗日)	38	——作	33
ドクダミ	60, 61, 175	苗代(ナエマ)	36	——茶	26
毒流し	49	苗代にモチを植えるな	36	——ドリ	39
特別の日の食事	25	なおる	128	二〇三高地	17
トコロ	23	ナカシロ	36	二百十日	180
年祝い	113, 125	ナカノウマヤ	28	ニロクの脇腹	63
年男	151			ニワ	43
年神様	150, 187			——コロガシ	41

大食会	155	団子	20	造り酒屋	52		
大蛇	193	タンサン	18	つくりっぱ	34		
太々神樂	205	炭酸鏡頭	21, 174	告げ	141		
大豆粕	58	誕生	113, 115	ツケダシ	51		
堆肥	4	——祝	124	ツジガタメ	201		
代用食	20	——餅	25, 124	ツジュウダング	20		
ダイマナクの行事	9	たんぱ	34	——ダンス	186		
高尾山	63	たんぱくろ	35	——の日	20		
タカハタ	48	ち 行					
薪一石	66	力石(チカライシ)	66	簡粥	97		
一ヒトナ	66	力餅	25, 124	頭痛	60		
タクアン	24	チクサン	51	つつ袖	14		
ダグルマ	66	チクワ	22	土入れ	32		
タケ	48	地芝居	205	つちぐも	5		
タコ	207	地縄	14	土穂のダング	186		
タゴワセ	47	地神講	34	椿名神社	6, 88		
タスキ	15	——様	34	ツブテ打ち	224		
脱穀機	39	地蔵神仰	109	ツブヌキ	47		
タツゼン	64	乳くれ	124	坪井戸	111		
タテオケ	34	チチタケ	22	ツミッコ	20		
タテジの餅	25	チチの不足	125	つむぎの着物	16		
タデの葉	60	チチバレモン	60	通夜	142		
タテビクサ	52	チフス	63	つらが広い	40		
タテマタ	42	チマキ	96	ツルギ	201		
七夕	10, 176	茶	26	つるべ井戸	28		
——飾り	176	中気	62, 63	ツワブキ	60		
田の神	149	中臣藏	205	ツワリ	61		
一の草とり	39	中年会	77	て 行			
一の広さ	35	中部用水	40	テ	116, 209		
タバコ	26	チョウチン	48	ティザシキ	28, 64		
——烟	26	朝鮮ビエ	21, 33	定着した人	58		
——包丁	26	チョイチョイ着	12, 13	出かせぎ	53		
タビ	17	チョーツベシ	123	出替り	168		
——ハソン	17	(サンダツワラ)	123	手甲	14, 143		
食物禁忌	64	チョーナ仕上	209	テッコハッコ	5		
玉マユ	48	徴兵検査	73	手伝い	82		
玉ギリ	46	チョボクレ	206	手拭い	14		
玉代の姫	194	地分け	5	ではの飯	143		
魂呼び	140	チンゲ	125	出穗	39		
タマンバラの箸	63	チンコロ	169	——水	39		
タラッペの根	60	——柳	60	テムスピ	129, 130		
タラの芽	23	チンバリ	60	テヨボクレ	59		
タルイレ	130	賃びき	25	寺	143		
タルダテ	130	つ 行					
タレコ	48	通婚囲	129	一の年始	153		
タレ肥	33, 34	ツカ	31, 32, 66	一参り	143		
タロッペ	22	月並神社	89	テン	50		
俵っこぼし	59	月の八日	168	テンガ	221, 224		
タワラギ	157			テンガモチ	36		
端午の節供	172			てんかん	61		
				天気占い	168		

食制	12	捨て子	123	染色	18
食用動植物	22	スネッキリ	32	先代萩	205
女子青年会	77	酔まんじゅう	21	金透院	78
諸職	52	炭俵	43	善導寺講	82
処女会	77	一の良否	43	ぜんだな石	192, 197
初瀬	126	ーフルイショウギ	43	千羽鳥の牛王札	37, 97
初七日	146, 147	炭焼き	41, 46, 59	せんふり	60, 175
除夜の鐘	151	窯	4, 30	ゼンマイ	22, 23, 24
ジョリーン	221, 224	の大きさ	43	千三つ	199
尻たたき	10	の言葉	43	膳餅	130
ジリヤキ	21	の家庭	44	そ 行	
代かき	36	の小屋	43	造花	144
白消炭	57	スリコギ	129	総会	70
シロコボレ	47	スリッパ	57	葬具	142
シロシタ	47	スルス	39, 53	葬式のあった家	147
白備前	32, 33	諫訪神社	67, 71, 92	——の日	142
ジロボー	47	——の秋の祭典	92	掃除	65
シロミズ	41	諫訪様	7, 89, 180	雑炊	25
白無垢	15	——祭り	172	雄炭(ゾウズミ)	42
師走女	16	せ 行		葬制	113, 114
シンコ	201	成人式	126	双体道祖神	106
信仰	86	生産に関する講	82	總代	70
信州街道	54	青年会	127	贈答	173
身上わたし	84	——の山	127	ゾウニ	152, 153
しんじん棚	150	——の行事	127	ゾウリ	12, 17
新築祝い	159	青年集団	127	葬列	144
新宅	5, 84	——團	77	俗信	106
陣田	198	——遊び	127	族制	84
シンドリ	36	——たまり場	127	底抜け柄杓	6, 7
ジントリ	207	セイレン	42	ソソヤキ	34
新年会	151	セキザ	17	ゾデ	144
ジンバ	36	セキとり	36	そばがき	21
す 行		赤飯	19, 25	——ぶるい	222
数理	66	——をたく日	25	——まいだま	21
水車	25, 35	堰普請	75	——マンジュウ	21
水神様	28, 29	赤廟	60	村会議員	70
水仙の玉	60	製糸	48	た 行	
スイトン	20	生児儀礼	119	田植え	31, 37, 173
スイメン	5, 49	節衣裳	16	——祝い	38
杉皮	30, 44	セッチン詣り	121	——を忌む日	38
——葺き	4	節分	167	太閤記	205
杉丸太	4	背絆	16	大黒様	149
スゴロク	207	セリツミ	154	大黒柱	27
すしを作る日	25	世話人	70	浅間神社	31
スス神様	117	——	87, 89, 90	大根	31
スズ切り	30	線香	30	——の切干し	24
スズの実	12, 24	善光寺街道	55, 56	代参講	78, 93
スズメがくし	35	——講	82	太子講	81
ズタ袋	143	戰死	67	大師様	111, 187

ササゲイ	201	——の座敷	136	しみ菜	24
ササニシキ	38	三又の木	45	シミメシ	12, 20
ササムジナ	50	山林	46	しめ縄	61
ササモタセ	22	三隣亡	106	シモバ	35
ササラ	202	三六ガマ	30, 141	社会生活	68
サシバ	17, 18	レ 行		ジャガイモ	22, 31
座席の順	73	シイタケ	22	しゃく	60
サツマイモ	22, 31	——栽培	4	しゃくり	62
里芋	19, 22	寺院明細帳	108	シャグチシヤマ	91
里帰り	137	しお	24	ジャシキ	209
さどばあさま	89	——断ち	107	十一	195
サナレ	42	——びき	19, 22	十一面観音	108
さらし	16	シオツカノジイサン	111	収穫期の芝居	206
サルダヒコ	11	四月苗代	36	就学前の遊び	207
サルのコシカケ	22, 60	地下足袋	17	修学旅行	77
サワモチ	105, 149, 183	式内社	6	十五日粥	10
三月	169	シケッタ	32	十五夜	20, 181
——節供	25	四合めし	21	住居	26, 35
三が日	153	仕事のてつだい	53	十三仏の掛軸	146
三が日の飾り	153	仕事始め	152	十三夜	183
山菜	22	死後の供養	146	シュウタ	32
産後の食事	119	ジゴロ引き	46	シュウト	20
一婦の入浴	119	二・三男	84	十二講	42, 46, 79, 94, 98, 156
一の禁忌	119	獅子の子	201	——様	67, 98, 149
サンザ	202	——の世話役	201	152, 156, 171	
三山旅行	127	——の附帯目的と由来	201	十六マユ玉	158
三三九度	132	シジ	48	出棺	144
三合めし	21	四十九日	146, 147	出産	116
サンシ	119	——のモチ	25	主食	19
三十五日	146	自然暦	35, 41	狩猟	49
三十三年忌	147	下草刈り	76	正月	147
サンジャク	15	シチク	30	——様	150
蚕種	47	七五三	126, 184	——飾り	150, 189
——の購入	58	しつけ	64	——棚	150
サンショウ	22, 23, 41	自転車	56	——の準備	184
産泰講	6, 80, 117	シニバタケ	32	鐘鬼大神	172
——様	36, 105, 116, 117	蓆切り	30	ショウギ	20
——信仰	6, 7	芝居	206	小黒柱	27
サンチュウ	221, 225	——小屋	206	ショウジンバ	106, 111
サントク	22	シバカリガマ	221	ショウアブ	172
三年ミソ	23	しごれ	61	——酒	172
産婆	118	終い(シマイ)正月	166	——薔	36
三番作	33	——天神	81	——湯	172
——そう	200	——年	188	消防団	77
——茶	26	——厄年	126	ショウユ	23
——ドリ	39	シマダ(島田)	17	ショイカズ	34
産婆にこみやられた	199	縞蛇の黒焼き	61	ショイコ	221, 227
三本歛	221, 224	島山部落の由来	193	食事	20
サンボンゴ	32	シミ大根	23	——のしつけ	64
サンヤサマ	20, 81	シミ菜		食習	18

撮入れ	155	——節供	173	コメゴメの木	157
一立て	155	古賀良講	81	米つき	25, 222
グンアカ	47	古希の祝い	126	一作り	31
け 行					
毛	66	コクサギ	34	一つけ街道	57
ケーパ	207	コクソ	47	——ぬか	143
ゲート(ゲイト)	69, 198	穀物うち	33	一箱	25
ケイマン	48	ご苦労よび	41	一を貰え	28
畦畔の草刈り	39	五合ばたち	21	五目鰐	81
契約	25, 68, 70, 71, 72, 168	五合マス	222	子守り	125
——作刈り	31, 40	小作	40	コヨギ	16
——米	73	——上げ	40	婚姻	58, 113, 128
——餅	73	コザシキ	209	——園	128
ケイリョウ(計量)	66	ゴザゲタ	17	——の条件	129
ケエカキ棒	37, 103, 156, 163	——ツキ	17	コンコ帽	14
化粧	17	コシアゲ	15	紺ジュバン	14
下駄	12, 17	乞食	59	權田栗毛	191
——の歯入れ	59	コジッコメ	150	權田の大字名	198
血圧で倒れた時	63	コジハン	15, 18	ゴンチの節句	173
ケブキリ石	43	腰巻祝い	126	コンニャク	222
——ダシ	42	御祝儀	130	紺の股引き	14
ケムゲエシ	145	コジュケイ	50	金比羅様	149
下痢	60	小正月	25, 157, 159	婚礼の場合の客座数	135
ケンチョン汁	186	コジョハン	12	さ 行	
ゲンノショウコ	60, 175	ごせ	206	災害	82
元禄	14	ゴゼ	59	西行ぶち	52
こ 行					
小字	68	コト八日	9	裁縫	4, 13, 64
肥桶	222	子ども組	77	——の一人前	13
コイショウギ	221, 225	——獅子	201	歳末諸事	188
コイ踏み	34	——遊び	207	祭文	207
鯉ノボリ	172	諺	198	さおばかり	227
庚神講	10, 79, 94, 95	コナウス	25	サカダチ	62
——様	78, 94	粉ぶるい	222	魚(サカナ)	22
——待ち	78, 94	——子にかかる	27	——の食べ方	50
こおじ	23	木の実	22	——の骨	63
荒神様	103	ゴバイ	43	——のハサミ	134
行人様	112	コバ豆腐	184	サガラ	35, 221, 222
コオセン	18	木挽き	20, 30, 44, 57	さかやもん	58
交易	54, 55, 56	ゴヒチの肩	63	先灯籠	144
コーチ	68, 70, 71	ゴヘイ	28	サギの宮	104, 159
——総代	68, 69, 71	御幣のコロモガエ	87	サキヤマ	44, 207
コーデ	62	コマ	207	——様	107
口頭伝承	191	ゴミッカブリ	22	サクイレ	32, 33
弘法大師	111	小麦の品種	32	サクガリ	40
公民館	70	米	57	サクキリ	33
氷解	173	——こおじ	24	サクツバライ	32
五月五日の節供	25	サケ	22	ザグリ	48

カリワケ	40	キナコ	166	草カキ	224
過橋酸	33	胡笠様	48, 159	草刈り	51
カリントウ	21	キノコ	12, 22	——ガマ	221, 224
カルコ	221	キハダ皮	18, 60	クサギの木の虫	60
カルタ	207	キミ(キビ)	21	草ゾウヤク	39
家例	152	——餅	21	草津街道	53
川浦の獅子舞	200	着物	13	草ぶき屋根	26
——の地名	198	キヤバン	143	クジ	27
川木	82	キャラブキ	23	クズカキ	34
皮剥式	9	救荒食品	24	——カキカゴ	221
皮ヒキ	23	キュウデ	85	——小屋	4, 34
川干し	50	——仕事	85	——の根	12, 24
難かけ	105	急病人	140	——マユ	48
カンカチ	202	キュウリ	4, 31	——屋根	26
カンカンショウブ	173	騒かたびら	143	区総会	71
カンカン帽	14	行商	52, 58, 77	クゾーバ	23
冠婚葬祭	113	清め	146	区長	70, 71
甘藷	22	行人塚	192	——金	70
観世流の謡い	205	共同墓地	70	——代行	70
カンソウ	34	——作業	74	口寄せ	59
ガンタク	23	共有	68	クツミレ	62
棺付き	144	——作業	74	くにもの	58
蒲原モチ	36	——山の権利	75	クヌギヅミ	42
寒みそ	23	——地	74	くねって九石	38
選駕の祝い	126	漁法	49	クマトリ	50
観音講	81	漁撈	49	熊の油	61
——様	65, 164	キラ	206	熊野神社	37
ガン(癌)	60	切り傷	60	組	68, 70
ガンジツ	150	ギリギリ船	59	クモ	66
眼病	63	霧積への道	56	倉開き	155
き 行		キリハギ	112	クリ	22
飢餓の際の食物	24	儀礼	34	クリマリ	150
きくいも	22	キルク	17	クルマ	33
儀式用着物	15	キワカキ	221	——ツカイ	25
キジ	50	ギン	5	——ヒキ	33
議事会	71	ギンカブト	207	クルミ	22
鬼子母神	62	禁忌	28, 64, 65	——の皮	18
喜寿の祝い	127	——作物	64	クルリ	33
気象予知	65	——動物	64	黒消炭	57
木ズルス	222	キンギヤク	201	黒炭	41, 43
北野神社	49, 87	キンチャク	85	——のカマ出し	43
義太夫	207	キントン	23	黒無垢	15
キツネ	50, 195	ギンナガシ	199	クロモチ	36
——つき	195	キンマラ	7, 149	クワガタ	5
——のヨメイリ	195	——		桑壳り	47
——火	107, 195	く 行		——カゴ	221
キッポウ	61, 160, 163	食い初め	122	一切りガマ	221
祈とう	140	喰違四間取型民家	208	一ツミザル	221
木戸賀	206	クガタチ	90	一の品種	47
		クキ	49	一ぱら	35

オシメ	8,189	オモテノウマヤ	28	火事	27
お駕廻様	170	おやおや	3,7,139	カスリ	18
お死靈様	3,62	オヤゲナイ	175	ガス系	48
(オシリヨーサマ)	86,101 102,147	オヤジテエ	132	ガスオオメ	18
お死靈様のたたり	103	オヤワノ山盛	80	ガズ	17
オシンコ	96	オンガ	32,222	風邪	61
おせえみそ	24	オンジャクワフ	47	風除け	170
お高もりの瓶	135	御岳講	78	家族生活	83
オタナ	150	女のイチゲン	136,137	——の構成	84
オ棚探し	153	女の子の着物	15	——の私金	85
——餅	153	オンペロ	152	形身配け	147
オチョウメモチヨウ	133	オンリヨウサマ	99,100 114,150	学校	35
オチョロムシ	63	オンマラ様	8	カッタデ	51
オッカド	10,18	か 行		カッチキ	34
オッキリコミ	12,18,20,21	蚕祝い	48	カッバの話	192
おつけの実	22	蚕神	49	カッボシ	39
オツミッコ	21	蚕の飼育法	47	門松	151
お寺さしき	145	一の始め	194	カナゴキ	39,222
オテンマ	26,56,68,74,75	一の病氣	48	カナババ	118
男の年取り	189	蚕ビヨリ	48	カナボボ	124
オニアソ	25	顔	66	カネツケの祝い	136
オニ(鬼)の豆	168	——の赤あざ	61	——のオコワ	25
オニムシ	207	カオス	31,49	——の日	136
お念仏	145	家屋	26	カノエサル	79
オノ	44	家格	83	カブト虫	207
オハギ	25	怪異	107	カボチャ	186
オハグロ	17	かいこん	35	釜神様	39,61
おはちの米	120	改層	76	——の口あけ	175
オバンシ	20	開拓	35	鎌倉三代記	205
お七夜	118,120	——	222	かます	33,222
オビヤキ	122	鍛	222	神穴	92
お百度	106	外とう着初め	17	上岡の觀音様	109
——まいり	140	外来者	58	神送り	182
お日待ち	21,94	改良白麦	32,33	髪形	17
オヒル	18	柿	63	カミキリ	207
オベットウ	93	書き初め	152	神無月の留守神様	182
お便所まいり	120	カギ竹	27,63	壹場	12,26
オボタテ	119,124	カキダシ	227	萱ぶき屋根	12
おぼやあけ	122	神楽道具	205	——マブシ	48
オボヤが明ける	120	カケモンザオ	150	粥	25
オボロウサマ	105	カケヤ	42	粥搔き	9
オマイ玉	156	蔭膳	106	——棒	10,157
お待ち女房	133	鍛治炭	42	カラウス	222
オママ	20	かご祝い	8	からいも	22
オミキズ	7,105	かごめかごめ	5	鳥川の魚	50
お宮まいり	122	飾り替え	156	——の由来	197
お召し	16	カジカ	5,50	カラス午王	37,194
主な星号	83	カシワ餅	173	——の札	37,194
一な苗字	83	——の皮	18,30	カラロソウ	47
				カリブン	139

—石	61	馬小屋	28	オオクマトンボ	5
座主の森	106	馬の景気あたり	51	(オニヤンマ)	
忌みあけ	147	一の飼	51	大正月	25
——の経	145	一のございだし	52	オオドシリ	188
忌み言葉	64	一の病気	51	オオヌスト	128
イモ洗い臼	12	一と女の年取り	187	オオバコ	60
——ガラ	24	一の利用	51	大晦日	189
——メシ	20	馬屋ごい	34	大麦の品種	32
入家式	133	——神様	104	オオメ	14, 18, 48
イロムク	21	ウメビラ	169	大山祇神	67
囲炉裏	28	梅干	20	おう穴	197
祝い着	120	ウラリン	30	お顔がくし	140, 150
祝い月日	34	ウリイ	23	オカザリ	150
岩永の神社	90	ウリッパ	22	——カエ	158
——用水組合	40	ウルシ	63	オカシラツキ	184
イワシ	19	ウルヌキ	33	オカリヤ	101, 184
イワナ	50	ウワキン	130	オカズ	22
う 行		運送	57	お館	142
初子	116	え 行		オガンショ	63, 109
初産	116	エイ(エエ)	37, 52, 76	オキチヂミ	48
ウエシロ	36	嬰児籠	8	オキンマラ	159
上野堀	40	恵応様	67	奥さんかぶり	14
ウケトリワタシ	113, 131	易	140	屋内の神	103
ウコン	16	枝打ち	76	オクマン様	92
ウシ	5, 207	一つき塔婆	147	小栗上野介	22, 192
牛運送	46	トウバ	147	——とぶつぶし騒動	192
丑の刻詣り	83	エツツケオビ	15	オクリのデー	209
丑の日	175	越中籠	31, 33, 53 221, 227	送り旗	34, 142
——精進	175	江戸妻	15	——盆	179
氏子縦代	70	エナ	118	オクンチ	181
碓氷社	31, 47	エビス	149	オケラ	5
——との交流	56	——講	165, 186	おけらのためさん	76
謹い	135, 205	——棚	165	オコエ	18
——初め	77, 153	——大黒	165	オコシ	142
うでまんじゅう	21, 34 174, 195	エプロン	15	オコジョ	63, 109
うど	23, 64	エンガ	32, 221, 222	オコト	168
打身	60	縁起	153	オコビル	18
ウドン	21, 20	エンジュ	64	おこわをつくる日	25
——粉の食品	21	演芸会	127	お歳暮	189
ウナギ	50	エンドウ	43	オサゴ	121
——ドウ	49	エンニン	184	オサキ	64, 106
——バリ	50	エンマ様	111, 186	——使い	107
産毛	125	お 行		幼いものの葬式	148
産着	16, 120	大字	68	お産で死んだ人の供養	148
ウブスナ様	144, 182	オオガキ	42	お産	115, 116
産めし	119	大カゴ	47	——の見舞	120
産湯	119	狼に助けられた話	193	——の場所	116
馬	51			——の神様	116
				オシトギ	150
				押麦	20

# 索引

あ 行					
アーポーヒーボ	157	油	22	イチガス	150
アイコク	36	アブラオンケンサマ	61, 63	イチゲン	131
愛國6号	36	雨乞い	67, 83, 104	——座敷	131, 135
アイツチ	22	雨降り仕事	53	——役者	132
相撲神社	92	——田	198	一人前	66
アオキワセ	47	始屋	59	——の仕事量	66
アオダイショウ	50	アヤリ	207	——の娘	139
アオメ	18	荒塙	24	イチノセ	47
赤抱き	122	アラクレ	36	一の宮謹	78, 81
アガタ	59, 107	新盆	179	一機二針	139
赤見	122	——提灯	179	一番契約	72
アカンボー	22	栗	12	——ザク	32
赤坊主	32	一ごわめし	22	——茶	26
赤ん坊のイチゲン	123	一ごせえ	33	——ドリ	39
アキアゲ	31, 41, 189	一づくり	33	イチマケ	83
秋葉様	24, 74	一の食べ方	21	イチョウガエシ	17
秋ソバ	21	一ブルイ	222	胃腸病	60
アケビ	22	一ボ	156, 157	一夜ゼリ	159
アケボーネ	133	一飯	20, 119	——餅	188
あげもん	13	アワモチ	22	五日の節供	194
朝イチゲン	135	淡島様	90, 116, 171	イッケ	5, 83, 84
一エビス	165	あわせもん	13	イッケショ	83
アサウラ	17	い 行		イッコク	199
アサゴコエ	18	慰安旅行	74	イッサンガ足	63
朝茶菓子	18	イカグマブシ	48	イッソメシ	12, 20
麻の葉模様	16, 120	育児	124	イトコッカワセ	128
一の虫	60	石芋	192	糸ひき歌	206
朝藤夕繩	64	一白	222	井戸神様	63
一湯	151	一タグミ	16	井戸掘り	29
一飯	18	一についての伝承	197	イドリケブ	42
一ソメエ仕事	53	一宮	6	稻荷組	83
足場木	26	衣・食・住	12	——様	90
遊び	56	イジメ	116, 125	犬	62
小豆を使った食物	25	異人	83	イヌクグリ	83
——粥	25, 34, 80, 163	居酒屋	52	戌の日	64
——ポウトウ	21, 34	イザリバタ	48	——の田植	37
あつけあたり	60	イズミ	8, 116	稻刈り	39
アトマル	17	伊勢謹	78, 81	——の品種	36
愛宕様	90	イタ屋根	12	——の穂	183
あだ名	198	板割り	27, 46	位碑持ち	144
後産	118	一合ぞうせえ	21	胃病	60
アトタツネ	137	一升マキ	37	衣服	13
穴掘り	142	一升ソバ	21	——のつけ	64
アナップサゲ	34, 183	一升マス	222	イブリ	42
		市	56	いへえた	32
				イボ	61

群馬県民俗調査報告書第十八集

## 倉渕村の民俗

昭和五十一年三月二十八日印刷  
昭和五十一年三月三十日発行  
(非売品)



編集兼発行者 群馬県教育委員会

発行所 前橋市大手町一丁目一一

群馬県教育委員会事務局

印刷所

前橋市元能町六七  
朝日印刷工業株式会社  
電話 50 四三六七